埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第241集

大里郡川本町

如意／如意南

県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（川本西部地区）
ふるさと農道緊急整備事業（川本西部地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告

２０００

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

如意・如意南遺跡付近の地形（西から）

如意・如意南遺跡付近の地形（北から）

序

埼玉県大里郡川本町の中央部を流れる荒川は、流域の田畑を肥やし、伏流水が各地で涌水となって人々の喉を潤し、常に人々の生活と密接に関わりを持ってきました。また、毎年冬の到来とともに、数十羽のコハクチョウが飛来し、人々の目を楽しませています。

この豊かな自然環境の中で、古来より人々はこの地を生活の場として選び、多くの足跡を残してきました。

現在の川本町は、この荒川の恵みによって、首都圏近郊において、重要な食料生産基地として大きな発展が期待されています。

川本町西部の荒川には、農業用水の取水堰である六堰頭首工があります。昭和14年に完成した六堰頭首工は、老朽化が進み、また周辺地域では水質悪化や湧水の枯渇などの問題が生じてきました。こうした事態に対応するため、農林水産省が主体となり、六堰頭首工などの基幹土地改良施設と、地区内水利施設の機能回復を目的とした「国営総合農地防災事業」が計画されました。

これに呼応して、埼玉県と川本町では、「付帯県営農地防災事業」により、周辺整備事業を実施することになりました。

埼玉県と川本町による、川本町西部の県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備・ふるさと農道緊急整備もこうした事業の一環であります。

建設事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地として、如意・如意南遺跡の一部が該当しておりました。上記埋蔵文化財の取り扱いについては、関係諸機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県深谷土地改良事務所と川本町の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、如意・如意南遺跡は、古墳時代後期から中世にわたる集落遺跡であることが明らかになり、竪穴住居跡や、掘立柱建物跡など、貴重な埋蔵文化財が発見されました。

また、竪穴住居跡からは、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土し、当地域の様相を明らかにする上で貴重な発見となりました。また、遺跡からは、漁労に使用したと考えられる、土錘と呼ばれる網の錘が数多く出土し、かつて如意・如意南遺跡に居住していた古代の人々が、荒川と密接に関わりを持っていたことを示す資料として大変貴重な発見となりました。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御指導・御協力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、深谷土地改良事務所、川本町をはじめ、川本町教育委員会ならびに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年２月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒井　桂

例 言

1　本書は、埼玉県大里郡川本町大字畠山字如意440番地他に所在する、如意・如意南遺跡の発掘調査報告書である。
発掘調査届に対する指示通知番号は、以下のとおりである。
如意
平成10年５月13日付け教文第２－24号
如意南
平成10年５月20日付け教文第２－28号

2　出土遺物の注記略号は、以下のとおりである。
如意遺跡：NYI（農免）
如意南遺跡：NYIMNM

3　発掘調査は、県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（川本西部地区）および、ふるさと農道緊急整備事業（川本西部地区）に伴う事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県深谷土地改良事務所、川本町の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　発掘調査は、当事業団職員の山本禎、栗岡潤が担当し、平成10年６月15日から平成10年９月30日まで実施した。整理・報告書作成は、栗岡が担当し、平成11年７月１日から平成12年２月29日まで実施した。

5　遺跡の基準点測量は、新日本航測株式会社に委託した。

6　写真は、発掘調査時の撮影を各担当者が行い、遺物の撮影は、栗岡・大屋道則が行った。

7　出土遺物の実測は、栗岡が行った。

8　縄文時代の石器の実測は、渡辺清志が行った。

9　本書の執筆は、Ｉ－１を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、他を栗岡が行った。

10　本書の編集は、資料部資料整理第１担当の栗岡が行った。

11　本書に掲載した資料は、平成12年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

12　本書の作成に際し、下記の方々から御教示、御協力を賜った。(敬称略)
川本町教育委員会、浅野晴樹、酒井清治、佐藤康二、村松篤、守屋健吾

凡 例

1　遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標点第IX系（原点：北緯36度00分00秒、統計139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。
また、各挿図における方位表示は、全て座標北を表す。

2　本書の本文・挿図・表などにおける遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ　竪穴住居跡　　SB　掘立柱建物跡
SK　土壙　SD　溝跡　P　ピット

3　本文中の挿図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

調査区全測図	1：400
竪穴住居跡	1：60、1：30
掘立柱建物跡	1：60
土壙	1：60
溝跡	1：80
ピット群	1：80
土器拓影図	1：4
土器実測図	1：4
土錘	1：2
玉類・紡錘車	1：2
石器・砥石	1：3
金属製品類	1：2

4　遺構図中に示した遺物の番号は、遺物の出土位置および接合関係を示し、遺物実測図のそれと一致させた。

5　遺構図中のスクリーントーンは、竪穴住居跡カマドの焼け込み範囲を示す。

6　土器実測図のスクリーントーンは、赤彩土器・黒色土器の範囲を示した。

7　遺物観察表の凡例は、以下のとおりである。
計測値が（ ）で囲まれたもので、土器は、推定値を示し、土錘は、現存長を示す。
計測値の単位は、表中に断りのないものは、大きさはcmで、重さはgで表した。
胎土は、土器に含まれる含有鉱物を、以下の記号で示した。

A：石英、B：白色粒子、C：長石、D：角閃石、E：赤色粒子、F：黒色粒子、G：雲母、H：片岩、I：白色針状物質、J：砂粒、K：チャート、L：小礫

土器の焼成を次のように判断した。

1：硬質・堅緻、2：良好、3：普通
4：劣・不良、5：軟質・脆弱

残存率は、口縁部から底部まで残存しているものについては、口縁部の残存率をパーセントで表し、それ以外のものについては、残存部位を示した。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査、整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 10
Ⅳ　如意遺跡の調査 …… 15
　1．遺跡の概観 …… 15
　2．遺構と遺物 …… 16
　　(1)　住居跡 …… 16
　　(2)　土壙 …… 49
　　(3)　溝跡 …… 58
　　(4)　その他の遺物 …… 59
Ⅴ　如意南遺跡の調査 …… 60
　1．遺跡の概観 …… 60
　2．遺構と遺物 …… 62
　　(1)　住居跡 …… 62
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 125
　　(3)　土壙 …… 126
　　(4)　溝跡 …… 142
　　(5)　ピット …… 146
　　(6)　グリッド出土・表採遺物 …… 153
Ⅵ　結語 …… 156

挿図目次

第１図 埼玉県の地形 …… 4
第２図 川本町地形区分図 …… 5
第３図 周辺の遺跡 …… 6
第４図 調査区周辺の地形 …… 11
第５図 如意・如意南遺跡全測図(1) …… 12
第６図 如意・如意南遺跡全測図(2) …… 13
第７図 如意遺跡全測図 …… 15
第８図 第137号住居跡 …… 16
第９図 第137号住居跡出土遺物 …… 17
第10図 第138号住居跡 …… 18
第11図 第138号住居跡出土遺物 …… 19
第12図 第139号住居跡 …… 21
第13図 第139号住居跡出土遺物 …… 22
第14図 第140号住居跡 …… 23
第15図 第140号住居跡出土遺物 …… 23
第16図 第141号住居跡 …… 24
第17図 第141号住居跡出土遺物 …… 24
第18図 第142号住居跡 …… 25
第19図 第142号住居跡出土遺物(1) …… 26
第20図 第142号住居跡出土遺物(2) …… 28
第21図 第143号住居跡 …… 29
第22図 第143号住居跡出土遺物 …… 30
第23図 第144号住居跡 …… 31
第24図 第144号住居跡出土遺物 …… 32
第25図 第145号住居跡 …… 33
第26図 第145号住居跡出土遺物(1) …… 33
第27図 第145号住居跡出土遺物(2) …… 34
第28図 第146号住居跡 …… 36
第29図 第146号住居跡出土遺物 …… 37
第30図 第147号住居跡 …… 38
第31図 第147号住居跡出土遺物 …… 39
第32図 第148号住居跡 …… 40
第33図 第148号住居跡出土遺物(1) …… 41
第34図 第148号住居跡出土遺物(2) …… 42
第35図 第149号住居跡 …… 44
第36図 第149号住居跡出土遺物(1) …… 44
第37図 第149号住居跡出土遺物(2) …… 45
第38図 第150・153号住居跡 …… 46
第39図 第150号住居跡出土遺物 …… 47
第40図 第153号住居跡出土遺物 …… 48
第41図 第151号住居跡 …… 48
第42図 第151号住居跡出土遺物 …… 48
第43図 第152号住居跡 …… 49
第44図 土壙(1) …… 50
第45図 第48・53号土壙出土遺物 …… 51
第46図 第53号土壙出土遺物 …… 52
第47図 第54号土壙出土遺物(1) …… 53
第48図 第54号土壙出土遺物(2) …… 54
第49図 土壙(2) …… 56
第50図 土壙(3) …… 57
第51図 第56～68号土壙出土遺物 …… 57
第52図 第１号溝跡 …… 58
第53図 グリッド出土・表採遺物 …… 59
第54図 如意南遺跡全測図 …… 60
第55図 第１～３号住居跡 …… 62
第56図 第１～３号住居跡出土遺物 …… 63
第57図 第４号住居跡 …… 64
第58図 第４号住居跡出土遺物 …… 65
第59図 第５号住居跡 …… 66
第60図 第５号住居跡出土遺物 …… 67
第61図 第６号住居跡 …… 68
第62図 第６号住居跡出土遺物 …… 69
第63図 第７号住居跡 …… 70
第64図 第７号住居跡出土遺物 …… 70
第65図 第８・12号住居跡 …… 71
第66図 第12号住居跡出土遺物 …… 72
第67図 第９号住居跡 …… 74
第68図 第９号住居跡出土遺物 …… 74
第69図 第10号住居跡 …… 76
第70図 第10号住居跡出土遺物(1) …… 77

第71図 第10号住居跡出土遺物(2) …… 78
第72図 第11号住居跡 …… 79
第73図 第11号住居跡出土遺物 …… 80
第74図 第13号住居跡 …… 81
第75図 第13号住居跡出土遺物 …… 82
第76図 第14号住居跡 …… 83
第77図 第14号住居跡出土遺物 …… 83
第78図 第15号住居跡 …… 84
第79図 第15号住居跡出土遺物 …… 84
第80図 第16号住居跡 …… 85
第81図 第16号住居跡出土遺物 …… 85
第82図 第17号住居跡 …… 86
第83図 第17号住居跡出土遺物 …… 87
第84図 第18・19号住居跡 …… 88
第85図 第18・19号住居跡出土遺物 …… 89
第86図 第20号住居跡 …… 90
第87図 第20号住居跡出土遺物 …… 90
第88図 第21号住居跡 …… 91
第89図 第21号住居跡出土遺物 …… 92
第90図 第22号住居跡 …… 94
第91図 第22号住居跡出土遺物 …… 95
第92図 第23号住居跡 …… 96
第93図 第23号住居跡出土遺物 …… 96
第94図 第24号住居跡 …… 97
第95図 第24号住居跡出土遺物(1) …… 98
第96図 第24号住居跡出土遺物(2) …… 99
第97図 第25号住居跡 …… 101
第98図 第25号住居跡出土遺物 …… 101
第99図 第26号住居跡 …… 102
第100図 第27号住居跡 …… 103
第101図 第27号住居跡出土遺物 …… 103
第102図 第28号住居跡 …… 104
第103図 第28号住居跡出土遺物 …… 104
第104図 第29号住居跡 …… 105
第105図 第29号住居跡出土遺物 …… 105
第106図 第30号住居跡 …… 106
第107図 第30号住居跡出土遺物 …… 107
第108図 第31号住居跡 …… 108
第109図 第31号住居跡出土遺物 …… 109
第110図 第32号住居跡 …… 110
第111図 第32号住居跡出土遺物 …… 111
第112図 第33号住居跡 …… 112
第113図 第33号住居跡出土遺物 …… 113
第114図 第34号住居跡 …… 113
第115図 第35号住居跡 …… 114
第116図 第35号住居跡出土遺物 …… 115
第117図 第36号住居跡 …… 116
第118図 第37号住居跡 …… 117
第119図 第37号住居跡出土遺物 …… 118
第120図 第38号住居跡 …… 119
第121図 第38号住居跡出土遺物 …… 120
第122図 第39・40号住居跡 …… 121
第123図 第39号住居跡出土遺物 …… 121
第124図 第41号住居跡 …… 122
第125図 第42号住居跡 …… 123
第126図 第42号住居跡出土遺物 …… 124
第127図 第1号掘立柱建物跡 …… 125
第128図 第1号掘立柱建物跡出土遺物 …… 126
第129図 土壙(1) …… 127
第130図 第4号土壙出土遺物 …… 128
第131図 第6・8号土壙出土遺物 …… 128
第132図 土壙(2) …… 129
第133図 第10号土壙出土遺物 …… 130
第134図 第11号土壙出土遺物 …… 132
第135図 第13・14号土壙出土遺物 …… 133
第136図 第16号土壙出土遺物 …… 134
第137図 土壙(3) …… 135
第138図 土壙(4) …… 137
第139図 第44号土壙出土遺物 …… 138
第140図 第48・53号土壙出土遺物 …… 138
第141図 土壙(5) …… 140
第142図 第58号土壙出土遺物 …… 141
第143図 第59・62号土壙出土遺物 …… 142
第144図 第1・2・3号溝跡 …… 143

第145図 第２号溝跡出土遺物 …… 144
第146図 第３号溝跡出土遺物 …… 145
第147図 第４号溝跡 …… 146
第148図 ピット群(1) …… 147
第149図 ピット群(2) …… 149
第150図 ピット群(3) …… 150
第151図 ピット群(4) …… 151
第152図 出土古銭 …… 152
第153図 グリッド出土・表採遺物(1) …… 154
第154図 グリッド出土・表採遺物(2) …… 155

図版目次

図版１　如意・如意南遺跡全景（手前は荒川）
如意遺跡全景（北から）
図版２　第137号住居跡　第138号住居跡
第138号住居跡カマド　第139号住居跡
第139号住居跡カマド　第140号住居跡
第141号住居跡　同遺物出土状況
図版３　第142号住居跡　第142号住居跡カマド
同遺物出土状況　第143号住居跡
第143号住居跡カマド　第144号住居跡
第145号住居跡　第145号住居跡カマド
図版４　第146号住居跡　第147号住居跡
第147号住居跡カマド　第148・149号住居跡
第148号住居跡カマド　第149号住居跡
第149号住居跡カマド　第150号住居跡
図版５　第150号住居跡カマド　第151号住居跡
第152号住居跡　第153号住居跡
第47号土壙・第１号溝跡　第53号土壙
第54号土壙　第61号土壙
図版６　第137号住居跡―１　第137号住居跡―２
第137号住居跡―３　第137号住居跡―４
第138号住居跡―１　第138号住居跡―２
第139号住居跡―１　第142号住居跡―１
第142号住居跡―２　第142号住居跡―３
図版７　第142号住居跡―４　第142号住居跡―５
第142号住居跡―12　第143号住居跡―２
第143号住居跡―３　第143号住居跡―４
第143号住居跡―６　第143号住居跡―８
第145号住居跡―１　第145号住居跡―２
図版８　第146号住居跡―２　第146号住居跡―８
第149号住居跡―１　第149号住居跡―５
第150号住居跡―２　第54号土壙―５
第142号住居跡―12　第65号土壙―１
図版９　第137号住居跡―５　第139号住居跡―３
第139号住居跡―５　第141号住居跡―１
第142号住居跡―６　第142号住居跡―11
図版10　第143号住居跡―10　第145号住居跡―３
第145号住居跡―４　第145号住居跡―５
第146号住居跡―６　第148号住居跡―１
図版11　第148号住居跡―２　第150号住居跡―３
第150号住居跡―５　第53号土壙―２
グリッド・表採―２　グリッド・表採―３
図版12　第137号住居跡―６　第137号住居跡―７
第146号住居跡―５　第150号住居跡―４
図版13　第138号住居跡出土土錘
第142号住居跡出土土錘
図版14　第148号住居跡出土土錘
第54号土壙出土土錘
図版15　第143号住居跡出土土錘
第149号住居跡出土土錘
第145号住居跡出土土錘
第53号土壙出土土錘
図版16　如意南遺跡全景（南から）
如意南遺跡II区全景（北から）
図版17　第１号住居跡　同遺物出土状況
第４号住居跡　第４号住居跡カマド
第５号住居跡　第５号住居跡カマド

同遺物出土状況　第６・７号住居跡
図版18　第６号住居跡カマド　第７号住居跡カマド
第９号住居跡　第９号住居跡カマド
第10号住居跡　第10号住居跡カマド
第11号住居跡　第11号住居跡カマド
図版19　第８・12号住居跡　第12号住居跡カマド
第12号住居跡遺物　第13号住居跡
第13号住居跡カマド　同遺物出土状況（１）
同遺物出土状況（２）　第14号住居跡
図版20　第15号住居跡
第16号住居跡・第17号土壙
第16号住居跡遺物出土状況　第17号住居跡
第17号住居跡カマド　第18・19号住居跡
第18号住居跡カマド　同遺物出土状況
図版21　第20号住居跡　第20号住居跡カマド
第21号住居跡　第21号住居跡カマド
第21号住居跡カマド　同遺物出土状況
第22号住居跡　第22号住居跡カマド
図版22　第23・24号住居跡　第24号住居跡カマド
第24号住居跡床面出土土錘　第25号住居跡
第26号住居跡　第27号住居跡
第28号住居跡　第29・38号住居跡
図版23　第30号住居跡　第30号住居跡カマド
第31号住居跡　第31号住居跡カマド
第32・33号住居跡　第34号住居跡
第35号住居跡　第36号住居跡
図版24　第37号住居跡　同貯蔵穴遺物出土状況
第39・40号住居跡　第40号住居跡カマド
第41号住居跡カマド　第42号住居跡
第42号住居跡カマドＡ　同カマドＢ
図版25　同カマドＢ　第１号掘立柱建物跡
第１号土壙　第10号土壙
同遺物出土状況　第10～13号土壙
第３号溝跡　如意南遺跡II区全景（南から）
図版26　第１号住居跡―２　第１号住居跡―３
第４号住居跡―１　第４号住居跡―４
第５号住居跡―１　第５号住居跡―２
第６号住居跡―１　第９号住居跡―１
第９号住居跡―５　第10号住居跡―１
図版27　第10号住居跡―５　第10号住居跡―６
第10号住居跡―７　第10号住居跡―８
第12号住居跡―１　第12号住居跡―２
第12号住居跡―５　第12号住居跡―７
第13号住居跡―１　第13号住居跡―４
図版28　第13号住居跡―５　第13号住居跡―６
第13号住居跡―７　第16号住居跡―１
第16号住居跡―２　第16号住居跡―４
第17号住居跡―１　第17号住居跡―２
第17号住居跡―５　第18号住居跡―２
図版29　第18号住居跡―３　第20号住居跡―３
第21号住居跡―１　第21号住居跡―５
第21号住居跡―11　第22号住居跡―１
第22号住居跡―５　第23号住居跡―１
第24号住居跡―１　第24号住居跡―４
図版30　第24号住居跡―５　第25号住居跡―１
第25号住居跡―４　第27号住居跡―１
第27号住居跡―２　第30号住居跡―１
第33号住居跡―２　第37号住居跡―１
第37号住居跡―２　第37号住居跡―３
図版31　第37号住居跡―４　第39号住居跡―２
第39号住居跡―３　第42号住居跡―１
第10号土壙―１　第11号土壙―１
第11号土壙―２　第11号土壙―４
第58号土壙―１　第58号土壙―５
図版32　第４号住居跡―６　第５号住居跡―３
第10号住居跡―２　第12号住居跡―12
第16号住居跡―５　第17号住居跡―６
図版33　第21号住居跡―９　第21号住居跡―11
第28号住居跡―１　第31号住居跡―１
第31号住居跡―２　第35号住居跡―１
図版34　第37号住居跡―５　第37号住居跡―６
第37号住居跡―８　第39号住居跡―５
第10号土壙―６　第48号土壙―１
図版35　第58号土壙―３　第３号溝跡―１

第３号溝跡―２　第３号溝跡―３
第３号溝跡―４　第３号溝跡―５
図版36　第５号住居跡―４　第９号住居跡―７
第13号住居跡―２　第17号住居跡―７
図版37　第18号住居跡―４　第21号住居跡―７
第30号住居跡―２　第10号土壙―７
図版38　第10号住居跡出土土錘
第31号住居跡出土土錘
第37号住居跡出土土錘
第11号土壙出土土錘
図版39　第24号住居跡出土土錘（１～８）
第24号住居跡出土土錘（９～16）
第24号住居跡出土土錘（17～24）
第24号住居跡出土土錘（25～31）
図版40　第１号住居跡―12　第４号住居跡―８
第13号住居跡―12　第３号溝跡―７
グリッド・表採―16　第24号住居跡―10
如意南遺跡出土砥石
図版41　ピット群出土古銭（表）
ピット群出土古銭（裏）
図版42　第12号住居跡―18　第９号住居跡―８
第29号住居跡―２　第33号住居跡―７
グリッド・表採―17　グリッド・表採―18
図版43　第22号住居跡―10　第22号住居跡―11
グリッド・表採―19
第13号住居跡―14

Ⅰ　調査の概要

1．発掘調査に至る経過

県北部に広がる荒川中流域の大里地区は首都圏近郊に位置し、有望な食料生産基地として大きな発展が期待されている。しかし、荒川の河床が低下したため洪水の危険が増大し、また、水質悪化や湧水の枯渇などの問題が生じてきた。こうした事態を受けて農林水産省が主体となり、大里地区において六堰頭首工など基幹土地改良施設と地区内水利施設の機能回復などの「国営総合農地防災事業」が計画された。これに呼応して埼玉県と川本町でも、「付帯県営農地防災事業」により支線水路等の周辺整備を行うこととなった。

平成９年２月21日付け９埼東第72号関東農政局埼玉東部土地改良事務所長より、六堰頭首工建設工事等用地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会を受けた。文化財保護課では、平成９年２月27・28日に試掘調査を行い、奈良・平安時代の住居跡を確認した。平成９年３月５日付け教文第1625号で、以下のような回答をした。

１　埋蔵文化財の所在

事業地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
如意	集落跡	縄文・奈良・平安	大里郡川本町如意地内
川端	集落跡	奈良・平安	大里郡川本町川端地内

２　取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については、当課と別途協議願います。

これを受けて文化財保護課と関係部局・川本町との間で事前協議がなされたが、計画変更が不可能であるため、工事地区について記録保存の措置を講ずることとした。また、六堰頭首工につながる農免道路部分についても試掘調査がなされ、新たに如意南遺跡が新規登録された。道路に敷設される歩道については川本町の事業であったが、これを分離して調査することが不可能であるため、一体として発掘調査することになり、実施機関として財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団があたることとなった。

如意・如意南遺跡にかかる文化財保護法第57条３の通知が深谷土地改良事務所長よりなされ、平成10年５月20日付教文第３－98号で収受した。

平成10年６月１日より発掘調査に入り、９月30日に終了した。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである。

如意（２次・３次）

平成10年５月13日付け教文第２－24号

平成10年５月13日付け教文第２－25号

如意南

平成10年５月20日付け教文第２－28号

（文化財保護課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

如意・如意南遺跡の発掘調査は、平成10年６月16日から平成10年９月30日にわたって実施した。調査対象面積は、3,350m²であった。

調査地点は、道路予定地であるため、南北に細長い調査区であった。また、途中道路と排水路によって調査地点が分断されていたため、便宜的に北からⅠ区～Ⅲ区の３地点に区分して調査を行った。

発掘調査は、発掘残土置き場の確保が困難であったため、中央のⅡ区から調査を開始し、Ⅲ区、Ⅰ区の順に調査を行った。

６月中旬に、Ⅱ区の表土排除、調査区域に囲柵工事を実施した。また、調査地点は水田に隣接し、調査期間中は、稲作の時期とも重なり、掘削によって水田の水が漏水し、作物への影響を防ぐため、表土排除開始時に、水田に面した調査区に土手を築いた。

表土排除後基準点測量を実施し、その後、遺構確認作業を実施した。その結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝跡などが検出された。遺構確認作業終了後、遺構の調査に着手し、断面図、平面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影等を順次行った。

７月中旬には、Ⅱ区の調査がほぼ終了し、南側のⅢ区の表土排除を開始した。排除した土は、調査の終了したⅡ区へ搬出した。

表土排除終了後、基準点測量を実施し、調査を開始した。その結果、竪穴住居跡、土壙、溝跡、埋没谷等が検出された。

遺構確認作業終了後、遺構の調査に着手し、断面図、平面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影等を順次行った。

また、Ⅲ区の調査と並行して、８月上旬には、北側のⅠ区の表土排除を開始した。排除した残土は、中央のⅡ区へ搬出した。

表土排除終了後、基準点測量を実施し、調査を開始した。その結果、竪穴住居跡、土壙、溝跡などが検出された。遺構確認作業終了後、遺構の調査に着手し、断面図、平面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影等を順次行った。

遺構の調査終了後、Ⅰ区、Ⅲ区の全景写真を撮影し、９月30日に全ての調査を終了した。

整理・報告書作成

如意・如意南遺跡の整理・報告書作成作業は、平成11年７月１日から平成12年２月29日にわたって実施した。

７月初旬から出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業を行い、これと並行して、遺構実測図、写真等記録図面整理を行った。

８月中旬から遺物実測・拓本作成を開始した。これと並行して、遺構・遺物の実測図トレース・遺物の写真撮影を行い、トレース・写真撮影終了後、報告書用版下の図版組を11月下旬まで実施した。

これらの作業終了後、報告書作成のため、原稿執筆、割付の作成などを行い、平成12年１月初旬から印刷を開始した。

印刷開始後、３回の校正を経て、２月29日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)　**発掘調査**（平成10年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚　誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進

管理部

専門調査員兼経理課長	関野　栄一
主任	江田　和美
主任	福田　昭美
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中　裕二
主任	長滝　美智子
主任	腰塚　雄二

調査部

調査部長	谷井　彪
調査部副部長	水村　孝行
調査第一課長	井上　尚明
統括調査員	山本　禎
主任調査員	栗岡　潤

(2)　**整理事業**（平成11年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚　誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓

管理部

管理部副部長兼経理課長	関野　栄一
主任	福田　昭美
主任	腰塚　雄二
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中　裕二
主任	江田　和美
主任	長滝　美智子

資料部

資料部長	高橋　一夫
資料部副部長	石岡　憲雄
主任調査員	栗岡　潤

II　遺跡の立地と環境

如意・如意南遺跡は、川本町大字畠山字如意付近にあり、町のほぼ中央部を東流する荒川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡付近の標高は、64.5mである。

如意遺跡は、荒川に面した地点に位置しており、如意南遺跡は、如意遺跡の南側に隣接して位置している。

如意南遺跡の更に南側には、平安時代末～鎌倉時代にかけて活躍した武将、畠山重能・重忠親子が居住したと伝えられる畠山館跡がある。

遺跡付近の荒川は、寄居町内から東流してきた流れが、同町赤浜付近で一旦北に向かう。そして本遺跡付近及び対岸の花園町黒田付近で東に流れを変え、熊谷方面へ東流する。

遺跡周辺の地形は、全てこの荒川による侵食作用と堆積作用によって形成された、河岸段丘となっている。

この内、最も高位にあるものは、南岸では江南面(江南台地)、北岸では櫛挽面（櫛挽台地）と呼ばれ、関東ローム層が薄く堆積し、最も古い段丘と考えられる。

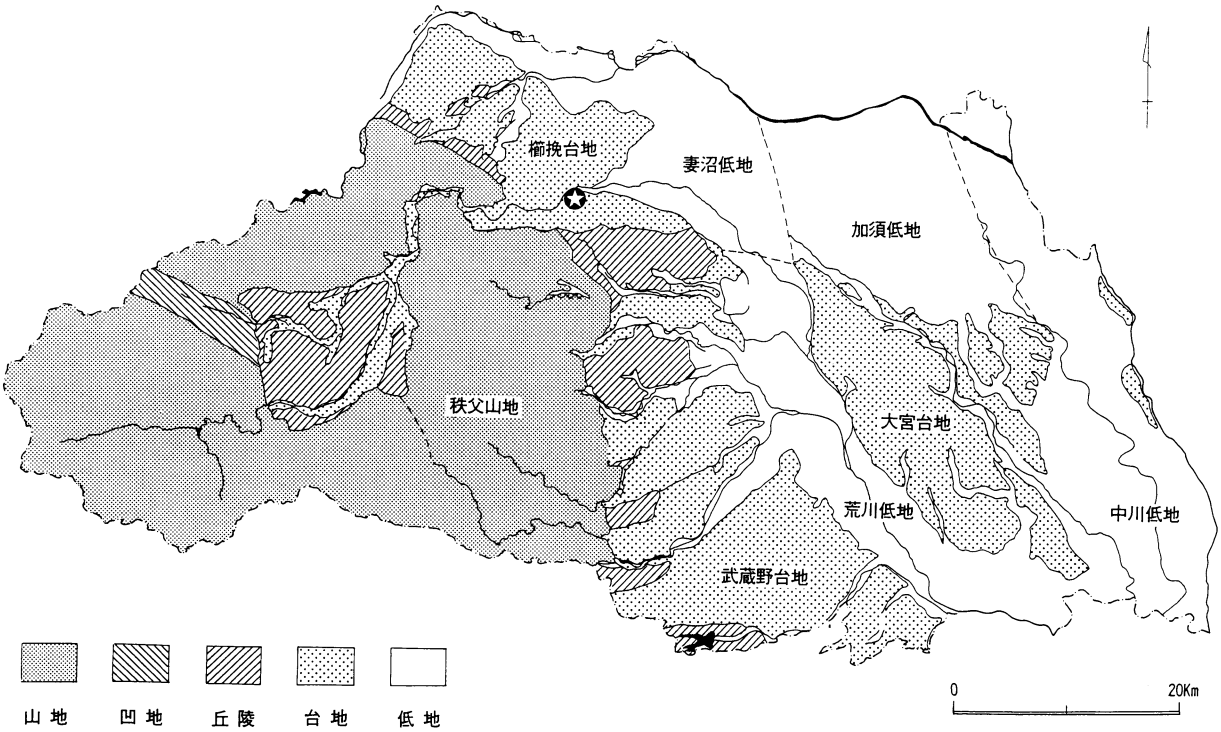
如意・如意南遺跡は、荒川の南岸にあり、江南面より一段低い寄居面上に立地している。遺跡のすぐ北側を荒川が流れ、荒川に面した地点は、現在では護岸された急な崖となっている。

遺跡の北側を流れる荒川は、昭和初年に建設された六堰頭首工によって形状が大きく改変されている。また、遺跡付近の地形についても、戦後の圃場整備によって地形が平坦となっている。

しかし、六堰頭首工建設以前の、明治18年測量の迅速図では、遺跡北側は、荒川との間に寄居面よりも一段低い瀬山面と思われる低地が認められる。この瀬山面は、現在は遺跡西側の字龍泉、倉淵、西川原、野合に広がり、寄居面上の本遺跡との高低差が3m程の崖となっている。この瀬山面が、遺跡の北側までまわり込んでいたと考えられる。したがって、本遺跡は、荒川の水面までは、やや距離があったと思われる。

また、如意南遺跡付近も、現在の平坦な地形が、迅速図ではいくつかの浅い谷が認められ、起伏に富んだ地形だったようである。このことは、今回の発掘調査で、調査地点内の数カ所で浅い谷が検出され、実際の地形が起伏に富んだものであることが実証された。

第１図　埼玉県の地形



本遺跡周辺の遺跡については、如意・如意南遺跡が、古墳時代後期から、中世にわたる複合遺跡であったため、ここでは、特に古墳時代後期以降の遺跡について概観したい。

川本町周辺では、古墳時代後期には、消滅しているものも多数知られているが、多くの古墳が築造された。特に、荒川両岸沿いは、その分布が顕著で、数十基単位がまとまった群集墳となっている。

古墳群は、荒川右岸上流から見ると、如意・如意南遺跡の南西に近接して、箱崎古墳群がある(増田 1963、川本町 1989、村松 1992)。6世紀前半から7世紀代にかけて、32基以上が築造された。全長32mの前方後円墳と、大型円墳1基を含み、須恵器・埴輪・玉類が出土している。如意・如意南遺跡の集落とは近接し、集落が6世紀初頭頃に始まることを考え合わせると、箱崎古墳群と集落の関連が想定され、興味深い。

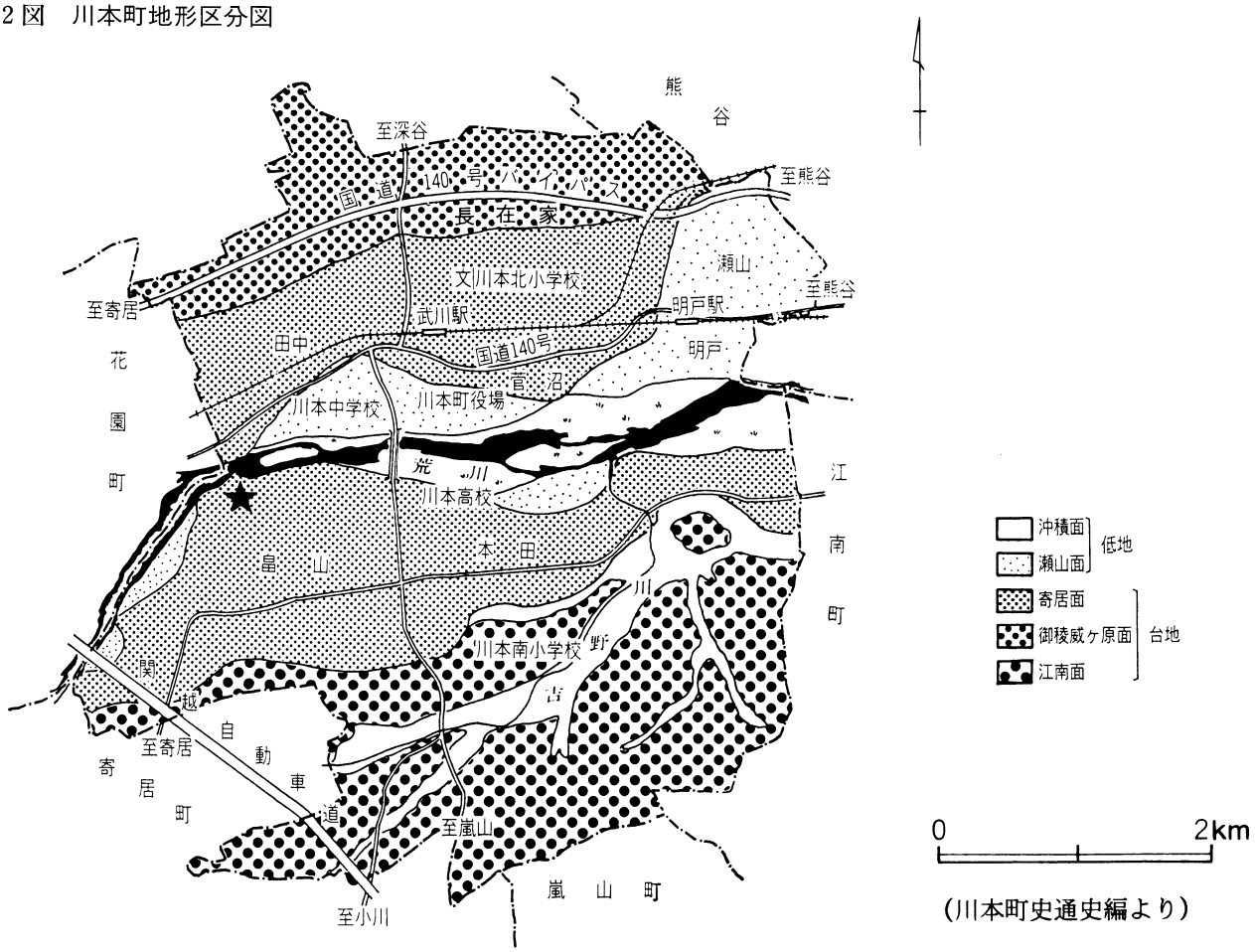
本遺跡の下流約1.2kmには、塚原古墳群がある。かつては前方後円墳の蛤塚古墳を含む数十基が知られていたが、消滅し、現存していない。この古墳群と、本遺跡の間に、川端遺跡があるが、川端集落との関連が想定される。

塚原古墳群のさらに下流の、江南町との境界付近には、鹿島古墳群がある。円墳を中心に88基が確認され、27基が調査されている (塩野他 1972)。胴張の石室を有し、大刀・鉄鏃等の鉄器を中心に、わずかな埴輪片・須恵器片が出土している。古墳の築造時期は、6世紀末から8世紀にかけて築造されたものと考えられている。

荒川沿いに展開する、寄居面の上位段丘である江南台地上では、吉野川流域に、上大塚古墳群、清水山古墳群 (川本町 1989) がある。上大塚古墳群は、6基が確認され、4基が現存している。清水山古墳群は、鹿島古墳群の南約600mにある。11基確認され、出土した埴輪等から、6世紀前半以降の築造と考えられている。

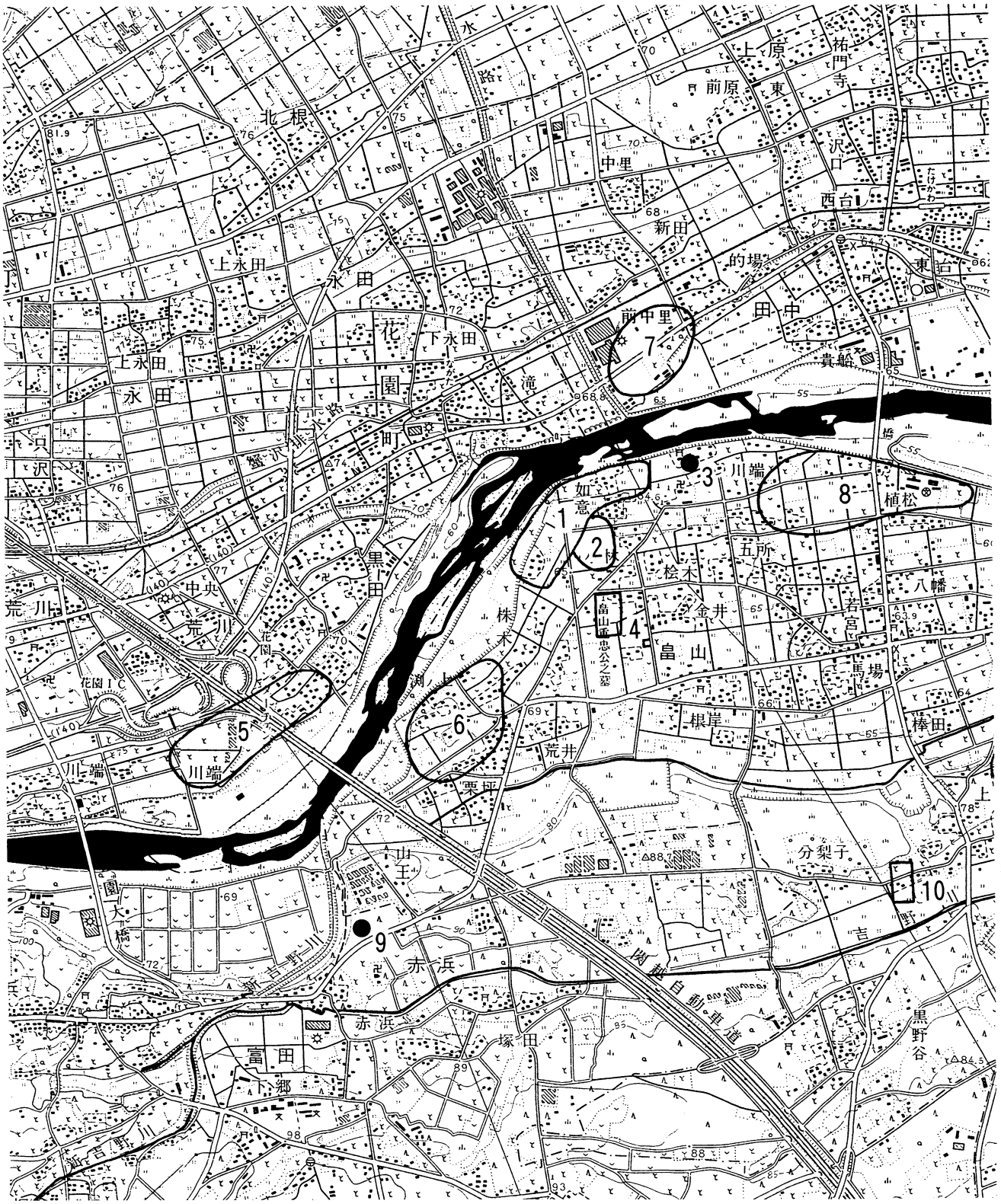
一方、荒川左岸では、箱崎古墳群の対岸に、花園町黒田古墳群がある。22基確認され、6世紀前半～7世紀前半にかけて築造されたと考えられている。

第2図　川本町地形区分図

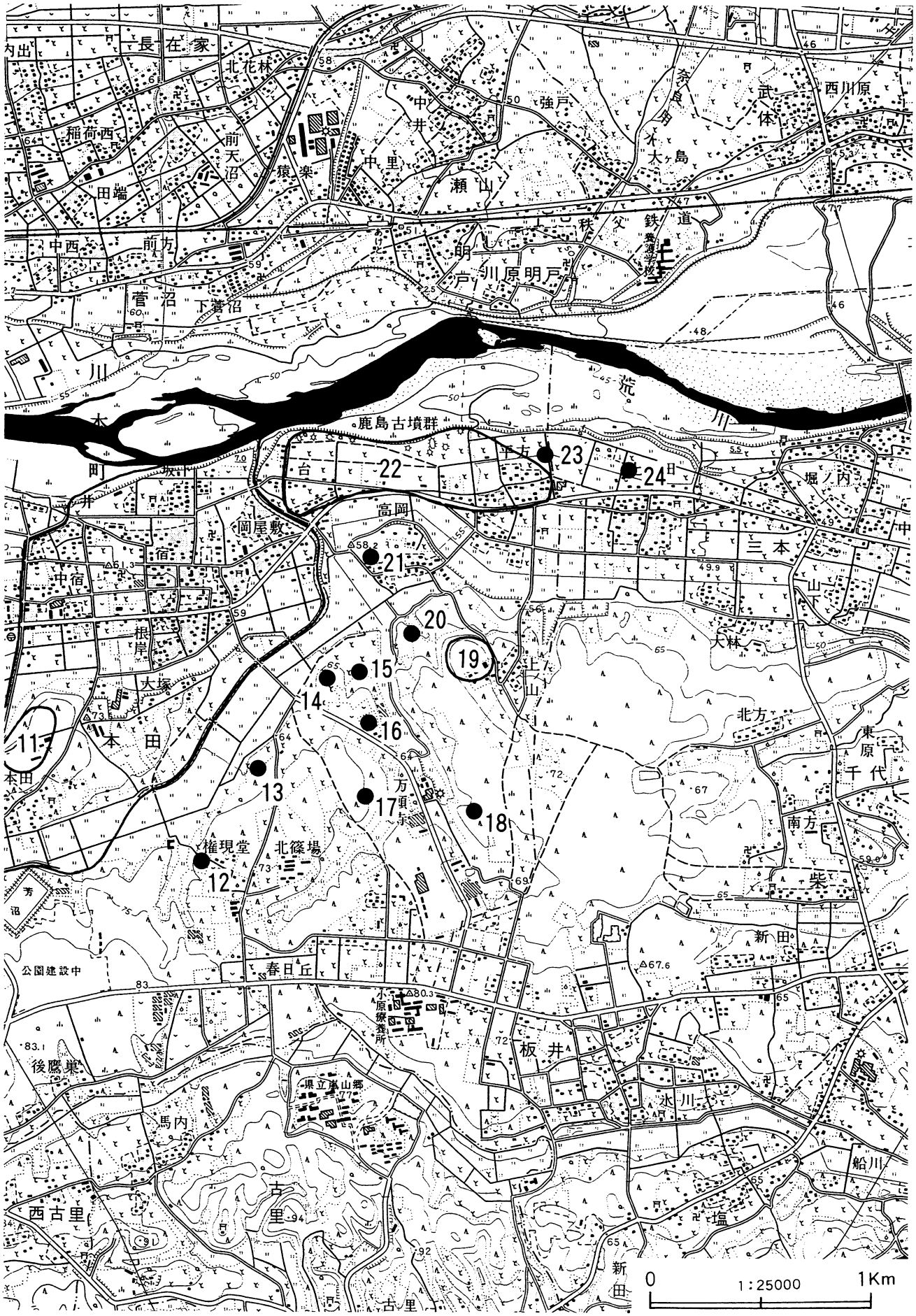


(川本町史通史編より)

第３図 周辺の遺跡



1 如意遺跡　2 如意南遺跡　3 川端遺跡　4 畠山館跡　5 黒田古墳群　6 箱崎古墳群　7 見目古墳群　8 塚原古墳群
9 赤浜天神沢遺跡 10 本田館跡　11 上大塚古墳群　12 権現堂遺跡　13 円阿弥遺跡　14 白草遺跡　15 竹之花遺跡
16 諦光寺廃寺比定他　17 四半歩遺跡　18 百済木遺跡　19 清水山古墳群　20 荷鞍ヶ谷戸瓦窯跡推定地
21 舟山遺跡 22 鹿島古墳群　23 鹿島平方裏遺跡　24 鹿島中世墳墓


鹿島古墳群
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
権現堂
北篠場
春日丘
公園建設中
後鷹巣
馬内
古里
西古里
板井
氷川
塩
船川
新田
三本
大林
上ノ山
北方
東原
千代
南方
柴
堀ノ内
岡屋敷
宿
中宿
根岸
大塚
本田
荒川
本川
町
井
台
平古
日
高岡
強戸
中井
中里
瀬山
明戸
川原明戸
大ケ島
武体
西川原
奈良
秩父鉄道
長在家
北花林
稲荷西
前天沼
猿楽
田端
中西
前方
菅沼
下菅沼
内出
小原療養所
県立風山郷
方頂寺
0
1:25000
1Km

また、その上流には、小前田古墳群があり、100基以上の古墳が確認されている。

塚原古墳群の対岸には、見目古墳群があり、２基の古墳が確認されている。

古墳時代後期の集落遺跡は、本遺跡の他に、荒川沿いでは、本遺跡及び塚原古墳群との間に川端遺跡（村松 1992・1993)、鹿島古墳群に隣接して鹿島遺跡、鹿島平方裏遺跡（村松 1995）等、それぞれ古墳群に隣接して分布している。これらの遺跡は、古墳時代後期から、平安時代まで存続する遺跡であり、それぞれが、小規模な地域における拠点的な集落であったと考えられる。

江南台地上の集落遺跡は、吉野川右岸に権現堂遺跡（村松 1991)が知られる程度で、大規模な集落は、荒川沿いに集中していた可能性がある。

奈良・平安時代は、川本町周辺では、荒川を境に北側は榛沢郡、本遺跡のある南側は男衾郡に属していたと考えられている。本遺跡及び東隣の川端遺跡は、男衾郡に属し、しかも郡境に立地していたことになる。

対岸の榛沢郡の郡衙は、岡部町熊野遺跡（鳥羽・平田 1997)周辺が有力視されており、北側の中宿遺跡からは、榛沢郡の正倉跡と考えられる倉庫群が、整然と並んで検出された（鳥羽 1995)。

一方、本遺跡を含む男衾郡については、現在明らかになっていない。

奈良・平安時代の遺跡は、荒川沿岸部では、古墳時代から連続して営まれる遺跡が多い。本遺跡を始め、川端遺跡、鹿島遺跡、鹿島平方裏遺跡が挙げられる。

川端遺跡からは、土師器・須恵器と共に、緑釉陶器・灰釉陶器が出土し、また多数の管状土錘が出土した。

江南台地では、現在百済木という興味深い地名が残されている。この百済木地区及び周辺では、百済木遺跡（村松 1999b)、竹之花遺跡、円阿弥遺跡（利根川 1991)、白草遺跡(磯崎 1992)、四反歩遺跡(金子 1993)等、多くの遺跡が分布している。また、実態は明らかではないが、百済木地区では、諦光寺廃寺・荷鞍ヶ谷戸瓦窯跡があったとされ、平安時代の小金銅仏や、瓦が採集されている。

この百済木地区で特に注目されるのは、近年川本町遺跡調査会によって調査が行われた百済木遺跡（村松 1999b）である。

百済木遺跡では、柵列で囲まれた建物群が２箇所で検出され、それぞれの区画内部に、一辺10mを超える大型竪穴住居跡があり、周囲に掘立柱建物跡が整然と配置されていた。時期は、８世紀前半に位置付けられている。この２つの建物群は、竪穴住居跡を中心に据えていることから、官衙跡とは考えにくく、律令初期の有力者層の居宅と推定されている。

古代男衾郡には、渡来人の子孫とされる壬生吉志福正という人物が、『類聚三代格』と『続日本後紀』に記録されている。この人物は、男衾郡榎津郷に居住する前男衾郡大領で、承和８年（845）に、二人の息子が収める一生分の租税を前納することを申請し、許可されている。また、承和12年（849）には、神火によって焼失したままの武蔵国分寺七重塔の再建を願い出て、許可されている。このことから、壬生吉志福正という人物は、男衾郡内において破格の財力を持っていたことが想定でき、壬生吉志氏一族は、この地の有力な豪族であったことが推定される。

百済木遺跡の建物群は、福正の活躍した時代よりも100年以上前のものであるが、壬生吉志一族か、それに匹敵する豪族の居宅であったのであろう。

中世になると、本遺跡周辺は、畠山庄と呼ばれ、平安時代末から鎌倉時代に活躍した、畠山重忠の本拠地と推定され、多くの中世遺跡が分布する。

如意南遺跡の南に近接して、畠山館跡がある。畠山重忠の館跡とされ、館跡内には現在重忠及びその一族・家臣のものと伝わる６基の五輪塔が残されている。

館跡は、これまでに５回にわたる調査が実施され、堀跡、溝跡、石組遺構等が検出された。このうち第1次調査では、６基の五輪塔下の発掘調査で、石組遺構に伴って蔵骨器が出土した（栗原他 1984)。

出土遺物は、蔵骨器、陶器片、青磁片、土師質土器（かわらけ）等、概ね13世紀後半～15世紀代の遺物が

出土していることから、館跡の存続時期もこの時期に属していたと考えられている。しかし、第５次調査では、13世紀前半に属する可能性のある、手捏ねの土師質土器が石組遺構から出土しており、館の存続時期が遡る可能性もある（村松 1999a)。

本遺跡の東には、重忠に由来する井椋神社、満福寺があるが、隣接する川端遺跡から、柱穴群が検出され、青磁片・古銭が出土している。

鹿島古墳群の東側には、鹿島中世墳墓跡（塩野他 1972）がある。楕円形の塚の上部に、配石を伴う板碑群と、火葬骨が出土した。

鹿島古墳群の南にある独立丘陵の頂上部には、舟山遺跡がある。舟山遺跡からは、多量の河原石と共に、13世紀～14世紀代の蔵骨器と、板碑が出土している(塩野他 1980)。

畠山館跡の南1.5kmの江南台地上には、重忠家臣の本田親常のものと伝えられる館跡がある。堀と土塁の一部が現存し、発掘調査により、深さ1.8mの箱薬研堀であることが確認されている（今井他 1985)。

江南台地上には、このほか、百済木遺跡の、万願寺という地名を残す付近から、二重の堀に囲まれた墓域、地下式壙、竪穴住居跡等が検出され、万願寺跡との関連が推定されている。(村松 1999b)

また、如意・如意南遺跡の南西約２kmの寄居町赤浜地区には、伝鎌倉街道上道があり、現在の関越自動車道と平行するように南東から北西にかけて直線的に延びる掘割状遺構が現存している。荒川に降りる地点では、緩やかに曲がり、切り通しとなっている。部分的ではあるが、赤浜天神沢遺跡において、側溝と硬化面を有する道路遺構が検出された。(小林 1996)

参考文献

磯崎　一　1992『白草遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第118集

今井　宏他　1985『埼玉県の中世城館跡』埼玉県立歴史資料館

金子直行　1993『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第130集

川本町　1989『川本町史　通史編』

栗原文藏他　1984『畠山重忠墓』川本町教育委員会

小林　高　1996「赤浜天神沢遺跡」『町内遺跡５』寄居町遺跡調査会

塩野　博他　1972『鹿島古墳群』埼玉県教育委員会

塩野　博他　1980『舟山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告書第９集

利根川章彦　1991『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第105集

鳥羽政之　1995『中宿遺跡　推定・榛沢郡正倉跡の調査』岡部町教育委員会

鳥羽政之・平田重之　1997『熊野遺跡発掘調査報告書』岡部町遺跡調査会

増田逸朗　1963「川本村箱崎古墳群の報告」『第１回埼玉県遺跡発掘調査報告会要旨』

村松　篤　1991『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』　川本町遺跡調査会

村松　篤　1992『川端遺跡発掘調査報告書』川本町遺跡調査会

村松　篤　1992『箱崎古墳群第３号墳・淵ノ上遺跡発掘調査報告書』川本町教育委員会

村松　篤　1993『川端遺跡第３次調査発掘報告書』川本町教育委員会

村松　篤　1995『鹿島平方裏遺跡発掘調査報告書』川本町遺跡調査会

村松　篤　1999a『畠山館跡　第５次調査の報告』川本町遺跡調査会

村松　篤　1999b「９　百済木遺跡の調査」『第32回　遺跡発掘調査報告会　発表要旨』

III　遺跡の概要

調査地点の概要

如意・如意南遺跡は、大里郡川本町大字畠山字如意・小林付近にあり、川本町のほぼ中央部を東流する荒川右岸の河岸段丘上に立地する。

如意遺跡は、荒川に面して位置し、如意南遺跡は、如意遺跡の南側に隣接して位置している。

遺跡の広がりは、如意遺跡は、字西川原・西川・野合・如意一帯に広がり、荒川に沿って、南西から北東方向に、長さ600m、幅100m～200m前後の広大な広さをもつ。荒川に沿った地点では、六堰頭首工建設に伴う発掘調査を、平成９年度から実施しており、平成11年度現在で、古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴住居跡が200軒以上検出されており、大規模な集落遺跡が展開していたものと考えられる。如意南遺跡は、字如意・小林付近に展開し、如意遺跡の南側に接して、東西180m、南北220m前後の楕円形に広がる。

遺跡付近の地形は、全て荒川による侵食作用と堆積作用によって形成された河岸段丘となっており、如意・如意南遺跡は、最も高位にある江南面より一段低い、寄居面と呼ばれる段丘上に立地している。この寄居面より下位には、瀬山面と呼ばれる低地があるが、遺跡の西側に僅かに残される程度で、遺跡の北側は荒川が流れ、現在では昭和初年に建設された六堰頭首工により護岸され、急激な崖となっている。

遺跡付近の標高は、64m～64.5m前後で、荒川から離れるに従い、標高が緩やかに高くなっているが、概ね平坦である。しかし、今回の発掘調査によって、調査地点内から、東西方向に展開する埋没谷を３地点で検出し、実際の地形は、起伏に富んだものであることが明らかになった。埋没谷については後述する。

発掘調査の概要

調査地点は、道路建設用地のため、幅12m前後、長さ280m前後の細長い調査区であった。このため、調査の便宜上、調査区を横断する道路及び排水路を境界に、Ⅰ区からIII区に区分し、如意遺跡はⅠ区北半部、如意南遺跡はそれ以南として調査を開始した。

しかし、調査の結果、遺跡の境界付近では、遺構が連続して検出され、遺跡の境界が不明確となった。両遺跡は、むしろ同一の遺跡であったと考える方が妥当と考えられ、これから報告する如意・如意南遺跡の境界は、あくまでも便宜的な境界線である。

遺構番号は、如意遺跡は、隣接する六堰頭首工建設用地内で検出した遺構から連続して付しており、竪穴住居跡はSJ137から、土壙はSK47からとなる。如意南遺跡については、今回調査した農道部分のみの調査であったため、それぞれ最初から番号を付した。

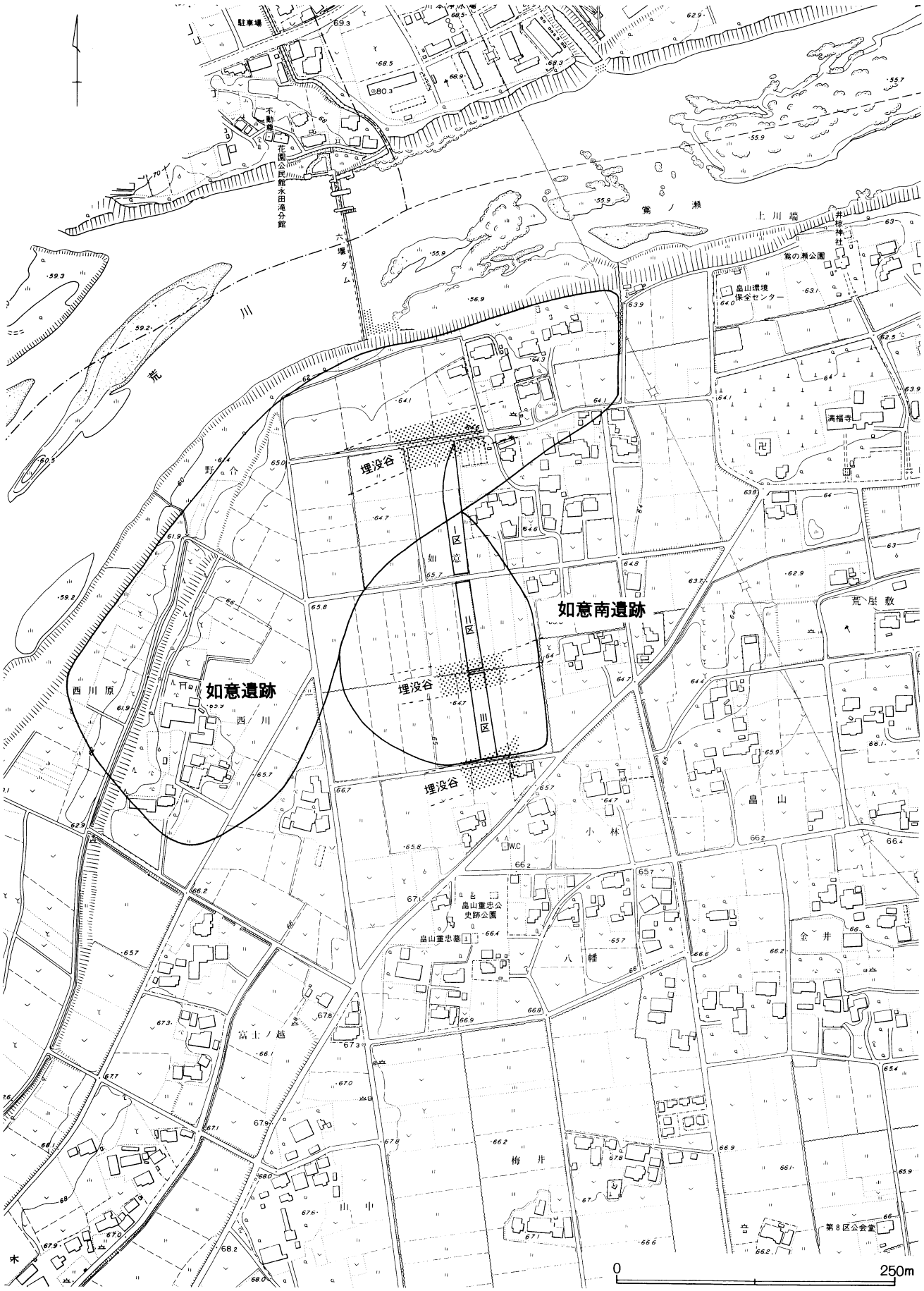
調査区に設定した10m方眼のグリッド番号についても、北側の六堰頭首工調査地点から連続しており、今回の調査地点は、東西方向は18から、南北方向はRから始まる。したがって、今回調査地点のグリッドは、R－18グリッドから始まる。また、調査地点は、南北に細長い調査区であったため、Z列以南は、頭にAを冠し、AA・ABという順に設定した。

遺構は、現地表下0.3m～1.5mで検出した。表土は、現在水田・畑の耕作土となっている。この表土は、戦後の圃場整備によって旧地形上に水平に盛られたもので、この下に旧表土（Ⅰ層）がある。旧表土は、白色の軽石状の粒子を多量に含む黒褐色または暗褐色土で、谷部へ行くほど層が厚くなっていた。旧表土直下では、台地部分では直接遺構確認面の黄褐色砂質土となり、谷部では遺構確認面との間に、やや粘性のある黒褐色土（II層）が堆積していた。中世の遺物は、このII層から出土した。II層の下には、炭化物を含み、締りのある黒褐色土（III層）が堆積していた。III層は、中世の溝跡に壊されていたことから、中世以前の堆積層と考えられる。III層の下層が遺構確認面となる黄褐色砂質土である。本文中の事実記載の中で地山としたものは、全てこの黄褐色砂質土である。

埋没谷について

埋没谷は、今回調査した地点では、３箇所で検出し

第４図　調査区周辺の地形



第５図　如意・如意南遺跡全測図(I)

第６図　如意・如意南遺跡全測図(2)

た。検出地点は、Ⅰ区北端部、Ⅱ区とⅢ区の境界、Ⅲ区南端である。

なお、遺構全体図に示した等高線は、遺構確認面となった黄褐色砂質土上面のものである。したがって、各谷の底面は、黄褐色砂質土の上面であって、実際の谷の底面を示すものではない。

Ⅰ区北端の谷は、北に向かう斜面を検出した。Ⅰ区の北では、六堰頭首工の建設に伴う調査を実施しており、その際に、南に傾斜する谷の対岸が検出された。

Ⅱ区とⅢ区の境界の谷は深く、現在の排水路と平行している。谷の最も低い地点と、現地表面との比高差は、約2.5mである。谷の両岸では、遺構確認時に礫層が露出していた。この礫層は、黄褐色砂質土の下層の礫層であるが、谷の両岸のみ盛り上がって露出していた。洪水時に運ばれた礫が、自然堤防状に盛り上がったものと考えられる。

Ⅲ区南端の谷は、南に向かう斜面を検出した。谷の等高線は、南西から北東方向に展開し、遺構は、この等高線に平行して検出した。

また、Ⅲ区の南に連続する地点を、川本町遺跡調査会が平成９年度に調査を行っているが、その際に谷の対岸が検出されている。

検出遺構の概要

検出した遺構は、両遺跡で、古墳時代後期～奈良平安時代の竪穴住居跡59軒、掘立柱建物跡１棟、古墳時代後期～中世にかけての土壙85基、溝跡５条、ピット277基であった。

各遺跡毎の検出数は、如意遺跡では、竪穴住居跡17軒、土壙25基、溝跡１条、如意南遺跡では、竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡１棟、土壙60基、溝跡４条、ピット277基であった。

竪穴住居跡は、殆どが重複し、単独で検出した遺構は少ない。また、幅12m前後の細長い調査区であり、遺構の多くは調査区外へ展開していた。このため、遺構の全体が明らかとなった住居跡は少なかった。

住居跡の時期は、出土遺物から、古墳時代後期～平安時代に属すると考えられる。

土壙は、竪穴住居跡と同時期のものと考えられるが、如意南遺跡では、中世の陶器・石造物が出土したものもあった。中世の遺物は、概ね14～15世紀代が中心で、室町時代のものと考えられる。

溝跡は、細長い調査区を横断するように検出されたため、全体の形状が明らかになったものはない。また、出土遺物が少なく、時期を明確にできたものは如意南遺跡SD3のみであった。SD3は、出土遺物から、中世に属していたものと思われる。

ピットは、如意南遺跡を中心に277基が検出された。ピットは、調査区内の四箇所に集中する傾向があったため、それぞれピット群１～４とした。ピットからは、出土遺物がなく、時期を明確にできたものはなかったが、各ピットの規模は、径30cm以下で、方形のものが多い。ピットの多くは平安時代の竪穴住居跡を壊しており、また、ピット群のあるグリッドからは、中世の遺物が出土していることから、中世に属していた可能性がある。

出土遺物の概要

出土遺物は、主に竪穴住居跡から、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・須恵器、土錘が出土した。奈良・平安時代の住居跡からは、他に鉄製品、紡錘車、砥石、帯金具、転用硯が出土した。また、判別できたものは少ないが、墨書土器が数点出土した。

特に注目されるのは、土錘の出土点数の多さであろう。図示可能な遺物は、如意・如意南遺跡で合わせて268点出土した。図示できなかった小破片も含めると、300点を超える。多くは竪穴住居跡からの出土で、数十点がまとまって出土した遺構もあった。土錘は漁労具と考えられ、本遺跡が荒川に面している点からも、漁労にも携わっていた集団であった可能性を示唆するものとして興味深い。

また、僅かではあったが、中世の遺物が出土した。主に土壙・溝跡、グリッドからの出土であった。

遺物は、概ね14～15世紀に属すると考えられる、破片資料であったが、瀬戸産の卸皿・碗・花瓶、在地産の鉢・土釜、古銭、宝篋院塔の相輪が出土した。

IV 如意遺跡の調査

1. 遺跡の概観

如意遺跡は、大里郡川本町大字畠山に所在する。遺跡は、字西川原・西川・野合・如意一帯に広がり、荒川に沿って、南西から北東方向に、長さ約600m、幅100～200m前後の広さを持つ。遺跡の北と西は荒川に面し、東は川端遺跡が隣接し、また南で如意南遺跡と接している。

調査地点は、道路建設用地のため、幅12m前後、長さ280m前後の細長い調査区であった。このため、調査の便宜上、道路および排水路を境界にⅠ区からⅢ区に区分して調査を実施した。

また、調査地点は、如意・如意南遺跡の２つの遺跡に跨っていたが、このうち如意遺跡に属する部分は、Ⅰ区の北半部で、南半部は如意南遺跡となる。

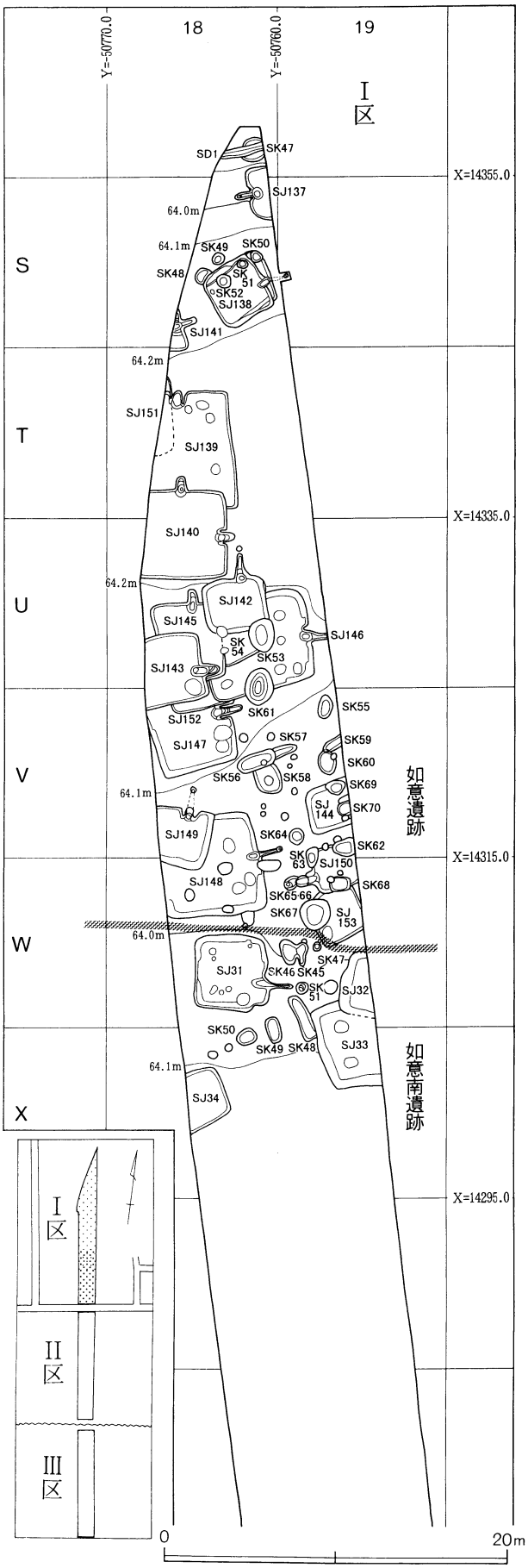
しかし、第Ⅲ章でも述べたが、調査の結果、如意遺跡と如意南遺跡の境界付近では、住居跡を中心に、遺構が連続して検出され、遺跡の境界が不明確となっている。むしろ２つの遺跡は、同一遺跡であったと考える方が妥当であり、本報告にある如意・如意南遺跡の境界は、あくまでも便宜的な境界線である。

今回如意遺跡として調査した地点は、Ⅰ区北半部であった。調査地点は、一見平坦に見えるが、遺構確認面となった黄褐色砂質土で計測した等高線は、緩やかではあるが、起伏があり、北端部では、北に向かって急激に傾斜していた。また、Ⅰ区の北には、六堰頭首工建設に伴う発掘調査地点があるが、ここでは南に傾斜する谷を検出しており、六堰頭首工建設用地と、本調査地点との間には埋没谷があったものと思われる。

検出した遺構は、古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡17軒、土壙25基、溝跡１条であった。

遺構番号は、六堰頭首工用地内で検出した遺構番号から連続して付しており、竪穴住居跡はSJ137から、土壙はSK47からとなる。溝跡は、本調査地点で最初に検出したため、SD1からとなる。

第７図　如意遺跡全測図



2. 遺構と遺物

(1) 住居跡

住居跡は、17軒検出した。検出した住居跡は、SJ137～SJ153である。

遺構番号については、前項でも触れたが、今回調査した如意遺跡は、平成９年度から調査中である、六堰頭首工建設用地内からの連番で番号を付したため、今回調査した農道部分の住居跡の番号は、SJ137からとなった。

したがって、如意遺跡SJ1～SJ136と、SJ153以降の住居跡は、六堰頭首工調査地点にある。

検出した17軒の住居跡は、古墳時代後期～平安時代に属し、殆どが重複して検出した。また、調査地点が幅10m前後であったため、調査区外へ展開していた住居跡も多く、全体の形状が明らかになったものは少ない。

第137号住居跡（第８・９図、図版２・６・９・12）

M・S－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であったと考えられるが、東側半分が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.09m、深さ0.37mであった。主軸方位は、N－103°－Wであった。

柱穴は検出できなかった。

床面は、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

カマドは西カマドで、南西方向に長い煙道を検出した。

貯蔵穴・壁溝などその他の付属施設は検出できなかった。

出土遺物は、カマド右脇の床面付近から、土師器坏、高坏、甕、甑が出土した。

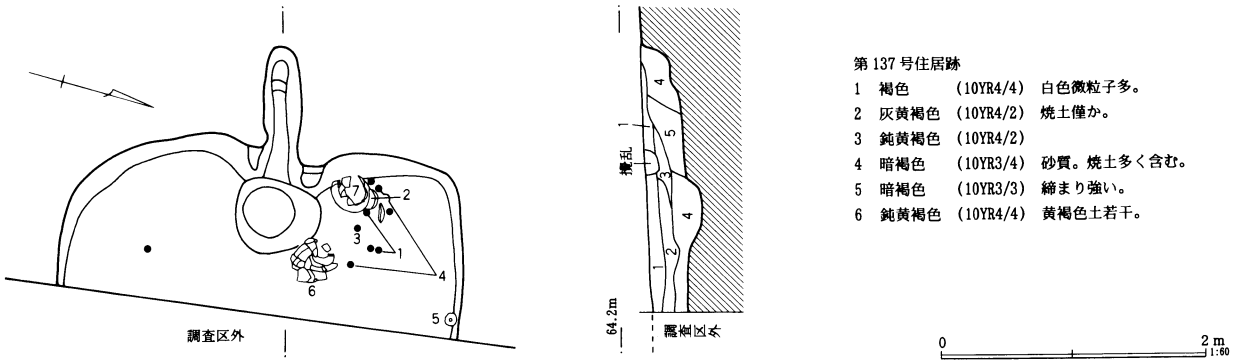
１～４は坏である。１は、口縁部が内湾しながら立ち上がる。内面口縁直下は、背の丸い工具による強いナデのため、口縁端部が玉縁状に肥厚していた。内外面ともナデは断続的であった。底部はヘラケズリされていたが、外面底部中央は、削り残され、窪んでいた。器面が荒れていたため、不明瞭であったが、外面に赤彩が認められた。

２～４は、円柱状の粘土塊から成形したと考えられる。２は、円柱から切り離した後、低部は丸く削らずに平底となっている。口縁部はやや外側に開きながら立ち上がる。３は、２と基本的に同一の技法によって成形されるが、底部にヘラケズリが施され、丸底となる。２・３とも、口縁部と底部の境界の稜線は明瞭でない。

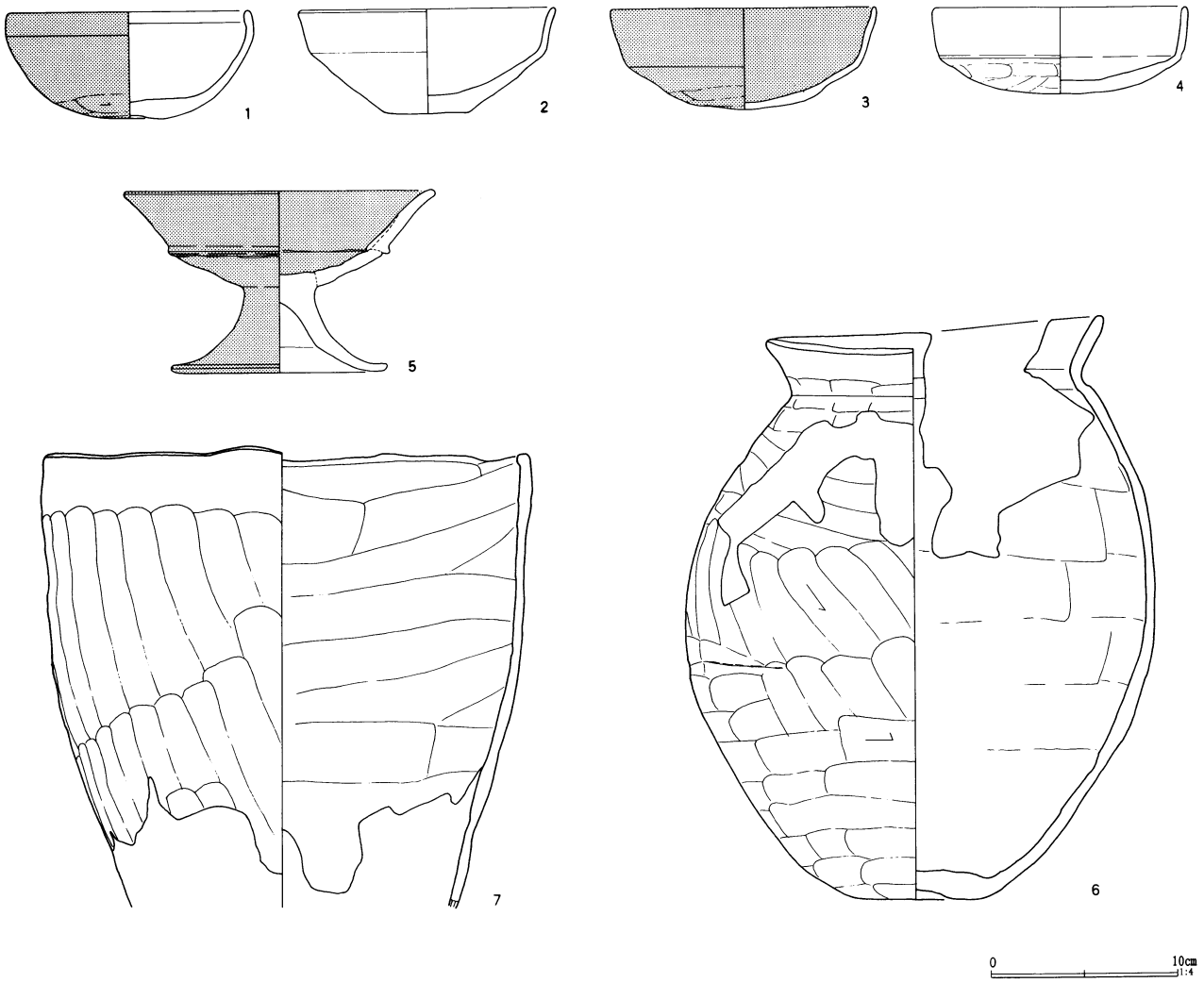
４は、底部のヘラケズリが口縁直下まで及ぶ、口縁部は２・３に比べ、直線的に立ち上がる。口縁部と底部の境界には強いナデによって生じた稜線が認められ、ナデの下端が沈線状になる。口縁端部は、作り出さず、丸くなる。

５は、高坏である。坏部口縁部は、外反しながら立

第８図　第137号住居跡



第９図　第137号住居跡出土遺物



第137号住居跡出土遺物観察表（第９図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.8	5.7		BDEHJL	3	橙	70%	床面	外面赤彩
2	坏	13.6	5.6	4.4	BDEJ	3	橙	70%	床面	
3	坏	14.1	5.4		BDFJL	4	橙	60%	床面	内外面赤彩
4	坏	12.9	4.6		BDEJ	3	明赤褐	40%	床面	
5	高坏	16.7	9.7	11.6	BEHJL	3	橙	70%	壁際	内外面赤彩
6	甕	17.7	32.2	7.0	ABDEHJL	4	暗褐	50%	床面	上げ底風
7	甑	25.5			ABDJL	2	明黄褐	胴上半部	床面	

ち上がる。坏部口縁部と底部の境界の稜線は明瞭である。脚部は裾が大きく開き、裾部端部がやや上方へ反っていた。器面が荒れ、調整が不明瞭であったが、赤彩が認められた。

６は、甕である。底部は上げ底状で、底部の周辺部がヘラケズリされていた。全体的に歪みが著しい。口縁部は横ナデ、胴部外面は、胴部上半と下部が横方向のヘラケズリ、胴部中位が縦方向のヘラケズリが施されていた。

７は甑である。下部を欠損していたため、全体の形状は不明である。外面口縁部及び内面はヘラナデ、外面胴部は縦方向のヘラケズリが施されていた。また、内面口縁端部直下は、強いナデにより、ヘラの上端が当たった痕跡が明瞭に認められた。

第138号住居跡（第10・11図、図版2・6・13）

S－18グリッドで検出した。

平面の形状は、四隅がやや丸みを帯び、歪んだ方形であった。

規模は、長軸3.72m、短軸3.50m、深さ0.45mであった。主軸方位はN－69°－Eであった。

柱穴は検出できなかった。

床面は、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

カマドは、東カマドで、長い煙道部を有していた。また、天井部が残存していた。煙道は、燃焼部から斜めに立ち上がり、先端部分でテラス状になっていた。天井部は、傾斜せず、水平に延びていた。

貯蔵穴・壁溝など他の施設は検出できなかった。

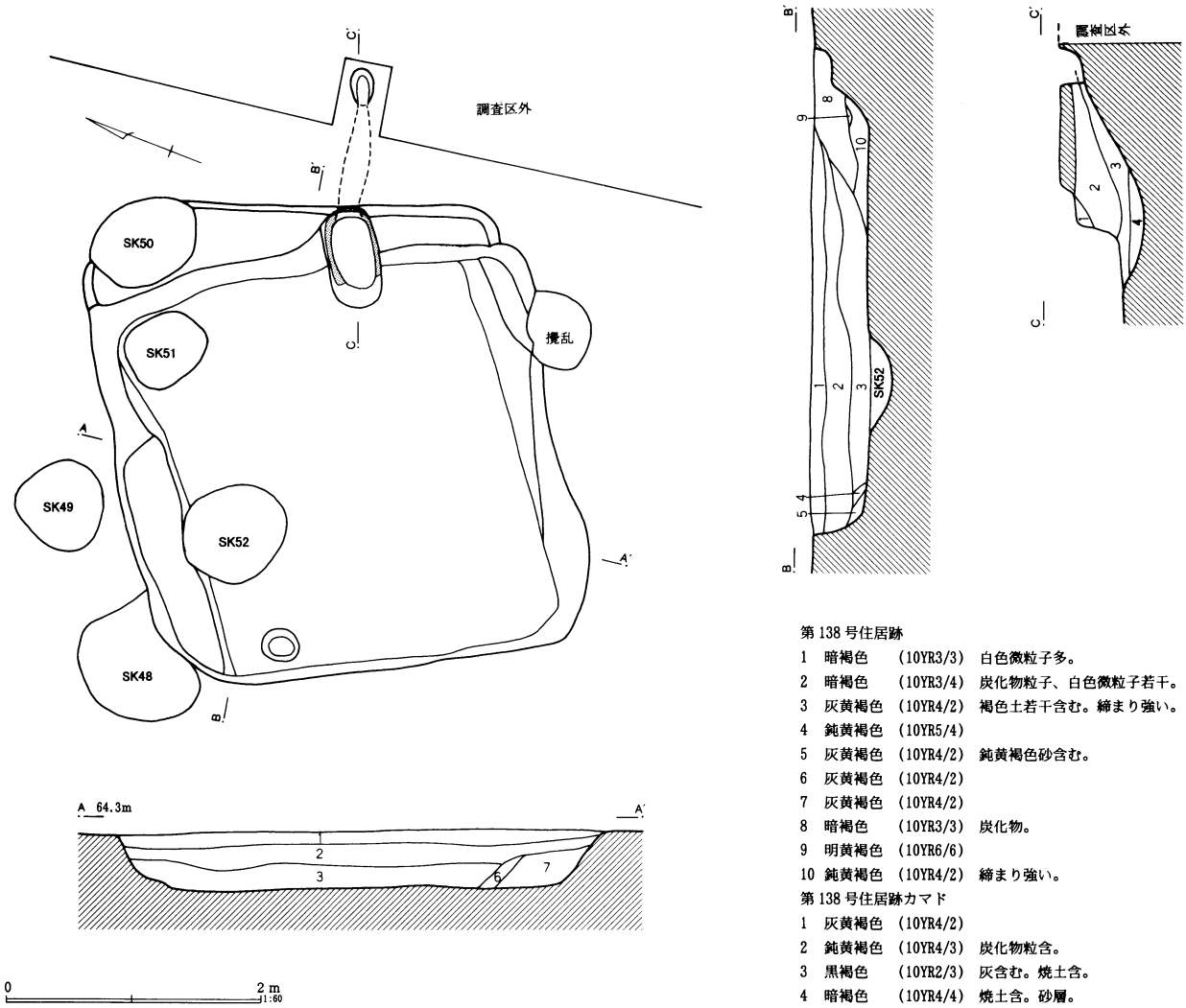
また、カマドの構築された住居東壁の、カマド両脇に、テラス状の張り出し部を検出した。当初は、重複する他の遺構の可能性も考慮したが、覆土が住居跡と同一であること、張り出しの東壁と住居の西壁が並行していること等から、同一の遺構とした。このテラス状の張り出しは、棚状の施設とも考えられる。

住居跡はSK48、50、51、52と重複していた。このうち、SK52は住居跡に壊されていることを確認したが、他の遺構との重複関係を明らかにすることはできなかった。

出土遺物は、平安時代の須恵器坏、高台坏、羽釜、灰釉陶器壺、土師器甕等が出土したが、何れも破片資料で、覆土中の遺物であり、土壙との重複も多く、時期の異なる遺物の混入も認められる。

また、土錘が13点出土した。

第10図　第138号住居跡



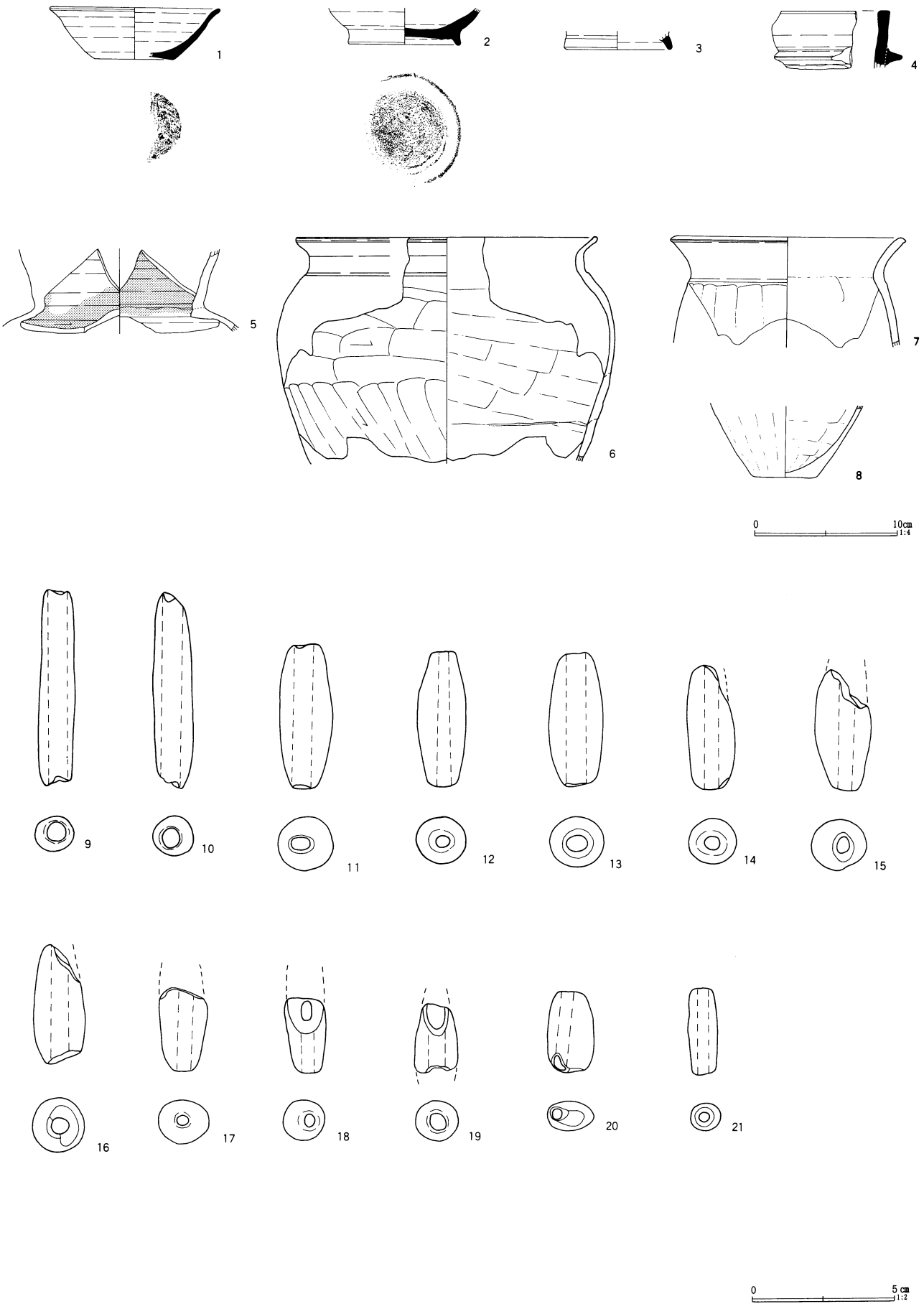
第138号住居跡

1　暗褐色　(10YR3/3)　白色微粒子多。
2　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物粒子、白色微粒子若干。
3　灰黄褐色　(10YR4/2)　褐色土若干含む。締まり強い。
4　鈍黄褐色　(10YR5/4)
5　灰黄褐色　(10YR4/2)　鈍黄褐色砂含む。
6　灰黄褐色　(10YR4/2)
7　灰黄褐色　(10YR4/2)
8　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物。
9　明黄褐色　(10YR6/6)
10　鈍黄褐色　(10YR4/2)　締まり強い。

第138号住居跡カマド

1　灰黄褐色　(10YR4/2)
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　炭化物粒含。
3　黒褐色　(10YR2/3)　灰含む。焼土含。
4　暗褐色　(10YR4/4)　焼土含。砂層。

第11図　第138号住居跡出土遺物



第138号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼 成	色　　調	残　存	出土位置	備　　考
1	坏	11.8	3.6	5.5	ABJHL	4	灰オリーブ	20%	覆土	末野
2	高台坏			7.7	AHJL	4	橙	底部	覆土	末野
3	高台坏			7.2	ABFHJL	3	灰オリーブ	高台	覆土	
4	羽釜				BEFJL	3	橙	口縁	覆土	
5	甕				ABF	2	明灰	破片	覆土	灰釉陶器
6	甕	16.0			ADJL	3	赤褐	口縁	覆土	
7	甕	(21.0)			ABEFJKL	3	褐	破片	覆土	
8	甕			4.5	BDHJL	3	暗褐	底部	覆土	

第138号住居跡出土土錘観察表（第11図）

番号	長 さ	径	穴 径	重　さ	分　類	色　調	残 存	備　考
9	7.0	1.3	0.7	11.76	AaIII	橙	100%	
10	6.9	1.4	0.7	12.50	AaIII	橙	100%	
11	5.1	2.0	0.7	17.65	BaV	褐	100%	
12	4.8	1.7	0.6	14.88	BbV	橙	100%	
13	4.7	1.9	0.7	15.78	BaV	黒褐	100%	
14	4.9	1.7	0.5	11.13	BaV	橙	90%	
15	(4.2)	2.0	0.6	13.61	Bb他	黒褐	80%	
16	4.2	1.7	0.6	13.66	Ba他	橙	90%	カマド
17	(3.0)	1.7	0.4	7.10	Ba他	にぶい黄橙	50%	
18	(2.6)	1.4	0.5	4.86	Ba他	にぶい黄橙	40%	
19	(2.5)	1.5	0.6	4.06	Ba他	にぶい褐	40%	
20	2.8	1.2	0.4	5.67	EaVI	灰褐	95%	
21	3.0	1.1	0.3	3.34	DbVI	黒褐	100%	

第139号住居跡（第12・13図、図版２・６・９）

T－18グリッドで検出した。

平面の形状は方形であったと思われるが、西側半分は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸6.74m、深さ0.12mであった。主軸方位はN－6°－Eであった。

床面は、地山の黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

床面からピットを３基検出したが、このうち主柱穴と考えられるのはP1・P2である。

カマドは北壁中央部に構築されていた。煙道部は短く、住居の北壁より突出していなかったが、住居そのものの深さが0.12mと浅く、本来は北側へ延びる煙道があったものと考えられる。カマド袖は、地山の削り出しによって構築されていた。

貯蔵穴は、カマド右側で検出した。

遺構は、南側でSJ140、西側でSJ151と重複していた。重複関係は、土層断面の観察により、SJ140に壊され、SJ151を壊していることを確認した。

出土遺物は、土師器坏・鉢・甕が出土した。また、土錘が２点出土した。

３は大型鉢で、外面が被熱し、胴部内面中位が幅５～10cmの範囲で帯状に焦げていた。調理に使われたと考えられるが、内面の剝落は顕著ではなかった。

第140号住居跡（第14・15図、図版２）

T・U－18グリッドで検出した。

平面の形状は方形であると思われるが、西側が調査区外へ展開していたため、全体の形状・規模は不明である。

規模は、長軸3.22m、深さ0.14mであった。主軸方位はN－5°－Eであった。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴、貯蔵穴、壁溝などは検出できなかった。

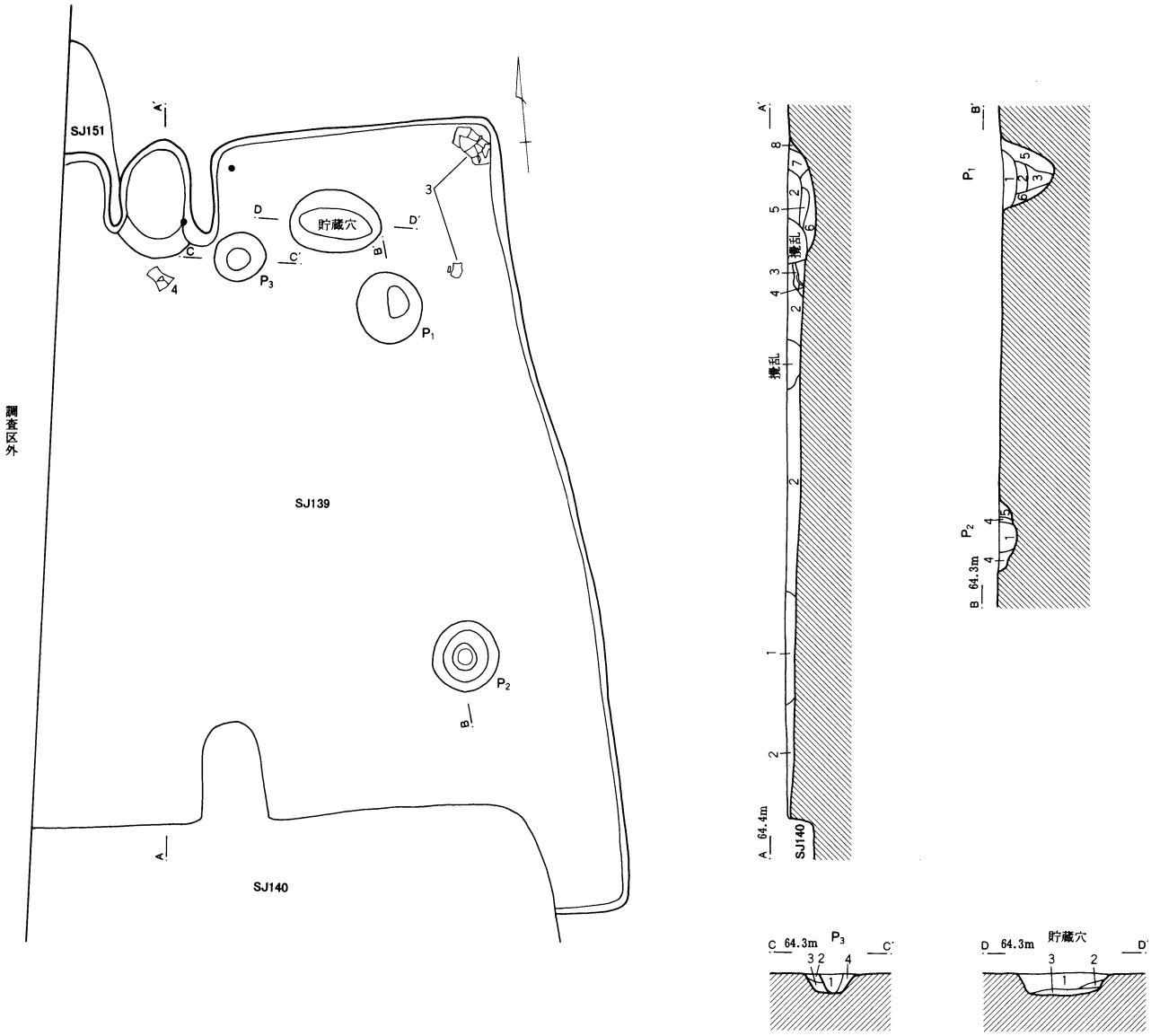
カマドは、住居北壁（カマドA）と東壁（カマドB）で２基検出した。カマドBに左右の袖が残存しているため、カマドBのほうが新しいと考えられたが、土層断面の観察で、カマドBに住居の立ち上がりが認められることから、カマドAのほうが新しい可能性がある。

カマドA・Bともに煙道は短かったが、住居が浅く検出されたため、上部が失われている可能性がある。

遺構は、SJ139と重複していた。重複関係は、SJ139よりも新しかった。

出土遺物は、覆土中より土錘３点、滑石製臼玉１点を検出した。

第12図　第139号住居跡



第139号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物僅か。
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　焼土粒含。
3　鈍黄褐色　(10YR4/3)　焼土ブロック多。
4　褐色　(10YR4/4)　砂質。
5　褐色　(10YR4/4)　砂を多く含む。焼土ブロック含む。
6　褐色　(10YR4/4)　焼土ブロック、炭化物多。
7　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物含。砂質。
8　褐色　(10YR4/4)　砂質。焼土粒含。

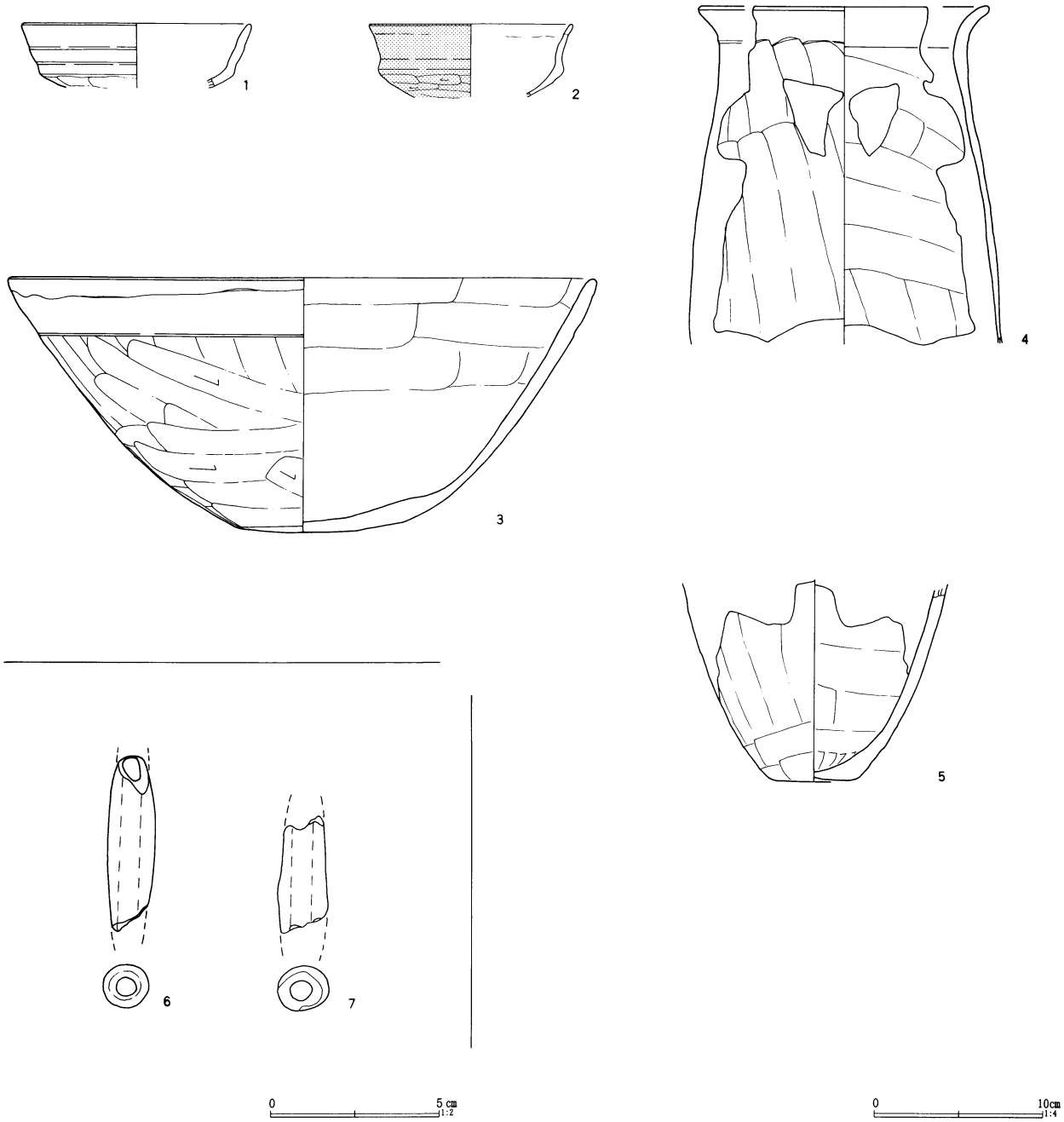
第139号住居跡P3
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)
2　鈍黄褐色　(10YR5/4)
3　黒褐色　(10YR3/1)　砂層。
4　黒褐色　(10YR3/1)

第139号住居跡P1・P2
1　黒褐色　(10YR3/2)
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　炭化物粒僅か。
3　鈍黄褐色　(10YR4/3)　やや粘質。
4　褐色　(10YR4/4)　砂層。
5　黒褐色　(10YR3/1)　砂層。
6　暗褐色　(10YR3/3)

第139号住居跡貯蔵穴
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)
2　黒褐色　(10YR3/2)
3　黒褐色　(10YR3/1)　砂層。

0　2m　1:60

第13図　第139号住居跡出土遺物



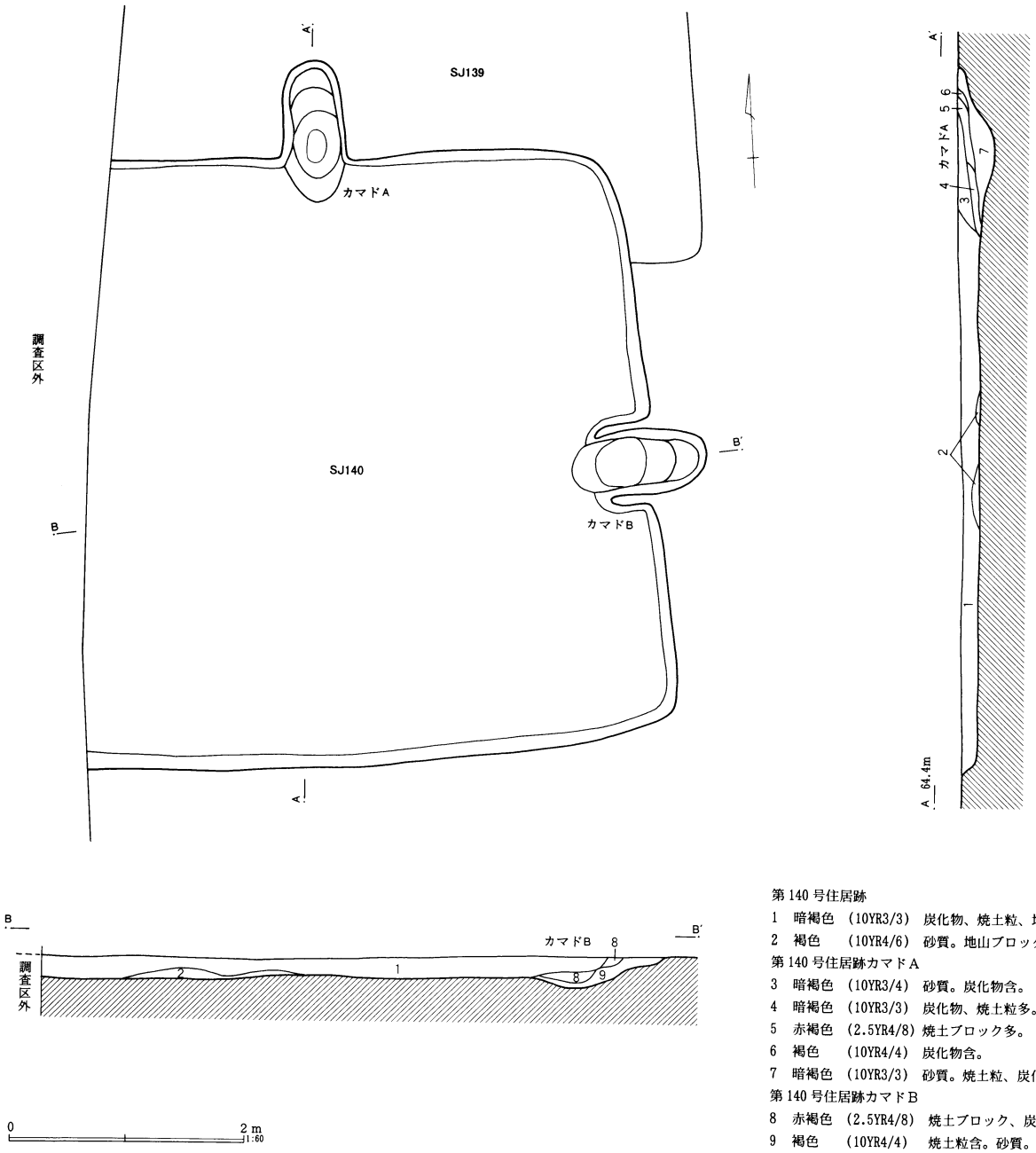
第139号住居跡出土遺物観察表（第13図）

番号	器　種	口 径	器 高	底 径	胎　土	焼 成	色　　調	残　存	出土位置	備　　考
1	坏	13.5			ADFHJL	3	橙	40%	P 3	
2	坏	12.2			ADEFHJL	3	暗褐	25%	覆土	外面黒色
3	鉢	34.5	15.0	10.0	ABDFHJKL	3	橙	80%	壁際	内面胴部帯状にコゲ
4	甕	(17.0)			ABEFJKL	3	橙	破片	床面	
5	甕			(4.2)	BFHJKL	3	橙	底部	覆土	

第139号住居跡出土土錘観察表（第13図）

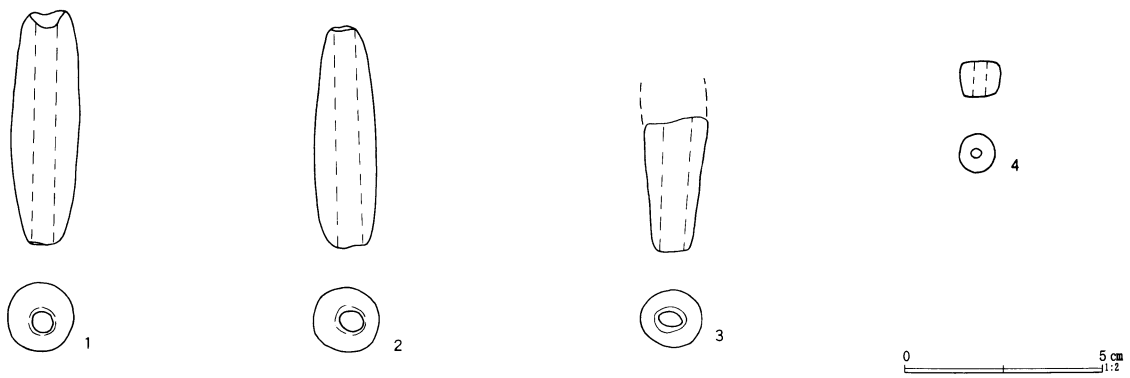
番号	長 さ	径	穴 径	重　さ	分　類	色　調	残　存	備　考
6	(5.2)	1.4	0.6	8.09	BaV	にぶい黄橙	70%	
7	(3.5)	1.5	0.7	6.06	Ba他	橙	30%	

第14図　第140号住居跡



第 140 号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物、焼土粒、地山ブロック含。
2　褐色　(10YR4/6)　砂質。地山ブロック多。
第 140 号住居跡カマドA
3　暗褐色　(10YR3/4)　砂質。炭化物含。
4　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物、焼土粒多。
5　赤褐色　(2.5YR4/8) 焼土ブロック多。
6　褐色　(10YR4/4)　炭化物含。
7　暗褐色　(10YR3/3)　砂質。焼土粒、炭化物多。
第 140 号住居跡カマドB
8　赤褐色　(2.5YR4/8)　焼土ブロック、炭化物多。砂質。
9　褐色　(10YR4/4)　焼土粒含。砂質。

第15図　第140号住居跡出土遺物



第140号住居跡出土土錘観察表（第15図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	5.9	1.7	0.6	17.02	BaIV	橙	100%	
2	5.6	1.6	0.6	12.67	BaIV	橙	100%	
3	(3.4)	1.6	0.6	6.10	Bb他	黒褐	50%	

第141号住居跡（第16・17図、図版2・9）

S－18グリッドで検出した。

平面の形状は方形であると推定されるが、北側が攪乱によって壊され、西側は調査区外に展開していたため、全体の規模、形状は明らかにできなかった。

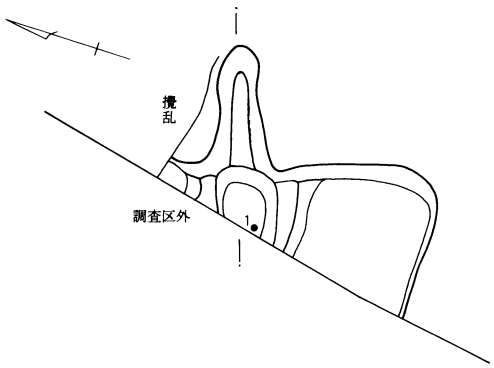
規模は、長軸・短軸とも不明で、深さは0.48mであった。主軸方位は、N—72°—Eであった。

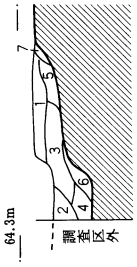
柱穴、貯蔵穴、壁溝等は検出できなかった。

カマドは東壁で検出した。煙道はやや長い。燃焼部が土壙状に窪み、煙道部は一段高いテラス状になっていた。

出土遺物は、土師器甕2点、土錘2点を検出した。

第16図　第141号住居跡

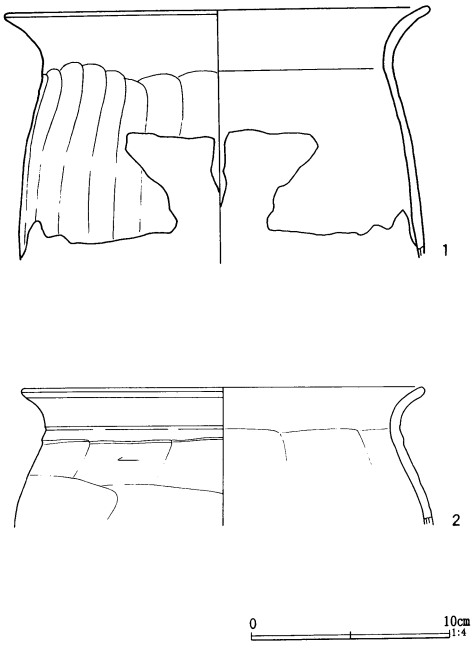


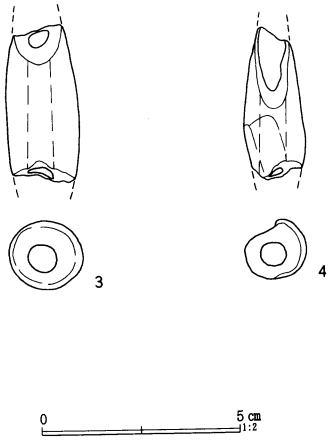


第141号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　白色微粒子含む。
2　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄褐色土若干含む。
3　暗褐色　(10YR3/4)　焼土多く含む。
4　焼土
5　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物粒僅か。
6　暗褐色　(10YR3/3)　砂質。
7　鈍黄褐色 (10YR5/4)

0　2m　1:60

第17図　第141号住居跡出土遺物





第141号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(21.2)			BEFJL	4	明黄褐	上半部	カマド	
2	甕	20.4			ABJL	3	黒褐	20%	覆土	

第141号住居跡出土土錘観察表（第17図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
3	(4.0)	1.9	0.7	13.06	Ba他	黄橙	70%	
4	(3.9)	1.6	0.7	5.69	Ba他	黄橙	50%	

第142号住居跡（第18～20図、図版3・6・7～9・13）

U－18グリッドで検出した。

平面の形状は、四隅が丸みを帯びた方形である。

規模は、長軸3.60m、短軸3.20m、深さ0.56mであった。主軸方位は、N－11°－Wであった。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

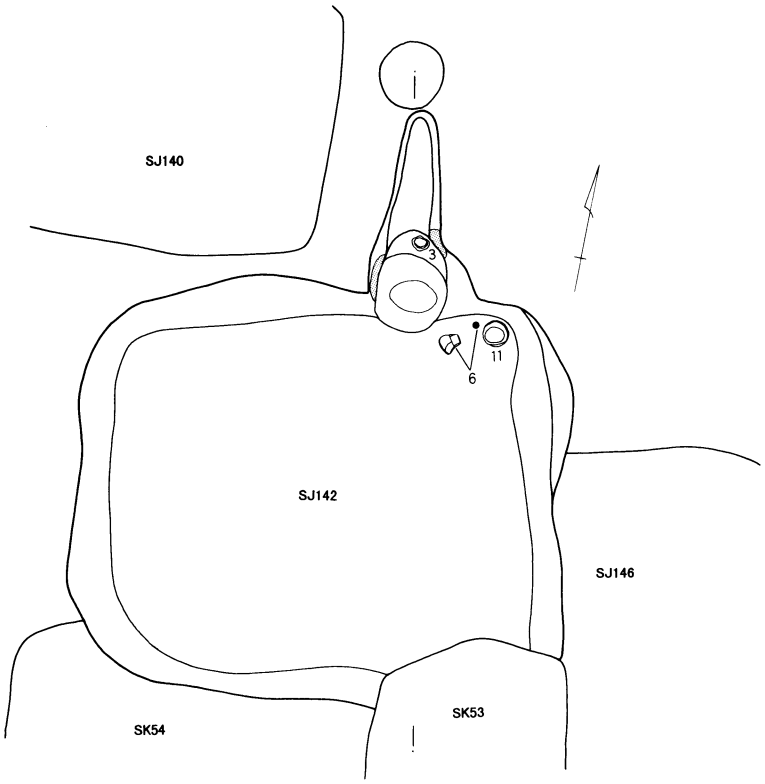
柱穴、その他の付属施設は検出できなかった。

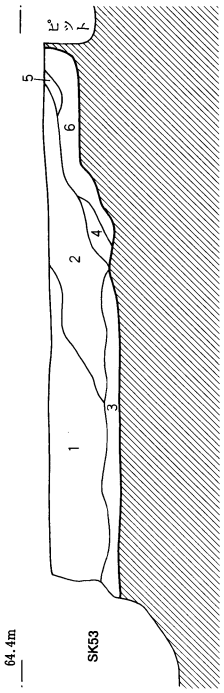
カマドは、北壁で検出したが、北東コーナーに寄った位置で検出した。やや長い煙道を有していた。燃焼部は土壙状に窪み、煙道部分は一段高いテラス状となっていた。袖は検出されなかった。

遺構は、SJ145・146、SK53・54と重複していた。重複関係は、SJ145・146よりも新しく、SK53・54よりも古かった。

遺物は、土師器坏・鉢・甑・甕・壺、須恵器坏・蓋・盤が出土した。また、土錘16点が出土した。

第18図　第142号住居跡

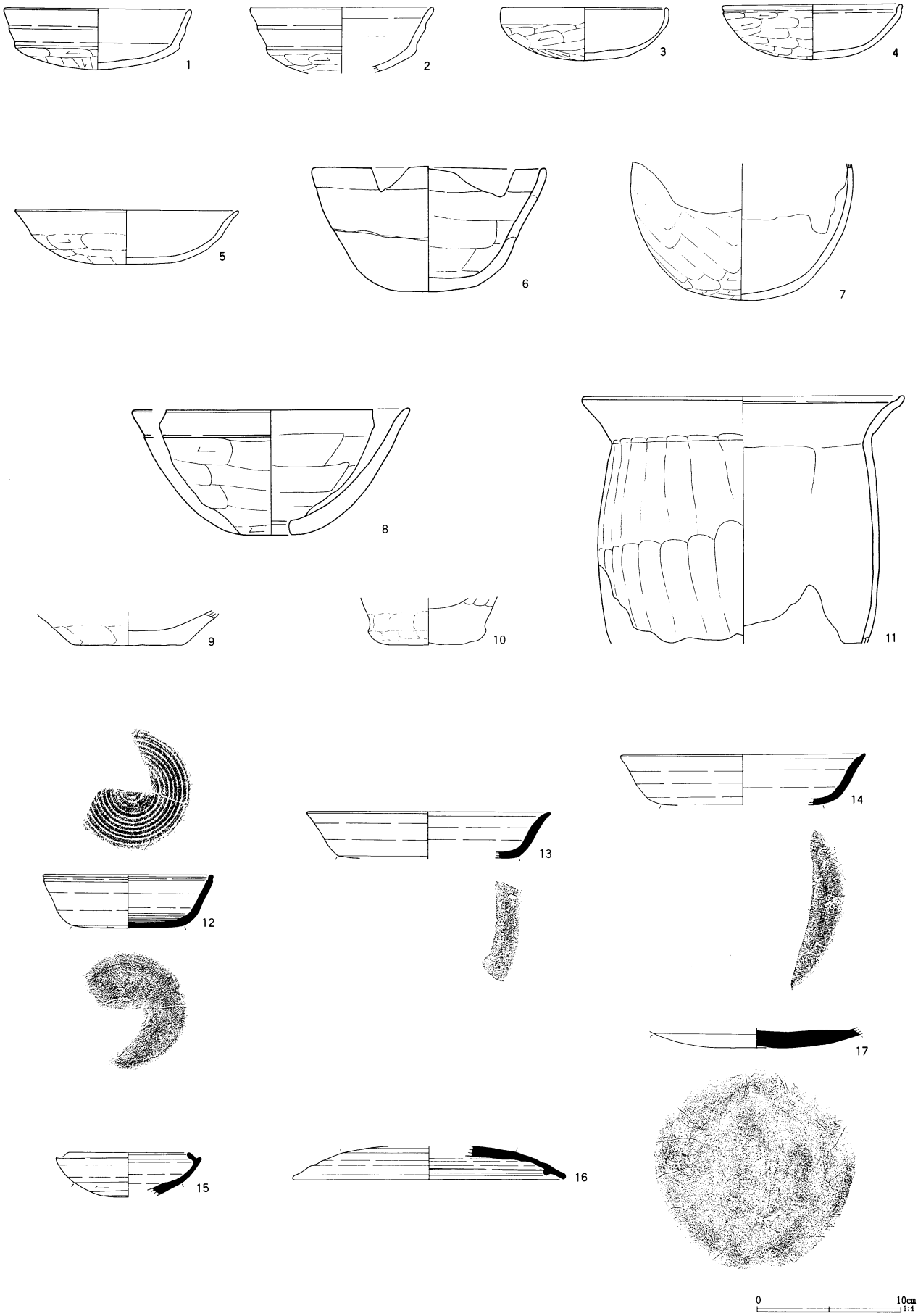




第142号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物、焼土粒を含む。砂を含む。
2　褐色　(10YR4/4)　砂質。炭化物を含む。焼土粒多。
3　褐色　(10YR4/6)　砂質。炭化物含。
4　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物多。
5　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック、焼土ブロックを含。
6　赤褐　(2.5YR4/8)　焼土、炭化物を多く含む。

0　2m　1:60

第19図　第142号住居跡出土遺物(1)



第142号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	13.1	4.2		ABDEHJL	3	橙	90%	覆土	底部黒班あり
2	坏	12.7			ABDEFJ	3	橙	40%	覆土	
3	坏	11.4	3.7		ABDEJ	2	橙	70%	カマド	
4	坏	12.6	3.8		BEJL	3	橙	70%	覆土	
5	坏	15.5	3.8		BDEJL	3	橙	40%	覆土	内面ナデ
6	鉢	(16.0)	8.7		ADEFJL	4	橙	60%	床面	
7	鉢			8.2	BDEHJL	3	橙	底部	覆土	
8	甑	19.1	8.7	3.0	ABDFJL	3	橙	30%	覆土	
9	壺			7.8	ABDHJL	3	橙	底部	覆土	
10	壺			8.3	AB	3	橙	底部	覆土	
11	甕	22.2			ABDEFJL	2	橙	胴上部	床面	
12	坏	11.8	3.7	7.8	BFJK	3	灰白	50%	覆土	回転ヘラケズリ　「ノタ目」
13	坏	(17.0)			BFHJL	3	灰	破片	覆土	回転ヘラケズリ　末野
14	坏	(17.0)	(3.6)	(11.2)	ABFHJL	3	灰	破片	覆土	回転ヘラケズリ　末野
15	坏	(8.5)	3.1		BF	1	灰	破片	覆土	湖西
16	蓋	19.1			ABFHJL	3	灰	破片	覆土	末野
17	盤				ABDFHJL	3	灰	底部	覆土	手持ちヘラケズリ　末野

1～5は、土師器坏である。1・2は口縁部に強いナデを施した有段口縁坏である。覆土中から出土した。

3は、口縁部が内屈する北武蔵型の坏である。カマド内から出土した。口縁部は屈曲せず、口縁外面のナデも弱い。底部のケズリは口縁直下まで及んでいた。

4は、覆土中から出土した。丸底で、口縁部は短く立ち上がる。口縁部と底部の境界は、強いナデによって沈線上に窪む。ケズリは口縁部直下まで及んでいた。内面の暗文は観察できなかった。

5は、口縁部が外反する皿状の坏である。覆土中から出土した。口縁部は横ナデ、底部はヘラケズリされるが、口縁部と底部の境界の稜は明瞭でない。

6・7は鉢である。6はカマド右脇の床面付近から出土した。7は覆土中の出土である。2点とも器面の風化・摩滅が著しく調整は不明瞭であった。

8は、鉢型の甑である。覆土中から出土した。外面口縁部は横ナデにより、胴部との境に稜線が認められた。外面胴部は横ケズリ、内面は横ナデされていた。

9・10は壺の底部と思われる。2点とも覆土中から出土した。9は、胴部下部に横ケズリが認められた。10は、厚底の底部で、底面と胴部の境界は、指頭による押さえ痕が連続的に認められた。

11は、甕である。カマド右脇の住居跡コーナーから出土したが、胴部下半部を欠損していた。口縁部は、やや外半気味に立ち上がり、口縁端部内面直下は、ナデによって沈線上に窪んでいた。外面胴部は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施されていた。

12～15は、須恵器坏である。全て覆土中の出土である。12は、口径11.8cmと小型の坏である。底部は平底で、全面が回転ヘラケズリされていた。口縁端部には、内外面とも沈線が認められた。また、底部内面には、細かな渦巻き状の「ノタ目」が施されていた。これは、一定の轆轤の回転に対し、指（爪）または工具を、中央からゆっくり外側に移動した結果、細かな渦巻き状の沈線となったと考えられる。胎土の特徴から末野産と思われる。

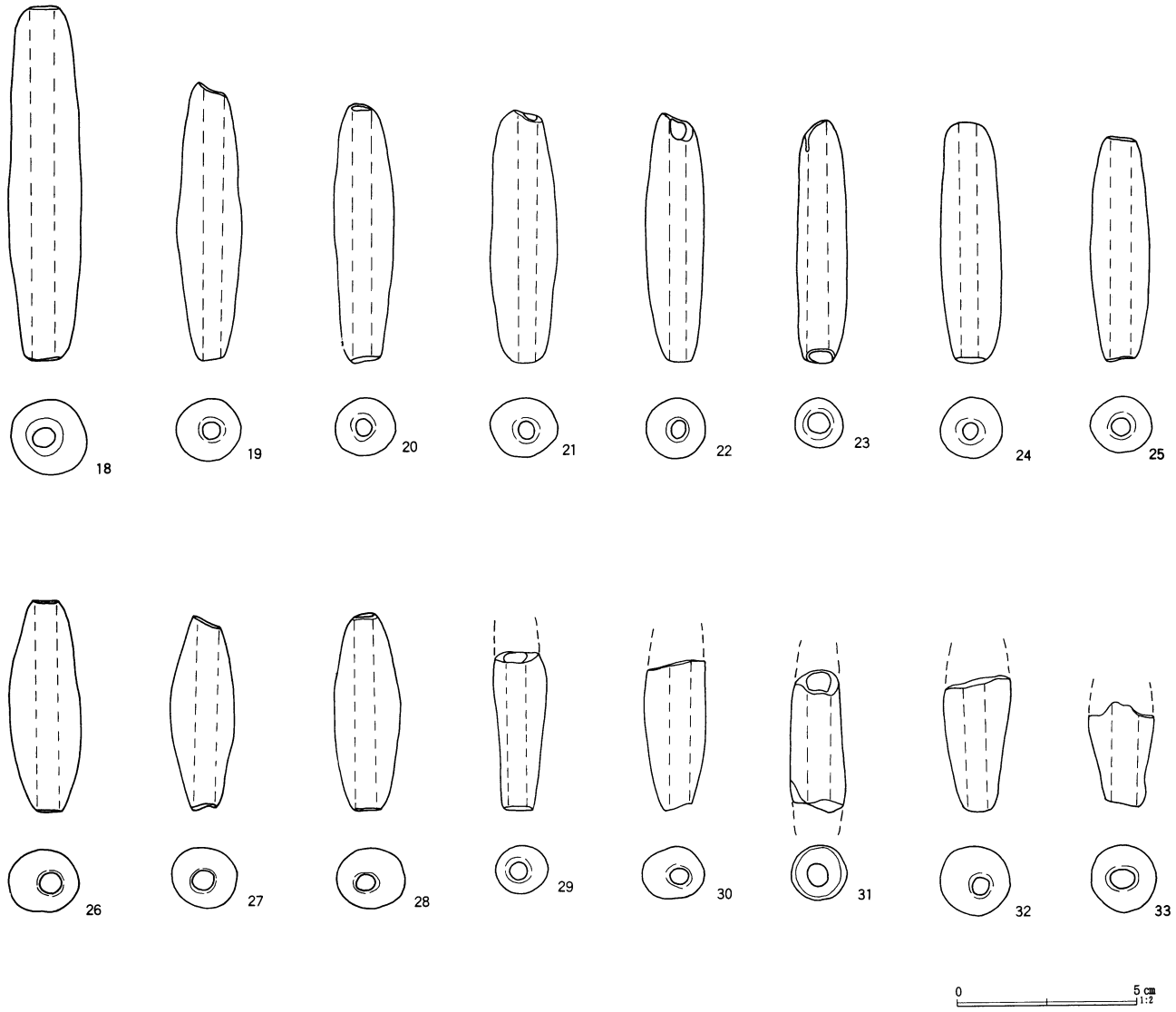
13・14は、口径17.0cmの大型の坏である。2点とも末野産と思われる。平底気味の底部からやや丸みをもって立ち上がり、口縁部はやや外半する。底部は2点とも全面が回転ヘラケズリされていた。

15は、蓋受のある小型の坏である。湖西産と考えられる。体部下半部及び底部はヘラケズリされていた。

16は、蓋である。かえりを有する。かえりの端部は短く丸い。末野産と考えられる。

17は盤と思われる。底部のみの破片である。厚底で、外面には手持ちのヘラケズリが施されていた。

第20図　第142号住居跡出土遺物(2)



第142号住居跡出土土錘観察表（第20図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
18	9.8	2.1	0.6	43.29	Bb I	にぶい黄橙	100%	
19	7.8	1.8	0.5	22.61	Ba II	にぶい黄橙	100%	
20	7.2	1.7	0.5	20.23	Ba III	浅黄橙	100%	
21	7.1	1.9	0.5	23.68	Ba III	橙	100%	
22	6.9	1.7	0.5	17.82	Ba III	にぶい黄橙	100%	
23	6.8	1.4	0.6	11.98	Aa III	にぶい黄橙	100%	
24	6.7	1.7	0.5	20.15	Ba III	橙	100%	
25	6.2	1.7	0.6	13.46	Ba IV	橙	100%	
26	5.9	2.0	0.6	17.65	Ba IV	にぶい黄橙	100%	
27	5.4	1.8	0.6	14.13	Ca V	黒褐	100%	
28	5.5	1.9	0.6	16.25	Ba IV	明赤褐	100%	
29	(4.4)	1.4	0.5	7.82	Ca他	浅黄橙	60%	
30	(4.2)	1.7	0.5	11.09	Ba他	にぶい黄橙	60%	
31	(4.0)	1.5	0.6	8.79	Aa他	にぶい黄橙	50%	
32	(3.8)	1.9	0.5	11.61	Ca他	にぶい褐	50%	
33	(3.0)	1.9	0.7	7.06	Ca他	橙	40%	

第143号住居跡（第21・22図、図版3・7・10・15）

U・V－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、西側が調査区域外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸4.08m、深さ0.40mであった。主軸方位は、N－80°－Eであった。

住居の床面は、平坦で、部分的に地山の黄褐色砂質土を主体とした貼床が施されていた。

壁面は、ほぼ直線的に立ち上がっていた。

柱穴・壁溝は検出できなかった。

カマドは、東壁中央の、やや南側に寄った位置で検出した。煙道部は、一部SK54に壊されていたため、全体の形状は不明であるが、やや幅広の煙道である。燃焼部は土壙状に窪んでおり、煙道は、一段高いテラス状となっていた。

貯蔵穴は、カマド右脇で検出した。径1.0m、深さ0.2mであった。

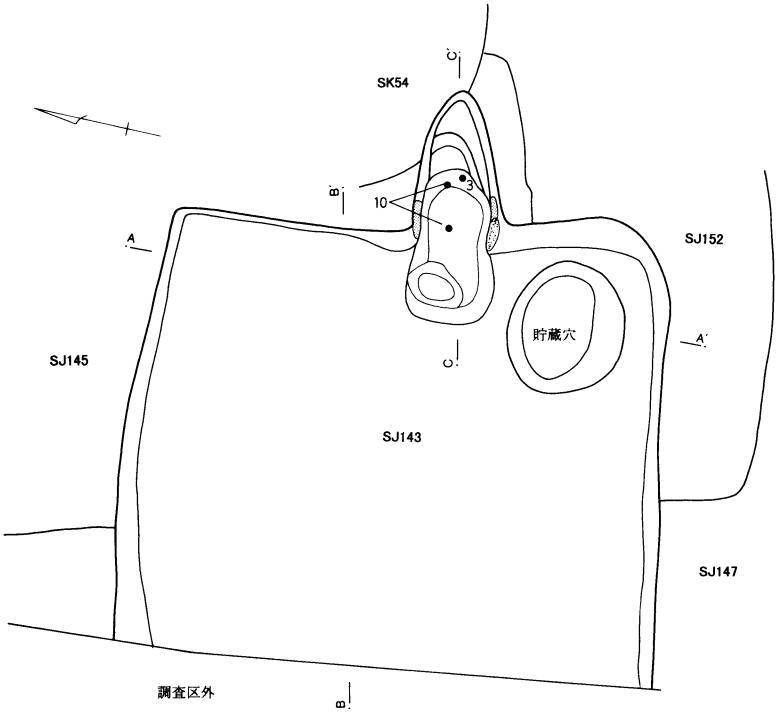
遺構は、SJ145・147・152、SK54と重複していた。重複関係は、土層断面の観察などから、SK54に壊され、他の全ての住居跡を壊していた。

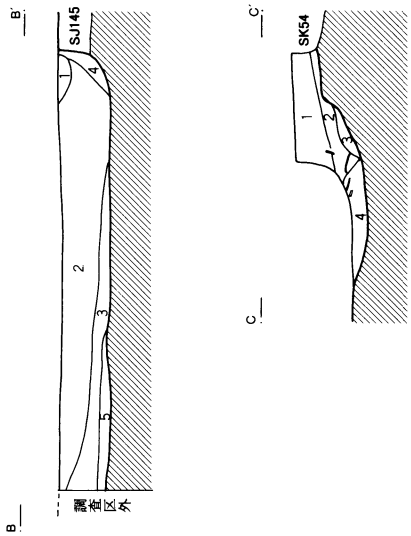
出土遺物は、須恵器坏・高台坏椀・皿・高台坏皿・長頸瓶・甕、土師器甕が出土した。また、覆土中より土錘が8点出土した。

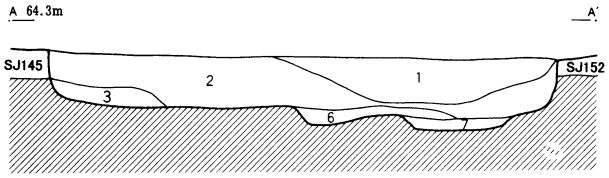
須恵器は全て末野産で、坏類、皿類の底部の調整は、糸切り後無調整であった。1・3・4はカマドから、それ以外は覆土中の遺物である。

土師器甕は、カマドから出土した。口縁部の形態は「コ」の字状である。

第21図　第143号住居跡





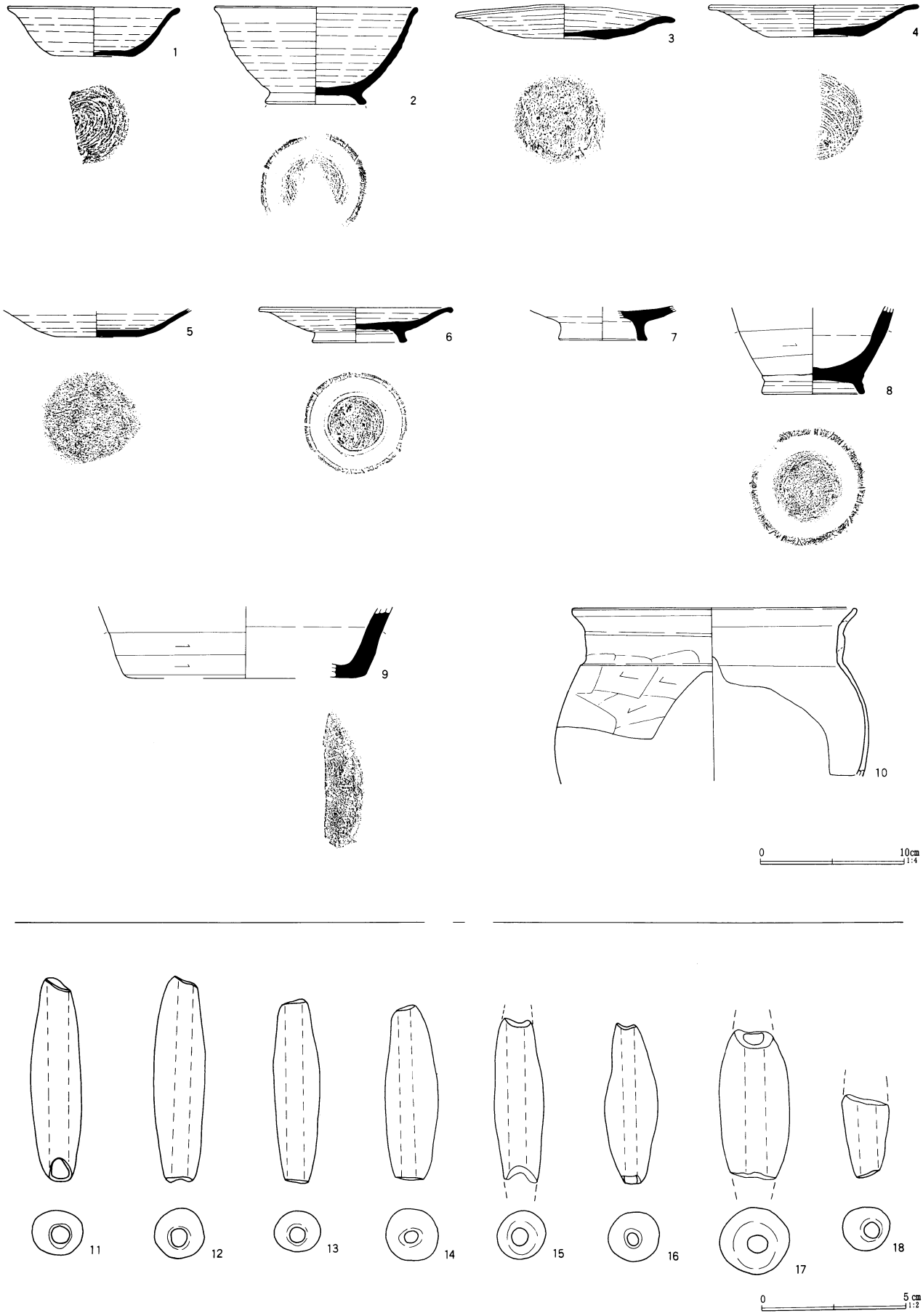


第143号住居跡
1　褐色　(10YR4/4)　炭化物、地山ブロック多。
2　暗褐色　(10YR3/4)　地山粒、炭化物、焼土粒多。
3　暗褐色　(10YR3/3)　焼土粒、炭化物含。
4　褐色　(10YR4/4)　炭化物含。砂質。
5　褐色　(10YR4/6)　地山ブロック多。掘り方。
6　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物を多量に含む。
7　黒褐色　(10YR2/3)　炭、焼土若干含む。(貯蔵穴)

第143号住居跡カマド
1　暗褐色　(10YR3/4)　地山粒、炭化物、焼土粒多。
2　赤褐色　(2.5YR4/8)　焼土、炭化物を多く含む。
3　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物含。
4　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物多。地山ブロック多。

0　2m
1:60

第22図　第143号住居跡出土遺物



第143号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	11.9	3.4	5.8	AFHJL	3	灰	25%	カマド	末野
2	高台椀	13.9	6.8	6.9	ABEFHJL	4	灰	60%	覆土	底部糸切り　末野
3	皿	15.4	2.4	5.8	ADEHJL	4	灰オリーブ	70%	カマド	末野
4	皿	14.6	2.2	6.4	AHJKL	3	灰	25%	カマド	末野
5	皿			5.9	AFHJL	4	灰オリーブ	破片	覆土	末野
6	高台皿	13.6	2.4	6.5	AFHJL	3	暗灰	40%	覆土	末野
7	高台皿			6.1	AHKL	2	灰	底部	覆土	末野
8	長頸瓶			6.9	ABFJL	3	明灰	底部	覆土	底部ヘラケズリ　末野
9	甕			(17.0)	AFHJKL	3	明灰	破片	覆土	手持ちヘラケズリ　末野
10	甕	19.6			ABDEJ	2	橙	口縁部	カマド	末野

第143号住居跡出土土錘観察表（第22図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
11	7.1	1.8	0.7	16.45	BaIII	暗褐	100%	
12	7.2	1.8	0.6	20.12	BaIII	にぶい黄橙	100%	
13	6.4	1.6	0.6	13.20	BaIV	橙	100%	
14	6.1	1.9	0.5	20.39	BaIV	にぶい黄橙	100%	
15	(5.7)	1.7	0.6	15.39	BaIV	にぶい黄橙	80%	
16	5.6	1.8	0.5	12.80	CaIV	橙	100%	
17	(5.2)	2.4	0.7	31.81	Ea他	橙	90%	
18	(3.0)	1.6	0.6	5.94	Ca他	にぶい黄橙	50%	カマド

第144号住居跡（第23・24図、図版3）

V－19グリッドで検出した。

平面の形状は方形であると思われるが、東側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸2.60m、深さ0.24mである。主軸方位はN－13°－Wであった。

床面は、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

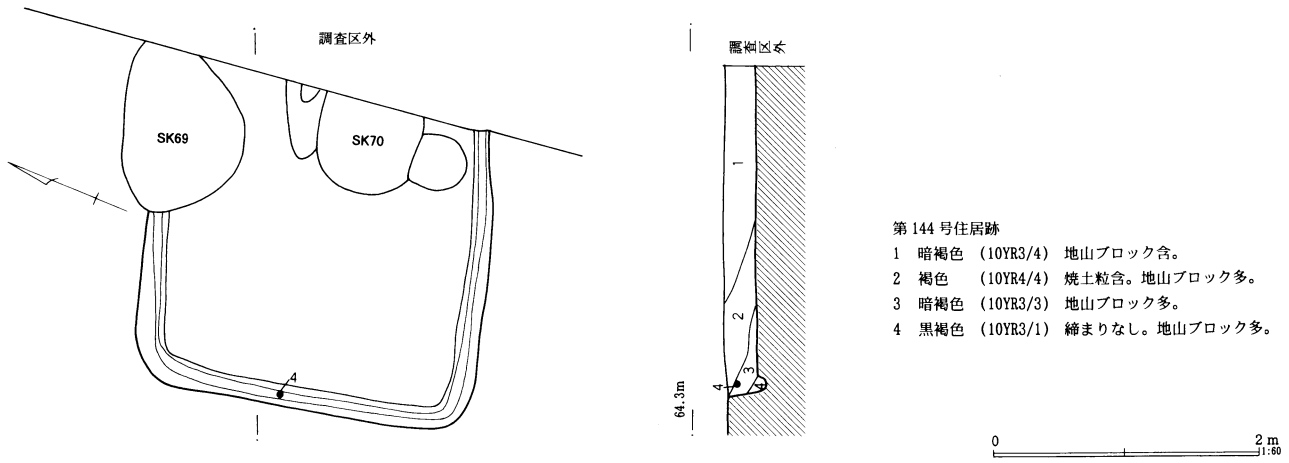
柱穴、貯蔵穴は検出できなかったが、壁溝が住居北・西・南壁で検出できた。

カマドは東側に袖と思われるものが検出されたため、東側にあったと思われるが、SK70に壊されていたため明らかにできなかった。

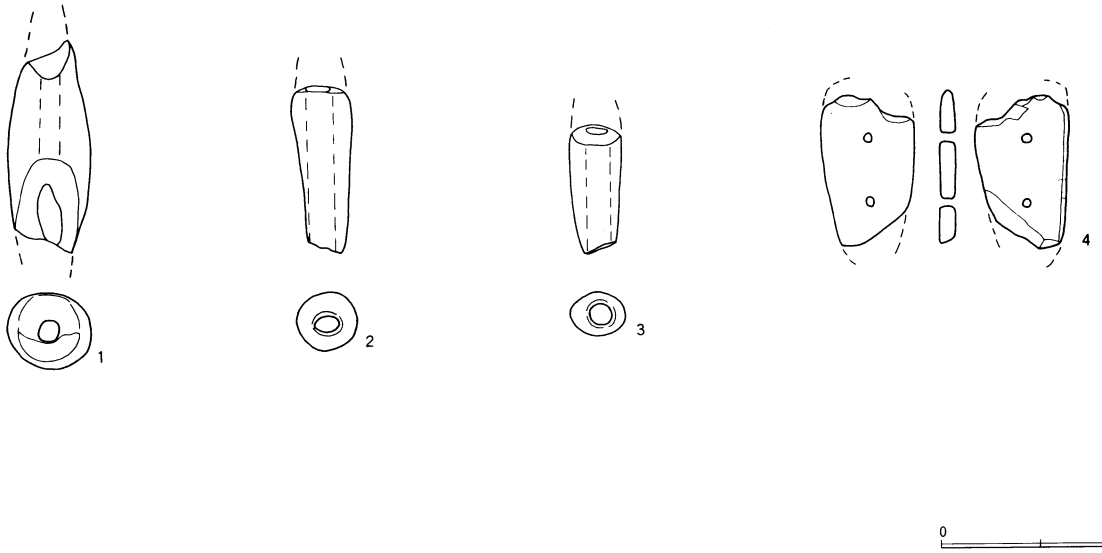
遺構は、SK69・70と重複していた。重複関係は、本住居跡が、２基の土壙に壊されていた。

出土遺物は、覆土中より、土錘３点と、石製模造品１点が出土した。模造品は滑石製で、剣形と思われる。重さは7.97gであった。

第23図　第144号住居跡



第24図　第144号住居跡出土遺物



第144号住居跡出土土錘観察表（第24図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	(5.4)	2.1	0.5	17.57	Ca他	橙	50%	
2	(4.2)	1.5	0.6	7.45	Ba他	橙	50%	
3	(3.1)	1.3	0.6	3.90	Aa他	暗褐	50%	

第145号住居跡（第25～27図、図版3・7・10・15）

U－18グリッドで検出した。平面の形状は長方形であったと思われるが、遺構の約半分を他の遺構に壊されていたため、全体の形状は不明である。

規模は、長軸4.66m、深さ0.37mである。主軸方位はN－2°－Wであった。

床面は、貼床はなかったが、概ね平坦であった。

壁溝・柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは、住居の北壁中央部よりやや東に寄った位置で検出した。袖は検出できなかった。燃焼部は土壙状に窪んでいた。煙道は短く、燃焼部より一段高いテラス状となっていた。

出土遺物は、カマド及び周辺部から、土師器坏・鉢・甕・壺が出土した。また、覆土中より土錘5点が出土した。

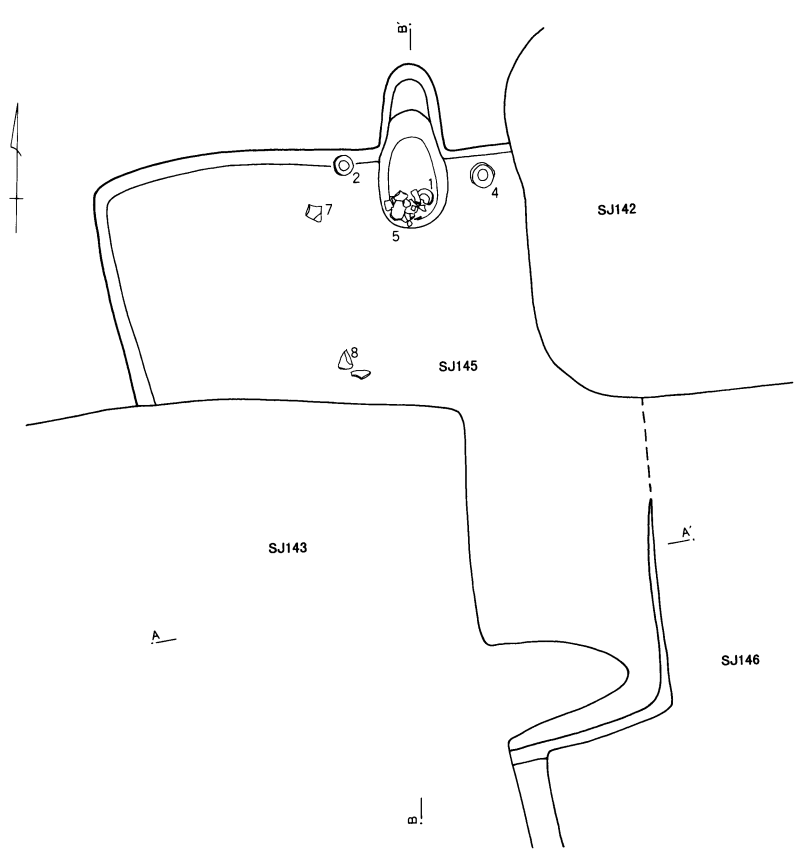
1・2は坏である。1はカマド炊き口から、2はカマド左脇から出土した。2点とも、口縁部にナデによる段を有する有段口縁坏である。1は丸底の底部にほぼ直線的に外傾する口縁部をもつ。2は、丸底の底部に大きく外反する口縁部をもつ。

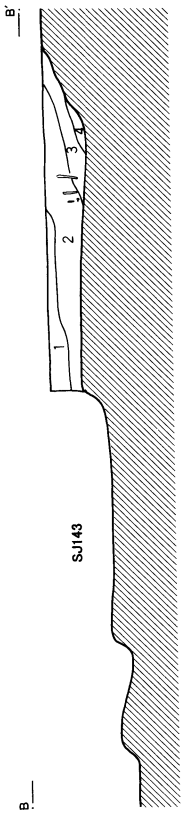
3は、鉢である。カマド覆土中から出土した。口縁部は大きく外反し、口縁端部内面直下には、強いナデによって生じたと考えられる、沈線状の窪みが認められる。

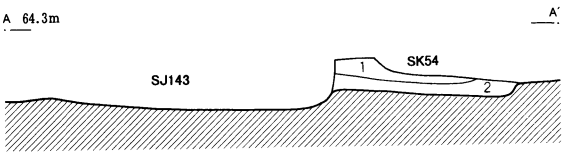
4～6は甕である。4はカマド右脇から出土した。胴部下半部～底部を欠損していた。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は、外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。5は、カマド炊き口から出土したが、口縁部と底部を欠損していた。胴部は、外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横ナデが施されていた。6は覆土中から出土した。口縁部の破片である。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は、外面は横方向のヘラケズリ、内面は横ナデが施されていた。

7・8は壷である。2点ともカマドから離れた床面から出土したが、口縁部の破片資料である。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部は、外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横ナデが施されていた。

第25図　第145号住居跡



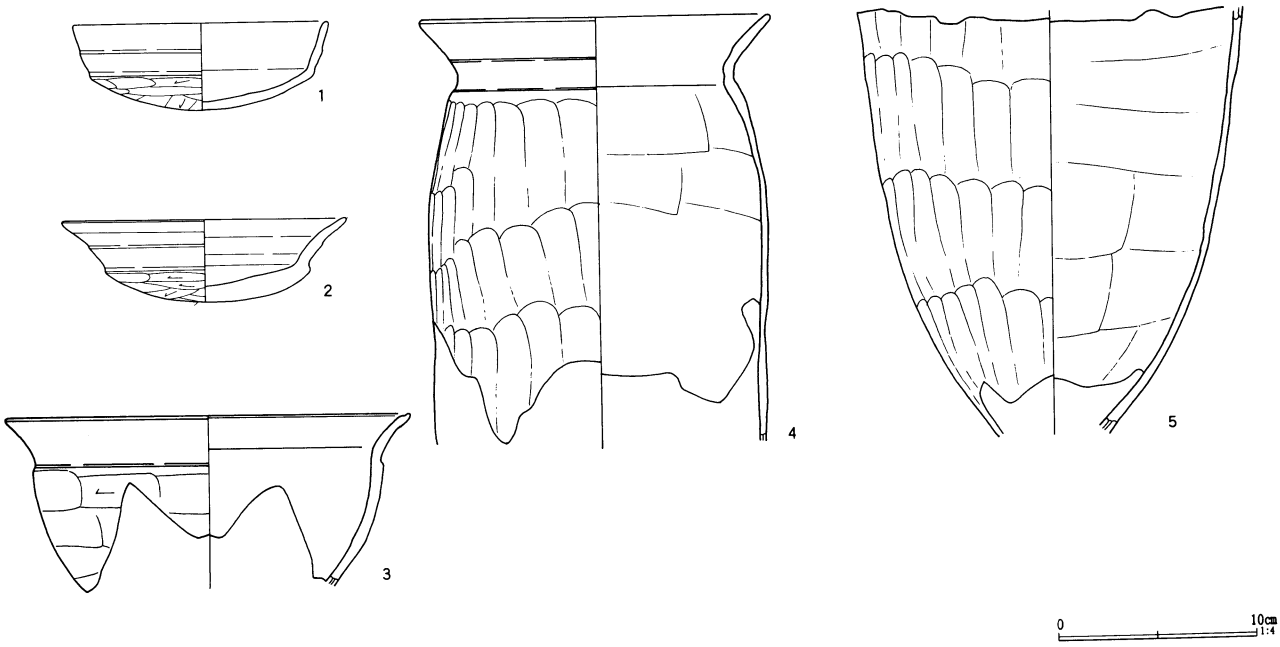




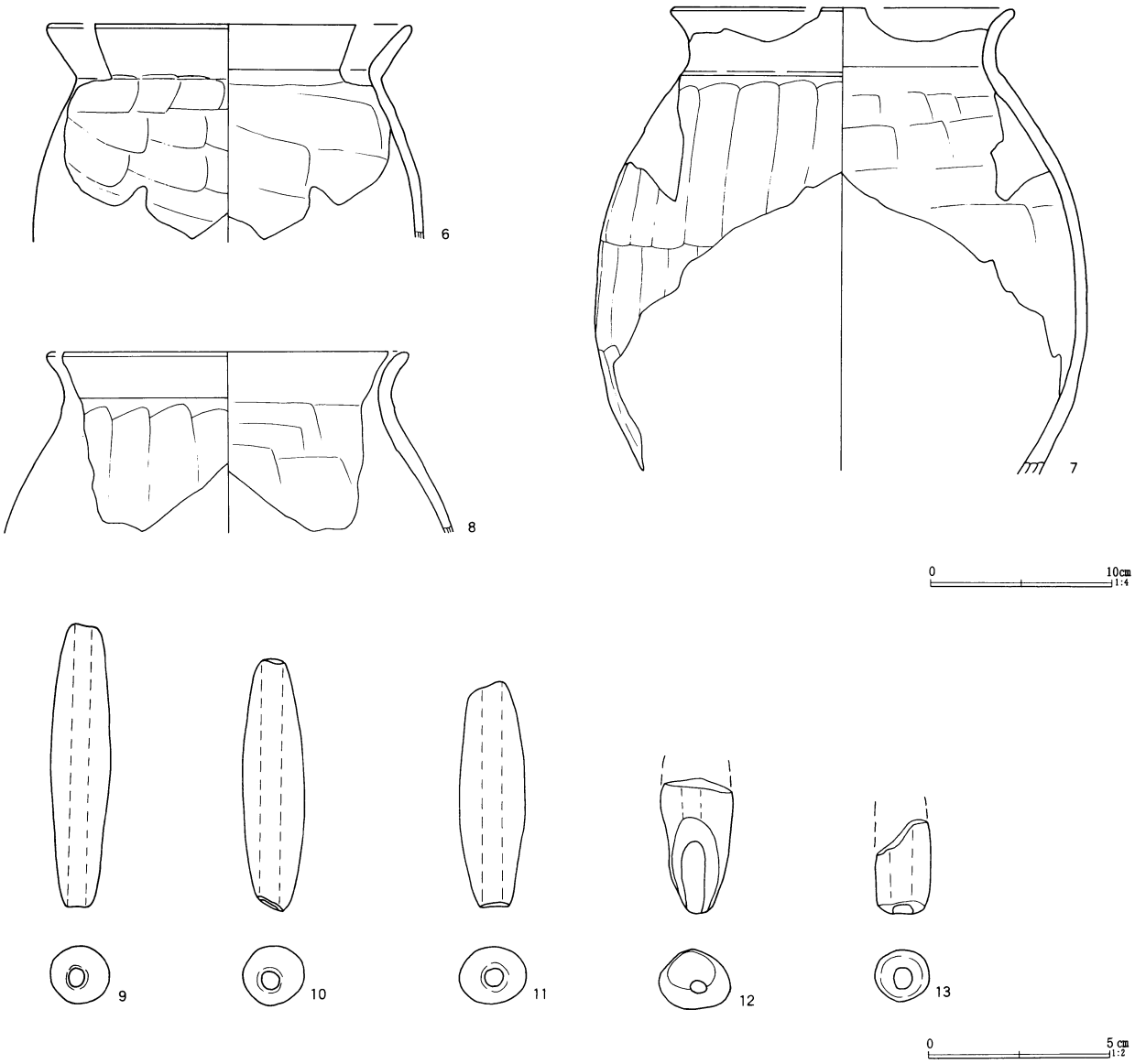
第 145 号住居跡
1　褐色　(10YR4/4)　炭化物、焼土粒含。地山ブロック多。
2　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物多。地山ブロック多。
第 145 号住居跡カマド
3　赤褐色　(5YR4/8)　焼土、炭化物含。
4　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物含。

0　2 m　1:60

第26図　第145号住居跡出土遺物(1)



第27図　第145号住居跡出土遺物(2)



第145号住居跡出土遺物観察表（第26・27図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.9	4.4		ABDEFJL	2	橙	40%	カマド	
2	坏	14.4	4.2		ADEFJL	2	橙	100%	壁際	
3	鉢	(20.4)			ABDEFJL	3	橙	破片	カマド	
4	甕	17.5			ABDEFJL	3	浅黄	胴上半部	壁際	
5	甕				ABDFHJL	3	橙	胴部	カマド	
6	甕	(19.6)			ABDEFHJL	3	明黄褐	破片	覆土	
7	壺	(18.6)			ABCEJKL	2	黄橙		床面	
8	壺	(19.2)			ABFJL	3	明黄褐	破片	床面	

第145号住居跡出土土錘観察表（第27図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
9	7.8	1.7	0.5	17.56	BaII	橙	100%	
10	7.0	1.7	0.6	17.93	BaIII	明赤褐	100%	カマド
11	6.2	1.8	0.5	17.88	BaIV	橙	100%	
12	(3.7)	2.0	0.6	10.30	Ba他	橙	40%	
13	(2.6)	1.5	0.5	5.41	Ba他	褐灰	40%	

第146号住居跡（第28・29図、図版4・8・10・12）

U・V－18・19グリッドで検出した。

平面の形状は、隅丸の長方形と思われるが、遺構の北側と東側を他の遺構に壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸6.15m、短軸5.61m、深さ0.26mであった。主軸方位は、N—76°—Eであった。

住居壁面は、ほぼ垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、6基検出した。柱掘り方の規模は、径0.8m～0.4mで、深さは0.22m～0.40mであった。四隅となるP1・P3・P4・P6の径は、0.7m～0.8mと間の柱穴よりも規模が大きくなっていた。柱痕は検出できなかった。

カマドは、住居東壁の中央部で検出した。燃焼部は、土壙状の落ち込みで、煙道部分は一段高いテラス状となっていたが、水平ではなく、緩やかに傾斜しながら立ち上がっていた。煙道は、細長く、長さ約1.1mまで確認できたが、煙道の先端部分が調査区外に展開していたため、全体の規模・形状は明らかにできなかった。また、袖は検出できなかった。

貯蔵穴は、カマド右側の、住居コーナー部に寄った位置で検出した。規模は、長径0.8m、短径0.6mの楕円形で、深さ0.42mであった。

壁溝は、カマドを除く東壁と、北壁及び南壁の一部で検出したが、全周していたかどうかは明らかにできなかった。

遺構は、SJ142・143・145・147・152、SK53・54・61と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察などから、SJ142・143・145、SK53・54・61に壊され、SJ147・152を壊していた。

出土遺物は、カマド、覆土中から、土師器坏・椀・鉢・甕・壺、須恵器坏が出土した。また、覆土中より土錘が3点出土した。

1はカマドから、他は覆土中の遺物である。7の壺には、外面と内面口縁部に赤彩が施されていた。

8は須恵器の坏であるが、外面及び内面の底部が著しく剥落しており、意図的に剥離した可能性もある。

第147号住居跡（第30・31図、図版4）

V－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の北側をSJ143・146・152に壊され、また、住居西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は長軸5.06m、深さ0.30mであった。主軸方位はN－76°－Eであった。

壁面は、概ね垂直に直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居東壁で検出した。燃焼部は土壙状に窪んでいた。煙道部は短く、燃焼部から一段高いテラス状となっていた。袖は、地山の砂質土の削り出しによって構築されていたが、天井部は残存していなかった。袖内側の壁面は焼け、赤く変色していた。

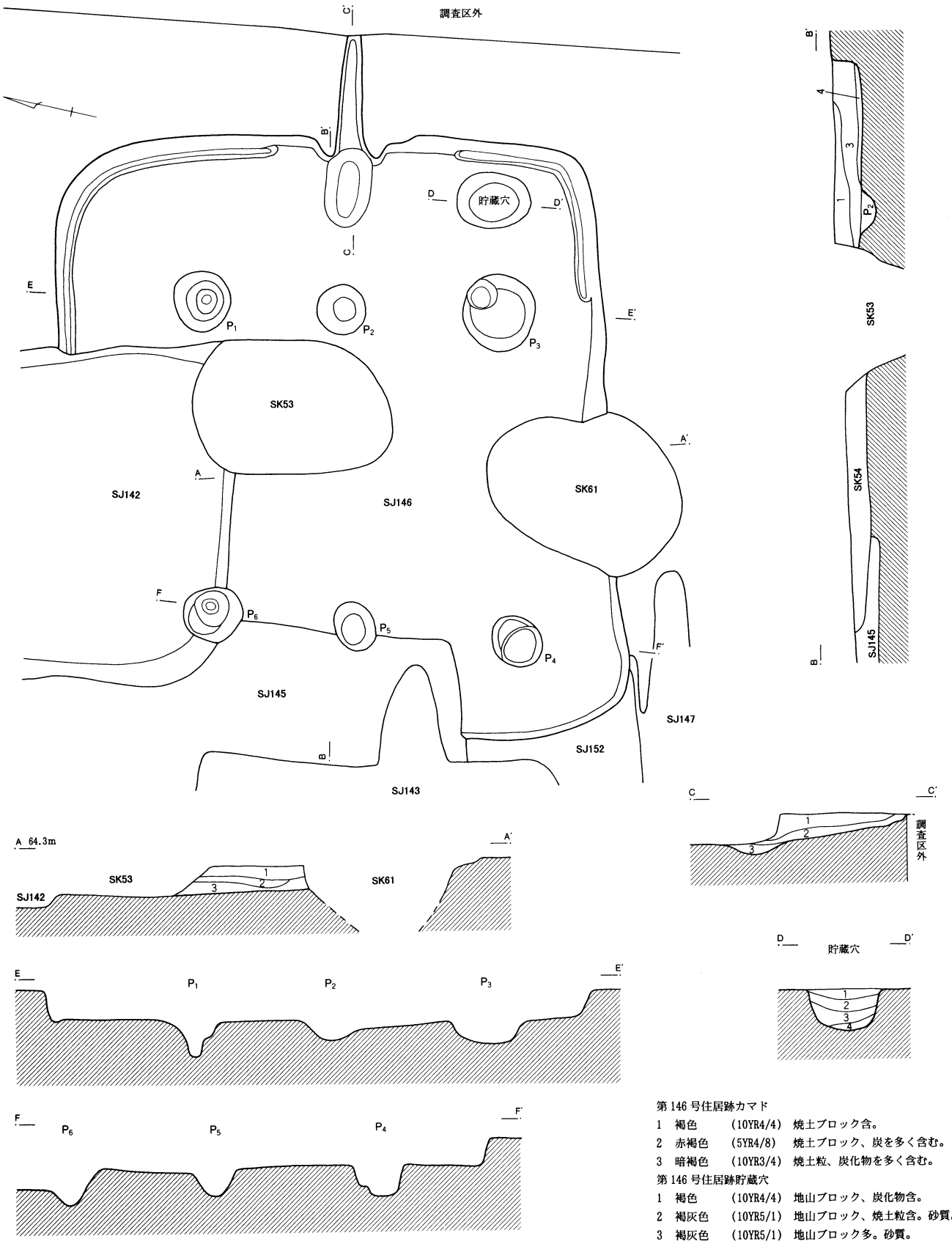
貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。長径1.05m、短径0.8mで深さ0.1m前後のテラスを有していた。中央部には、直径0.5m前後のピットが掘り込まれていた。また、貯蔵穴の右側に隣接して、径0.7m、深さ0.23mの貯蔵穴状の掘り込みを検出した(P1)。底面には、径0.15m前後の小穴が検出された。P1は、貯蔵穴に壊されていることから、古い貯蔵穴の可能性もあるが、詳細は明らかにできなかった。

壁溝は、東壁のカマドを除く部分と、南壁、西壁で検出した。このため、壁溝は、全周していた可能性もある。

遺構は、北側でSJ143・146・152と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、全ての住居跡に壊されていた。

出土遺物は、覆土中から土師器の破片が出土したが、図示できたものは、土錘が1点であった。

第28図　第146号住居跡



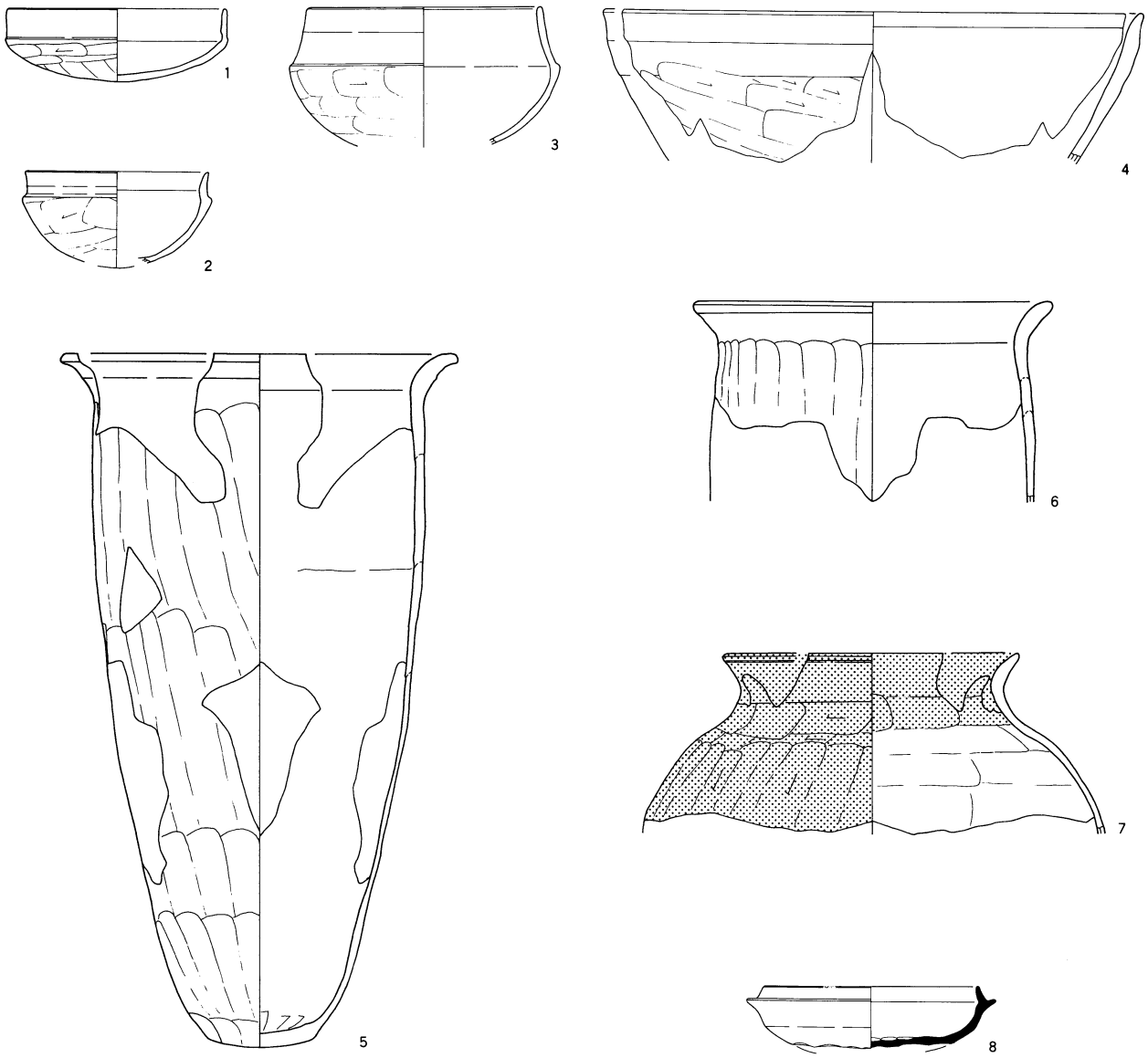
第146号住居跡カマド
1　褐色　(10YR4/4)　焼土ブロック含。
2　赤褐色　(5YR4/8)　焼土ブロック、炭を多く含む。
3　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物を多く含む。

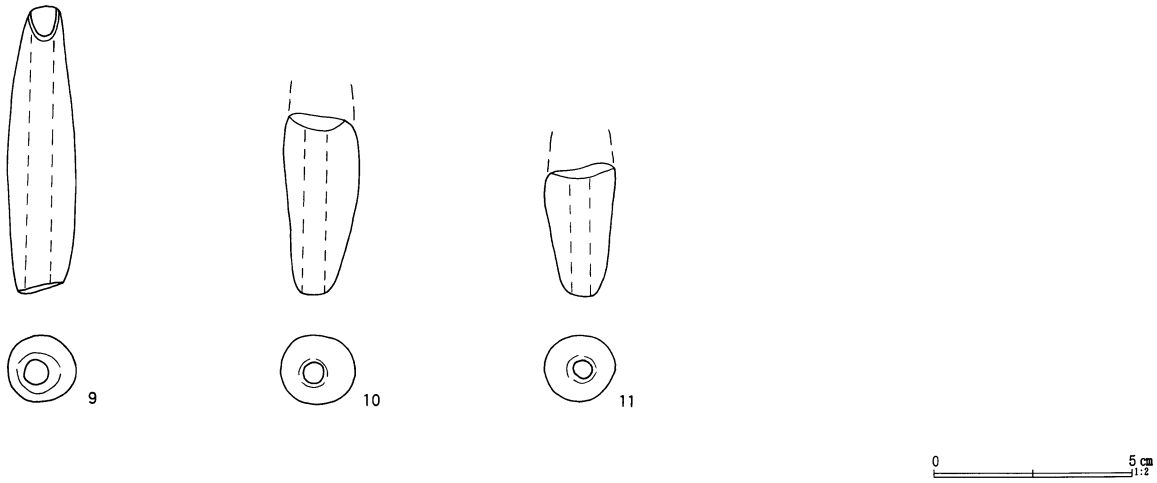
第146号住居跡貯蔵穴
1　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック、炭化物含。
2　褐灰色　(10YR5/1)　地山ブロック、焼土粒含。砂質。
3　褐灰色　(10YR5/1)　地山ブロック多。砂質。
4　灰黄褐色　(10YR6/2)　砂を多く含む。焼土粒を含む。

第146号住居跡
1　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック多。焼土粒、炭化物含。砂を含む。
2　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物多。焼土粒含。
3　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック多。砂を含む。
4　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物多。焼土粒含。

0　2 m　1:60

第29図　第146号住居跡出土遺物





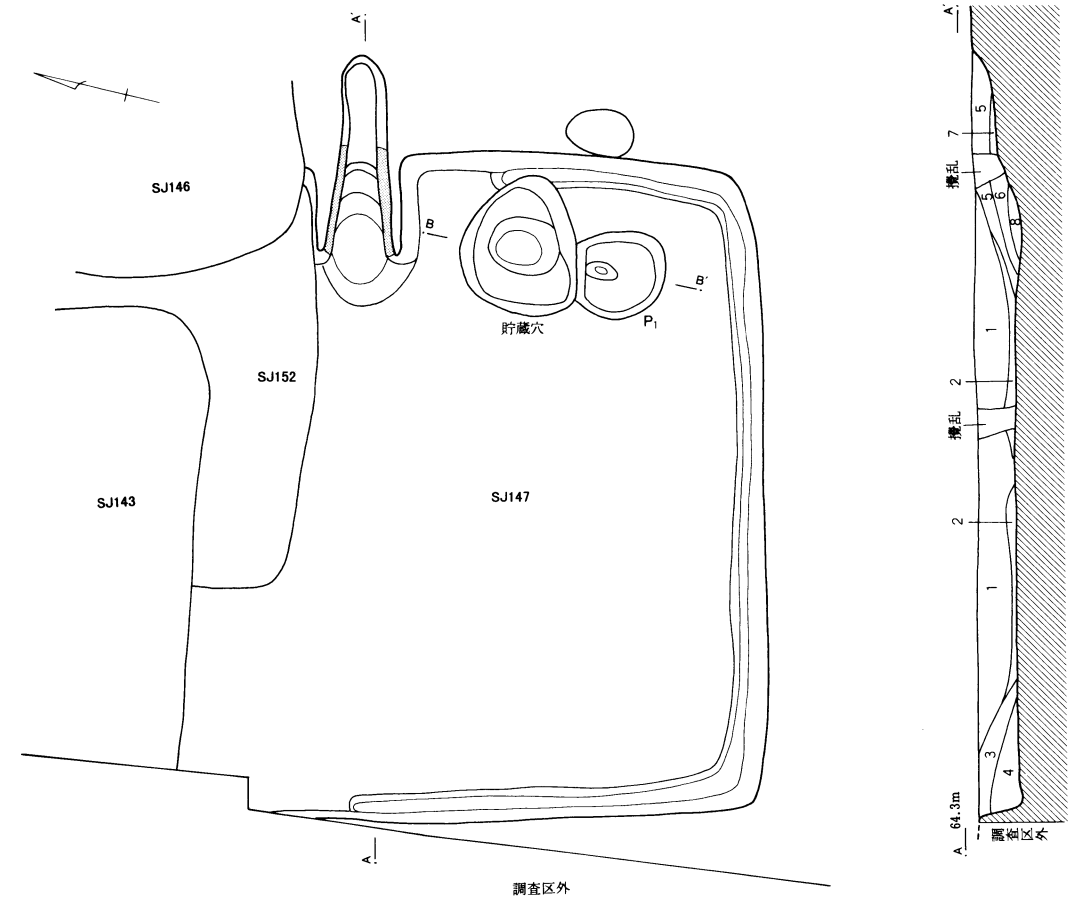
第146号住居跡出土遺物観察表（第29図）

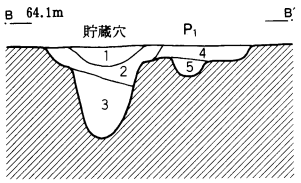
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.0)	4.0		ABDEFHJL	4	橙	25%	カマド	
2	椀	10.1	(5.3)		ADEFJ	3	橙	40%	覆土	
3	椀	(12.9)			ABDEFJ	3	橙	20%	覆土	
4	鉢	29.8			ABDEFJL	3	橙	破片	覆土	
5	甕	(22.6)	38.4	(5.5)	ABEFJL	3	褐灰	50%	覆土	
6	甕	(19.4)			ABDFHJL	3	橙	口縁	覆土	
7	壺	(16.1)			ABEFJKL	3	赤褐	口縁	覆土	内外面赤彩
8	坏	11.8			BF	2	暗灰	40%	覆土	底部内面剝落

第146号住居跡出土土錘観察表（第29図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
9	7.2	1.8	0.6	18.91	BaIII	にぶい橙	100%	
10	(4.6)	1.9	0.6	14.31	Ba他	橙	60%	
11	(3.4)	1.8	0.5	8.97	Ba他	橙	50%	

第30図　第147号住居跡





第147号住居跡

1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　地山ブロック多。炭化物含。
2　黒色　(10YR2/1)　炭化物層。焼土粒含。
3　灰黄褐色　(10YR4/2)　炭化物、焼土粒含。灰白色砂を多く含む。
4　褐灰色　(10YR4/1)　炭化物、地山ブロック多。
5　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物多。
6　暗褐色　(10YR3/3)　焼土粒多。
7　鈍赤褐色　(5YR5/4)　焼土粒、ブロック、炭化物多。
8　赤褐色　(2.5YR4/6)　焼土、炭を多く含む。

第147号住居跡貯蔵穴

1　暗褐色　(10YR4/3)　地山ブロック、炭化物含。
2　褐灰色　(101YR4/1)　砂を多く含む。炭化物多。焼土粒多。
3　暗褐色　(10YR4/3)　砂を多く含む。焼土粒含。

第147号住居跡P1

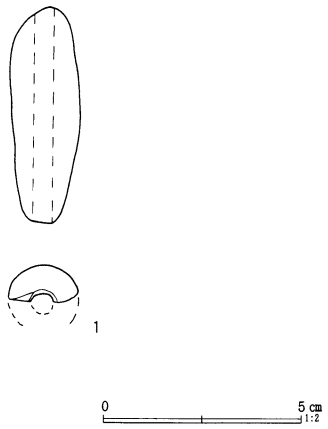
4　暗褐色　(10YR4/3)　地山ブロック、炭化物、焼土粒含。
5　褐灰色　(10YR4/1)　砂を多く含む。炭化物含。

0　2 m　1:60

第147号住居跡出土土錘観察表（第31図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	5.4	1.8	0.5	7.89	BaV	浅黄橙	50%	

第31図　第147号住居跡出土遺物



第148号住居跡（第32～34図、図版4・10・11・14）

V・W－18・19グリッドで検出した。平面の形状は方形であったと考えられるが、遺構の北西側をSJ149に壊され、また、西側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸5.92m、短軸5.80m、深さ0.40mである。主軸方位はN－78°－Eであった。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、P1・P2が相当すると思われる。また、住居跡南西部で、P1・P2に対応した位置にピット（GP5）を検出したが、住居の覆土から掘り込まれていたため、住居には伴わないピットと判断した。このGP5の他に、住居と重複するピットを4基検出した（GP1～4）が、全て本遺構を壊していた。

カマドは、住居東壁の中央付近で検出した。袖は検出できなかった。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていた。煙道は、長さ1.2m、幅0.25mと細長く、燃焼部より一段高く、テラス状となっていた。

貯蔵穴は、カマド右側のやや壁から離れた位置で検出した。貯蔵穴の形状は楕円形で、長径0.85m、短径0.7m、深さ0.28mであった。

壁溝は、北壁・東壁・南壁・西壁の一部で検出した。西壁では、途中で壁溝が切れることから、壁溝は全周していなかったものと思われる。

遺構は、SJ149及びピットと重複していた。遺構の重複関係は、全ての遺構に壊されていた。

出土遺物は、住居北東隅付近及び覆土中から出土した。特に覆土中の遺物は、土師器・須恵器の破片が多く、時期差のある土器も混在していた。本遺構は、多くの遺構と重複しており、また攪乱も受けていたため、混入遺物と考えられるものもあった。図示可能な遺物は、土師器甕・甑、須恵器高盤の脚部の破片・甕の胴部片が出土した。また、土錘が20点出土した。

1～4は土師器甕である。1は、頸部の屈曲が強い。口縁端部は厚く、強いナデにより沈線状に窪んでいた。器面の調整は、口縁部は、内外面とも横ナデ、胴部外面は斜め方向のヘラケズリ、内面は横ナデが施されていた。2は、頸部の屈曲は弱い。内面口縁端部直下は、沈線状に窪んでいた。器面の調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は、縦方向のヘラケズリ、内面は横ナデが施されていた。

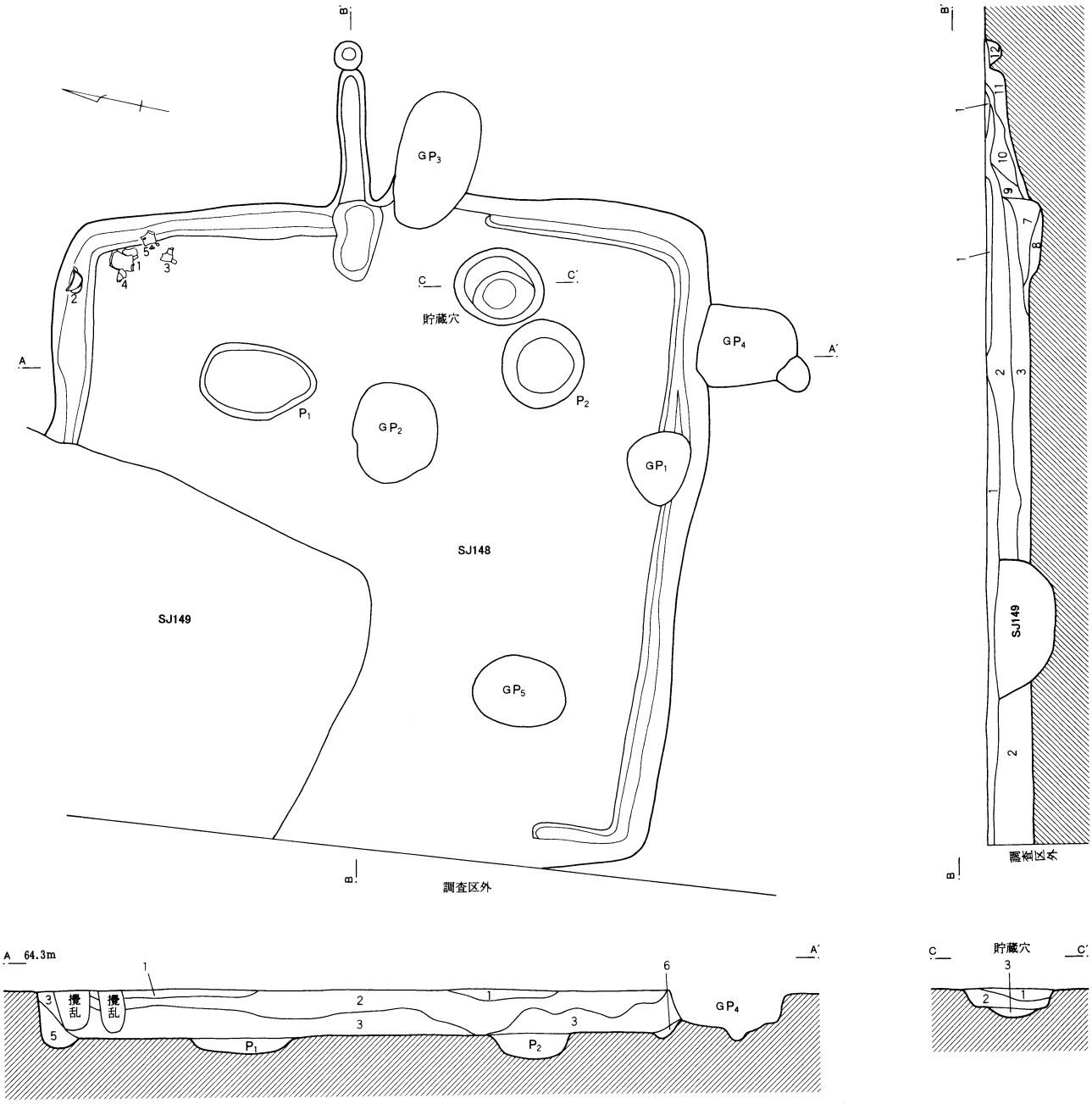
3・4は、口縁部と胴部の境界に、強いナデによって生じた稜が認められる。3の内面口縁端部は沈線状に窪んでいた。2点外面胴部には、縦方向のヘラケズリが施されていた。

5・6は甑である。5は、口縁端部が面取りされ、外面端部直下は沈線状になっていた。胴部に把手が認められた。外面のケズリは、口縁直下まで及んでいた。6は、口縁部に強いナデによって生じた段を有する。

7・8は、須恵器高盤の脚部と思われる。裾部は八の字状に開き、側面を持つ。側面は下方に向き、端部は丸くなっていた。

9は、甕胴部の破片である。外面は平行叩き、内面は青海波文の当て具痕が認められた。

第32図　第148号住居跡



第148号住居跡

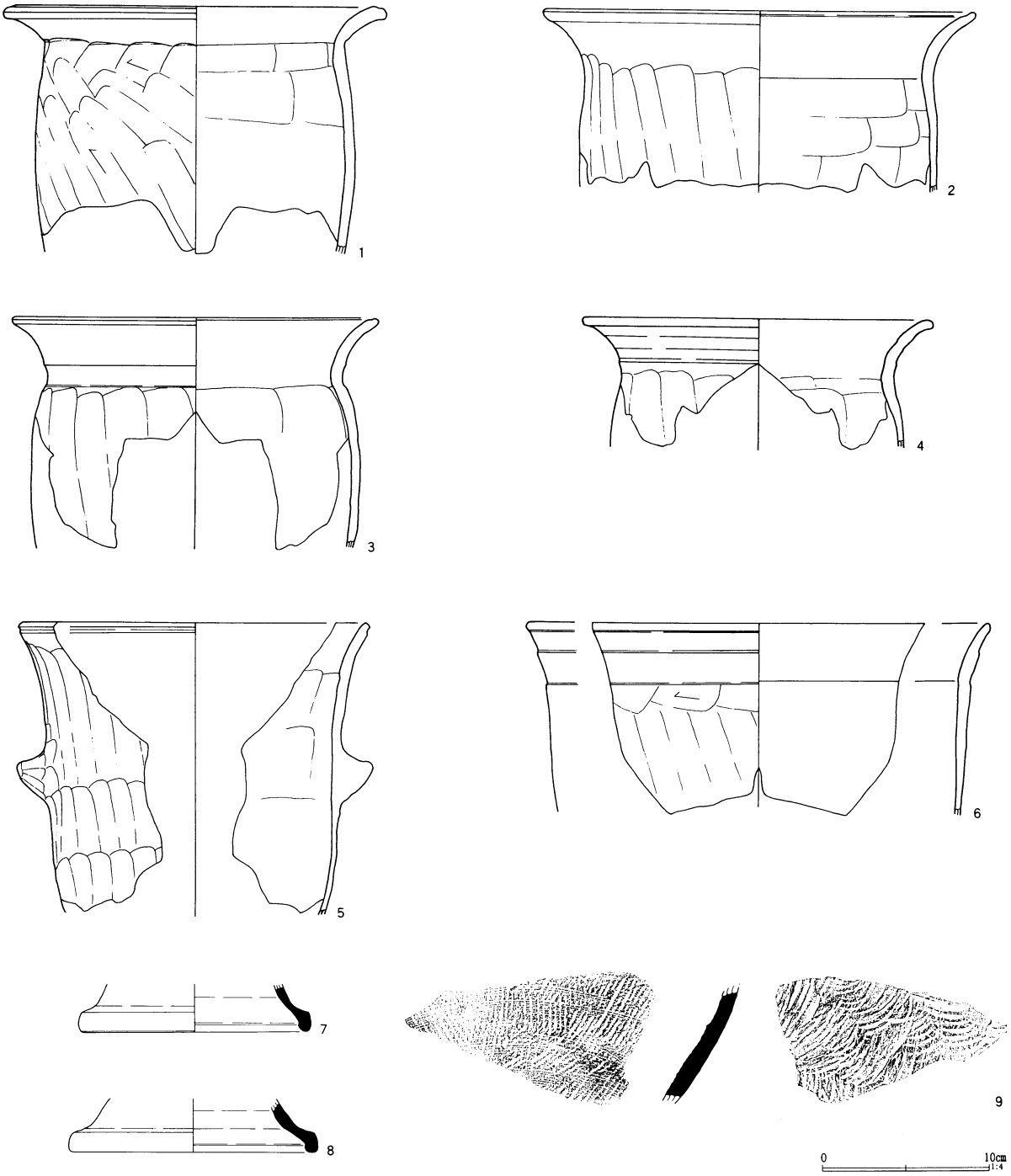
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　白色微粒子多。
2　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物若干。
3　鈍黄褐色　(10YR4/2)　鈍黄橙色土多。
4　黒褐色　(10YR4/2)　しまり弱い。
5　黒褐色　(10YR4/2)　炭化物、鈍黄褐色含む。
6　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物若干。
7　暗褐色　(10YR3/4)　焼土、炭化物含む。
8　鈍黄橙色　(10YR6/4)　炭極多。
9　黒褐色　(10YR2/3)
10　褐色　(10YR4/4)
11　暗褐色　(10YR3/3)
12　黒褐色　(10YR2/3)　締まり強い。

第148号住居跡貯蔵穴

1　灰黄褐色　(10YR4/2)　灰主体に含む。締まり強い。
2　灰黄褐色　(10YR4/2)　締まり強い。
3　黒褐色　(10YR3/1)　粘性。

0　2 m　1:60

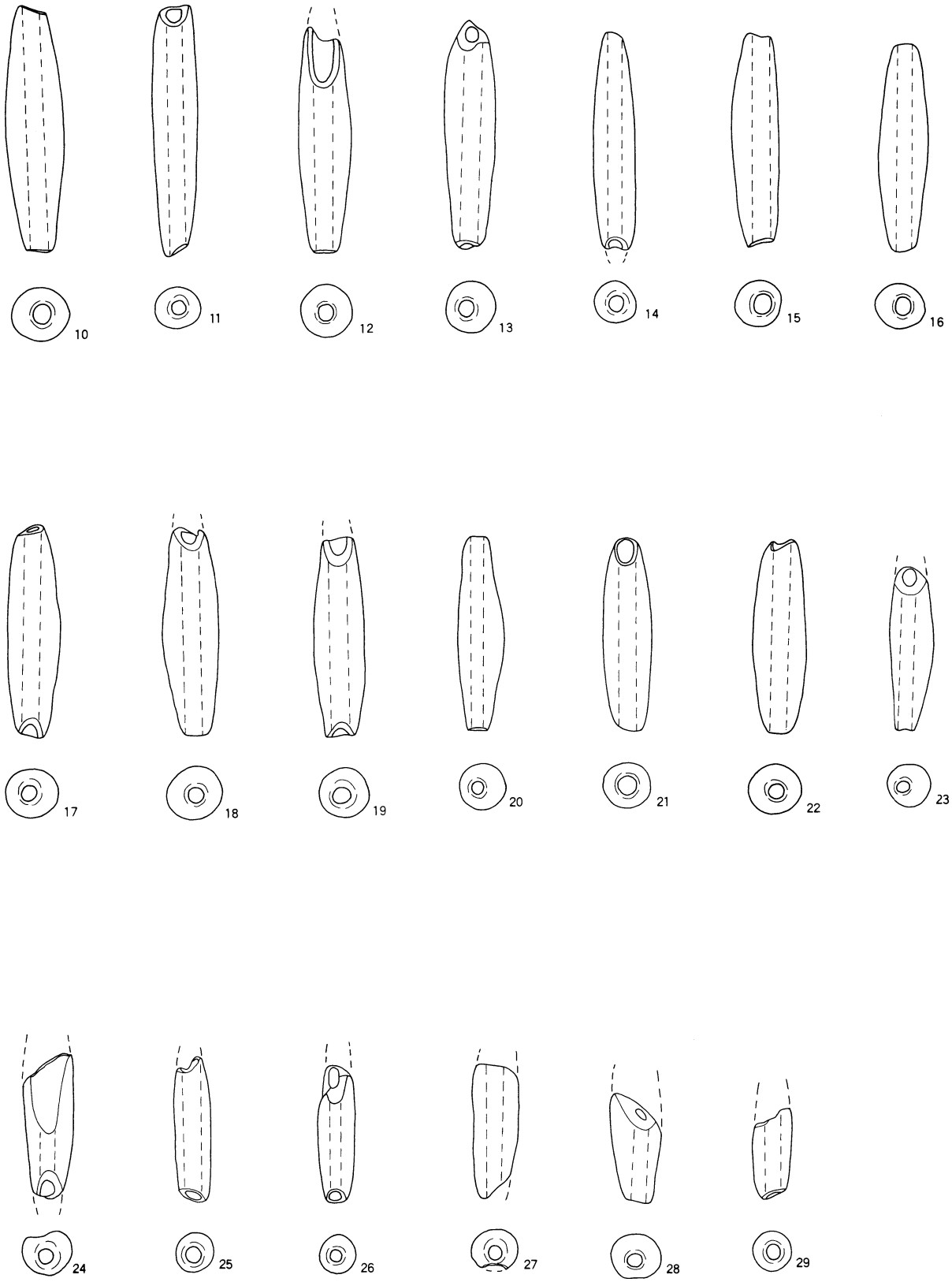
第33図　第148号住居跡出土遺物(1)



第148号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(21.4)			ABEFJL	3	にぶい橙	口縁	床面	
2	甕	(25.7)			ABDEFHJL	3	にぶい橙	口縁	床面	
3	甕	(21.6)			ABDEFHJL	2	にぶい橙	口縁	床面	
4	甕	20.7			ABDEFHL	2	にぶい橙	口縁	床面	
5	甑	(20.5)			ABDEFHJL	3	褐	破片	壁際	
6	甑	(27.4)			ABFJL	2	橙	破片	覆土	
7	高盤			13.5	ABEFHJL	3	橙	破片	覆土	末野
8	高盤			14.5	AFHJL	3	灰白	破片	覆土	末野
9	甕				BFJL	2	灰		覆土	末野

第34図　第148号住居跡出土遺物(2)



第148号住居跡出土土錘観察表（第34図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
10	8.0	1.9	0.6	21.89	BaII	にぶい橙	100%	
11	8.0	1.5	0.5	15.31	AaII	にぶい橙	100%	
12	(7.2)	1.7	0.6	16.37	BaIII	にぶい橙	80%	
13	7.3	1.6	0.6	18.92	BaIII	にぶい黄橙	90%	
14	7.0	1.3	0.5	10.70	AaIII	浅黄橙	100%	
15	6.9	1.5	0.6	13.67	BaIII	橙	100%	
16	6.7	1.6	0.5	13.76	BaIII	灰黄褐	100%	
17	6.8	1.7	0.5	15.98	BaIII	にぶい橙	100%	
18	(6.7)	1.8	0.5	19.04	BaIII	にぶい黄橙	90%	
19	(6.4)	1.7	0.6	15.53	BaIV	黒褐	90%	
20	6.3	1.5	0.4	11.93	CaIV	橙	100%	
21	6.2	1.6	0.6	13.26	BaIV	橙	90%	
22	6.2	1.7	0.5	16.51	BaIV	にぶい黄橙	100%	
23	(5.3)	1.5	0.4	9.15	BaV	橙	80%	
24	(4.7)	1.6	0.5	10.01	Ba他	黒褐	50%	
25	(4.7)	1.2	0.5	6.37	Aa他	にぶい黄橙	80%	
26	(4.4)	1.2	0.4	6.84	Aa他	黒褐	70%	
27	(4.3)	1.5	0.5	7.19	Ba他	にぶい黄橙	40%	
28	(3.5)	1.6	0.5	6.30	Ba他	にぶい黄橙	40%	
29	(2.9)	1.3	0.5	4.19	Ba他	明赤褐	40%	

第149号住居跡（第35～37図、図版4・8・15）

V・W－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居西側が調査区域外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.49m、深さ0.60mであった。主軸方位は、N－8°－Eであった。

壁面は、概ね垂直に直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、堅く締まり、概ね平坦であった。

遺構の覆土は、黒褐色～暗褐色土が主体で、地山の黄褐色砂質土ブロックを多量に含んでいた。また、最上層（1層）は、住居上部を覆っており、また、白色の軽石状の粒子を多量に含んでおり、住居の覆土の様相とは異なる層である。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居北壁の、中央部からやや東に寄った位置で検出した。袖は両側で検出した。袖の壁面が焼け、赤変していたが、硬化していなかった。燃焼部は、浅い土壙状であった。煙道は、長さ1.2m、幅0.5m～0.2mで、先端に向かって細くなっていた。底面は、燃焼部から緩やかに傾斜しながら立ち上がっていた。また天井部が残存していた。天井部は赤く焼け、硬化した面を持っていた。煙出し部分は、円形のピット状で、径は0.3mであった。

貯蔵穴は、カマド右脇の住居北東隅で検出した。規模は、長径0.5m、短径0.35mの楕円形で、深さは0.35mであった。

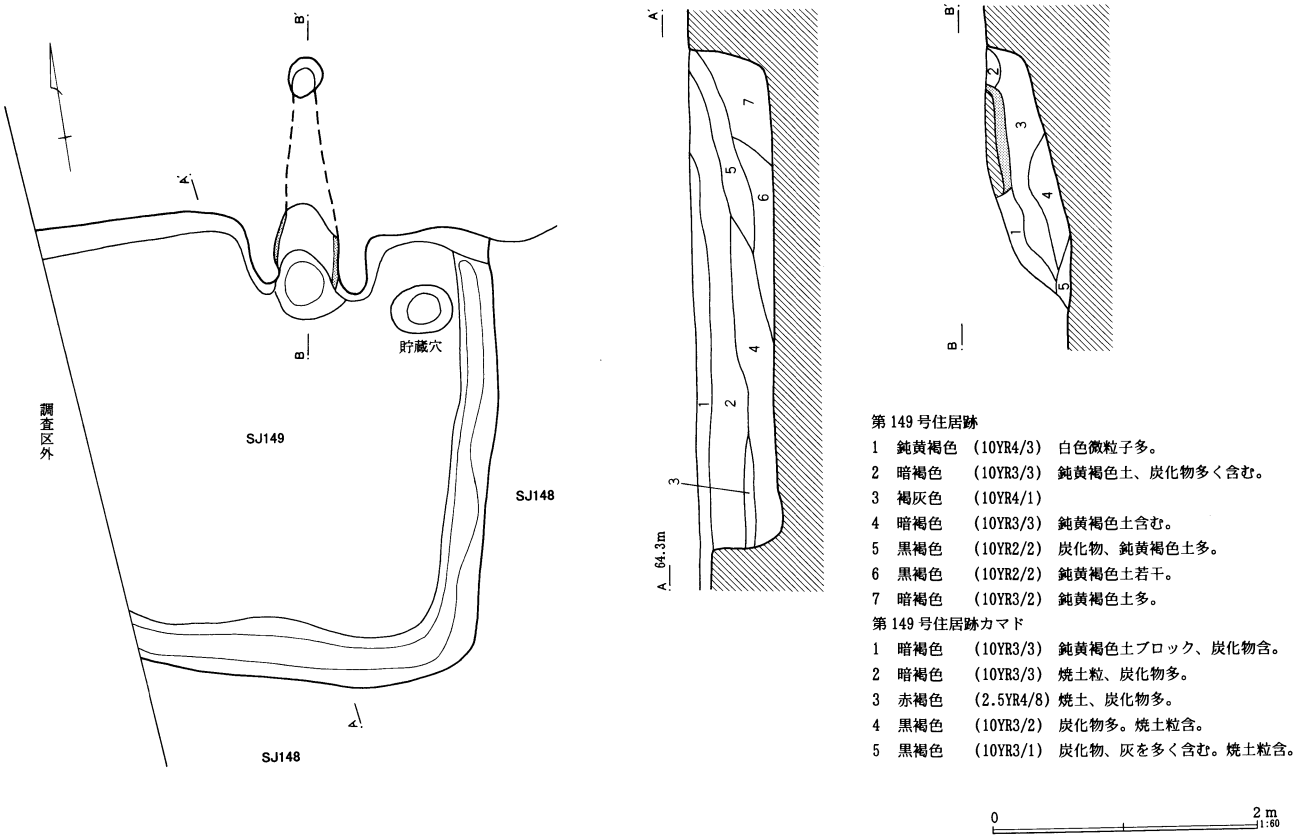
壁溝は、住居東壁と南壁で検出したが、北壁で検出できなかったため、全周していなかったと思われる。

遺構は、SJ148と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構がSJ148を壊していた。

出土遺物は、住居覆土及び貯蔵穴内より、土師器坏・甕、須恵器坏・壺が出土した。貯蔵穴内から出土した遺物は、3・4で、他は覆土からの出土である。

また、土錘が8点、土玉が1点出土した。土玉は、径8mm、厚さ7mm、重さ0.52gと小型で、本遺跡唯一の資料である。

第35図　第149号住居跡

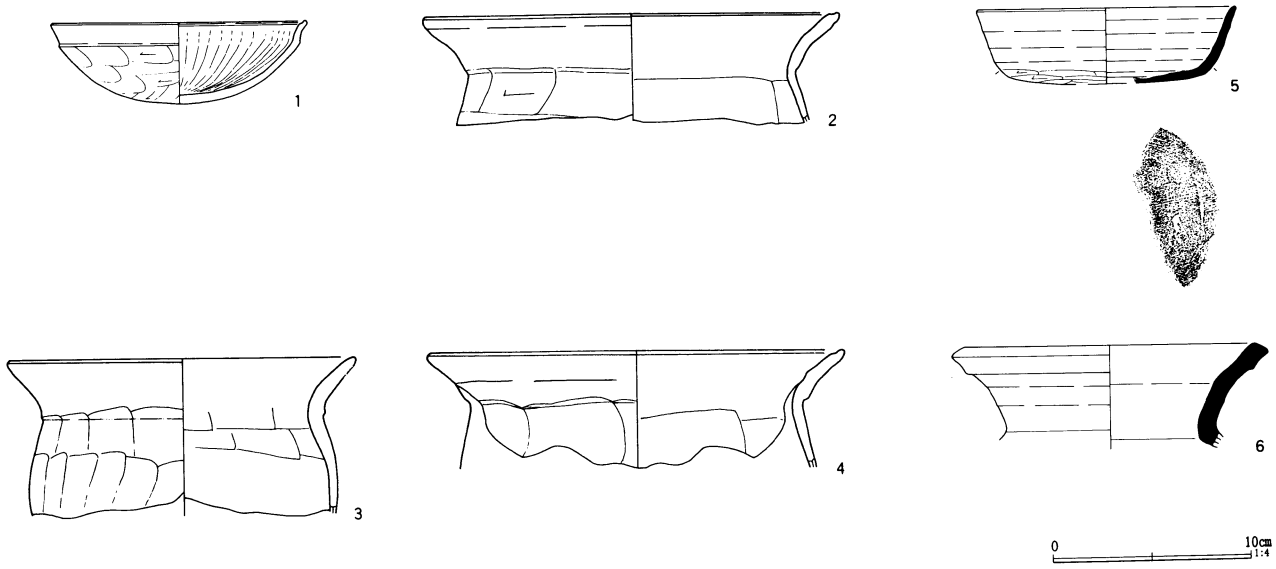


第 149 号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　白色微粒子多。
2　暗褐色　(10YR3/3)　鈍黄褐色土、炭化物多く含む。
3　褐灰色　(10YR4/1)
4　暗褐色　(10YR3/3)　鈍黄褐色土含む。
5　黒褐色　(10YR2/2)　炭化物、鈍黄褐色土多。
6　黒褐色　(10YR2/2)　鈍黄褐色土若干。
7　暗褐色　(10YR3/2)　鈍黄褐色土多。

第 149 号住居跡カマド
1　暗褐色　(10YR3/3)　鈍黄褐色土ブロック、炭化物含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　焼土粒、炭化物多。
3　赤褐色　(2.5YR4/8)　焼土、炭化物多。
4　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物多。焼土粒含。
5　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物、灰を多く含む。焼土粒含。

0　2 m　1:60

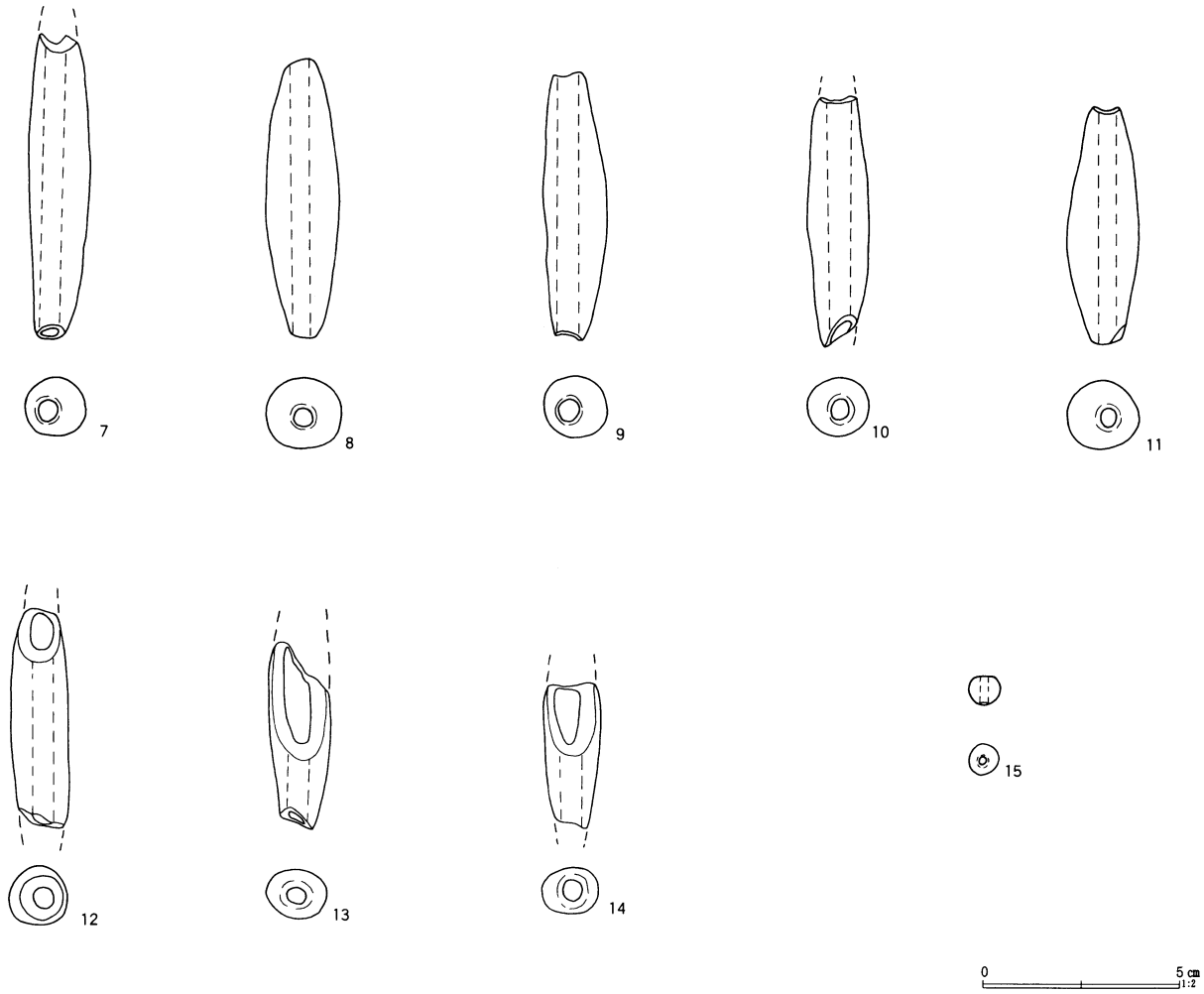
第36図　第149号住居跡出土遺物(1)



第149号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.8	4.1		BDEJ	3	黄橙	50%	覆土	内面暗文あり
2	甕	(20.6)			ABFHJL	3	橙		覆土	
3	甕	(17.1)			ABEFHJL	3	橙	口縁	貯蔵穴内	
4	甕	(20.7)			ABDFHJL	2	橙	口縁	貯蔵穴内	
5	坏	(13.1)	(3.8)	(10.0)	ABFJL	1	灰褐	25%	覆土	手持ヘラ　末野
6	壺	14.2			BFHJ	3	灰オリーブ		覆土	

第37図　第149号住居跡出土遺物(2)



第149号住居跡出土土錘観察表（第37図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	(7.7)	1.6	0.5	16.14	BaII	褐	90%	
8	7.1	1.9	0.5	23.25	BaIII	黒褐	100%	
9	6.8	1.6	0.6	14.10	BaIII	にぶい黄橙	100%	
10	(6.3)	1.6	0.5	13.94	BaIV	明赤褐	80%	
11	6.0	1.8	0.5	16.04	CaIV	橙	100%	
12	(5.6)	1.5	0.5	12.13	Aa他	橙	70%	
13	(4.8)	1.6	0.5	6.64	Ba他	橙	40%	
14	(3.7)	1.5	0.5	5.36	Aa他	橙	40%	

第150号住居跡（第38・39図、図版4・8・11・12）

V・W－19グリッドで検出した。

平面の形状は、四隅がやや丸みを帯びた方形と思われるが、東側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸2.72m、深さ0.54mであった。主軸方位は、N－107°－Wであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、堅く締まり、概ね平坦であった。また、床面直上には、炭化物を多く含む黒色土が薄く堆積していた。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、西壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていたが、住居外へ突出していた。煙道は、SK65・66に壊されていたため、検出できなかった。壁面は焼け、赤く変色していたが、硬化はしていなかっ

た。

貯蔵穴・壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SJ153、SK62・63・65・67と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察等から、全ての土壙に壊され、SJ153を壊していることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、土師器坏・甑・甕・壺が出土した。また、土錘が1点出土した。

第153号住居跡（第38・40図、図版5）

W－19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、住居跡の一部が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.04m、短軸2.96m、深さ0.48mであった。主軸方位は、N－117°－Wであった。

壁面は、概ね垂直で、ほぼ直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、堅く締まり、概ね平坦であった。

柱穴は検出できなかった。

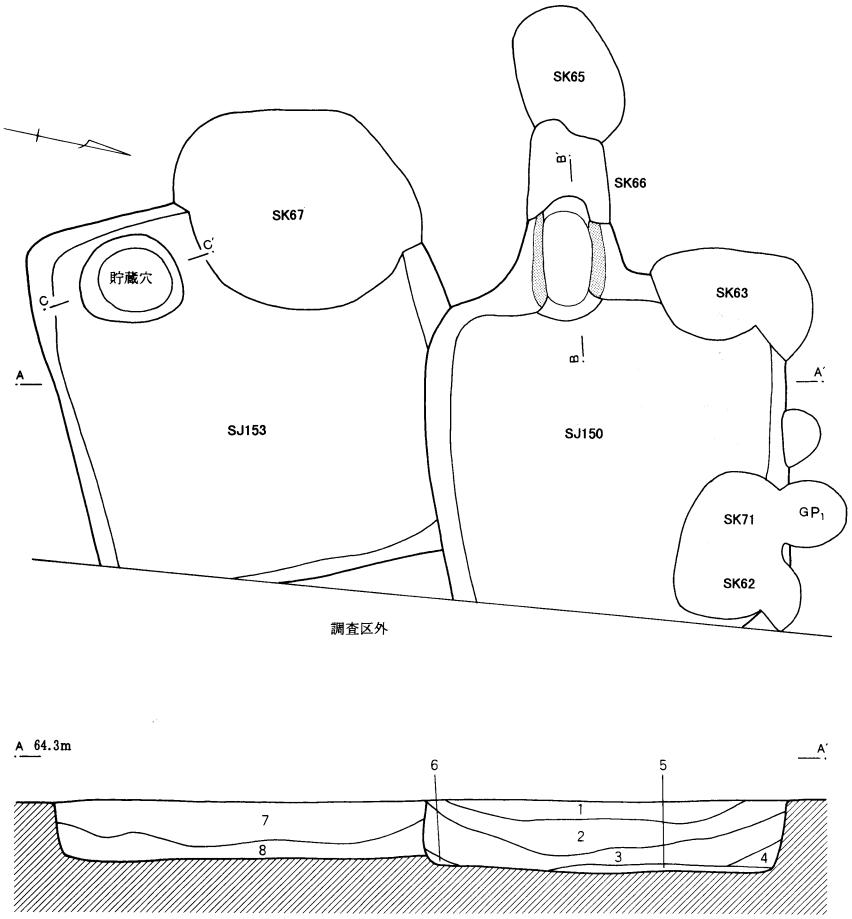
カマドは、検出できなかったが、貯蔵穴の検出位置から、西壁に構築されていたと思われる。しかし、SK67に壊されていたため、明らかにすることはできなかった。

壁溝は、検出できなかった。

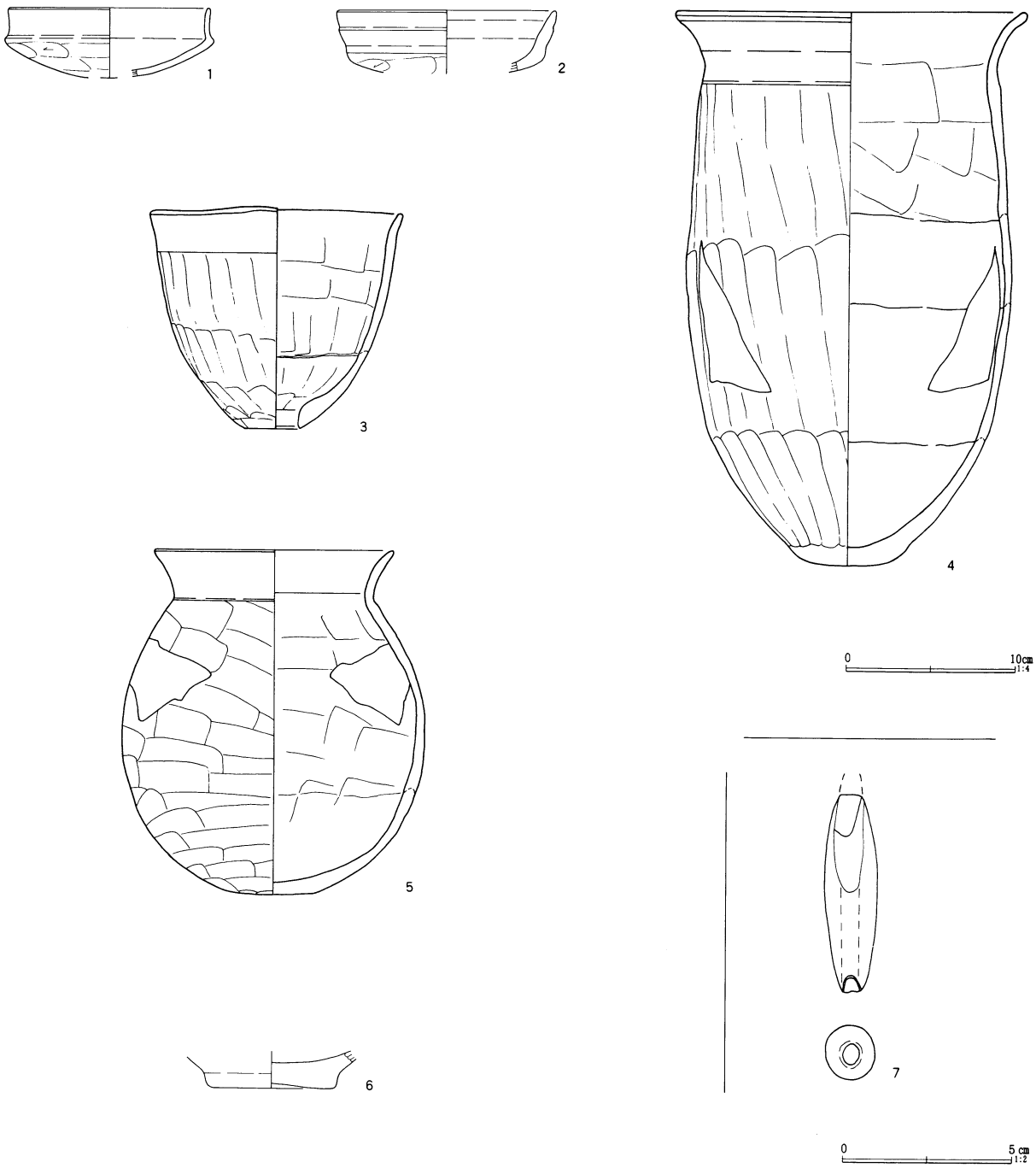
遺構は、SJ150、SK67と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察等から、SJ150、SK67に壊されていることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、土師器甕・壺が出土した。1は、甕である。外面胴部に縦方向のヘラケズリが認められた。2は壺である。

第38図　第150・153号住居跡



第39図　第150号住居跡出土遺物



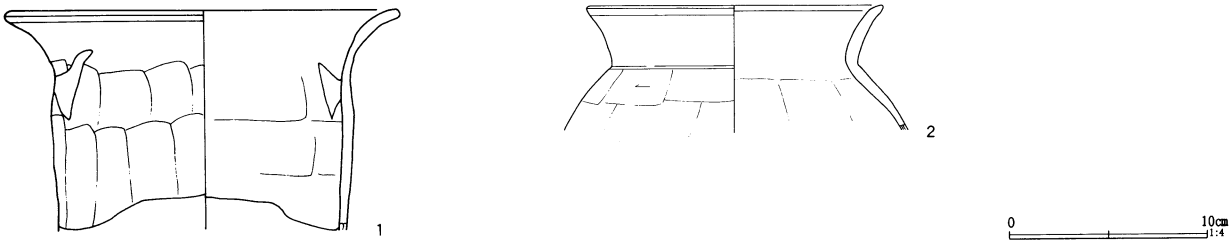
第150号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(11.8)			ABDEJ	3	橙	25%	覆土	
2	坏	(12.8)			ABEJL	3	褐灰	20%	覆土	
3	甑	14.7	13.2	3.3	ABFHJL	3	にぶい橙	100%	覆土	
4	甕	(20.5)	(32.6)	(5.8)	ABEFJKL	3	橙	50%	覆土	
5	甕	(14.1)	(20.3)	(4.9)	ABEFJL	3	橙	60%	覆土	
6	壺			7.6	BDEJL	3	黄橙	底部	覆土	

第150号住居跡出土土錘観察表（第39図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	(5.8)	1.5	0.5	11.69	BaIV	橙	80%	

第40図　第153号住居跡出土遺物



第153号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(19.3)			ABEFJL	3	橙	口縁	覆土	
2	壺	14.8			ABDEJ	2	黄橙	口縁	覆土	

第151号住居跡（第41・42図、図版5）

T－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であったと思われるが、遺構の大部分が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。本遺構は、上部をSJ139によって壊されていたため、SJ139の床面で検出した。

規模は、長さ4.55m、深さ0.54mである。主軸方位はN－6°－Wであった。

壁面は、概ね垂直に、直線的に立ち上がっていた。床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、堅く締まり、概ね平坦であった。

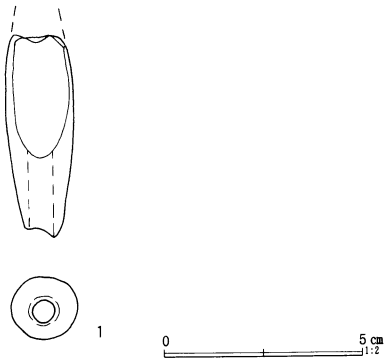
柱穴は検出できなかった。

カマド・貯蔵穴・壁溝等も検出できなかった。

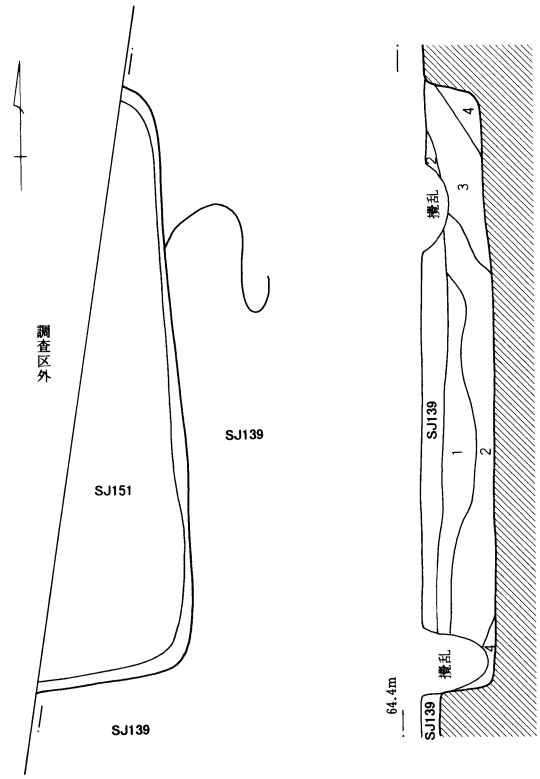
遺構は、SJ139と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、本遺構は、SJ139に壊されていることを確認した。

出土遺物は、覆土中から土錘が1点出土した。

第42図　第151号住居跡出土遺物



第41図　第151号住居跡



第151号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。焼土粒含。
2　暗褐色　(10YR3/4)　焼土ブロック、炭化物、焼土粒多。
3　黒褐色　(10YR3/2)　地山ブロック、炭化物多。焼土ブロック含。
4　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック多。砂質。

第151号住居跡出土土錘観察表（第42図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	(5.1)	1.7	0.6	10.53	Ba他	にぶい黄橙	60%	

第152号住居跡（第43図、図版５）

U・V－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であったと思われるが、遺構の大部分を、他の遺構によって壊され、南西隅部分のみの検出であったため、全体の規模、形状は明らかにできなかった。

遺構の深さは、0.16mであった。

壁面は、概ね直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は検出できなかった。

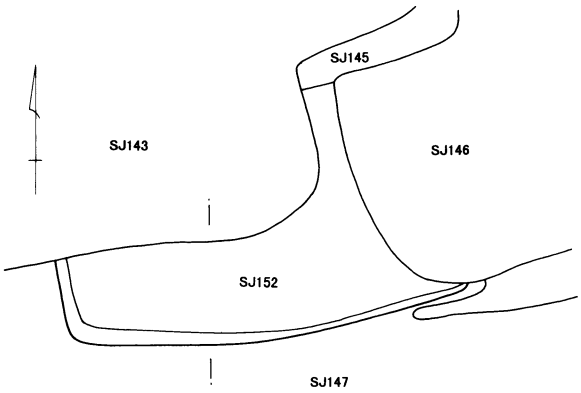
カマドは、検出できなかった。

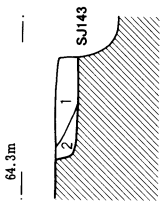
貯蔵穴、壁溝等その他の施設も検出できなかった。

遺構は、SJ143・145・146・147と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察等から、SJ143・145・146に壊され、SJ147を壊していることを確認した。

出土遺物は、古墳時代の土師器の破片が出土したが、図示可能な遺物はなかった。

第43図　第152号住居跡





第152号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物、地山ブロック多。
2　褐色　(10YR4/4)　炭化物、地山ブロック多。

0　2m
1:60

(2)　土壙

第47号土壙（第44図、図版５）

R－18グリッドから検出した。

平面の形状は楕円形と思われるが、中央部をSD1に壊され、東側が調査区外に展開していたため、全体の規模、形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸1.32m、深さ0.09mであった。

遺物は出土しなかった。

第48号土壙（第44・45図）

S－18グリッドから検出した。

遺構は、東側はSJ138と重複していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.02m、短軸0.7m、深さ0.48mであった。主軸方位はN－10°－Eであった。

遺物は、覆土中から土師器壺、須恵器壺の破片が出土した。

第49号土壙（第44図）

S－18グリッドから検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.71m、短軸0.70m、深さ0.48mであった。主軸方位はN－79°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

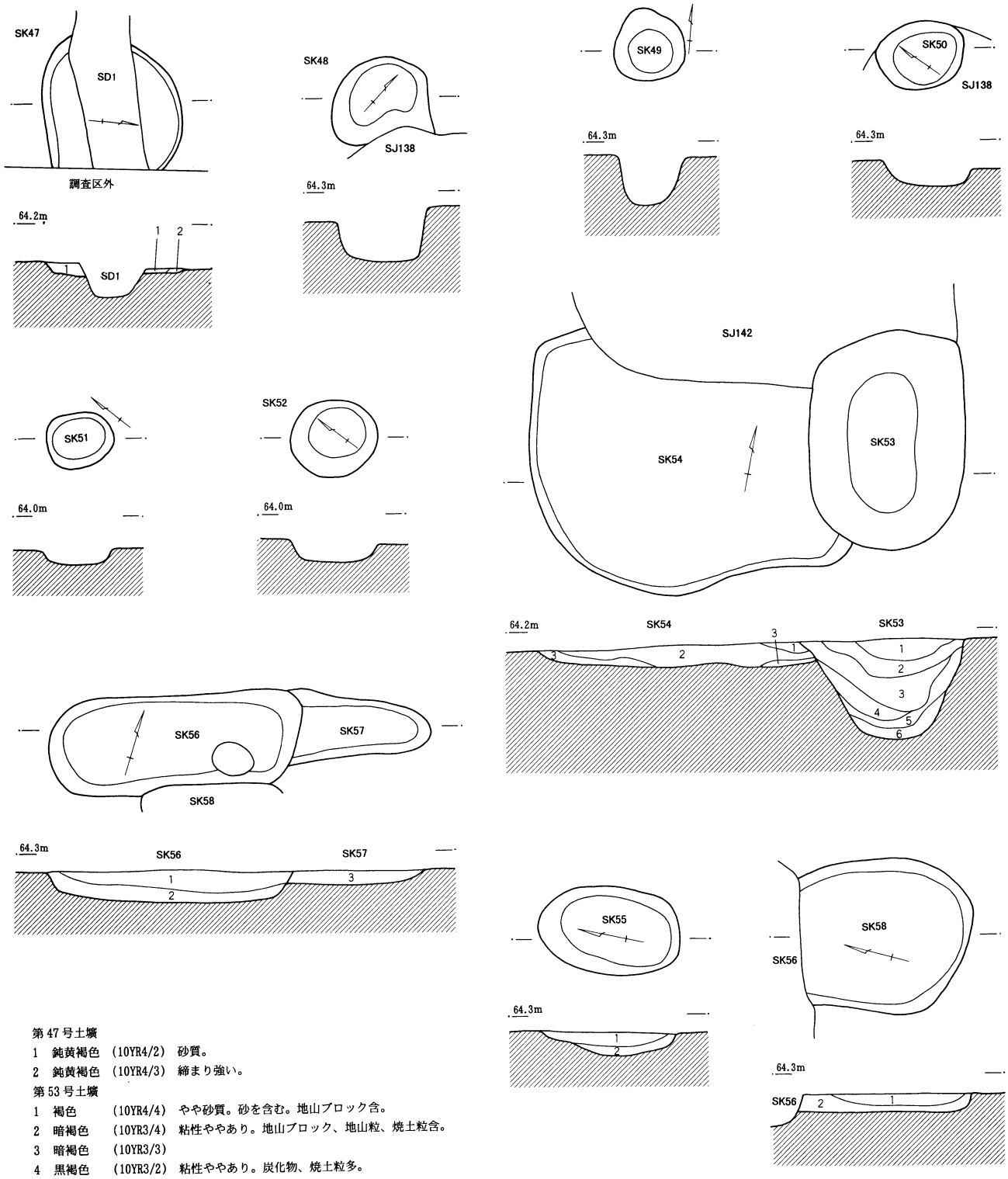
第50号土壙（第44図）

S－18グリッドから検出した。

遺構は、SJ138と重複していたが、遺構の重複関係は明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.88m、短軸0.65m、深さ0.21mであった。主軸方位はN－45°－Wであった。

第44図　土壙(1)



第47号土壙
1　鈍黄褐色　(10YR4/2)　砂質。
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　締まり強い。
第53号土壙
1　褐色　　(10YR4/4)　やや砂質。砂を含む。地山ブロック含。
2　暗褐色　　(10YR3/4)　粘性ややあり。地山ブロック、地山粒、焼土粒含。
3　暗褐色　　(10YR3/3)
4　黒褐色　　(10YR3/2)　粘性ややあり。炭化物、焼土粒多。
5　鈍黄褐色　(10YR5/3)　砂質。焼土粒、炭化物含。
6　灰黄褐色　(10YR5/2)　砂質。炭化物を含む。焼土粒含。
第54号土壙
1　褐色　　(10YR4/4)　炭化物含。
2　黒褐色　(10YR3/1)　地山ブロック、焼土粒、炭化物多。
3　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物含。
第55号住居跡
1　暗褐色(10YR3/4)　地山ブロック、焼土粒、炭化物含。
2　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック多。

第56・57号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒含。
2　黒褐色　(10YR3/2)　地山ブロック多。焼土粒含。
3　暗褐色　(10YR2/2)　地山ブロック、炭化物含。
第58号土壙
1　褐色　　(10YR4/4)　地山ブロック多。焼土粒含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。

0　2 m　1:60

遺物は出土しなかった。

第51号土壙（第44図）

S－18グリッドから検出した。

遺構は、SJ138と重複していたが、重複関係は明らかにできなかった。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.65m、短軸0.51m、深さ0.14mであった。主軸方位はN－60°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第52号土壙（第44図）

S－18グリッドから検出した。

遺構は、SJ138に壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.84m、短軸0.74m、深さ0.20mであった。主軸方位はN－36°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第53号土壙（第44・45・46図、図版5・15）

U－18グリッドから検出した。

遺構は、SJ142・146、SK54を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.15m、短軸1.51m、深さ0.98mであった。主軸方位はN－79°－Eであった。

遺構は、深く掘り込まれ、地山の砂質土の下層である粘質土まで掘り込まれていた。

出土遺物は、土師器坏・台付甕の脚部・鉢、須恵器高台坏が出土したが、周辺の遺構からの混入の可能性が高い。また、土錘が8点出土した。

1は、土師器坏である。口縁部に段を有する。

2は、台坏甕の脚部と考えられる。脚部の輪積痕、及び胴部との接合痕が明瞭である。

3は、鉢である。破片であったため、全体の復元はできなかった。胴部に縦方向及び横方向のヘラケズリが認められた。

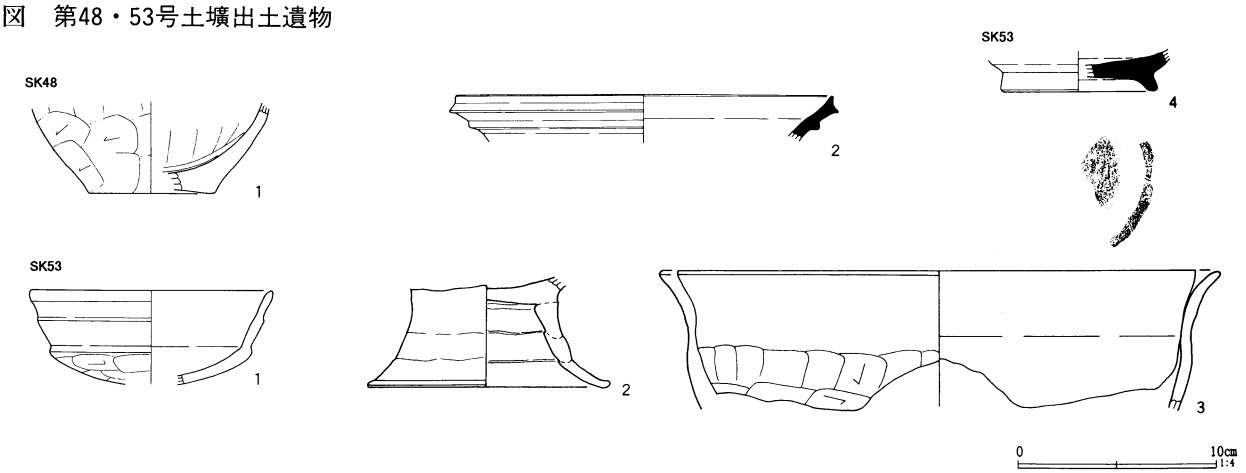
4は、須恵器高台坏である。破片資料であるが、底部には、糸切り痕が認められた。

第54号土壙（第44・47・48図、図版5・8・14）

U－18グリッドから検出した。

遺構は、SJ142・146、SK53と重複していた。重複関係は、本遺構が、SJ142・146を壊し、SK53に壊されていた。

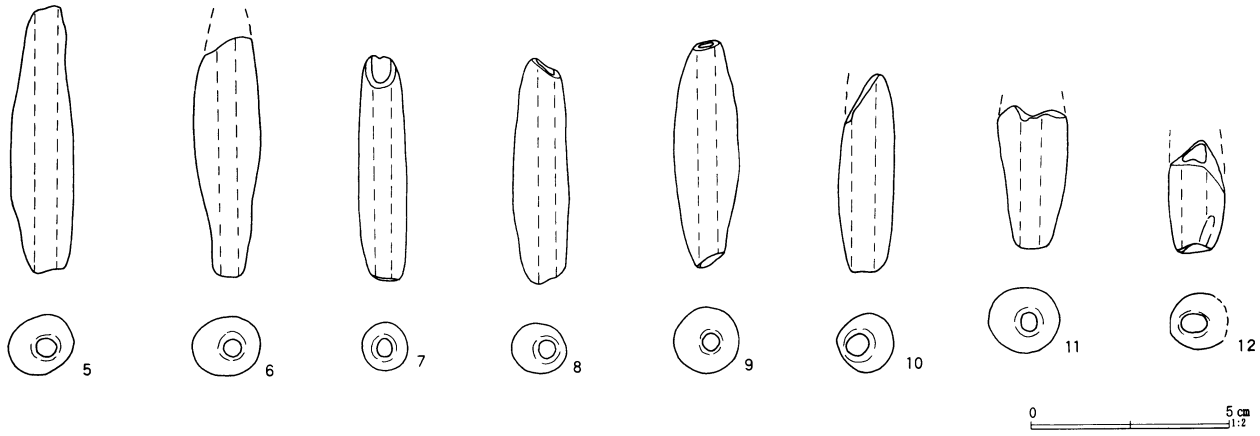
第45図　第48・53号土壙出土遺物



第48・53号土壙出土遺物観察表（第45図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
48-1	甕	19.0		(6.3)	ADEHJL	3	橙	底部		SK 48
2	壺				BF	1	灰	口縁		SK 48
53-1	坏	(12.1)	(4.8)		ABDEFJL	3	明黄褐	25%		SK 53
2	台付甕			(11.8)	ABDEJKL	3	橙	脚部		SK 53
3	鉢	(28.0)			ABEFHJL	3	橙	口縁		SK 53
4	高台坏			7.8	BDHJL	4	灰黄	底部		SK 53

第46図　第53号土壙出土遺物



第53号土壙出土土錘観察表（第46図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
53-5	6.8	1.6	0.6	15.54	BaIII	にぶい橙	100%	
6	(6.0)	1.7	0.4	14.48	Ca他	にぶい黄橙	80%	
7	5.7	1.7	0.4	8.15	AaIV	にぶい黄橙	90%	
8	5.7	1.4	0.4	9.22	BaIV	にぶい橙	100%	
9	5.8	1.7	0.5	12.96	CaIV	橙	100%	
10	5.0	1.4	0.6	8.70	BaV	橙	90%	
11	(3.7)	1.8	0.5	10.27	Bb他	にぶい黄橙	50%	
12	(2.9)	1.4	0.6	4.20	Ba他	黒褐	30%	

平面の形状は方形と思われるが、東側をＳＫ53に壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。また、本遺構は、SJ142の調査中に確認したため、SJ142と重複する部分の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸2.33m、深さ0.22mであった。主軸方位はN－10°－Wであった。

出土遺物は、土師器坏、須恵器坏が出土した。また、土錘が26点出土した。

１～４は、土師器坏である。１・２は、模倣坏である。２は、口縁端部に強いナデによる沈線が認められた。３・４は、有段口縁の坏である。３は、口縁部の段が沈線状となり、また口縁端部を作り出していた。４の内面底部には、ヘラミガキ状の暗文が認められた。

５は、坏もしくは高坏と考えられる。口縁部は大きく外反し、内面口縁端部は、強いナデにより玉縁状になっていた。

６は、大型の坏もしくは椀と考えられる。

７は、須恵器坏である。口縁部の破片であるが、一部底部が残存しており、回転ヘラケズリの痕跡が認められた。

第55号土壙（第44図）

Ｖ－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.38m、短軸0.84m、深さ0.23mであった。主軸方位はN－2°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第56号土壙（第44・51図）

Ｖ－18グリッドで検出した。

本遺構は、SK57、58を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.44m、短軸0.88m、深さ0.32mであった。主軸方位はN－71°－Eであった。

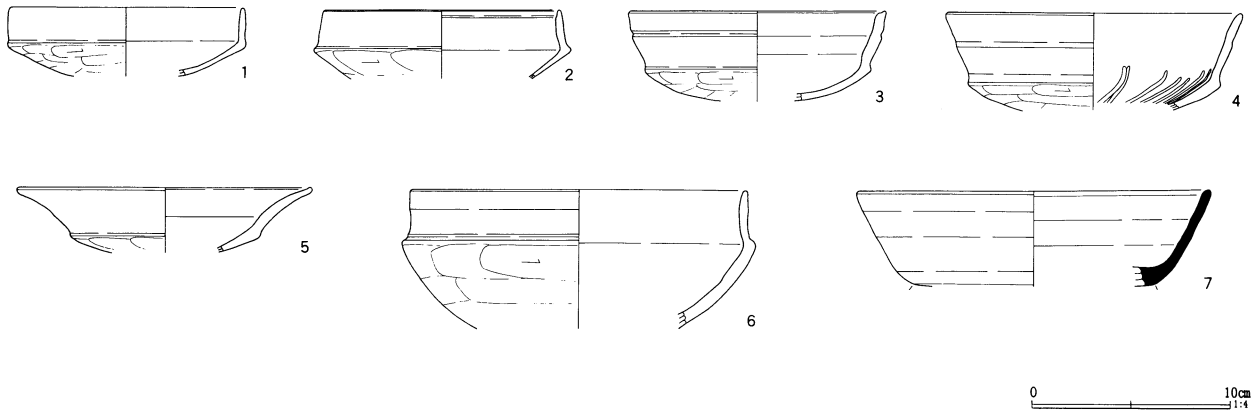
出土遺物は、土錘が１点出土した。

第57号土壙（第44図）

Ｖ－18・19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形であったと思われるが、遺構の

第47図　第54号土壙出土遺物(1)



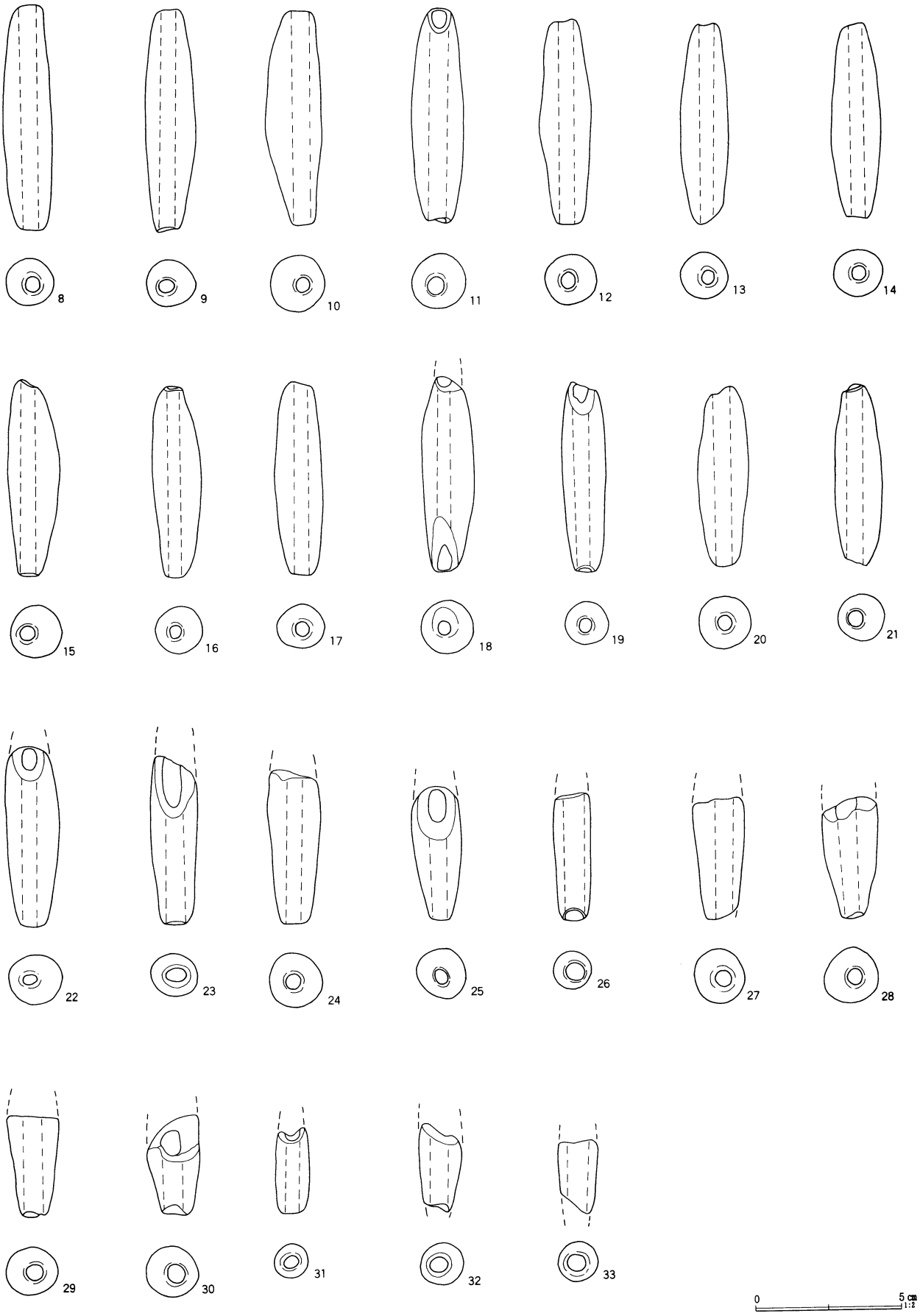
第54号土壙出土遺物観察表（第47図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
54-1	坏	11.8			ABDEFJ	3	暗褐	20%	覆土	
2	坏	(11.9)			ABDEHJ	3	橙	20%	覆土	
3	坏	(12.9)	(4.6)		ABDEJL	3	橙	25%	覆土	
4	坏	14.8			ABDEFJL	3	暗褐	20%	覆土	
5	高坏	14.8			ABEFJL	3	橙	坏部	覆土	
6	椀	16.8			ABDEFJL	3	暗褐	20%	覆土	
7	坏	(17.6)	(5.0)	(12.1)	ABFHJL	3	にぶい赤褐	破片	覆土	回転ヘラケズリ　末野

第54号土壙出土土錘観察表（第48図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
54-8	7.7	1.7	0.5	20.37	BaII	にぶい橙	100%	
9	7.6	1.7	0.5	21.28	BaII	にぶい黄橙	100%	
10	7.4	1.9	0.5	24.51	BaIII	にぶい黄褐	100%	
11	7.4	1.9	0.6	22.14	BaIII	灰褐	100%	
12	7.0	1.8	0.5	19.54	BaIII	にぶい黄橙	100%	
13	6.8	1.6	0.5	16.26	BaIII	明赤褐	100%	
14	6.7	1.7	0.5	17.80	BaIII	橙	100%	
15	6.7	1.8	0.5	18.23	BaIII	橙	100%	
16	6.6	1.6	0.5	16.71	BaIII	明黄褐	100%	
17	6.7	1.6	0.5	17.96	BaIII	にぶい黄橙	100%	
18	(6.7)	1.8	0.4	19.69	BaIII	橙	90%	
19	6.5	1.5	0.5	15.27	BaIII	灰黄褐	90%	
20	6.7	1.8	0.5	18.40	BaIII	にぶい黄橙	100%	
21	6.2	1.6	0.5	12.95	BaIV	橙	100%	
22	(6.2)	1.8	0.5	19.71	BaIV	にぶい黄橙	90%	
23	(5.8)	1.6	0.7	12.05	Ba他	褐	70%	
24	(5.3)	1.8	0.5	17.01	Ca他	にぶい黄橙	60%	
25	(4.6)	1.7	0.5	10.48	Ba他	灰褐	60%	
26	(4.4)	1.3	0.6	6.50	Aa他	にぶい橙	60%	
27	(4.2)	1.8	0.6	12.40	Ba他	にぶい黄橙	50%	
28	(4.2)	1.8	0.5	12.80	Ca他	にぶい赤褐	50%	
29	(3.5)	1.8	0.6	8.19	Ba他	橙	40%	
30	(3.4)	1.8	0.6	7.42	Ba他	橙	30%	
31	(3.0)	1.1	0.5	3.92	Aa他	にぶい黄橙	50%	
32	(3.1)	1.5	0.6	4.91	Ba他	灰褐	30%	
33	(2.6)	1.4	0.7	4.21	Aa他	灰黄褐	30%	

第48図　第54号土壙出土遺物(2)



西側をSK56に壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸0.54m、深さ0.14mであった。主軸方位はN－70°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第58号土壙（第44図）

V－18グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形と思われるが、遺構の北側をSK56に壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸1.46m、深さ0.18mであった。主軸方位はN－18°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第59号土壙（第49図）

V－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形と思われるが、遺構の東側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。また、南側でSK60を壊していた。

規模は、短軸0.72m、深さ0.24mであった。主軸方位はN－63°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第60号土壙（第49図）

V－19グリッドで検出した。遺構の北側は、SK59に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.18m、短軸1.00m、深さ0.30mであった。主軸方位はN－8°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第61号土壙（第49・51図、図版5）

U・V－18グリッドで検出した。遺構は、SJ146を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.18m、短軸1.60m、深さ1.14mであった。主軸方位はN－11°－Eであった。

遺構は、深く掘り込まれ、底面は、一部礫層が露出していた。

遺物は、土錘が1点出土した。

第62号土壙（第49・51図）

V－19グリッドで検出した。遺構は、SJ150、SK71を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.04m、深さ0.51mであった。主軸方位はN－6°－Wであった。

遺物は、土錘が1点出土した。

第63号土壙（第49・51図）

V・W－19グリッドで検出した。遺構は、SJ150を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.26m、短軸0.83m、深さ0.54mであった。主軸方位はN－13°－Wであった。

遺物は、土錘が1点出土した。

第64号土壙（第49図）

V－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.15m、短軸0.90m、深さ0.25mであった。主軸方位はN－34°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第65号土壙（第49・51図、図版8）

W－19グリッドで検出した。遺構の東側で、SK66を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.12m、短軸0.75m、深さ0.83mであった。主軸方位はN－52°－Eであった。

遺物は、須恵器坏底部の破片が出土した。須恵器坏内面底部には、工具あるいは指（爪か？）による渦巻き状の「ノタ目」が認められた。また、外面底部は、全面に回転ヘラケズリが施されていた。産地は、末野産と考えられる。

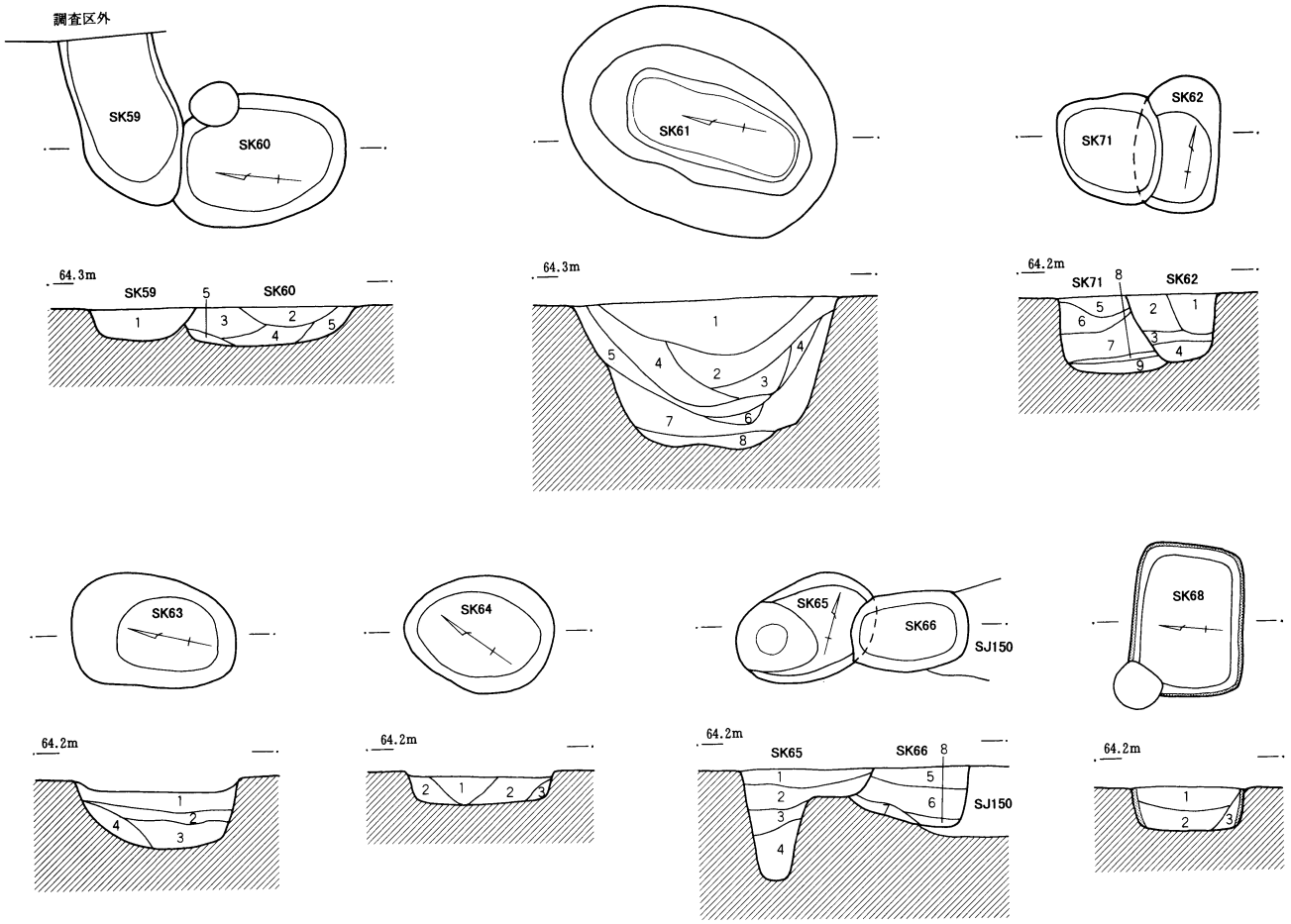
第66号土壙（第49図）

W－19グリッドで検出した。遺構の東側でSJ150のカマドを壊し、西側でSK65に壊されていた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸0.89m、短軸0.61m、深さ0.46mであった。主軸方位はN－74°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第49図　土壙(2)



第59・60号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物含。
2　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物、焼土粒含。
3　暗褐色　(10YR3/3)　焼土粒含。
4　褐色　(10YR4/6)　地山ブロック多。
5　褐色　(10YR4/4)　焼土粒含。

第61号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　粘性ややあり。地山ブロック、地山粒、焼土粒含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　やや砂質。地山ブロック、炭化物多。
3　鈍黄褐色　(10YR5/3)　砂質。炭化物含。
4　黒褐色　(10YR3/2)　粘性ややあり。炭化物、焼土粒多。
5　褐灰色　(10YR6/1)　砂質。締まりなし。炭化物を僅かに含む。
6　明赤褐色　(2.5YR5/6)　焼土(焼けた砂)多。炭化物含。
7　灰黄褐色　(10YR5/2)　砂質。炭化物を含む。焼土粒含。
8　灰黄褐色　(10YR4/2)　砂層。焼土粒含。

第62・71号土壙
1　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ1～2cm)、(φ1mm)をまばらに含む。しまり欠き、粘性有。
2　暗褐色　(10YR4/3)　黄褐色土粘土ブロック(φ1～2cm)やや多く含む。
3　暗褐色　(10YR4/3)　黄褐色土粘土ブロック(φ1～2cm)を多く含む。
4　黄褐色　(10YR6/4)　黄褐色土を主とし、暗褐色土ブロック(φ1～2cm)の混土層。
5　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5cm)まばら。焼土、炭化物(φ2～3mm)まばら。
6　暗褐色　(10YR4/3)　黄褐色土粘土ブロック(φ1～2cm)多。
7　暗褐色　(10YR3/3)　黄褐色土粘土ブロック(φ2～3mm)まばら。
8　暗褐色　(10YR4/3)　炭(φ3～5cm)、焼土ブロック(φ3～5cm)多。
9　暗褐色　(10YR4/2)　暗褐色と黄褐色の混土層。

第63号土壙
1　暗褐色　(10YR5/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)まばら。焼土粒子、炭化物粒子微。
2　暗黄褐色　(10YR6/3)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)を主体とする褐色土の混土。
3　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)やや少なくまばら。
4　暗黄褐色　(10YR4/3)　黄褐色粘土ブロック(φ5～8mm)をベースに暗褐色土との混土層。

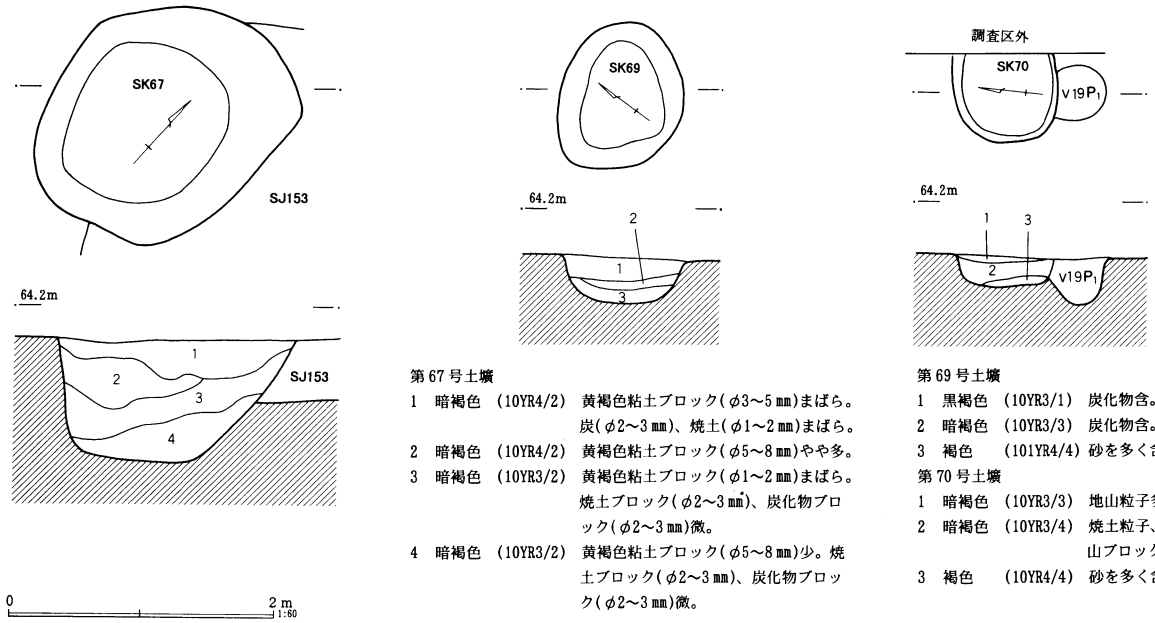
第64号土壙
1　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)多。焼土粒微。
2　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ2～3mm)少。
3　暗黄褐色　(10YR5/4)　黄褐色粘土ブロックにより構成。

第65・66号土壙
1　暗褐色　(10YR4/3)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)多。炭(φ1mm)少。
2　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ5～8mm)まばら。炭(φ1～2mm)少。
3　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)少。
4　黒褐色　(10YR3/2)　黄褐色粘土ブロック(φ1～2mm)少。
5　褐色　(10YR5/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)多。
6　暗褐色　(10YR5/2)　黄褐色粘土ブロック(φ2～3mm)少。焼土ブロック(φ1cm)少。炭(φ3～5mm)少。
7　暗褐色　(10YR4/2)　炭(φ1～2mm)、焼土(φ1mm)少。
8　暗褐色　(7.5YR5/3)　焼(φ2～3mm)多。炭(φ2～3mm)少。

第68号土壙
1　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5mm)少。炭化物ブロック(φ2～3mm)、焼土(φ2～3mm)やや多。
2　暗黄褐色　(10YR5/2)　黄褐色粘土ブロック(φ2～3mm)多。
3　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ2～3mm)少。

0　2m　1:60

第50図　土壙(3)

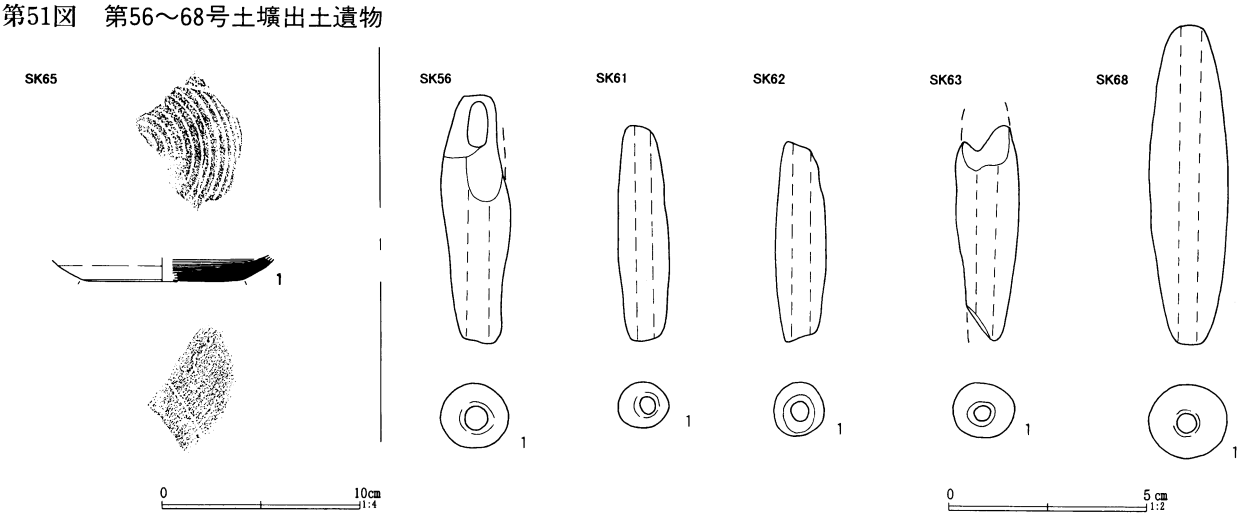


第67号土壙
1　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ3～5㎜)まばら。炭(φ2～3㎜)、焼土(φ1～2㎜)まばら。
2　暗褐色　(10YR4/2)　黄褐色粘土ブロック(φ5～8㎜)やや多。
3　暗褐色　(10YR3/2)　黄褐色粘土ブロック(φ1～2㎜)まばら。焼土ブロック(φ2～3㎜)、炭化物ブロック(φ2～3㎜)微。
4　暗褐色　(10YR3/2)　黄褐色粘土ブロック(φ5～8㎜)少。焼土ブロック(φ2～3㎜)、炭化物ブロック(φ2～3㎜)微。

第69号土壙
1　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物含。地山ブロック含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物含。地山ブロック多。
3　褐色　(101YR4/4)　砂を多く含む。

第70号土壙
1　暗褐色　(10YR3/3)　地山粒子多。
2　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒子、炭化物少量。地山ブロック含。
3　褐色　(10YR4/4)　砂を多く含む。

第51図　第56～68号土壙出土遺物



第65～68号土壙出土遺物観察表（第51図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
65-1	坏			(18.0)	ABFHJL	3	褐		覆土	「ノタ目」　末野

第56～68号土壙出土土錘観察表（第51図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
56-1	6.3	1.7	0.6	13.74	Ca他	明赤褐	70%	
61-1	5.4	1.3	0.4	7.98	AaV	橙	100%	
62-1	5.1	1.3	0.5	8.04	BaV	橙	100%	
63-1	(5.4)	1.6	0.4	12.08	Ca他	にぶい黄橙	70%	赤彩？
68-1	8.0	2.0	0.5	30.12	BaII	暗灰黄	100%	

第67号土壙（第50図）

W－19グリッドで検出した。遺構は、SJ153を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.90m、短軸1.54m、深さ0.92mであった。主軸方位はN－6°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第68号土壙（第49・51図）

W－19グリッドで検出した。遺構は、SJ150・153を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.16m、短軸0.85m、深さ0.32mであった。主軸方位はN－87°－Eであった。

壁面は、垂直に立ち上がっていた。壁面全面にわたって焼けており、赤変していた。

遺物は、土錘が１点出土した。

第69号土壙（第50図）

V－19グリッドで検出した。遺構は、SJ144を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.17m、短軸0.93m、深さ0.36mであった。主軸方位はN－72°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第70号土壙（第50図）

V－19グリッドで検出した。SJ144と重複し、カマドを壊していた。

平面の形状は楕円形であるが、遺構の東側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸0.78m、深さ0.23mであった。主軸方位はN－84°－Eであった。

第71号土壙（第49図）

V－19グリッドで検出した。遺構は、SJ150を壊し、SK62に壊されていた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸0.80m、短軸0.79m、深さ0.58mであった。主軸はN－７°－Wであった。

(3) 溝跡

第１号溝跡（第52図、図版５）

R－18グリッドから検出した。

溝跡は、ほぼ東西方向に調査区を横断していた。このため、溝の両端は調査区外へ展開し、全体の形状を明らかにすることはできなかった。

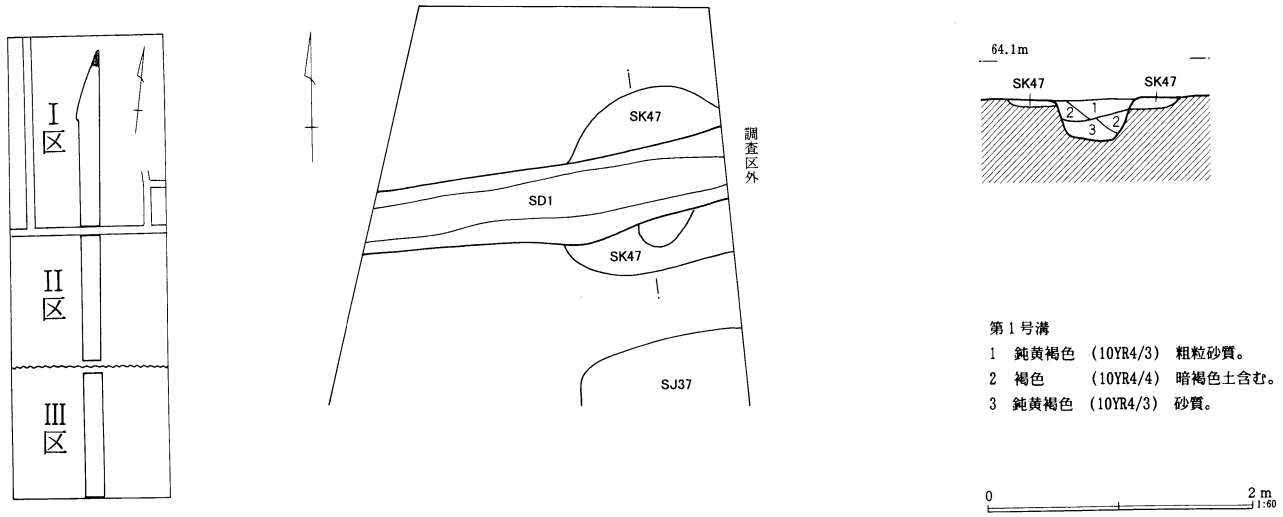
溝跡の規模は、幅0.6m～0.65m、深さ0.35mで、長さは2.8mまで確認できた。

断面の形状は逆台形で、底面は、凹凸はなかったが、西から東へ向かって緩やかに傾斜していた。西端と東端の差は0.2mであった。

遺構は、SK47と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、本遺構がSK47を壊していることを確認した。

遺物は、平安時代の須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第52図　第１号溝跡



(4) その他の遺物（第53図、図版11）

如意遺跡からは、表彩及びグリッド取り上げ遺物として、須恵器甕、中世陶器、土錘、縄文時代の打製石斧が出土した。

1は、須恵器甕の口縁部の破片である。表採資料である。口縁端部は貼り付けによる複合口縁で、外面端部直下は強いナデにより、ヘラの上端が当たった痕跡が明瞭である。このため、口縁端部が玉縁状となっていた。

2は、甕の胴部の破片である。表採資料である。大小の破片の外面同士が融着していた。

小破片の内面は、青海波文が明瞭で、ナデは認められなかった。外面は不明である。もう一方は、内外面とも、叩きの後ナデ消され、内面には当て具の痕跡が僅かに認められた。

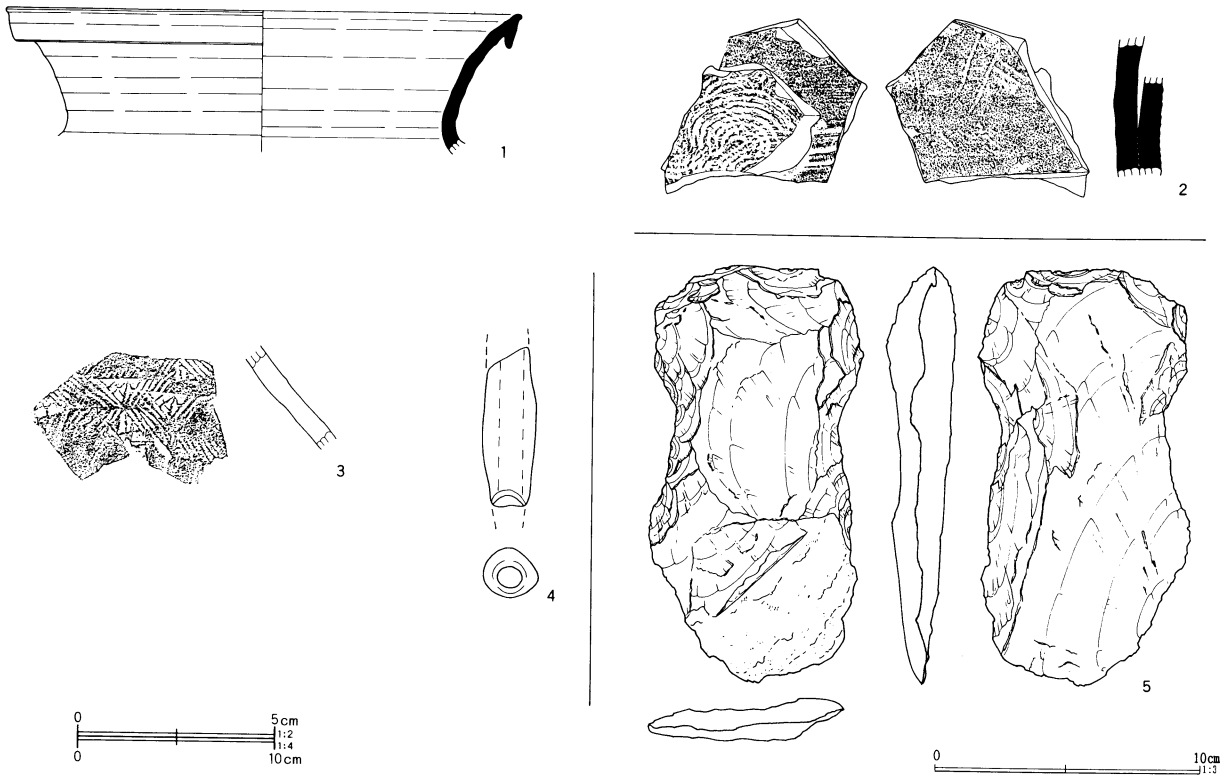
3は、中世常滑産の甕胴部の破片である。表採資料である。

外面は赤褐色で横方向に連続した押印文が認められた。内面はナデが施されていた。

4は、土錘である。W－18グリッドから出土した。

5は、縄文時代の打製石斧である。V－18グリッドから出土した。硬砂岩製で、長さ15.7cm、幅7.4cm、厚さ2.6cm、重さ309.5gであった。如意遺跡からは、縄文時代の遺構は検出しておらず、縄文時代に属する遺物は、この打製石斧1点のみであった。

第53図　グリッド出土・表採遺物



グリッド出土・表採遺物観察表（第53図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(26.0)			ABFKL	2	暗褐		表採	
2	甕				BFJL	2	赤褐		表採	末野
3	甕				ABFHJL	2	灰		表採	中世　常滑

グリッド出土・表採土錘観察表（第53図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
4	(4.0)	1.4	0.6	6.21	Aa他	にぶい黄橙	50%	W-18グリッド

V　如意南遺跡の調査

1. 遺跡の概観

如意南遺跡は、大里郡川本町大字畠山に所在する。遺跡は、字小林・如意付近に展開し、如意遺跡の南側に接している。遺跡の広がりは、東西180m、南北220m前後の楕円形に展開する。

調査地点は、道路建設予定地のため、幅12m前後、長さ280m前後の細長い調査区であった。このため、調査の便宜上、道路および排水路を境界にⅠ区からⅢ区に区分して調査を実施した。

また、調査地点は、如意・如意南遺跡の二つの遺跡に跨っていたが、このうち如意南遺跡に属する部分は、Ⅰ区の南半部、Ⅱ区、Ⅲ区である。

しかし、如意遺跡と如意南遺跡の境界付近では、住居跡を中心に遺構が連続して検出され、遺跡の境界が不明確となっている。二つの遺跡は、むしろ同一の遺跡であったと考える方が妥当であり、本報告にある如意・如意南遺跡の境界は、便宜的なものである。

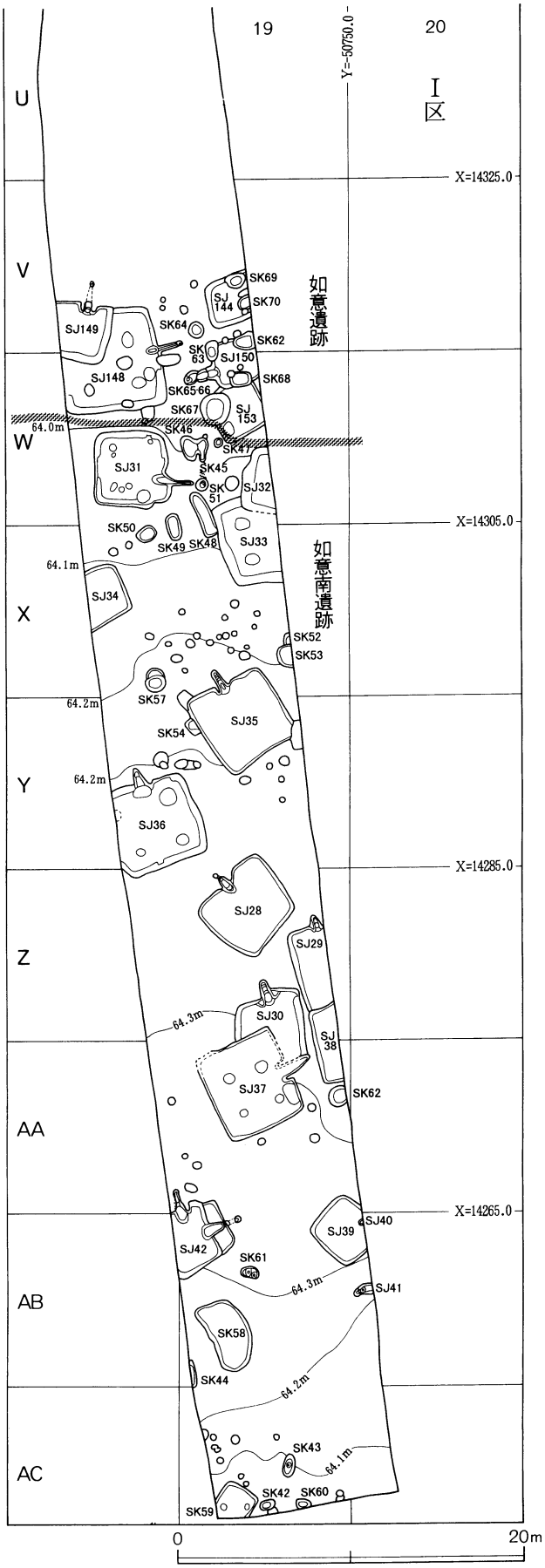
検出した遺構は、古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡１棟、土壙60基、溝跡4条、ピット群4箇所であった。遺構は、その殆どが重複し、また調査区外へ展開していたため、全体の形状が明らかになったものは少なかった。

なお、調査中、土壙は61基調査したが、うちSK25については、土層断面や形状の観察の結果、自然の窪みと判断したため、最終的な検出数は60基となり、SK25は欠番とした。

出土遺物は、竪穴住居跡を中心に、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・須恵器、土錘が出土した。奈良・平安時代の住居跡からは、他に鉄製品、紡錘車、砥石、帯金具、転用硯、墨書土器が出土した。

また、僅かではあったが、土壙・溝跡・グリッドから、中世の遺物が出土した。破片資料ではあったが、瀬戸産の卸皿・碗・花瓶、在地産の鉢・土釜、古銭、宝篋院塔の相輪が出土した。

第54図　如意南遺跡全測図



19
20
21
Y=-50750.0
Y=-50740.0
X=14245.0
X=14225.0
X=14205.0
X=14185.0
X=14165.0
AD
AE
AF
AG
AH
AI
AJ
AK
II
区
SD1
SD2
SD3
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SJ1
SJ2
SJ3
SJ4
SJ5
SJ6·7
SJ8
SJ9
SJ10
SJ11
SJ12
SJ13
SJ14
SJ15
SJ16
SB1
63.8m
63.9m
63.5m
礫層露出範囲
20
21
22
Y=-50740.0
Y=-50730.0
X=14135.0
X=14115.0
X=14095.0
AL
AM
AN
AO
AP
AQ
AR
AS
III
区
63.0m
62.6m
64.0m
64.5m
谷
礫層露出範囲
SK41
SJ26
SJ27
SJ24
SJ23
SJ22
SK40
SJ25
SK35
SD4
SJ21
SK34
SJ20
SK36
SK30
SK32
SK37
SK29
SK31
SK38
SJ18
SJ19
SK39
SK28
SK33
SK27
SK26
SJ17
I
区
II
区
III
区
0
20m

2. 遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第55・56図、図版17・26・40）

AK・AL－20グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸2.68m、深さ0.49mであった。主軸方位は、N－72°－Eであった。

住居壁面は、概ね垂直であったが、床面からやや丸みをもって立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

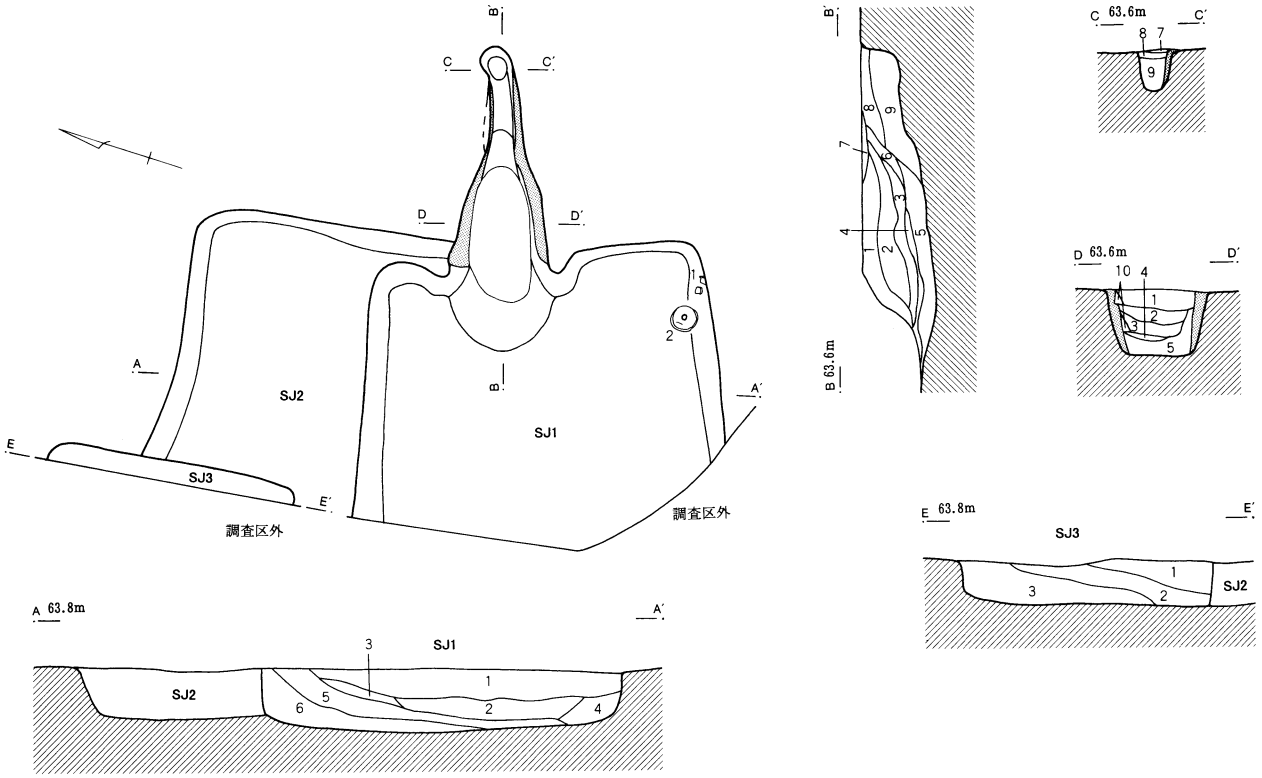
柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは、東壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていたが、住居外へ突出していた。煙道は、一段高いテラス状で、煙突部分では垂直に立ち上がっていた。煙道の壁は焼け、赤く変色した硬化面を持っていた。

遺構は、SJ2と重複していた。遺構の重複関係は、SJ1がSJ2を壊していた。

出土遺物は、住居覆土、壁際から、土師器坏、須恵器坏・蓋、土錘、紡錘車が出土した。

第55図　第1～3号住居跡



第1号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　地山粒、白色微粒子多く含む。
2　黒褐色　(10YR3/1)　粘性ややあり。炭化物粒、焼土粒含。
3　黒褐色　(10YR3/1)　焼土ブロック、炭化物多。
4　黒褐色　(10YR3/1)　地山粒、炭化物含。
5　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。
6　黒褐色　(10YR3/1)　砂質。地山粒、ブロック多。

第3号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物多。
2　黒褐色　(10YR3/1)　砂質。炭化物多。砂を多く含む。
3　黒褐色　(10YR3/2)　砂質。炭化物多。焼土粒を含む。砂を多く含む。

第1号住居跡カマド
1　暗褐色　(10YR3/3)　地山粒、白色微粒子多く、炭化物含む。
2　黒褐色　(10YR3/2)　ローム粒、焼土ブロック含む。締まりあり。
3　鈍黄褐色　(10YR5/4)　炭化物、焼土含み、粘性があり柔らかい。
4　鈍黄橙色　(10YR6/4)　焼土ブロック多く含む。
5　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物を多く含み、粘性あり。
6　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物を多く、焼土若干含む。
7　赤褐色　(5YR4/6)　焼土ブロックに白色粒子含みしまっている。
8　鈍黄褐色　(10YR5/3)　ローム粒、炭化物含みしまっている。
9　暗褐色　(10YR3/4)　ローム粒若干含み、粘性あり。
10　黒褐色　(10YR3/2)　焼土ブロック、粒子多い。

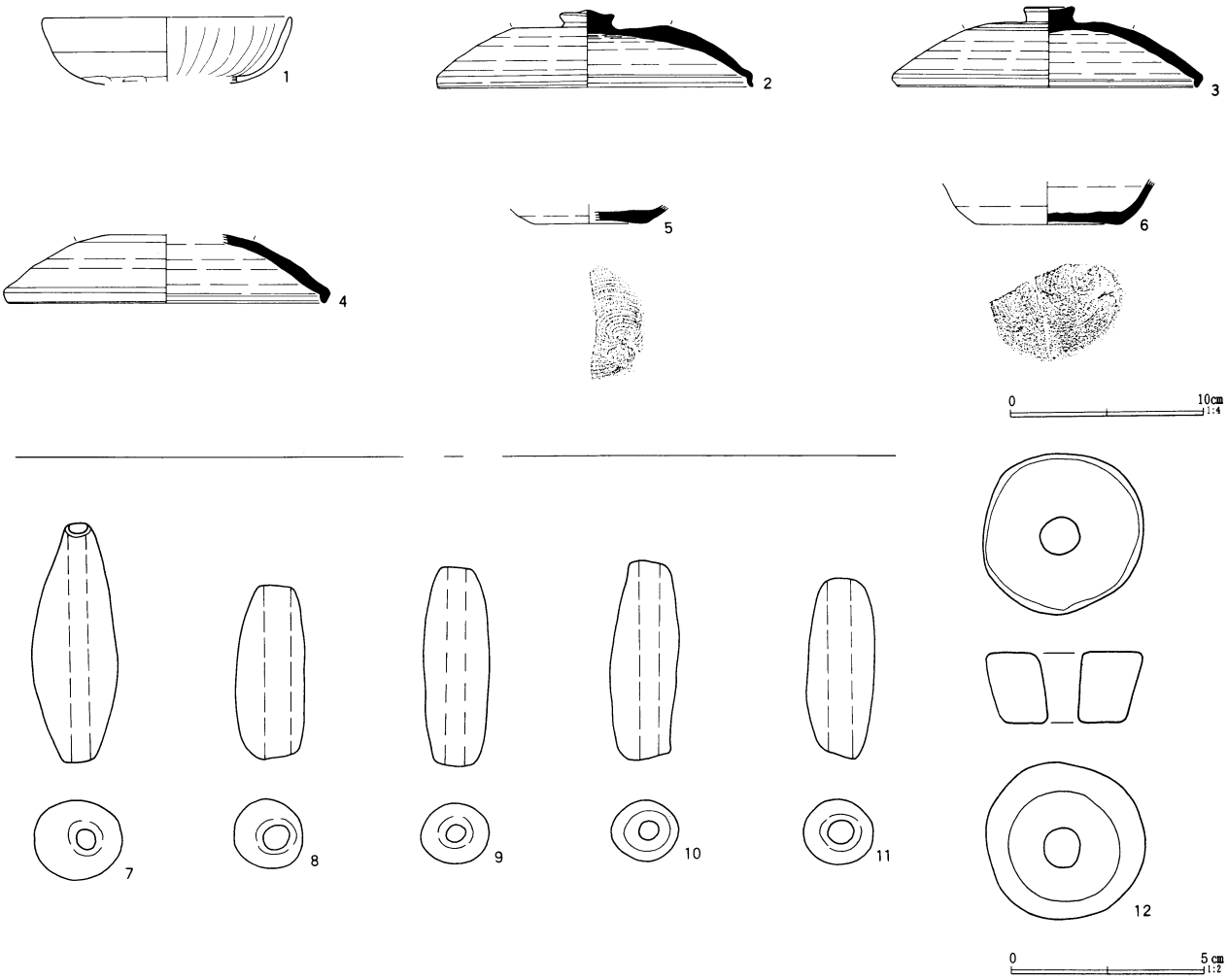
0　2m　1:60

SJ1から出土した遺物は、1～5と、6・7、12である。1は、土師器坏で、内面に放射状の暗文が認められた。SJ1壁際から出土した。

2～4は、須恵器蓋である。2は、壁際から、他は覆土から出土した。3点とも、胎土の特徴から、末野産と考えられる。

12の紡錘車は土製で、長径4.2cm、短径3.3cm、厚さ1.8cm、重さ35.99gであった。

第56図　第1～3号住居跡出土遺物



第1・2号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.8			ABFJ	2	にぶい橙	破片	SJ1壁際	放射状暗文あり
2	蓋	16.3	4.0		AEFHJL	4	灰黄	100%	SJ1壁際	末野
3	蓋	(15.6)	4.2		ABEFHJL	4	灰黄	30%	SJ1覆土	末野
4	蓋	(16.4)			ABEFHJL	4	灰黄	25%	SJ1覆土	末野
5	坏			(6.0)	ABDFJL	3	灰	底部	SJ1覆土	末野
6	坏			(7.3)	ABEFHL	3	灰褐	底部	SJ2覆土	末野

第1・2・3号住居跡出土土錘観察表（第56図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	6.2	2.2	0.4	27.75	BaⅣ	にぶい黄橙	100%	SJ 1
8	4.5	1.8	0.7	14.96	BaⅤ	にぶい褐	100%	SJ 1
9	5.2	1.8	0.5	14.87	BaⅤ	にぶい橙	100%	SJ 2
10	5.2	1.8	0.5	13.76	BbⅤ	にぶい黄橙	100%	SJ 3
11	4.6	1.7	0.7	12.88	BaⅤ	にぶい黄褐	100%	SJ 3

第２号住居跡（第55・56図）

AK－20グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、南側をSJ1に、西側をSJ3に壊され、また西側は調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸、短軸とも明らかにできなかった。深さ0.36mであった。主軸方位はN－8°－Wであった。

柱穴・貯蔵穴・カマド、壁溝は検出できなかった。

遺構は、SJ1・SJ3と重複していた。遺構の重複関係は、SJ1・SJ3に壊されていた。

遺物は、覆土中から、土師器須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は、第56図６の須恵器坏と、９の土錘１点であった。

６は、末野産の須恵器坏である。底部の破片であった。低部の調整は、糸切後、無調整であった。

第３号住居跡（第55・56図）

AK－20グリッドで検出した。

遺構は、調査区西壁で検出した。殆どが調査区外へ展開し、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、両端の立ち上がり間の距離が1.9mと小さく、遺構は土壙であった可能性もある。深さは、0.35mであった。

壁面は、概ね直線的に立ち上がっていた。床面は地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴、貯蔵穴、カマドなどは検出できなかった。

遺構は、SJ2と重複していた。遺構の重複関係は、SJ2を壊していた。

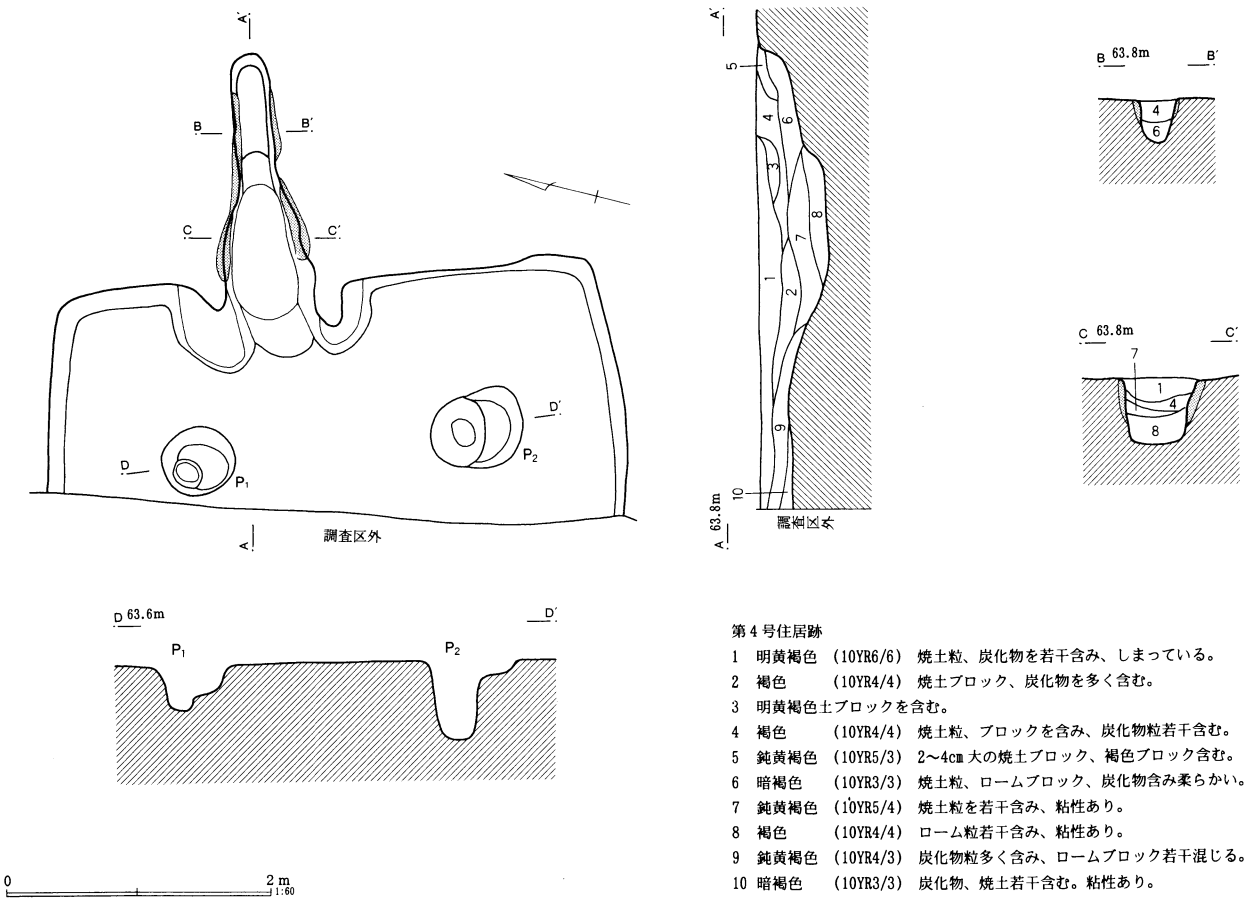
出土遺物は、覆土中から、土錘が２点出土した。

第４号住居跡（第54・58図、図版17・26・32・40）

AK－４グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、住居の西側半分は調査区外に展開するため、全体の形状は明らかにできなかった。

第57図　第４号住居跡



第４号住居跡

1　明黄褐色　(10YR6/6)　焼土粒、炭化物を若干含み、しまっている。
2　褐色　(10YR4/4)　焼土ブロック、炭化物を多く含む。
3　明黄褐色土ブロックを含む。
4　褐色　(10YR4/4)　焼土粒、ブロックを含み、炭化物粒若干含む。
5　鈍黄褐色　(10YR5/3)　2～4cm大の焼土ブロック、褐色ブロック含む。
6　暗褐色　(10YR3/3)　焼土粒、ロームブロック、炭化物含み柔らかい。
7　鈍黄褐色　(10YR5/4)　焼土粒を若干含み、粘性あり。
8　褐色　(10YR4/4)　ローム粒若干含み、粘性あり。
9　鈍黄褐色　(10YR4/3)　炭化物粒多く含み、ロームブロック若干混じる。
10　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物、焼土若干含む。粘性あり。

規模は、短軸4.34m、深さ0.23mであった。主軸方位は、N－72°－Eであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴はP1（深さ35cm）、P2（深さ58cm）の２基を検出した。

カマドは、東壁の中央からやや北に寄った位置で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、住居外へ、やや突出していた。煙道部分は、一段高い水平なテラス状となり、煙突部は垂直に立ち上がっていた。また、煙道の壁は、両側が焼け、赤く変色し硬化面を持っていた。袖は、両側で検出した。

貯蔵穴、壁溝は検出できなかった。

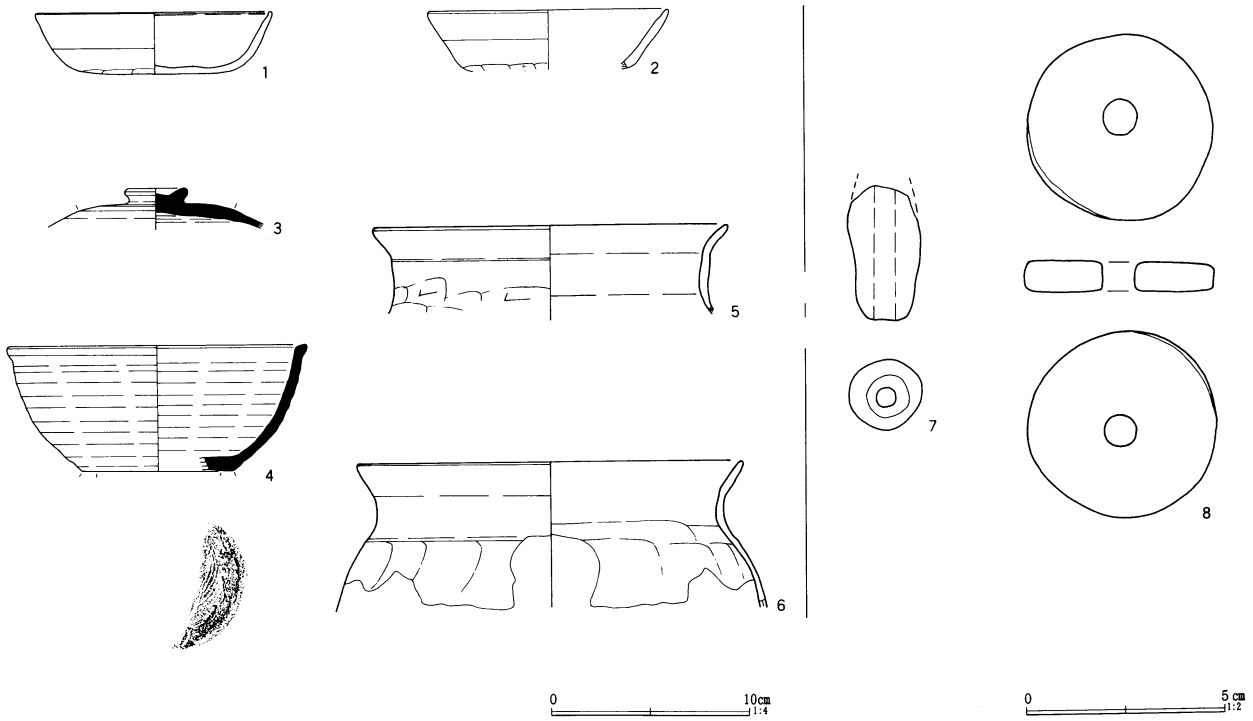
出土遺物は、カマド及び住居覆土から、土師器坏・甕、須恵器蓋・椀が出土した。また、土錘１点、土製の紡錘車１点が出土した。１・５・６はカマドから、他は覆土中の遺物である。

１～４は、土師器である。１・２の坏は、内面口縁端部が、強いナデによって窪み、特に１は沈線状になっていた。

３・４の甕は、口縁部がコの字状であった。

８の紡錘車は、土製で、直径4.8cm、厚さ0.75cmの扁平な形態であった。重さは、24.36gであった。

第58図　第４号住居跡出土遺物



第４号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	11.8	3.1		ABDFJ	3	橙	100%	カマド	
2	坏	12.0			ABEFJL	4	橙	25%	覆土	
3	蓋				BEFHJL	4	橙	天井部	覆土	末野
4	椀	(15.1)	(6.3)	(7.6)	AEIJ	2	灰	破片	覆土	南比企
5	甕	(17.8)			ABEFJL	3	橙	口縁	カマド	
6	甕	(19.3)			ABD	3	橙		カマド	

第４号住居跡出土土錘観察表（第58図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	(3.3)	1.8	0.5	10.93	Bb他	にぶい橙	60%	

第５号住居跡（第59・60図、図版17・26・32・36）

AJ－20グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、住居の東側半分は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.03m、深さ0.40mである。主軸方位は、N－12°－Wである。

壁面は、概ね垂直に、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、硬く締り、平坦であった。

柱穴・貯蔵穴は、検出できなかった。

カマドは北壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、煙道部は、一段高いテラス状になっていた。煙突部はほぼ垂直に立ち上がっていた。また、天井部が残存していた。袖は、両側で検出した。

壁溝は、カマドのある北壁を除き、西壁・南壁で検出した。東壁は、調査区外へ展開していたため、明らかにできなかった。

遺物は、住居の南西部床面及び覆土中から出土した。

１～４は床面から、５は覆土から出土した。

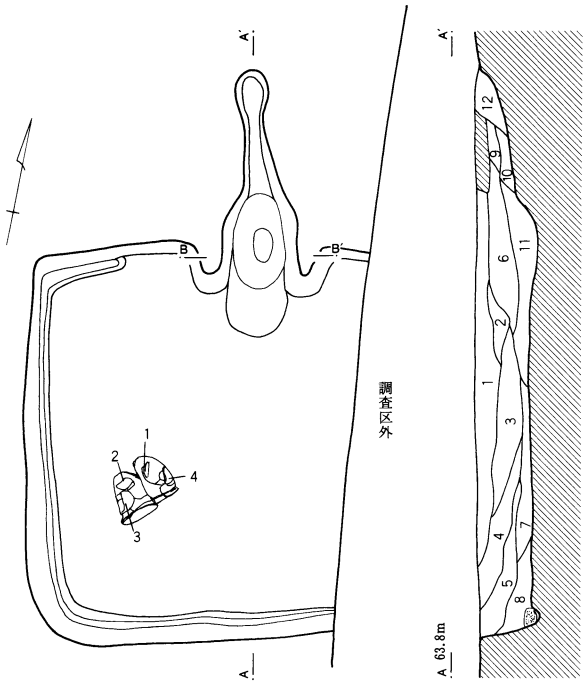
出土状況は、３・４の甕が床面上に横倒しに並んでおり、１・２の坏は、その上から出土した。

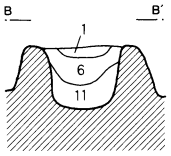
１・２は、土師器坏である。１は、丸底の底部から、やや内湾気味に立ち上がる。底部はヘラケズリされるが、口縁部直下までは及んでいない。２は、1よりも大型の坏である。丸底の底部で、口縁部は直立気味に上方へ立ち上がる。底部はヘラケズリされるが、口縁部直下までは及んでいない。

３～５は、土師器甕である。３は、胴部下部を欠損していた。口縁部は大きく外側に開く。口縁内面端部直下は、強いナデにより、沈線状となっていた。器面の調整は、口縁部は内外面ともナデ、胴部は、外面は頚部を横方向、胴部以下は縦方向のヘラケズリ、内面は、ヘラナデが施されていた。

４は、器形は３に似ている。口縁部は大きく外側に開く。口縁内面端部直下は、強いナデにより、沈線状になっていた。器面の調整は、口縁部は内外面ともナデ、胴部は、外面は頚部～胴部上位を横方向、胴部下部を縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが

第59図　第５号住居跡





第５号住居跡

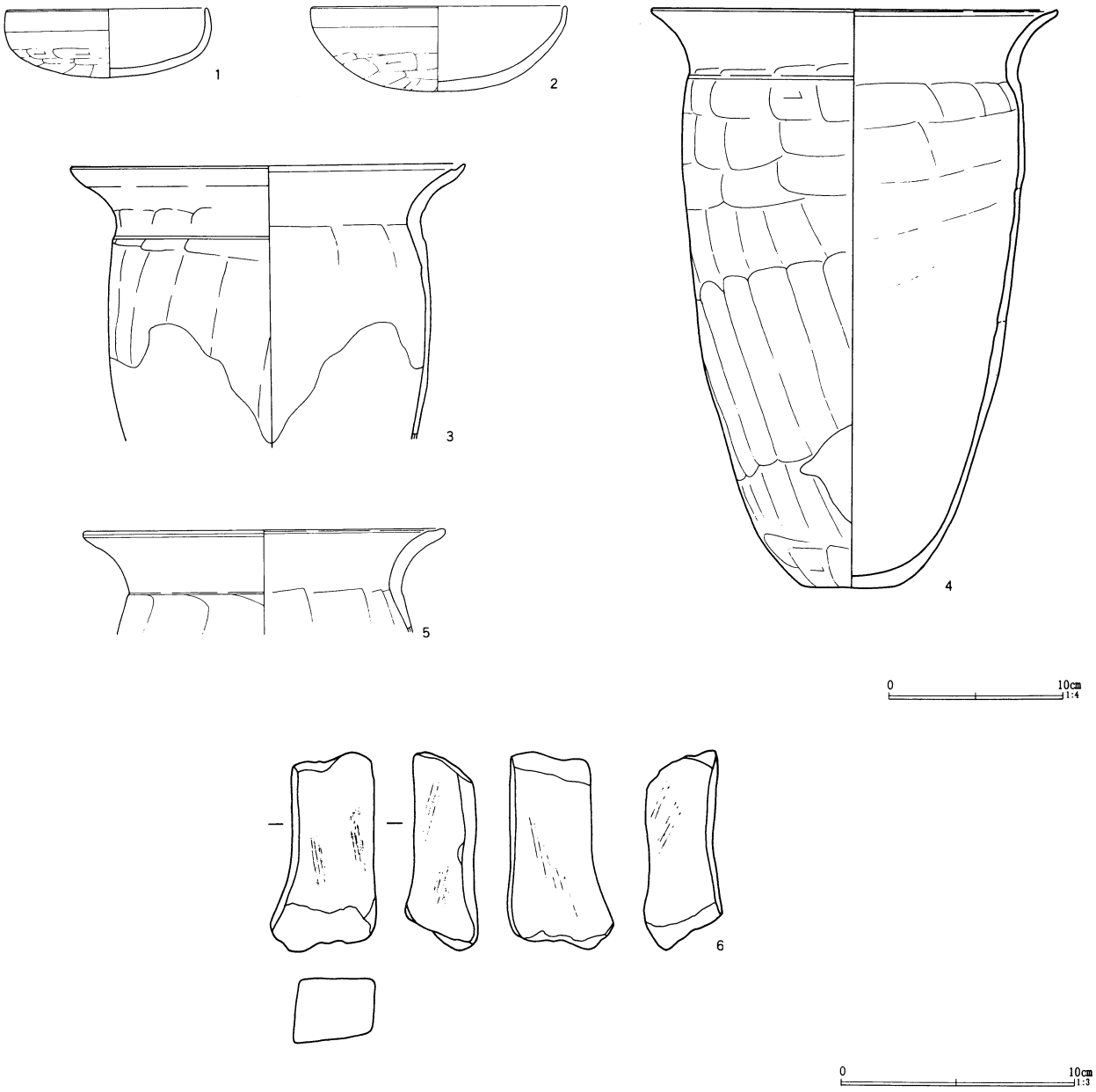
1　黒褐色　(10YR3/2)　地山粒、焼土粒、炭化粒(φ0.2～0.5cm)を少し含む。砂質。
2　灰淡褐色　(10YR4/2)　地山粒(φ0.2～0.8cm)を多く含む。
3　灰淡褐色　(10YR4/2)　地山ブロック(φ0.5～3.0cm)を多く含む。焼土粒、炭化粒(φ0.2 ～0.5cm)を少し含む。
4　灰淡褐色　(10YR5/2)　地山ブロック(φ0.5～3.0cm)多く含む。締まり非常によい。
5　灰淡褐色　(10YR3/2)　地山ブロック(φ0.5～3.0cm)を多く含む。
6　鈍黄褐色　(10YR4/3)　地山ブロック(φ0.5～3.0cm)を非常に多く含む。焼土粒、炭化粒(φ0.2～0.8cm)を少し含む。
7　黒褐色　(10YR3/1)　地山粒、炭化粒(φ0.2～0.8cm)を少し含む。粘性やや強い。
8　灰黄褐色　(10YR4/2)　地山粒(φ0.2～0.5cm)を多く含む。

第５号住居跡カマド

9　黒褐色　(10YR3/1)　地山ブロック(φ0.5～2.0cm)を多く含む。
10　灰黄褐色　(10YR4/2)　地山粒(φ0.2～0.5cm)を少し含む。9層、11層との層界がやや赤化。掘り方。
11　鈍黄褐色　(10YR4/3)　地山ブロック、焼土ブロック(φ0.5～3.0cm)を多く含む。炭化材(φ0.5～5.0cm)を全体的に含む。
12　灰黄褐色　(10YR4/2)　地山粒(φ0.2～0.5cm)を少し含む。

0　2 m　1:60

第60図　第５号住居跡出土遺物



第５号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	11.8	3.9		ABDEFJ	3	橙	60%	床面	
2	坏	14.8	4.9		ABDEFJ	2	橙	70%	床面	
3	甕	(22.6)			ABEFJL	3	橙	胴上半部	床面	
4	甕	23.2	33.3	5.9	ABEFJL	3	黄灰	60%	床面	
5	甕	(21.0)			ABEFJL	3	橙	口縁	覆土	

施されていた。また、底部との境界は横方向のヘラケズリが施されていた。

５は、口縁部の破片である。口縁部は器肉が厚く、大きく外側に開く。口縁内面端部直下は、強いナデにより、沈線状になっていた。器面の調整は、口縁部はナデ、胴部は、外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。

６は、砥石である。石質は凝灰岩製で、重さは146.2gであった。風化が著しい。

第６号住居跡（第61・62図、図版17・26）

AD・AE－19グリッドで検出した。

平面の形状は、隅がやや丸みを帯びた方形であると思われるが、住居の西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.54m、深さ0.42mであった。主軸方位は、N－16°－Wであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの黄褐色砂質土で、やや凹凸があった。

柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは北壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていた。煙道部は床面と同レベルで、水平なテラス状となっていた。煙突部は、垂直に立ち上がっていた。また、天井部が残存していた。天井部と燃焼部壁面は焼け、赤く変色した硬化面となっていた。袖は検出できなかった。

壁溝は、住居北東隅と、南壁で検出した。西壁については、調査区外へ展開していたため、明らかにすることができなかった。

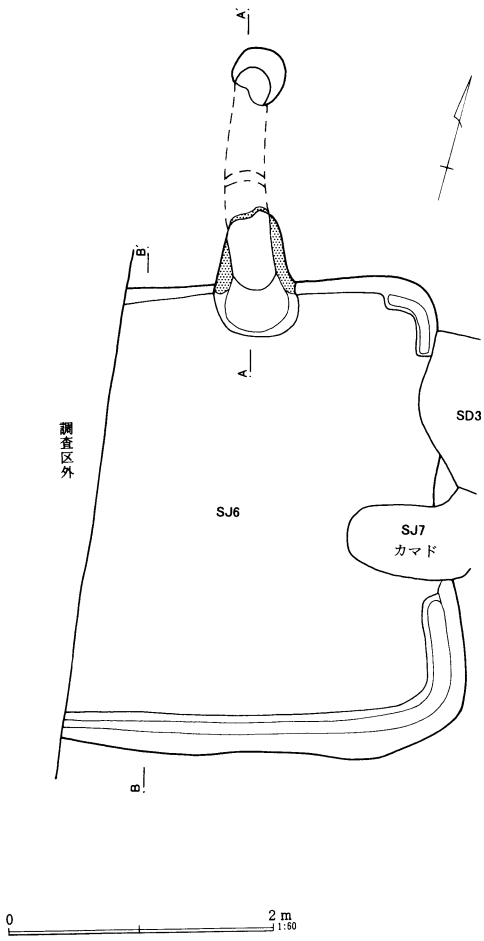
出土遺物は、カマド及び覆土中から、平安時代の須恵器坏・高台付椀・鉢が出土した。また、土錘が２点出土した。

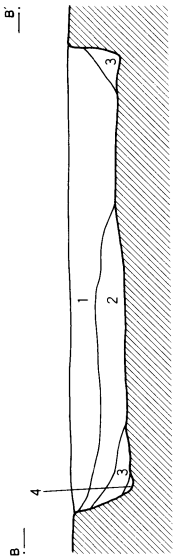
１・２は、須恵器坏である。２点とも底部の調整は、糸切後無調整であった。１は、末野産と考えられる。口縁部外面に墨書が認められたが、判読はできなかった。２は南比企産と考えられる。底部外面にヘラ記号「×」が認められた。

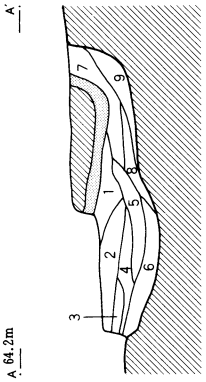
３・４は、末野産の高台付椀である。底部の破片で、４はカマドから出土した。

５は末野産の鉢で、口縁部から胴部の破片である。

第61図　第６号住居跡







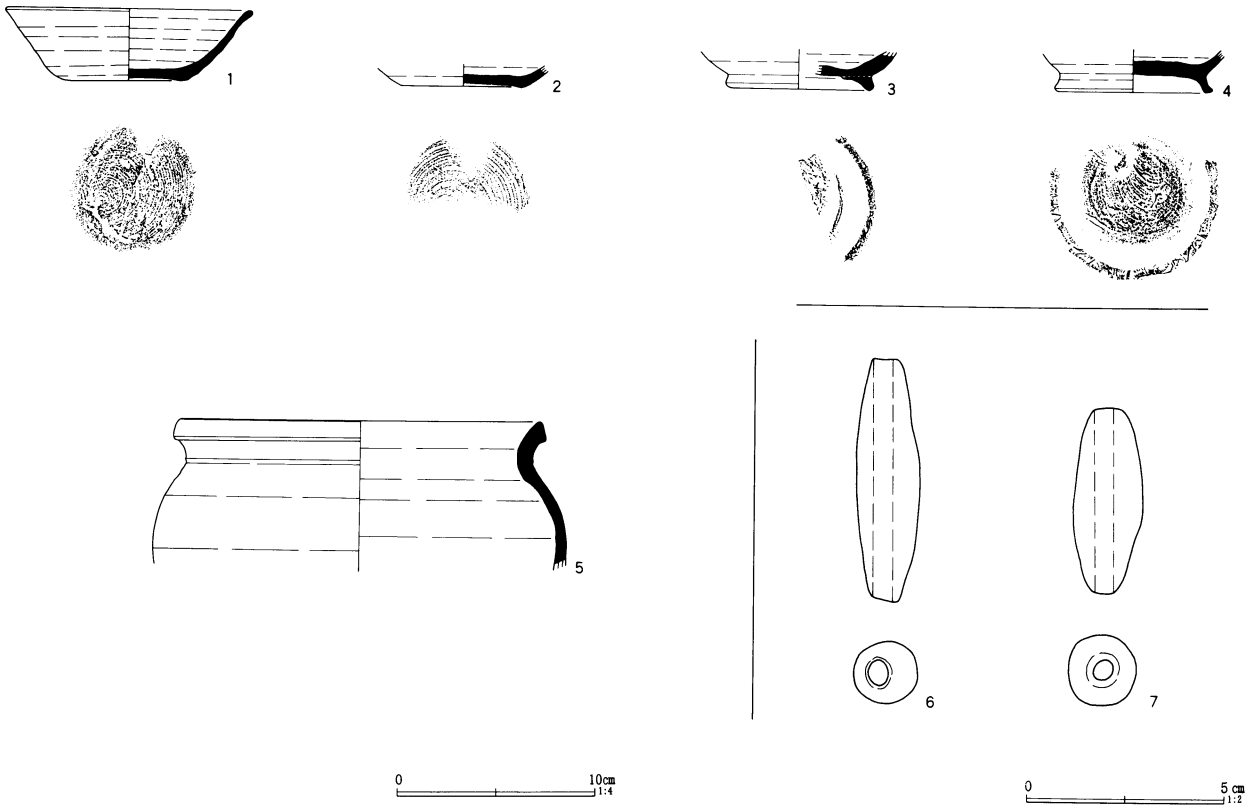
第６号住居跡

1　暗褐色　(10YR3/3)　粘性あり。炭化物、焼土粒を少量含む。
2　暗褐色　(10YR3/3)　砂粒。炭化物を多く含む。地山ブロックを多く含む。
3　黒褐色　(10YR3/2)　地山ブロックを含む。炭化物粒を多く含む。
4　暗褐色　(10YR3/4)　砂、礫を多く含む。締まりあり。粘性なし。

第６号住居跡カマド

1　鈍黄褐色　(10YR4/2)　粘性あり。焼土粒、ブロック、炭化物を僅かに含む。
2　暗褐色　(10YR3/3)　粘性あり。炭化物、焼土粒を少量含む。
3　暗褐色　(10YR3/3)　粘性あり。炭化物を含む。
4　黒褐色　(10YR3/1)　焼土粒、炭化物を多く含む。締まりなし。
5　暗褐色　(10YR3/4)　焼土ブロック、炭化物を多く含む。締まりなし。
6　褐色　(10YR4/4)　砂質。焼土ブロックを多く含む。
7　暗褐色　(10YR3/3)　粘性ややあり。炭化物を僅かに含む。地山ブロックを含む。
8　黒褐色　(10YR3/2)　地山ブロック、焼土粒を含む。
9　暗褐色　(10YR3/3)　砂質。焼土粒を含む。

第62図　第６号住居跡出土遺物



第６号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.3	3.6	6.3	AEFJL	3	灰オリーブ	50%	覆土	墨書あり　末野
2	坏			6.1	DIJ	3	橙	底部	覆土	ヘラ記号　南比企
3	高台椀			7.7	ADEFHJL	2	灰	底部	覆土	末野
4	高台椀			(7.3)	ABFHJL	3	灰	底部	カマド	末野
5	鉢	(18.0)			ABEFHJL	3	灰	破片	覆土	末野

第６号住居跡出土土錘観察表（第62図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
6	6.0	1.6	0.5	13.09	BaⅣ	にぶい橙	100%	
7	4.7	1.7	0.5	14.08	BaⅤ	にぶい橙	95%	

第７号住居跡（第61・62図、図版18）

AE－19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。また、SJ6、SD3に壊されていた。

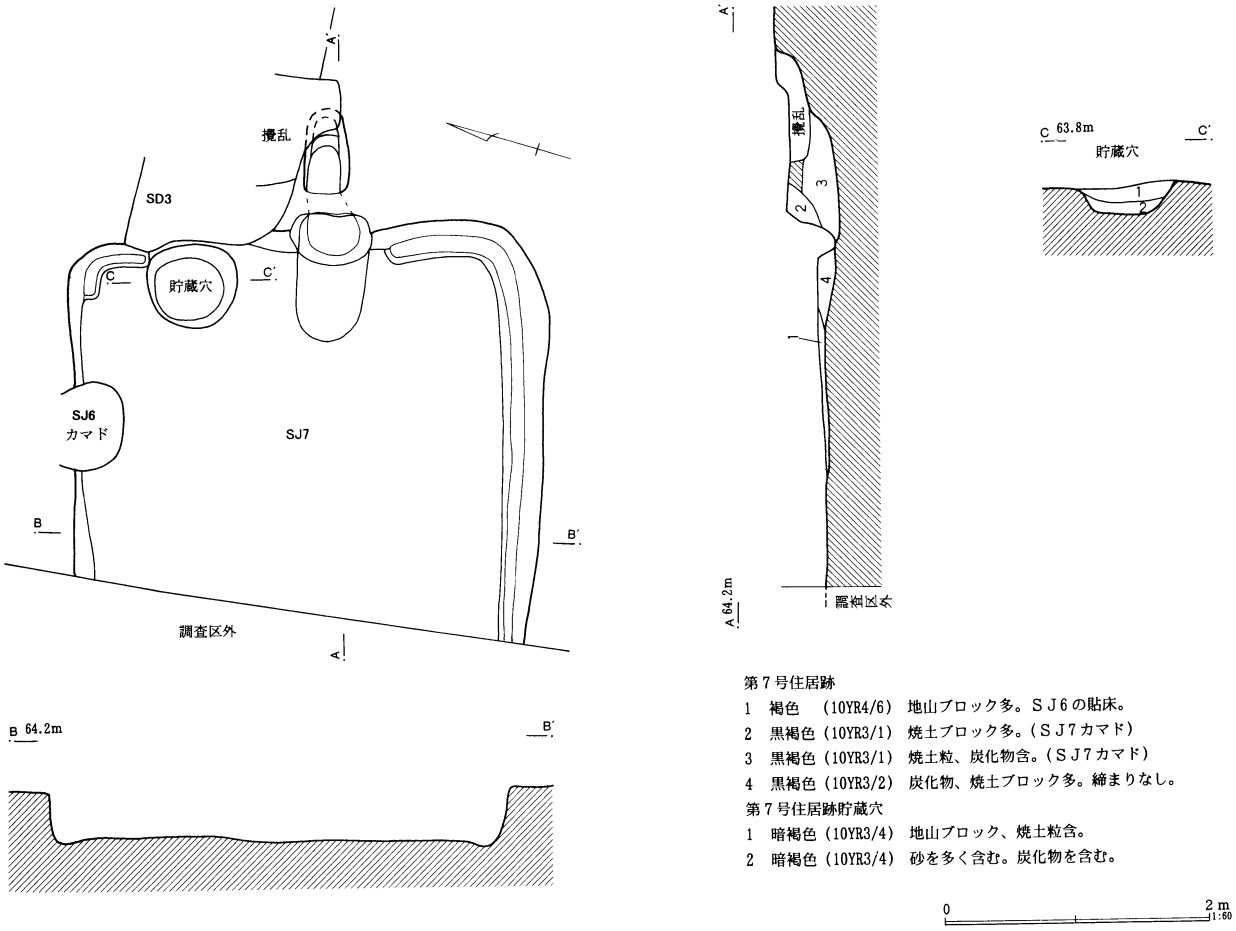
規模は、短軸3.56m、深さ0.45mであった。主軸方位はN－73°－Eであった。遺構は、SJ6と重複していたが、一部床面・壁面を共有している部分もあった。遺構の重複関係はSJ6に壊されていたことから、SJ６からSJ7に建替えたものと考えられる。

カマドは、東壁で検出した。燃焼部は、浅い土壙状に掘り込まれていた。煙道部は、先端が攪乱されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。また、天井部が残存していた。

貯蔵穴は、カマドの左側で検出した。長径0.7m、短径0.65mで、深さ0.25mであった。

出土遺物は、カマドから土師器甕が出土した。

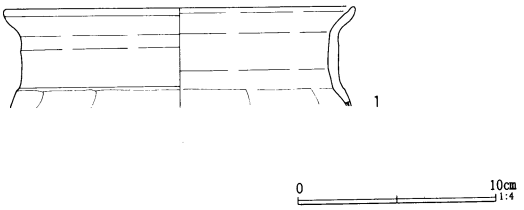
第63図　第７号住居跡



第７号住居跡出土遺物観察表（第64図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	17.8			ADJL	3	橙	破片	カマド	

第64図　第7号住居跡出土遺物



第８号住居跡（第65図、図版19）

AD・AE－19・20グリッドで検出した。

遺構は、大部分がSJ12に壊されていたため、規模、形状を明らかにすることはできなかった。

遺構は、南壁を検出したのみであった。SJ12の南壁と平行することから、主軸方位は、SJ12と同じであったと考えられる。深さは0.15mであった。

遺物は出土しなかった。

第12号住居跡（第65・66図、図版19・27・32・42）

AD・AE－19・20グリッドで検出した。

平面の形状は、東西に細長い長方形の住居である。

遺構は、SK10･13、SD3に壊されていた。また、SJ8を壊していた。

規模は、長軸4.64m、短軸3.35m、深さ0.54mであった。主軸方位は、N－82°－Eであった。

壁面は、床面から概ね垂直に立ち上がるが、遺構上部では、大きく外側に開きながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、東壁で検出したが、煙道先端部分が調査

区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。燃焼部は、土壙状の落ち込みとなるが、住居外へ突出していた。

壁溝は、北壁の一部をSK10によって壊されていたが、ほぼ全周しているものと思われる。

貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。径0.85m、深さ0.18mであった。

出土遺物は、須恵器坏・高台付坏・蓋・長頸瓶・鉢が出土した。また、土錘5点、鉄製品として刀子1点が出土した。

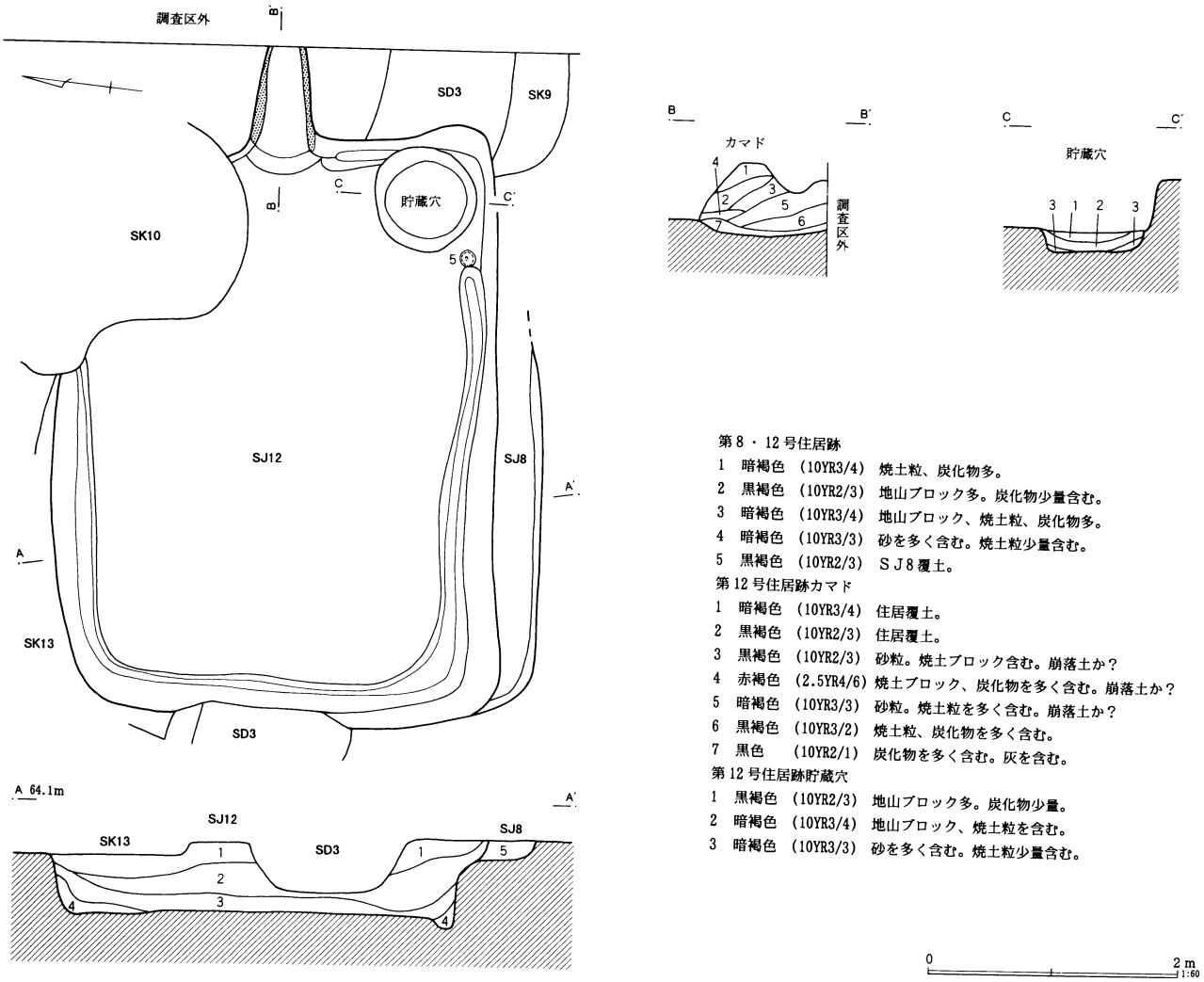
1～5は、坏である。底部の調整は糸切後無調整である。1・3・4は末野産と考えられる。2は、焼成が良く、胎土に黒色の吹出しを多量に含んでいた。5は、内面に縦方向のヘラミガキ状の暗文が施され、黒色処理されていた。1・3・4は覆土から、2はカマドから、5は住居南壁際から出土した。

7～9は蓋である。天井部は、ヘラケズリされていた。7は、つまみから口縁部まで残存していた。口縁端部の折り返しは短く、丸くなっていた。3点とも覆土から出土した。7・9は末野産、8は産地不明であった。

11・12の鉢は、末野産と考えられる。11は、口縁部の破片である。口縁部はくの字に屈曲し、短く立ち上がる。内面端部直下は、強いナデにより窪んでいた。12は、口縁部を欠損していた。胴部下部はヘラケズリされていた。

18は、刀子である。覆土中から出土した。茎尻を欠損していた。長さは、現存長で14.2cm、刃幅は最大で2.15cm、背幅0.4cm、茎部は、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ99.09gであった。

第65図　第8・12号住居跡

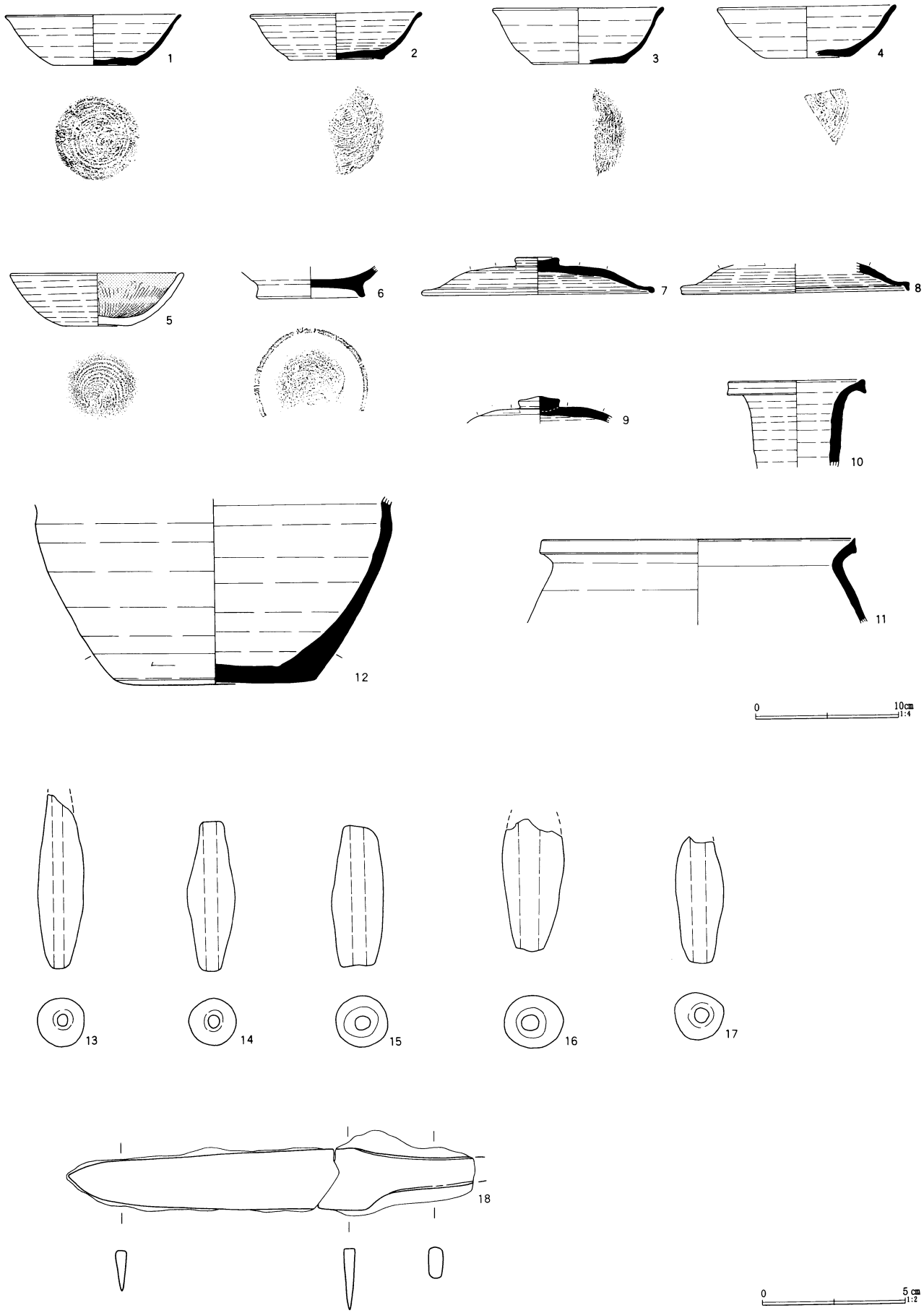


第8・12号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物多。
2　黒褐色　(10YR2/3)　地山ブロック多。炭化物少量含む。
3　暗褐色　(10YR3/4)　地山ブロック、焼土粒、炭化物多。
4　暗褐色　(10YR3/3)　砂を多く含む。焼土粒少量含む。
5　黒褐色　(10YR2/3)　SJ8覆土。

第12号住居跡カマド
1　暗褐色　(10YR3/4)　住居覆土。
2　黒褐色　(10YR2/3)　住居覆土。
3　黒褐色　(10YR2/3)　砂粒。焼土ブロック含む。崩落土か？
4　赤褐色　(2.5YR4/6)　焼土ブロック、炭化物を多く含む。崩落土か？
5　暗褐色　(10YR3/3)　砂粒。焼土粒を多く含む。崩落土か？
6　黒褐色　(10YR3/2)　焼土粒、炭化物を多く含む。
7　黒色　(10YR2/1)　炭化物を多く含む。灰を含む。

第12号住居跡貯蔵穴
1　黒褐色　(10YR2/3)　地山ブロック多。炭化物少量。
2　暗褐色　(10YR3/4)　地山ブロック、焼土粒を含む。
3　暗褐色　(10YR3/3)　砂を多く含む。焼土粒少量含む。

第66図　第12号住居跡出土遺物



第12号住居跡出土遺物観察表（第66図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.3)	3.5	5.8	ABEHJL	4	灰黄	40%	覆土	末野
2	坏	11.8	3.2	6.6	FK	2	灰	25%	カマド	産地不明
3	坏	11.8	3.9	6.2	AEHJKL	3	灰	破片	覆土	末野
4	坏	(12.4)	3.6	(5.9)	ABDEHJL	4	赤褐	25%	覆土	末野
5	坏	11.8	3.7	4.7	ADJK	2	橙	100%	壁際	内面黒色処理　暗文
6	高台坏			7.4	ABHJL	2	灰	底部	覆土	末野
7	蓋	(16.0)	2.5		ABDEFHJL	3	灰	60%	覆土	末野
8	蓋	(16.0)			ABJ	1	灰	破片	覆土	産地不明
9	蓋				ABEHJL	4	橙	天井部	覆土	末野
10	長頸瓶	9.5			AF	1	灰	口縁	覆土	産地不明
11	鉢	(22.0)			ABFJL	2	灰	破片	覆土	末野
12	鉢			(14.4)	ABFHJL	3	灰	胴部	覆土	末野

第12号住居跡出土土錘観察表（第66図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
13	(6.1)	1.6	0.4	16.52	CaIV	橙	90%	
14	5.2	1.7	0.4	11.83	CbV	にぶい橙	100%	
15	4.9	1.8	0.5	17.65	BbV	橙	100%	
16	(4.6)	2.1	0.6	16.38	Bb他	褐灰	50%	
17	4.4	1.7	0.5	11.44	Ca他	橙	80%	

第9号住居跡（第67・68図、図版18・26・36・42）

AE−20グリッドで検出した。遺構は、SJ10・11と重複していた。

平面の形状は、方形であった。

規模は、長軸3.40m、短軸2.89m、深さ0.42mであった。主軸方位は、N−4°−Eであった。

壁面は、やや外傾していたが、直線的に立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居北壁の西隅に寄った位置で検出した。燃焼部は土壙状に掘り込まれるが、煙道部まで段差なく連続し、緩やかに傾斜していた。煙突部分では、垂直に立ち上がっていた。また、天井部が残存していた。袖は、検出できなかった。

貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

遺構は、SJ10・11と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が他の全ての住居跡を壊していた。

出土遺物は、覆土及びカマドから、須恵器坏・蓋、土師器甕が出土した。また、鉄製品として、鋤先の破片が出土した。1〜6・8は覆土から、7はカマドからの出土である。

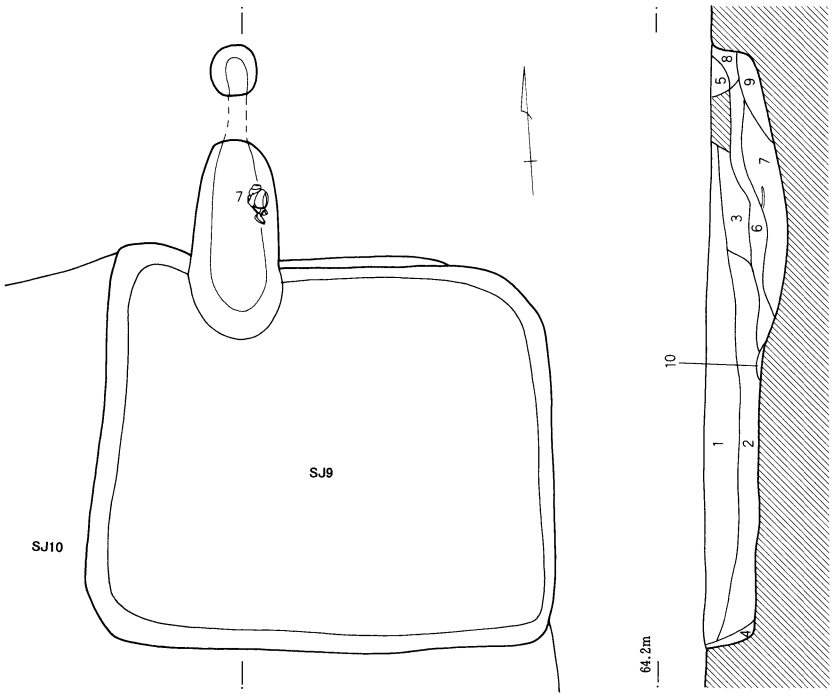
1〜4は、須恵器坏である。4点とも末野産で、底部の調整は、糸切後無調整であった。4の底部外面には、ヘラ書きの文字または記号が認められたが、判読はできなかった。

5・6は、須恵器蓋である。5は、焼成が良く硬質で、黒色粒子、石英粒子を含んでいたが、産地は不明である。6は、白色針状物質を含んでおり、南比企産と思われる。口縁端部を欠損していた。

7は、土師器甕である。口縁部はくの字状で、肩部に張りのある土器である。口縁内面端部直下は、強いナデにより沈線状になっていた。器面の調整は、口縁部は内外面ともナデ、胴部は、外面は上部を斜め方向のヘラケズリ、下部は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。

8は、U字型の鋤先の破片である。耳部の破片で、風呂部を受ける溝がある。この溝は、大きくめくれ上がり、刃部の断面はY字状となっていた。現存長8.9cm、刃部の幅は1.7cm、重さ33.45gであった。

第67図　第9号住居跡

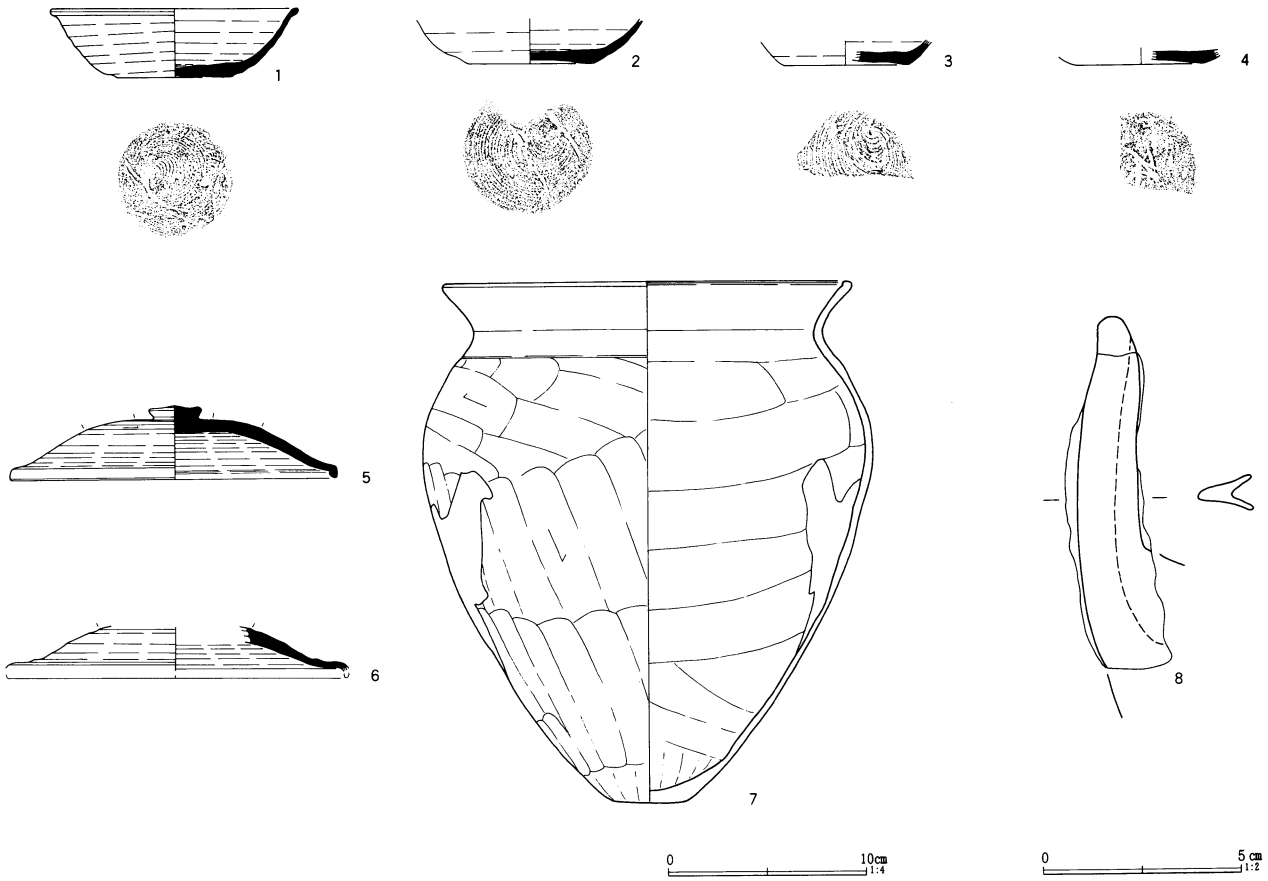


第９号住居跡

1　暗褐色　(7.5YR3/3)　小礫(φ3～10㎜)多。土器細片多。砂質。
2　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物、土器細片若干。砂質。
3　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物、焼土、鈍黄褐色土含む。シルト質。
4　暗褐色　(10YR3/3)　やや砂質。
5　黒色　(10YR2/1)　白色微砂粒子含む。
6　黒褐色　(10YR3/1)　灰、焼土多。
7　黒褐色　(10YR3/2)　シルト質。
8　黒褐色　(10YR3/2)　ややシルト質。
9　黒褐色　(10YR3/2)　ややシルト質。
10　黒褐色　(10YR3/1)　砂質。

0　2 m 1:60

第68図　第9号住居跡出土遺物



第９号住居跡出土遺物観察表（第68図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.4)	3.5	5.8	ABFK	2	灰	50%	覆土	末野
2	坏			6.4	ABEFJ	3	黄灰	底部	覆土	末野
3	坏			6.3	AEFHIJL	3	褐灰	底部	覆土	末野
4	坏			(6.3)	AEFGHJK	4	灰黄	底部	覆土	ヘラ書文字あり　末野
5	蓋	16.5	3.8		AFJK	1	灰	40%	覆土	産地不明
6	蓋				AFIJK	2	灰		覆土	南比企
7	甕	(20.4)	(26.3)	3.8	ABEFJ	3	橙	40%	カマド	

第10号住居跡（第69・70・71図、図版18・27・32・38）

AE・AF－19・20グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であった。遺構は、SJ9･11と重複していた。

規模は、長軸6.30m、短軸5.62m、深さ0.40mであった。主軸方位は、N－3°－Eであった。

壁面は、やや外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、重複するSJ9の床面とほぼ同レベルであった。貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、6基検出したが、このうちP1、P2、P4、P5が主柱穴であると思われる。

貯蔵穴は、検出できなかった。

カマドは、北壁の東に寄った位置で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、煙道部は、テラス状の平坦部が階段状になっていた。また、天井部が残存していなかったため、煙突部の形状は明らかにできなかった。袖は両側で検出した。袖、及び煙道部の壁は焼けて赤く変色していたが、硬化面は持っていなかった。

壁溝は、南壁の一部で検出した。

遺構は、SJ9･11と重複していた。遺構の重複関係は、SJ9に壊され、SJ11を壊していた。

出土遺物は、覆土、カマド内等から、土師器坏・台付甕、須恵器坏・高台付坏・高台付椀・蓋・甕が出土した。また、砥石1点と土錘９点が出土した。

１は、土師器坏である。覆土中から出土した。底部は丸底気味で、口縁部は僅かに外反する。口縁部は内外面とも横ナデされ、底部は横方向のヘラケズリが施されるが、ケズリは口縁直下までは及ばず、無調整部がある。無調整部は、指頭による押さえ痕及び指ナデが認められた。

２は、土師器甕である。小型であることから、台付甕であったと思われる。口縁部はコの字状で、強いナデによって、口縁部直下と胴部との境界付近に段が生じている。胴部は横または縦のヘラ削りが施されていた。２は、カマドから出土した。

３・４は、台付甕の脚部である。３は、脚部が大きく外反しながら広がる。裾部は欠損していた。４は、やや内湾しながら短く広がる。

５～13は、須恵器坏である。全て末野産で、底部の調整は、糸切後無調整であった。５は住居南壁際の床面から出土したが、他は覆土中からの出土である。

14・15は、高台付坏である。２点とも、末野産で、15は、高台部を欠損していた。

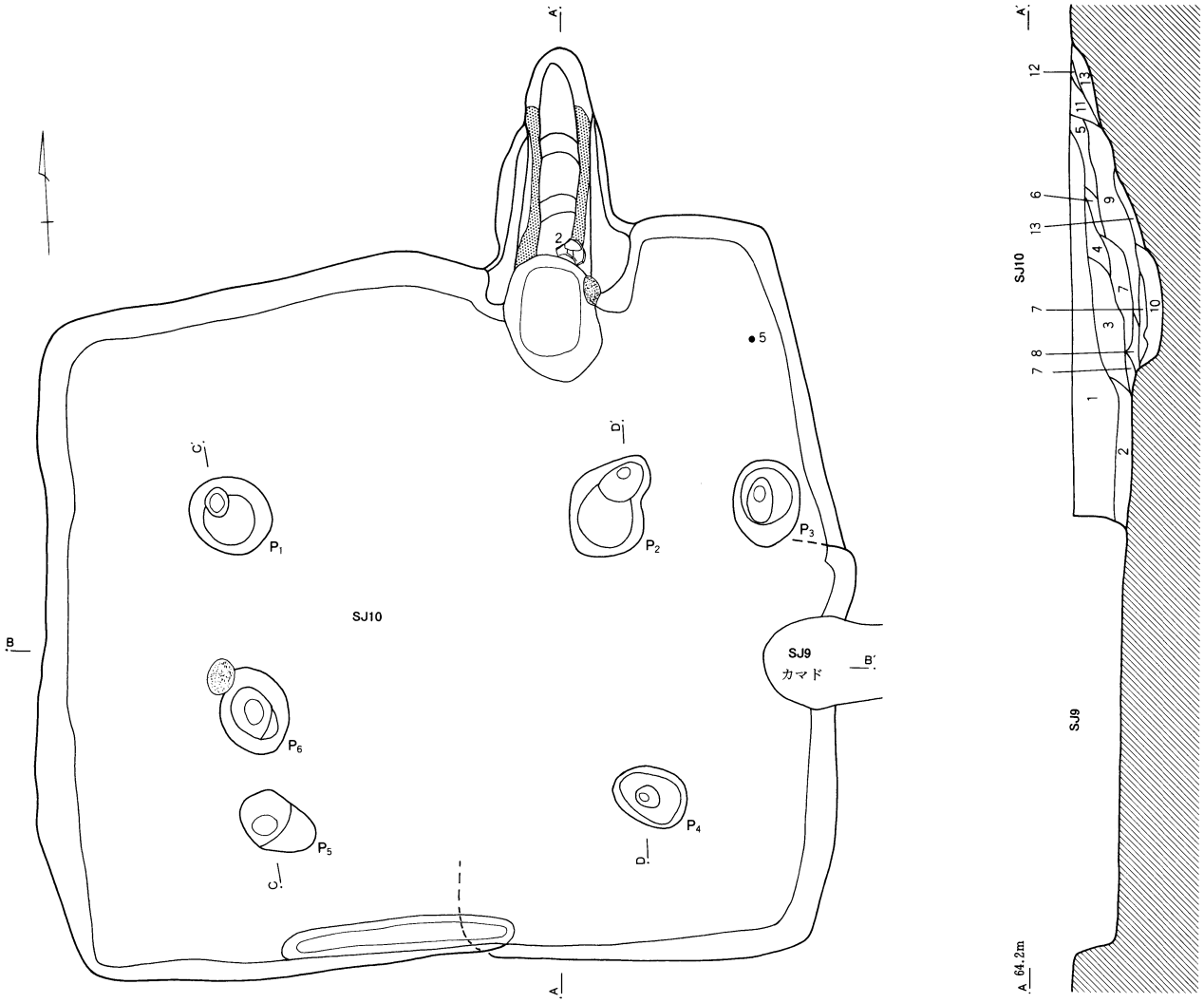
16は、底径が大きいことから、椀と考えられる。高台部は薄く、やや内湾している。

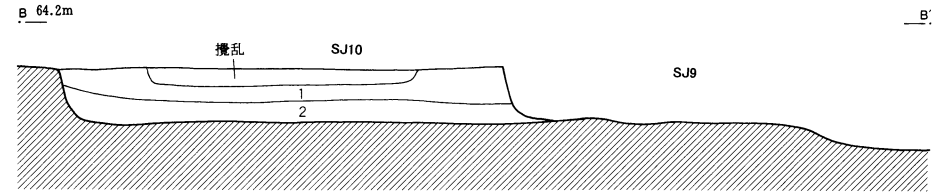
17・18は、蓋である。天井部とつまみが残存していたが、口縁部は欠損していた。17は、南比企産、18は、末野産と考えられる。

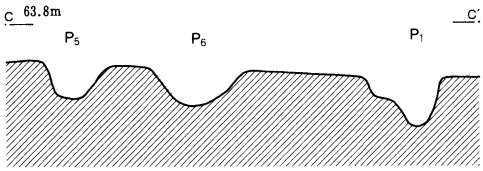
19・20は、甕の胴部片である。19は、胴部上半部の破片である。頸部が一部残存していた。外面は、平行叩きの後ナデ、内面は、当て具痕は殆ど残らず、ナデ消されていた。20は、胴部下部の破片である。外面は、横または斜め方向の平行叩きの後ナデ、内面には当て具の痕跡が僅かに認められるが、殆どナデられ、消されていた。２点とも、胎土の特徴から、末野産と思われる。

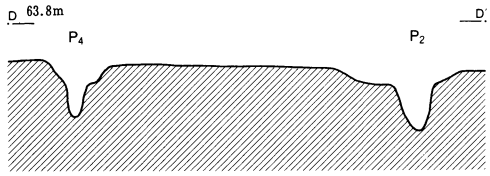
21は、砥石である。石質は凝灰岩製で、重さは152.3gであった。

第69図　第10号住居跡







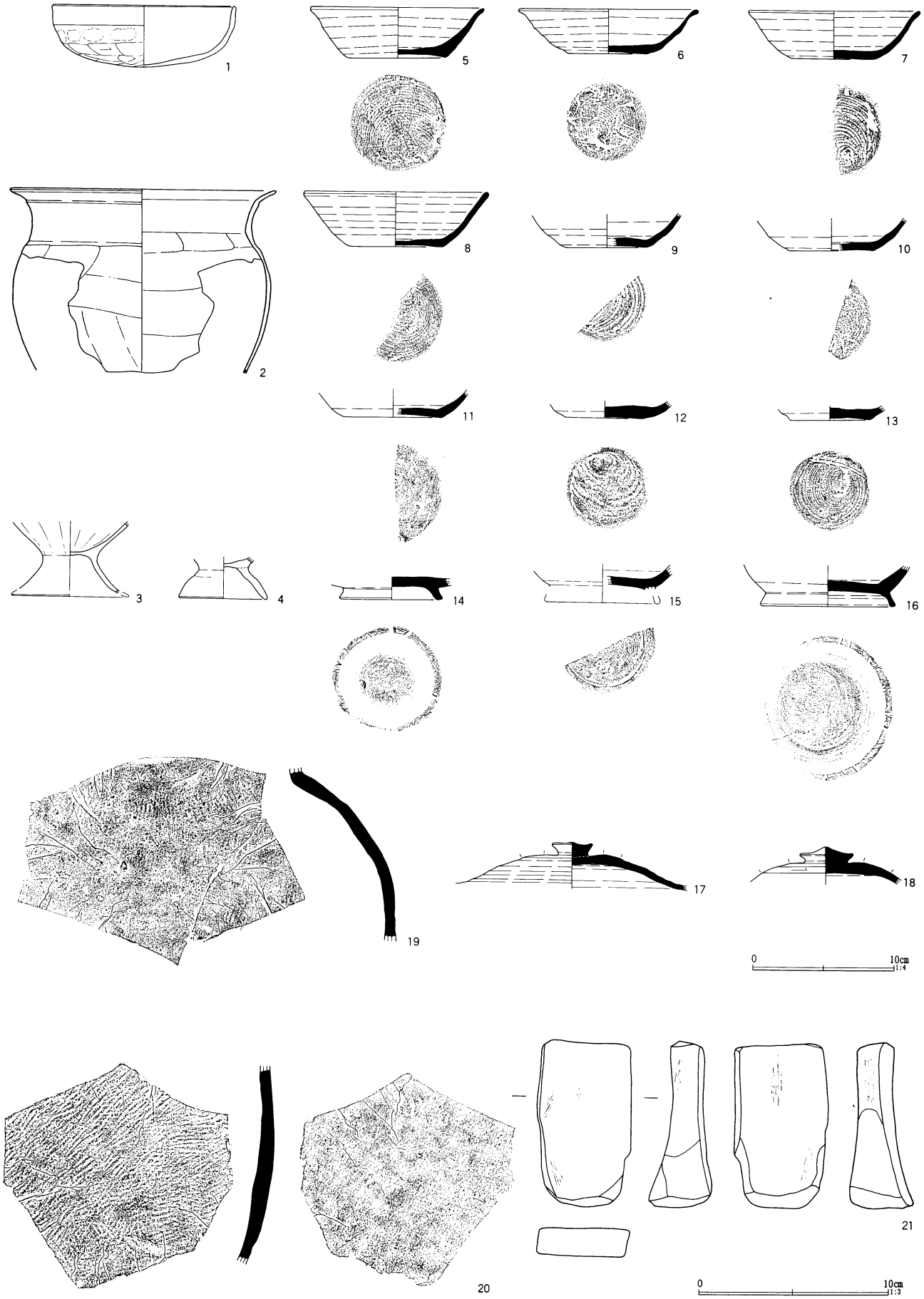


第10号住居跡

1　褐色　(10YR3/3)　白色微粒子多く含む。
2　暗褐色　(10YR3/3)
3　暗褐色　(7.5YR3/3)
4　灰褐色　(7.5YR3/2)
5　暗褐色　(10YR3/3)　焼土多く含む。
6　鈍黄褐色　(10YR4/4)　やや粘質。
7　灰層　粘土若干 焼土粒、炭化物粒若干。
8　黒褐色　(10YR3/2)
9　暗褐色　(7.5YR2/2)　焼土粒多。
10　黒褐色　(10YR3/2)　灰多く含む。
11　暗褐色　(7.5YR3/3)　焼土若干。
12　焼土
13　褐色　(10YR4/4)　シルト質。焼土微。

0　2 m　1:60

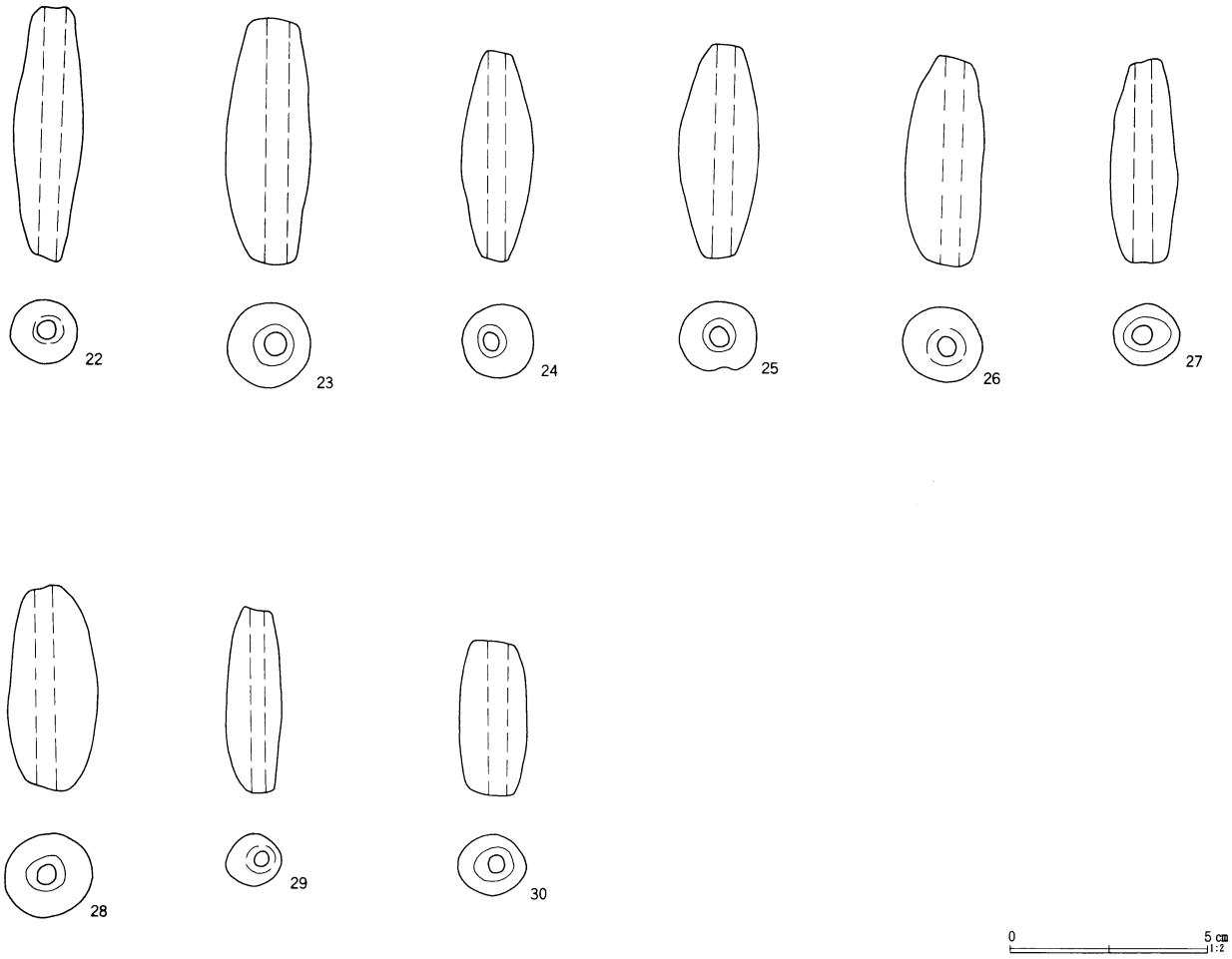
第70図　第10号住居跡出土遺物(1)



第10号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.8)	4.4		ABDEFJ	2	橙	30%	覆土	
2	甕	(18.7)			ABDEFJ	3	橙	胴上半部	カマド	
3	台付甕				ABDEJ	3	橙		覆土	
4	台付甕			6.2	ABDEJ	3	黄橙	脚部	覆土	
5	坏	(12.2)	3.5	7.0	AEFJL	2	灰	80%	壁際	末野
6	坏	12.5	3.2	5.7	AEFHJ	2	灰	100%	覆土	末野
7	坏	(12.0)	3.4	(6.0)	EFHJK	2	灰	40%	覆土	末野
8	坏	(12.9)	3.9	(6.4)	JKL	2	灰	25%	覆土	末野
9	坏			(5.7)	ACFHK	2	灰	底部	覆土	末野
10	坏			(6.0)	AFJK	2	灰	底部	覆土	末野
11	坏			7.0	ABEJK	4	灰	底部	覆土	末野
12	坏			5.6	EFHL	3	灰	底部	覆土	末野
13	坏			5.6	AFJK	2	灰	底部	覆土	末野
14	高台坏			6.9	AEFJK	3	灰	底部	覆土	末野
15	高台坏				CEFJ	2	灰	底部	覆土	末野
16	高台椀			(9.4)	AHKL	3	灰白	底部	覆土	末野
17	蓋				IJ	2	灰	20%	覆土	南比企
18	蓋				AEHL	4	灰黄	天井部	覆土	末野
19	甕				ADJKL	2	灰		覆土	
20	甕				ABFJKL	2	灰		覆土	

第71図　第10号住居跡出土遺物(2)



第10号住居跡出土土錘観察表（第71図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
22	6.4	1.7	0.5	16.26	CaIV	橙	100%	
23	6.2	2.1	0.6	27.32	BbIV	にぶい橙	100%	
24	5.2	1.8	0.4	14.91	CbV	橙	100%	
25	5.4	2.0	0.5	18.91	BbV	にぶい褐	100%	
26	5.2	2.0	0.5	16.26	BaV	明赤褐	100%	
27	5.1	1.7	0.5	13.26	CbV	橙	100%	
28	5.2	2.2	0.5	23.62	BbV	明赤褐	100%	
29	4.7	1.4	0.4	8.78	BaV	橙	100%	
30	3.8	1.7	0.4	10.02	DbVI	浅黄橙	100%	

第11号住居跡（第72・73図、図版18）

AE－20グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、住居の東側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸2.76m、深さ0.44mである。主軸方位は、N－25°－Wであった。

壁面は、概ね垂直だが、やや丸みを持って立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは、北壁中央部で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、煙道部はテラス状で、緩やかに傾斜していた。また、天井部が残存し、煙突部は、垂直に立ち上がっていた。天井及び壁面は、僅かに焼けた痕跡が観察できた。

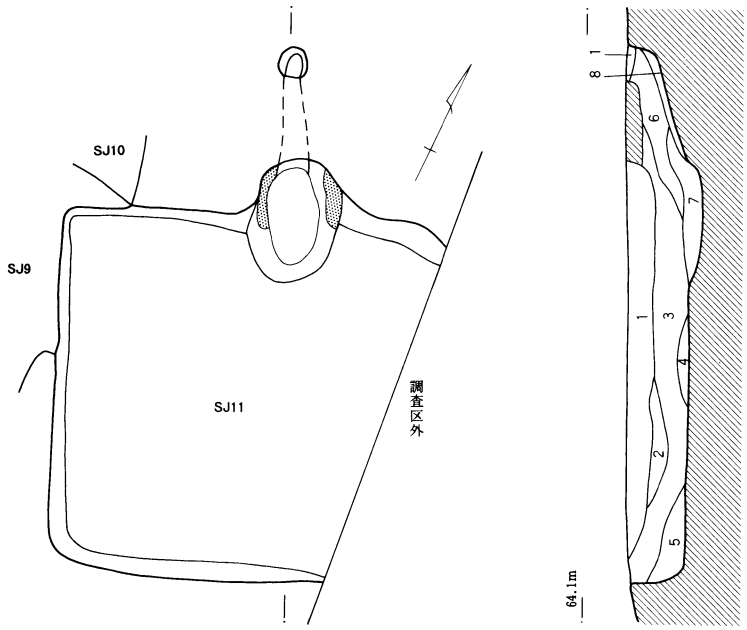
壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SJ9・10と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、全ての住居跡に壊されていたことから、本遺構が最も旧い住居であると思われる。

出土遺物は、覆土中から、須恵器蓋が出土した。また、土錘が1点出土した。

1～3は、須恵器蓋である。3点とも末野産と考えられる。1は、天井部とつまみが残存していた。天井部はヘラケズリされていた。2・3は、口縁部の破片である。断面三角形の鋭利なかえりを有する。

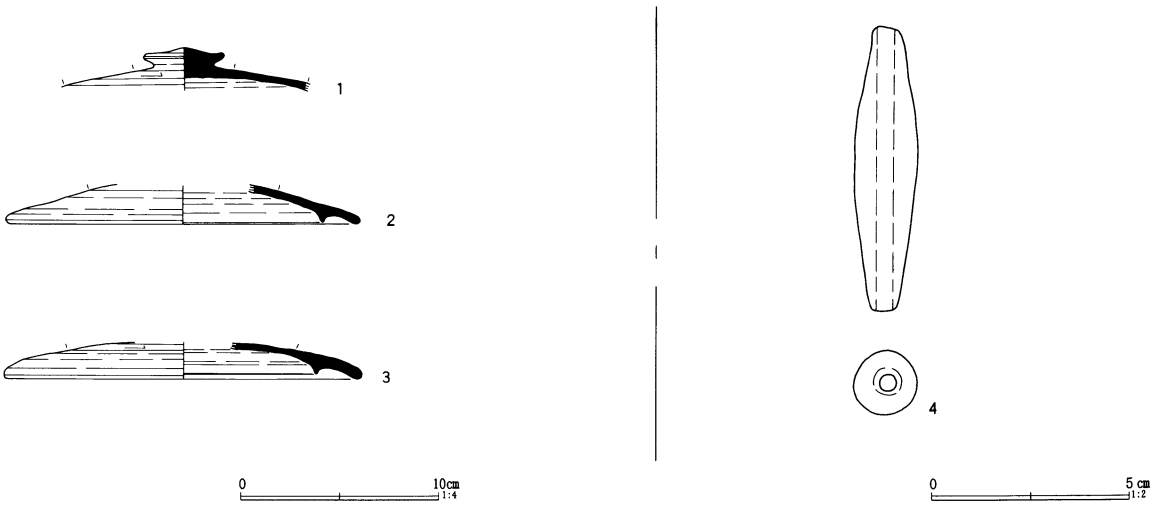
第72図　第11号住居跡



第11号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　白色微粒子多。黄褐色土若干。砂質。
2　黒褐色　(10YR3/2)　やや粘質。
3　灰黄褐色　(10YR4/2)　砂質。
4　黒褐色　(10YR2/2)
5　灰黄褐色　(10YR4/2)　小礫若干。砂質。
6　黒褐色　(10YR2/2)　砂質。
7　黒褐色　(10YR3/2)　焼土多く含む。
8　黒色　(10YR2/1)　砂質。

0　2m　1:60

第73図　第11号住居跡出土遺物



第11号住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋				ABDEFHJL	4	橙	天井部	覆土	末野
2	蓋	17.6			ABEFJ	2	灰黄褐		覆土	末野
3	蓋	17.8			ABEFJL	2	灰		覆土	末野

第11号住居跡出土土錘観察表（第73図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
4	7.2	1.6	0.4	14.99	CaIII	にぶい橙	100%	

第13号住居跡（第74・75図、図版19・28・36・40・43）

AF・AG－20グリッドで検出した。

規模は、長軸4.10m、短軸3.20m、深さ0.41mであった。主軸方位は、N－7°－Wであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、北壁中央部で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていた。煙道部は、水平なテラス状であったが、床面とほぼ同一レベルであった。煙突部は、ほぼ垂直に立ち上がっていた。天井部は残存していなかった。袖は、検出できなかった。

また、カマドの両側には、テラス状の張り出しを検出した。棚状施設の可能性がある。

貯蔵穴は、カマド右側の住居北東隅付近で検出した。

出土遺物は、覆土、貯蔵穴内及び貯蔵穴周辺から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が出土した。また、覆土中から、土製紡錘車1点、土錘1点、帯金具1点が出土した。

遺構は、攪乱が多く、覆土中の遺物は、時期差が認められ、他からの混入の可能性が高い。

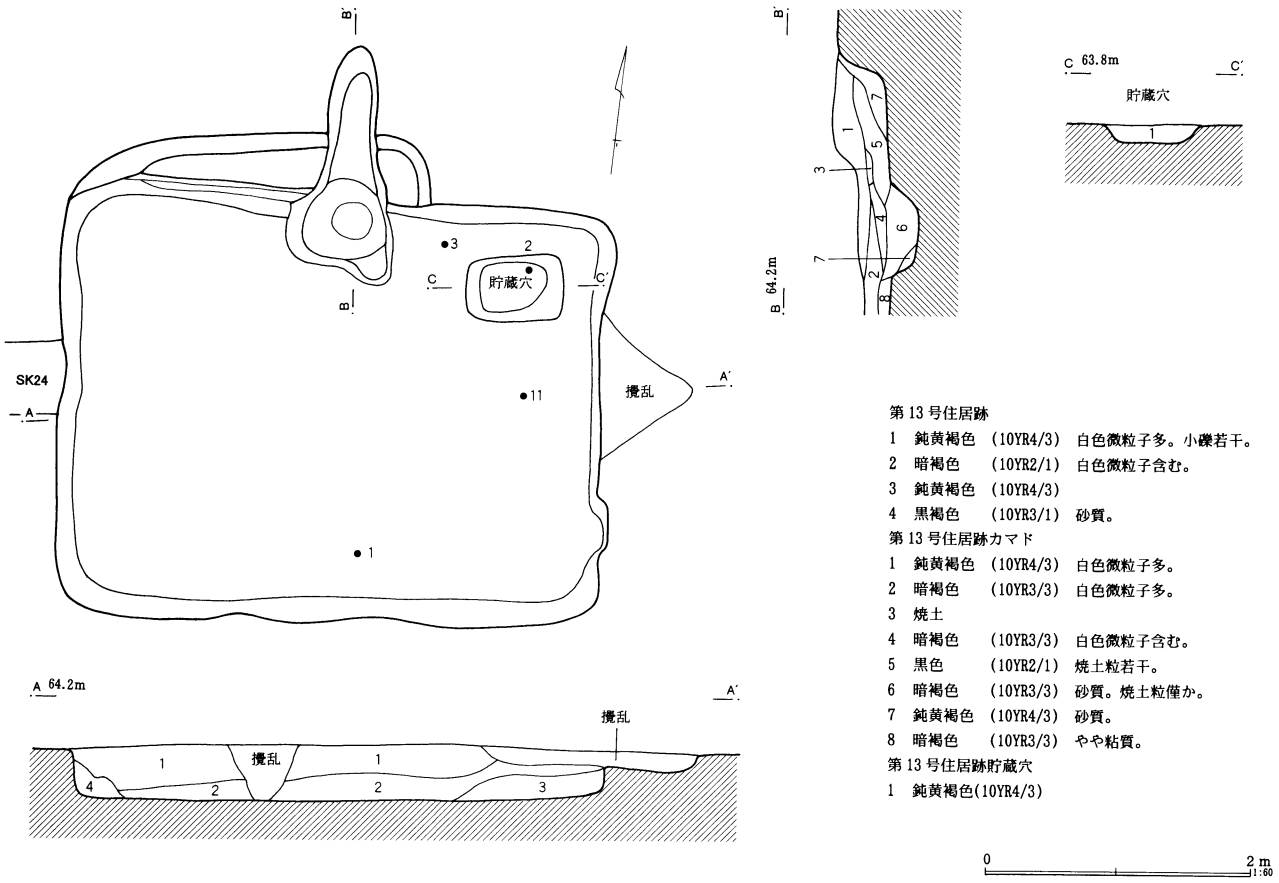
1は、土師器坏である。覆土中から出土した。底部は丸底で、口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がる。

2・3は土師器甕である。2は、貯蔵穴内から、3は貯蔵穴脇の壁際から出土したが、2は底部を、3は胴部以下を欠損していた。頸部に横方向のヘラケズリが施され、胴部は斜めまたは縦方向のヘラケズリが施されていた。

4～7は、須恵器坏である。全て覆土中から出土した。全て末野産と考えられる。底部の調整は、4は手持ちヘラケズリ、5は周辺部ヘラケズリ、6・7は、糸切後無調整であった。

8～10は、蓋である。全て覆土中から出土した破片資料である。3点は末野産と考えられる。8の蓋は、

第74図　第13号住居跡



第13号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.0	3.6		ABDEFJ	3	橙	90%	覆土	
2	甕	22.1			ABDEFJ	2	橙		貯蔵穴	
3	甕	21.8			ABDEJL	3	橙		壁際	
4	坏	(11.7)	3.8	7.1	ABDFHL	2	灰	25%	覆土	手持ちヘラケズリ
5	坏	(11.6)	3.3	8.2	ABFJL	3	灰	25%	覆土	周辺ヘラ　末野
6	坏	(11.8)	3.2	7.4	BJL	2	灰	40%	覆土	末野
7	坏	11.8	3.4	7.2	ABFJKL	2	灰	25%	覆土	末野
8	蓋	(17.8)			ABFJKL	3	赤褐	破片	覆土	末野
9	蓋	(17.0)			ABFHJL	2	灰	破片	覆土	末野
10	蓋				ABFHJL	4	灰	破片	覆土	末野
11	甕				AKL	1	暗灰	破片	覆土	末野

第13号住居跡出土土錘観察表（第75図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
13	(6.6)	2.4	0.8	34.47	Ca他	淡黄	90%	

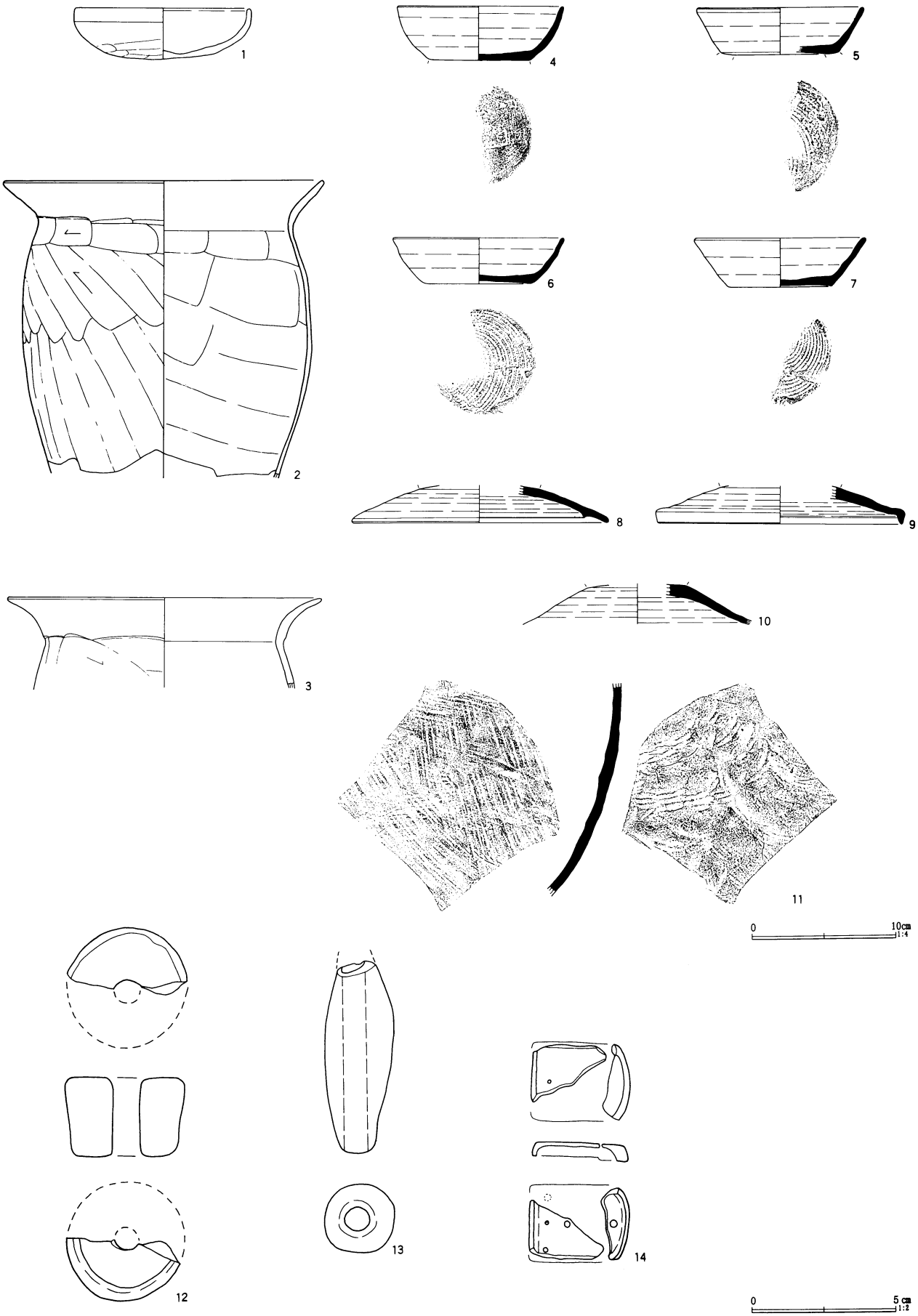
かえりを有していた。

11は、甕の胴部の破片である。外面は、斜め方向の平行叩き、内面は当て具の痕跡が認められ、ナデ消されていた。

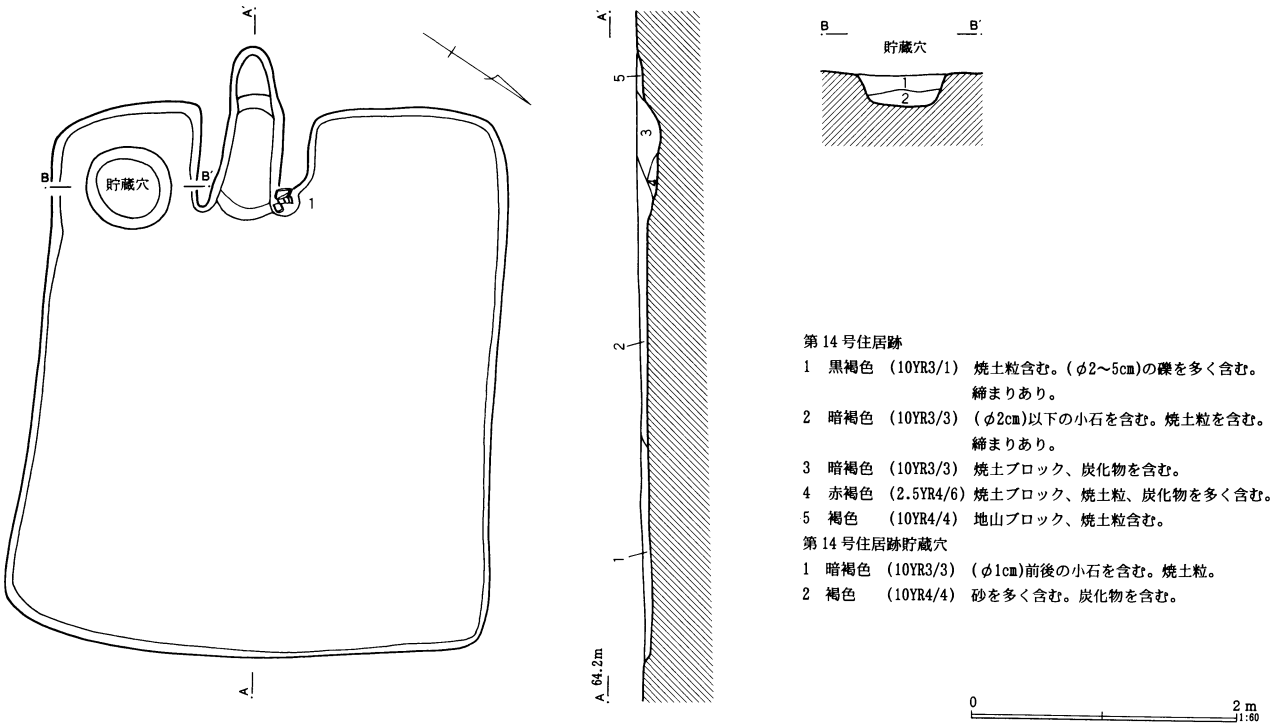
12は紡錘車である。上端の径4.3cm、下端の径3.6cm、厚さ2.8cm、重さ26.92gであった。

14は、腰帯金具（蛇尾）である。2点あるが、同一個体である。全長は3.5cm、幅2.7cm、重さ4.31gであった。厚さは、先端部で0.6cm、末端部で0.45cmであったため、欠損した部分で段になっていたと思われる。裏面には、鋲の跡が3箇所で認められた。また、末端部に径1mmの補修孔が認められた。

第75図　第13号住居跡出土遺物



第76図　第14号住居跡



第14号住居跡出土遺物観察表（第77図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甑	21.5			BDEHJL	4	橙	破片	カマド右袖	

第14号住居跡（第76・77図、図版19）

AI－20グリッドで検出した。

平面の形状は、東西方向に長い長方形である。

規模は、長軸4.10m、短軸3.48m、深さ0.08mであった。主軸方位は、N－123°－Wであった。

壁面は、遺構が確認面から浅く検出したため、遺構上部の構造は明らかにできなかった。

床面は、礫混じりの砂質土で、一部礫層が露出していた部分もあったが、概ね平坦であった。

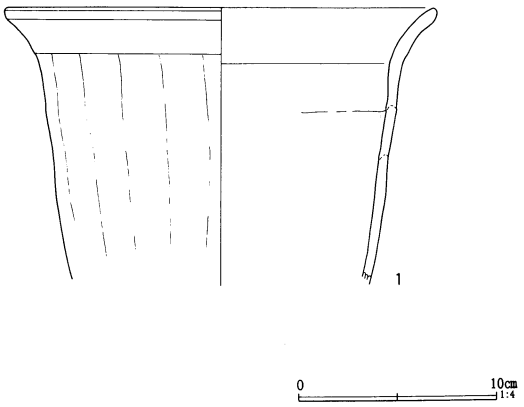
なお、遺構の北では、遺構確認時に、既に礫層が露出していた。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、南西側の壁面で検出した。燃焼部は土壙状に掘り込まれていた。煙道部分は、短いテラス状の平坦部を検出したが、遺構が浅く、上部の構造は明らかにできなかった。袖は両側で検出した。

貯蔵穴は、カマド左脇で検出した。径0.65mの円形で、深さ0.25mであった。

第77図　第14号住居跡出土遺物



壁溝は、検出できなかった。

出土遺物は、古墳時代後期の土師器の小片が出土したが、図示可能な遺物は、土師器甑が１点出土したのみである。

甑は、カマド右袖で出土した。底部を欠損していた。口縁部は、外反しながら立ち上がる。口縁部は横ナデ、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。

第15号住居跡（第78・79図、図版20）

AJ－20グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と考えられるが、住居の大部分が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸2.86m、深さ0.22mであった。主軸方位は、N－83°－Eであった。

壁面は、やや外傾しながら立ち上がる。

床面は、黄褐色砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居の東壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、煙道部は斜めに立ち上がっていた。袖は、検出できなかった。

貯蔵穴は、カマド右脇の住居南東隅で検出した。規模は、径0.50mの円形で、深さは0.42mであった。

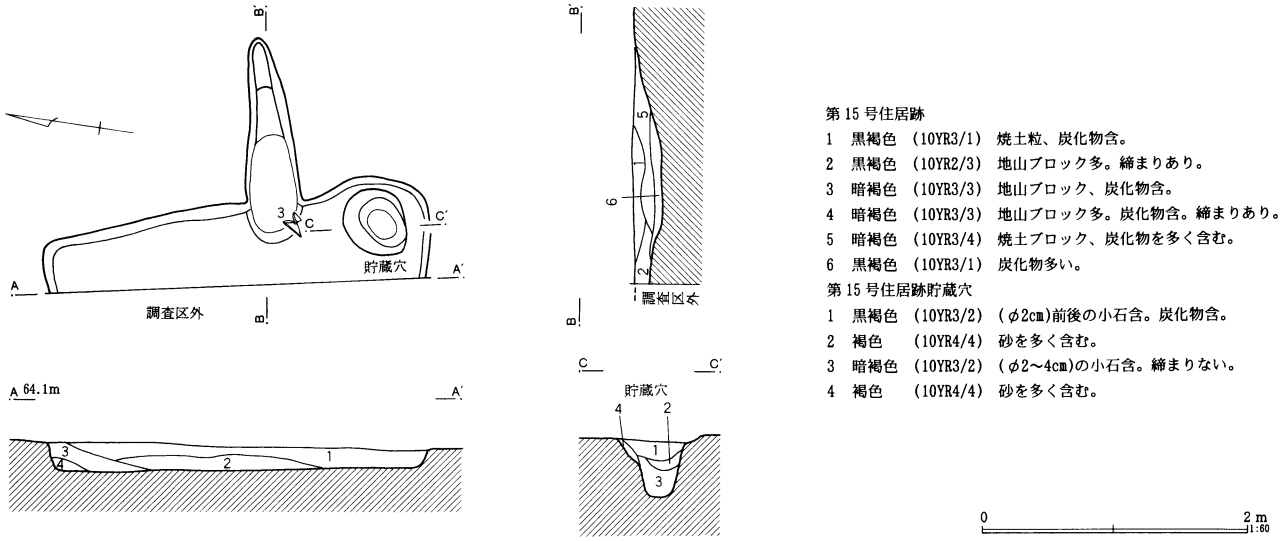
壁溝は、検出できなかった。

出土遺物は、カマド及び貯蔵穴から、須恵器坏、土師器甕が出土した。

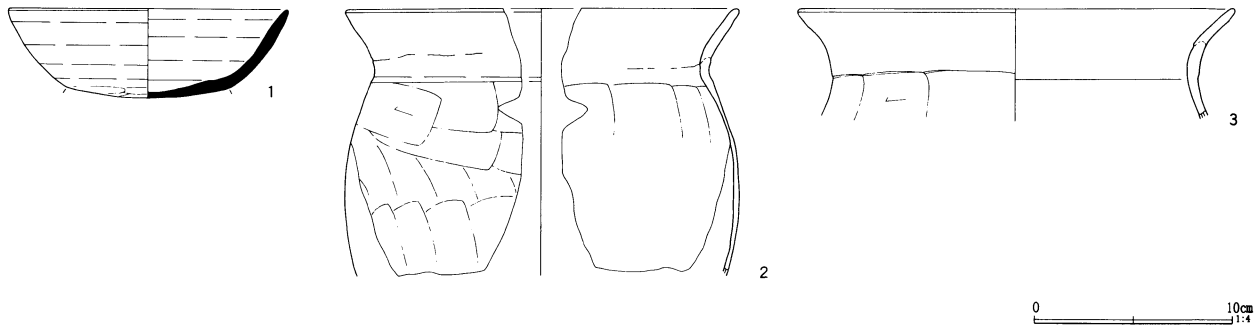
1の坏は、カマドから出土した。末野産と考えられる。底部は丸底で、底部外面は、手持ちヘラケズリされていた。

2は、貯蔵穴、3は、カマドから出土した。

第78図　第15号住居跡



第79図　第15号住居跡出土遺物



第15号住居跡出土遺物観察表（第79図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	14.2	4.5		ABEHJL	4	橙	25%	カマド	手持ちヘラケズリ　末野
2	甕	19.8			ABDEJ	3	橙	破片	貯蔵穴	
3	甕	(22.0)			ABDEFJ	3	橙	25%	カマド	

第16号住居跡（第80・81図、図版20・28・32）

AI－20グリッドで検出した。

平面の形状は、やや歪んだ方形である。

規模は、長軸2.76m、短軸2.92m、深さ0.10mであった。主軸方位は、N－1°－Eであった。

床面は、地山の黄褐色砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、北壁の、住居北西隅に寄った位置で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていた。煙道部については、遺構が浅く検出されたため、明らかにできなかった。袖は、両側で検出した。

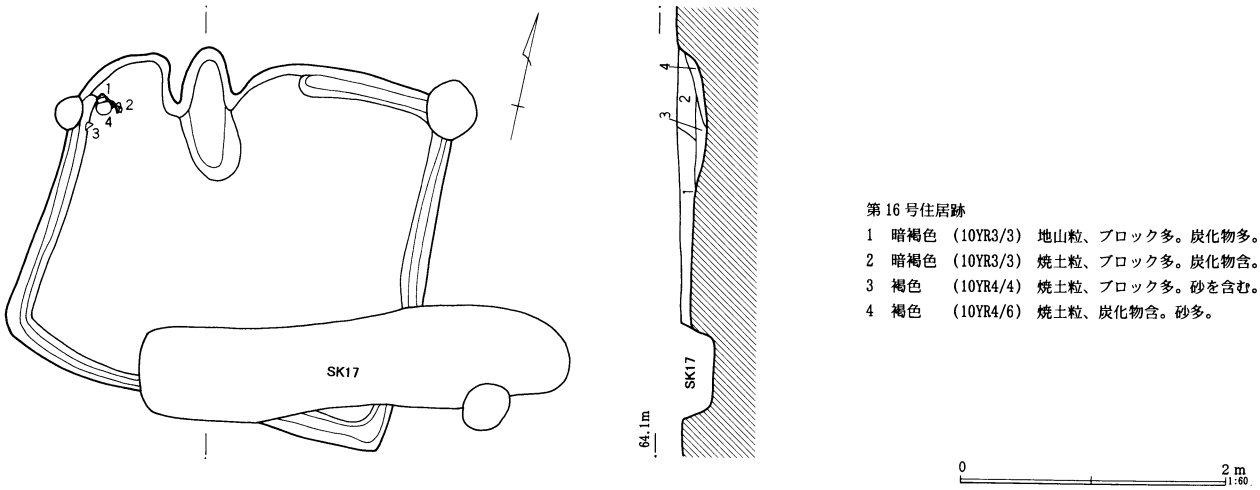
貯蔵穴は、検出できなかった。

壁溝は、カマド周辺を除き、全周していた。

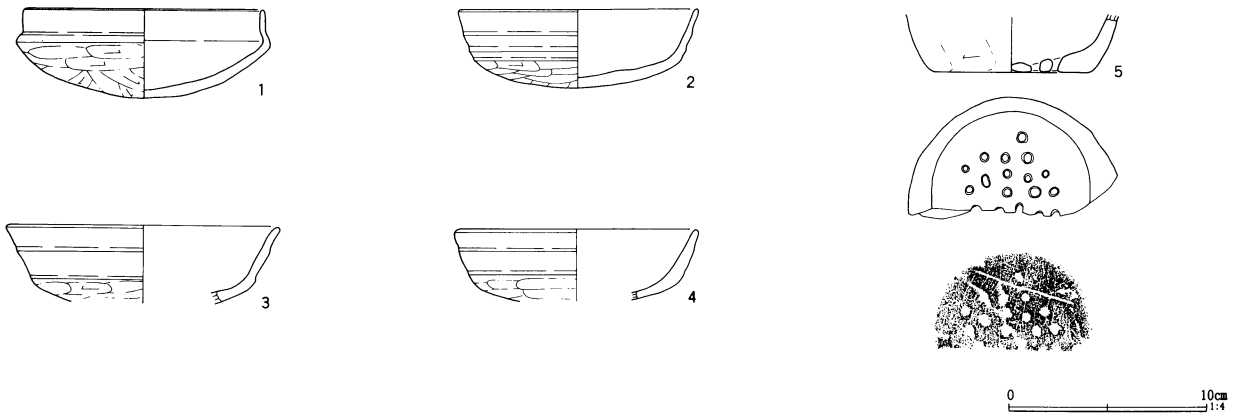
遺構は、SK17と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、SK17に壊されていることを確認した。

出土遺物は、住居北西隅及び覆土から古墳時代後期の土師器坏・甑が出土した。1～4の坏は、住居北西隅から、5の甑は、覆土から出土した。また、5の底部には、小さな孔が穿たれ、木葉痕が認められた。

第80図　第16号住居跡



第81図　第16号住居跡出土遺物



第16号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.1	4.5		ABDEFJKL	2	黄橙	90%	北西隅	
2	坏	12.0	4.0		ABDEFJKL	4	浅黄	50%	北西隅	
3	坏	13.6			BDEFJ	3	褐	20%	北西隅	
4	坏	12.1			ABDEFJL	3	褐	40%	北西隅	
5	甑			8.0	ABEFHJL	2	黄橙	底部	覆土	底部木葉痕

第17号住居跡（第82・83図、図版20・28・32・36）

AS・AT－21グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、深さ0.32mであった。主軸方位はN－50°－Eである。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出できなかった。

カマドは、東壁で検出した。燃焼部は、床面から15cm程掘り込まれるが、底面は、煙道部底面と連続し、煙突部分で、垂直に立ち上がっていた。天井部は、残存していたが、重複する土壙に一部破壊されていた。また、カマド両側の壁は焼け、赤く変色した硬化面となっていた。

遺構は、SK26・27と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、土壙に壊されていた。

出土遺物は、カマド及び覆土から、須恵器坏・蓋・転用硯、土師器甕が出土した。

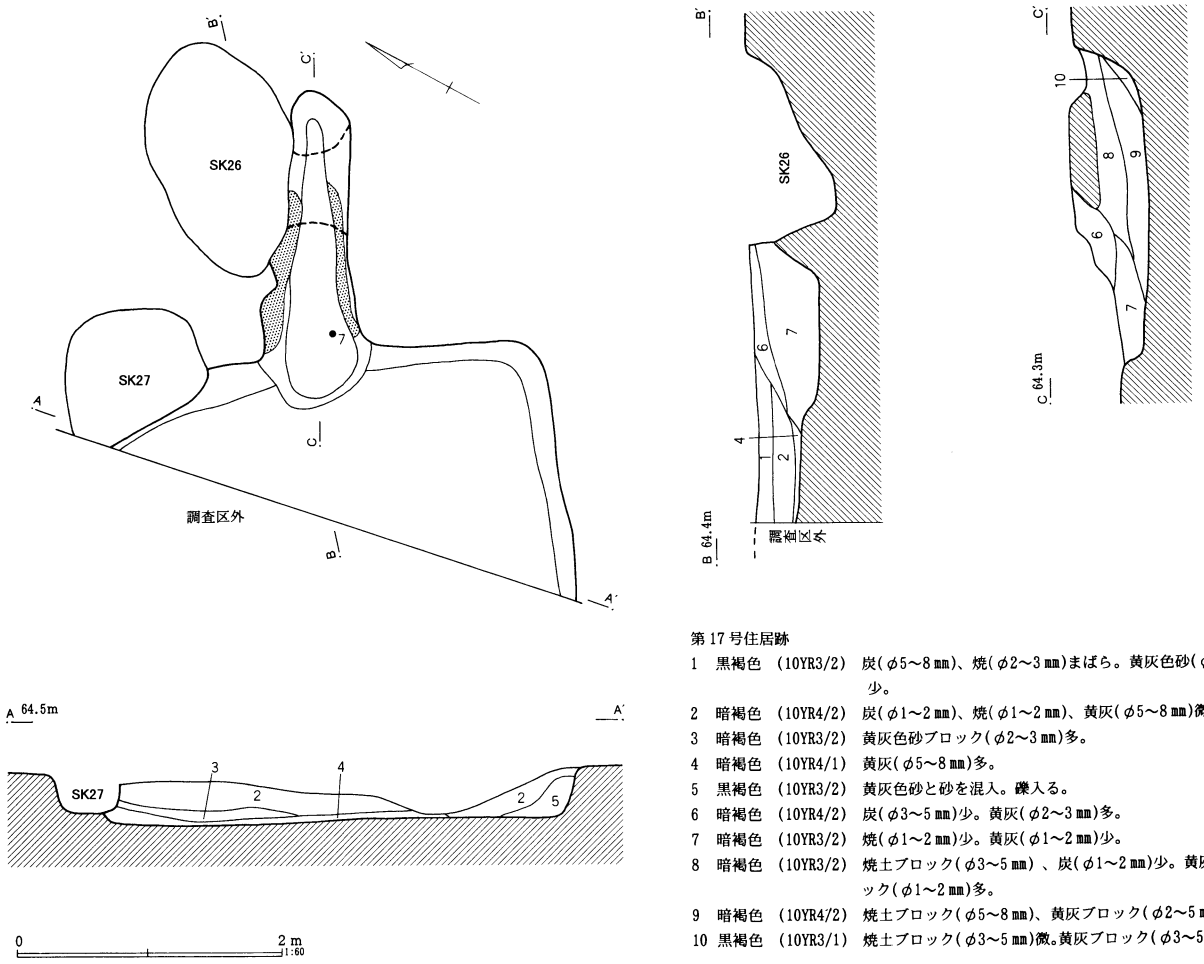
1～4は、須恵器坏である。底部の調整は、糸切後無調整であった。

5の蓋は、器高が高く、口縁部の折り返しが短い。天井部は、糸切後つまみを貼り付ける。天井部外周部はヘラケズリされていた。

6は、高台坏であるが、底部外面に顕著な磨耗痕と墨痕が認められ、転用硯と考えられる。また、高台部と口縁部が意図的に打ち欠かれていた。

7～9は、土師器甕である。7のみカマドから出土した。他は覆土中から出土した。

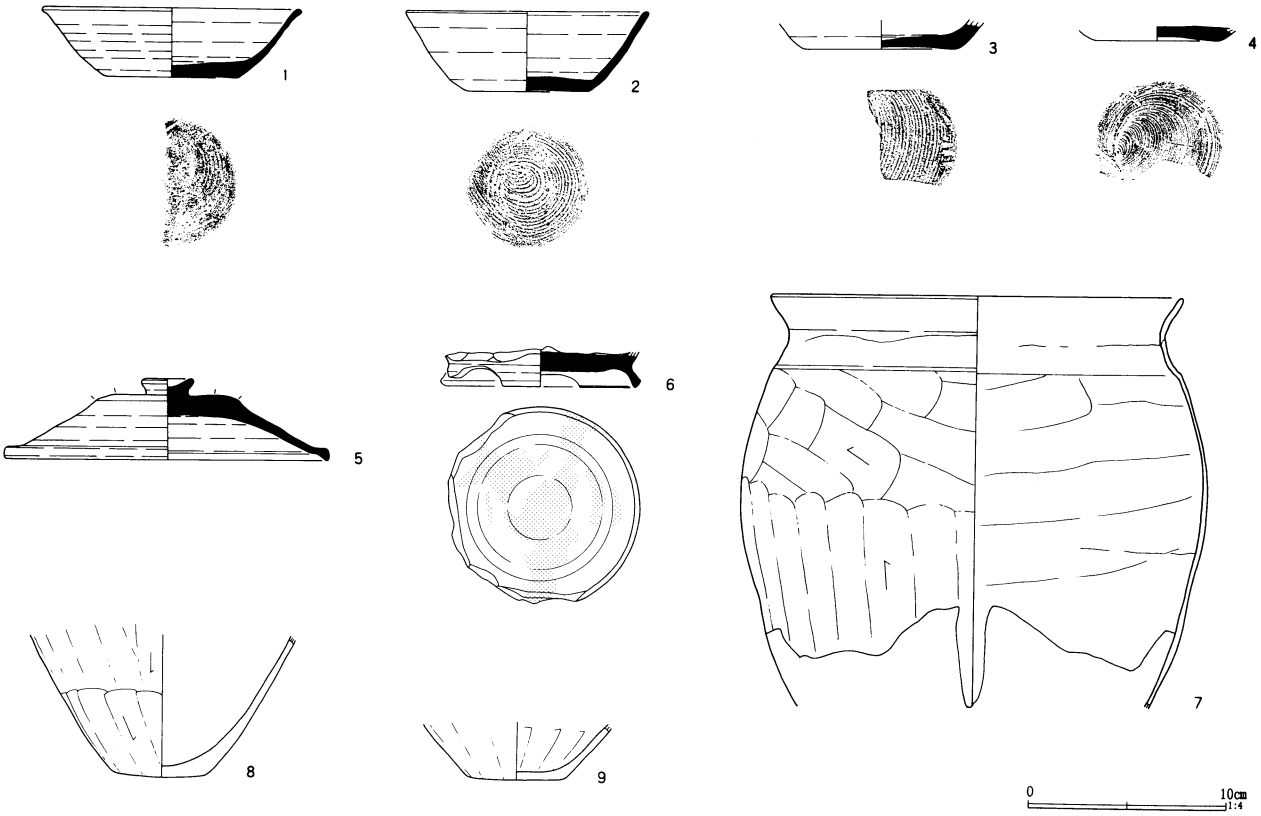
第82図　第17号住居跡



第17号住居跡

1　黒褐色　(10YR3/2)　炭(φ5～8㎜)、焼(φ2～3㎜)まばら。黄灰色砂(φ5～8㎜)少。
2　暗褐色　(10YR4/2)　炭(φ1～2㎜)、焼(φ1～2㎜)、黄灰(φ5～8㎜)微。
3　暗褐色　(10YR3/2)　黄灰色砂ブロック(φ2～3㎜)多。
4　暗褐色　(10YR4/1)　黄灰(φ5～8㎜)多。
5　黒褐色　(10YR3/2)　黄灰色砂と砂を混入。礫入る。
6　暗褐色　(10YR4/2)　炭(φ3～5㎜)少。黄灰(φ2～3㎜)多。
7　暗褐色　(10YR3/2)　焼(φ1～2㎜)少。黄灰(φ1～2㎜)少。
8　暗褐色　(10YR3/2)　焼土ブロック(φ3～5㎜)、炭(φ1～2㎜)少。黄灰色砂ブロック(φ1～2㎜)多。
9　暗褐色　(10YR4/2)　焼土ブロック(φ5～8㎜)、黄灰ブロック(φ2～5㎜)多。
10　黒褐色　(10YR3/1)　焼土ブロック(φ3～5㎜)微。黄灰ブロック(φ3～5㎜)まばら。

第83図　第17号住居跡出土遺物



第17号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.9)	3.5	(6.5)	ADFHL	3	灰	25%	覆土	末野
2	坏	(12.2)	4.0	6.2	DEIL	2	橙	20%	覆土	南比企
3	坏			(7.8)	ABDFHJ	3	灰	底部	覆土	末野
4	坏			6.4	AFIJ	2	灰	底部	覆土	南比企
5	蓋	(16.3)	4.1		ABEFJ	2	灰	20%	覆土	末野？
6	高台坏			9.5	BFJK	2	灰		覆土	転用硯
7	甕	(20.8)			ABDEFJL	2	灰褐	20%	カマド	
8	甕			4.7	ABDEFJK	3	橙		覆土	
9	甕			4.8	ABDFJ	3	橙	底部	覆土	

第18号住居跡（第84・85図、図版20・28・29・37）

AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸3.04m、深さ0.67mであった。主軸方位は、N－70°－Eであった。

壁面は、やや外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

カマドは、東壁で検出した。燃焼部は、皿状で、床面とのレベル差は殆ど認められなかった。袖は検出できなかった。

また、カマド右側の住居東壁には、張出部を検出したが、棚状施設かどうかは明らかにできなかった。

貯蔵穴・壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SJ19と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、SJ19を壊していた。

出土遺物は、カマド及び覆土から、須恵器坏・高台付椀、土師器甕が出土した。

第19号住居跡（第84・85図、図版20）

AR・AS－21グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、SJ18に住居の北側を壊され、西側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、深さ0.30mであった。主軸方位は、N－48°－Eであった。

壁面は、ほぼ垂直に、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、床面に小ピットを検出したが、柱穴とは考えにくい。

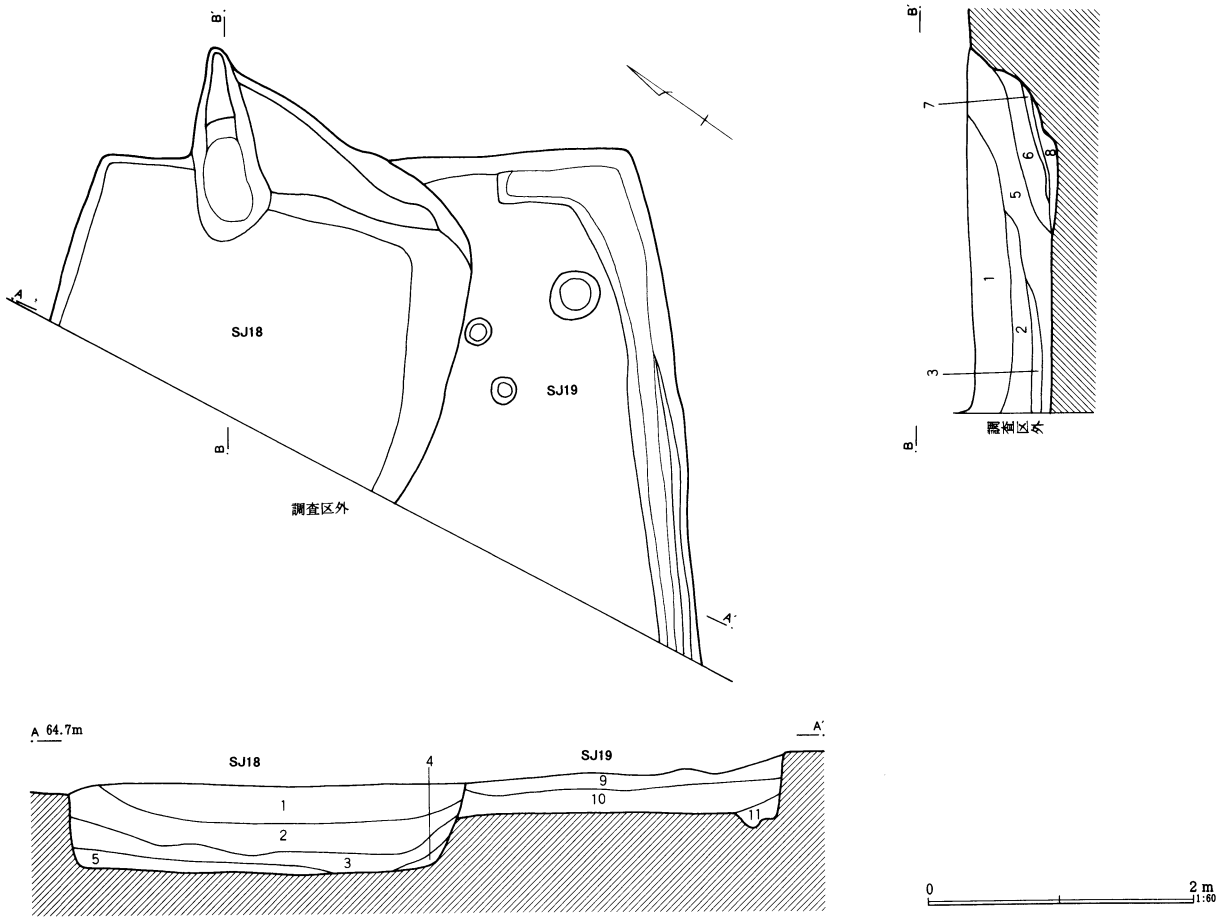
カマド・貯蔵穴は検出できなかった。

壁溝は、住居南壁で検出したが、全周していたかどうかは明らかにできなかった。

遺構は、SJ18と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、SJ18に壊されていた。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は土錘１点であった。

第84図　第18・19号住居跡



第18号住居跡

1　暗褐色　(10YR4/1)　黄灰色砂ブロック(φ2～3㎜)まばら。焼土(φ2～5㎜)、炭化物(φ0.5㎜)まばら。

2　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～5㎜)まばら。焼土(φ1～2㎜)やや多。特に3層との層界に多い。

3　暗黄灰色　(10YR5/3)　暗褐色土をベースに黄灰色砂を多く混入。焼土(φ5～8㎜)、炭化物(φ2～3㎜)まばら。

4　暗褐色　(10YR4/1)　黄灰色砂ブロック(φ3～5㎜)多。焼土ブロック(φ5～8㎜)少。

5　褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～5㎜)多。炭化物(φ2～5㎜)まばら。焼土(φ3～5㎜)まばら。

6　褐色　(2.5YR5/3)　黄灰色砂ブロック(φ5～8㎜)多。焼土(φ8～10㎜)をまばら。天井の崩落土。

7　褐色　(10YR5/2)　焼土多。天井の崩落土。

8　暗褐色　(10YR3/2)　焼土ブロック(φ1～2㎜)少。灰多。灰層。

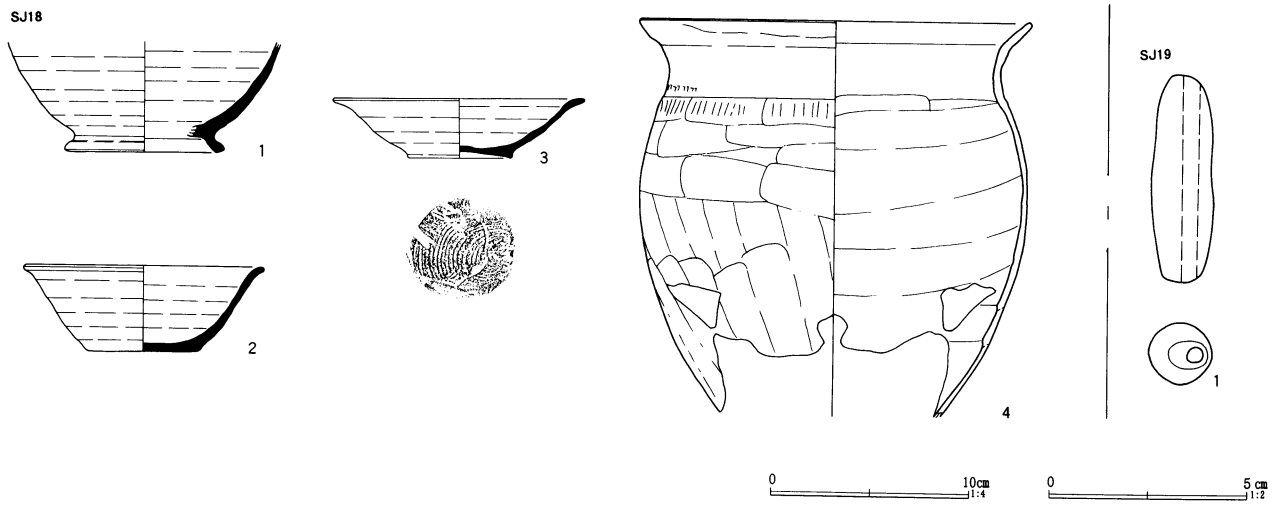
第19号住居跡

9　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～5㎜)やや多。焼土ブロック(φ1～2㎜)少。

10　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ1～2㎜)、焼土ブロック(φ1～2㎜)少。

11　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂粒(φ1～2㎜)多。焼土粒(φ1～2㎜)少。

第85図　第18・19号住居跡出土遺物



第18号住居跡出土遺物観察表（第85図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	高台椀			(7.3)	ABDJKL	2	灰	底部	カマド	末野
2	坏	(11.9)	4.3	(5.7)	BDEFHJ	5	橙	25%	覆土	末野
3	坏	(12.6)	3.0	5.2	BEHJ	4	灰	20%	覆土	末野
4	甕	(19.4)			ABDEFJ	2	橙	60%	覆土	末野

第19号住居跡出土土錘観察表（第85図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	5.2	1.6	0.4	12.94	BbV	にぶい橙	100%	

第20号住居跡（第86・87図、図版21・29）

AQ・AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は、東西に長い長方形の住居であると思われる。また、北西隅が調査区外へ展開していた。

規模は、長軸5.50m、短軸4.68m、深さ0.36mであった。主軸方位は、N－53°－Eであった。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、平坦で、硬く締まっていた。

柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは、住居東壁で検出した。燃焼部は、皿状で、床面とのレベル差は殆ど認められなかった。煙道部は、段差なく緩やかに傾斜し、煙突部では、概ね垂直に立ち上がっていた。また、カマドの天井部が残存し、天井内部は、赤く焼けた硬化面となっていた。

壁溝は、カマド周辺を除き、ほぼ全周していた。

出土遺物は、カマド及び床面から、土師器坏・甕、須恵器坏が出土した。1・3は床面から、2はカマドから出土した。

第21号住居跡（第88・89図、図版21・29・33・37）

AQ－21・22グリッドで検出した。

平面の形状は、長方形であった。

規模は、長軸5.02m、短軸3.08m、深さ0.65mであった。主軸方向は、N－40°－Wであった。

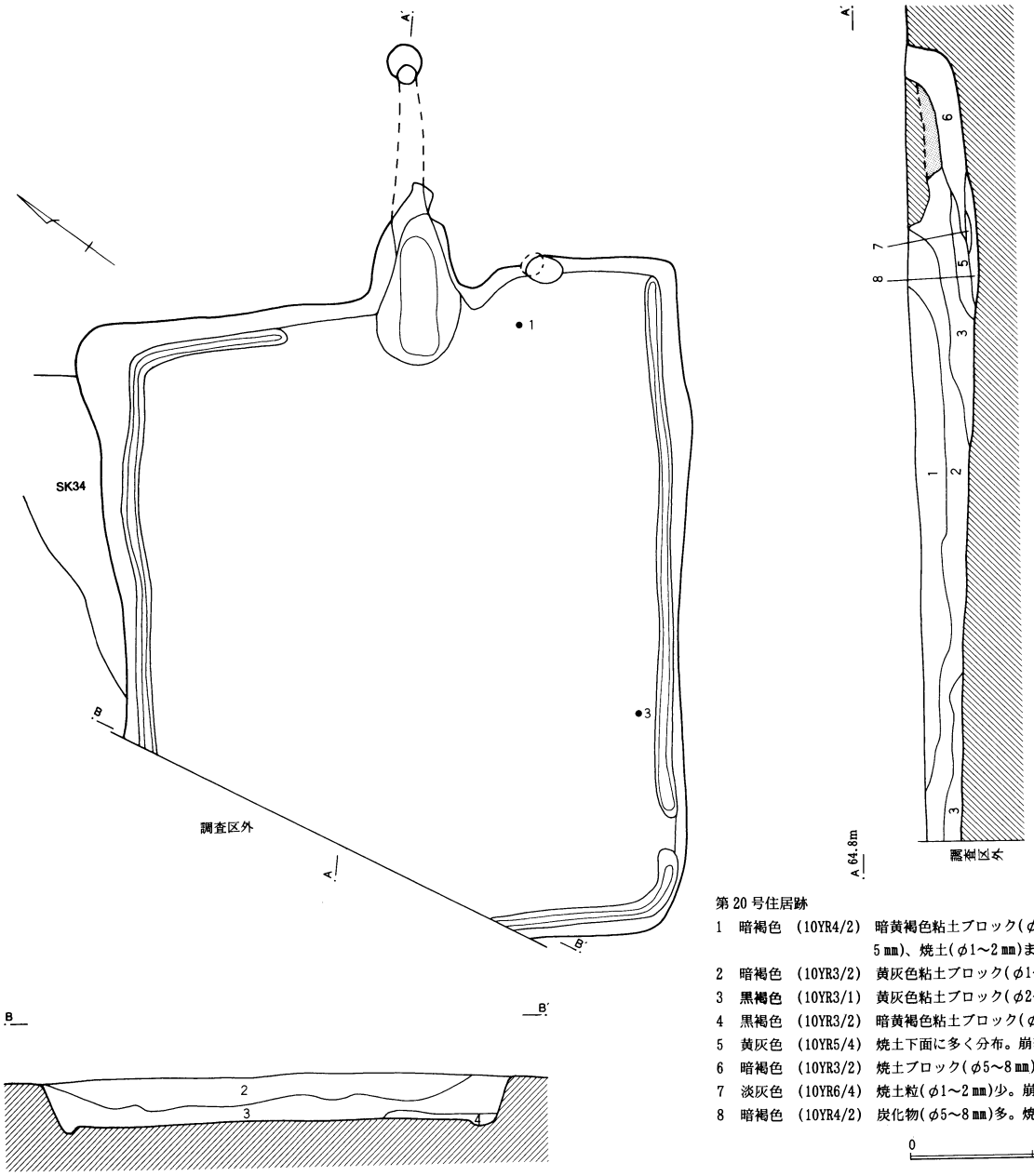
壁面は、床面から垂直に立ち上がっていたが、上部では大きく外側に傾いていた。

床面は、地山の黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、硬く締まっていた。また、床面は、住居中央部分が高く、僅かではあるが、四方の壁に向かって傾斜していた。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居北壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、底面には小穴が設けられていた。煙道

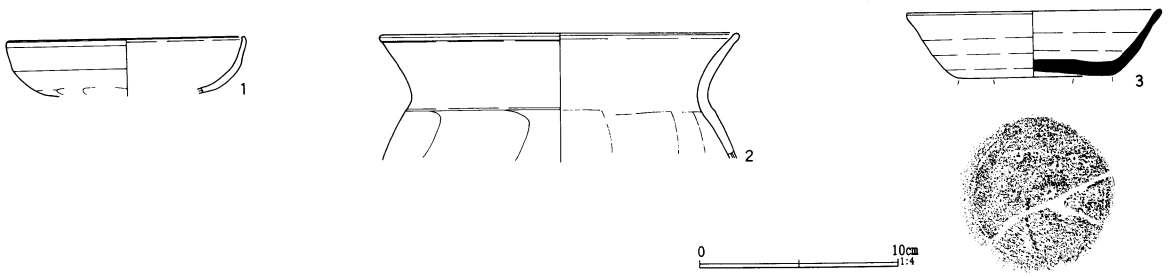
第86図　第20号住居跡



第 20 号住居跡

1　暗褐色　(10YR4/2)　暗黄褐色粘土ブロック(φ2～3 mm)、炭化物(φ2～5 mm)、焼土(φ1～2 mm)まばら。
2　暗褐色　(10YR3/2)　黄灰色粘土ブロック(φ1～5 mm)多。
3　黒褐色　(10YR3/1)　黄灰色粘土ブロック(φ2～3 mm)まばら。
4　黒褐色　(10YR3/2)　暗黄褐色粘土ブロック(φ2～3 mm)多。
5　黄灰色　(10YR5/4)　焼土下面に多く分布。崩落した天井。
6　暗褐色　(10YR3/2)　焼土ブロック(φ5～8 mm)多。煙突からの流れ込み。
7　淡灰色　(10YR6/4)　焼土粒(φ1～2 mm)少。崩落した天井。
8　暗褐色　(10YR4/2)　炭化物(φ5～8 mm)多。焼土(φ5～10 mm)少。灰層。

第87図　第20号住居跡出土遺物



第20号住居跡出土遺物観察表（第87図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	11.8			ABEFJ	3	橙	口縁	覆土	
2	甕	18.0			ABDFJL	3	橙	口縁	カマド	
3	坏	12.8	3.3	7.7	ABFHJK	4	灰白	80%	床面	周辺ヘラ　末野

は、燃焼部より一段高いテラス状で、煙突部分で垂直に立ち上がっていた。また、カマドの天井部が残存していた。袖は、左側で検出した。右側では、土師器甕が伏せた状態で出土したが、本来は袖の芯材となっていたものと思われる。また、左袖からは、芯材として径35cmの礫が出土した。

貯蔵穴は、住居北東隅で検出した。長径0.95m、短径0.71mの楕円形で、深さは0.30mであった。

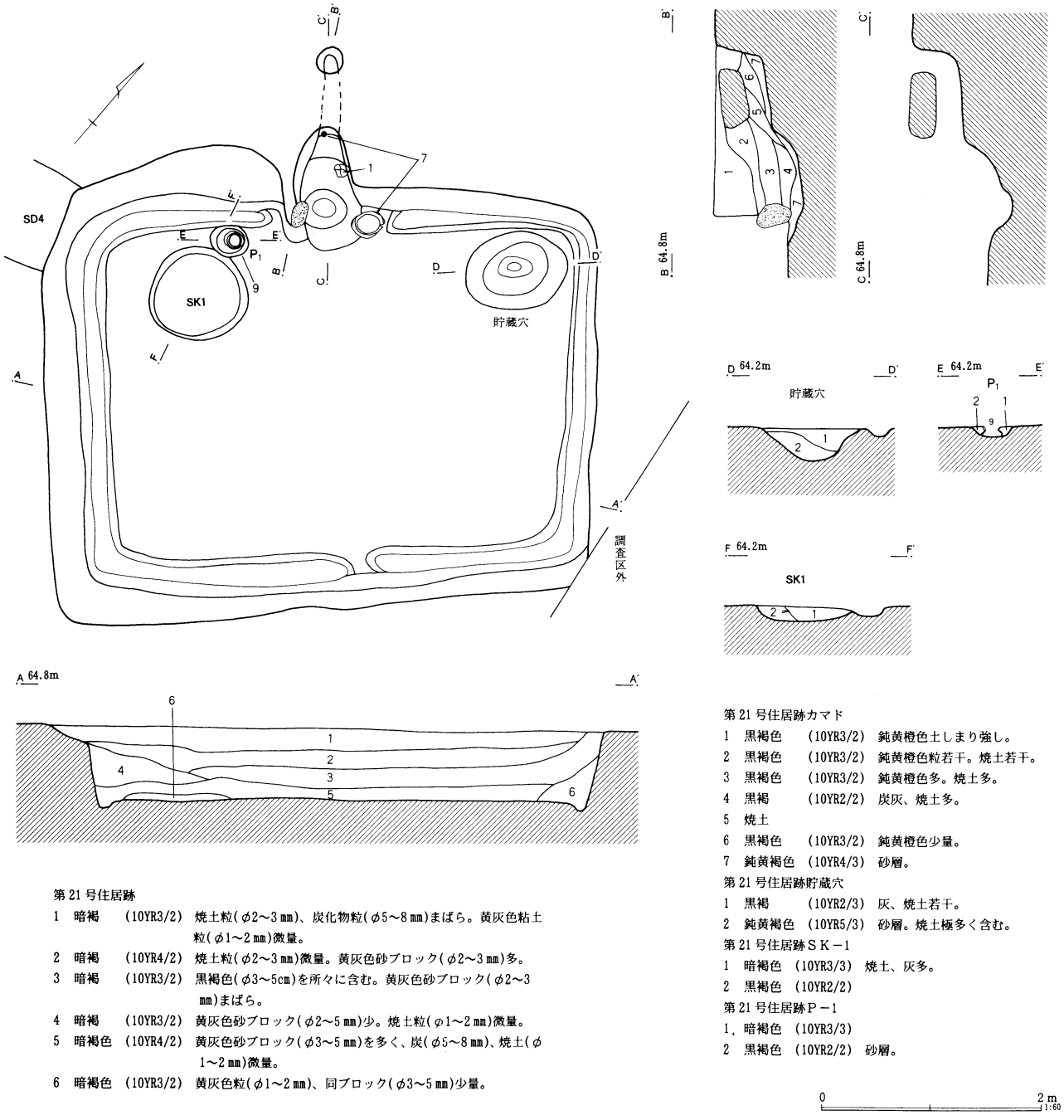
また、カマド左側に、土壙1基、ピット1基を検出した。それぞれ貯蔵穴の可能性があるが、SK1、P1とした。

壁溝は、カマドを除き、住居を全周していた。

出土遺物は、住居覆土、カマド、SK1、P1から、土師器坏・甕、須恵器坏が出土した。また、覆土中から土錘が1点出土した。

1～6は、土師器坏である。1はカマドから、2～4は覆土から、5・6はSK1から出土した。5の坏は、全面に赤彩が施されていた。

第88図　第21号住居跡



第21号住居跡
1　暗褐　(10YR3/2)　焼土粒(φ2～3mm)、炭化物粒(φ5～8mm)まばら。黄灰色粘土粒(φ1～2mm)微量。
2　暗褐　(10YR4/2)　焼土粒(φ2～3mm)微量。黄灰色砂ブロック(φ2～3mm)多。
3　暗褐　(10YR3/2)　黒褐色(φ3～5cm)を所々に含む。黄灰色砂ブロック(φ2～3mm)まばら。
4　暗褐　(10YR3/2)　黄灰色砂ブロック(φ2～5mm)少。焼土粒(φ1～2mm)微量。
5　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～5mm)を多く、炭(φ5～8mm)、焼土(φ1～2mm)微量。
6　暗褐色　(10YR3/2)　黄灰色粒(φ1～2mm)、同ブロック(φ3～5mm)少量。

第21号住居跡カマド
1　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄橙色土しまり強し。
2　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄橙色粒若干。焼土若干。
3　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄橙色多。焼土多。
4　黒褐　(10YR2/2)　炭灰、焼土多。
5　焼土
6　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄橙色少量。
7　鈍黄褐色　(10YR4/3)　砂層。

第21号住居跡貯蔵穴
1　黒褐　(10YR2/3)　灰、焼土若干。
2　鈍黄褐色　(10YR5/3)　砂層。焼土極多く含む。

第21号住居跡SK－1
1　暗褐色　(10YR3/3)　焼土、灰多。
2　黒褐色　(10YR2/2)

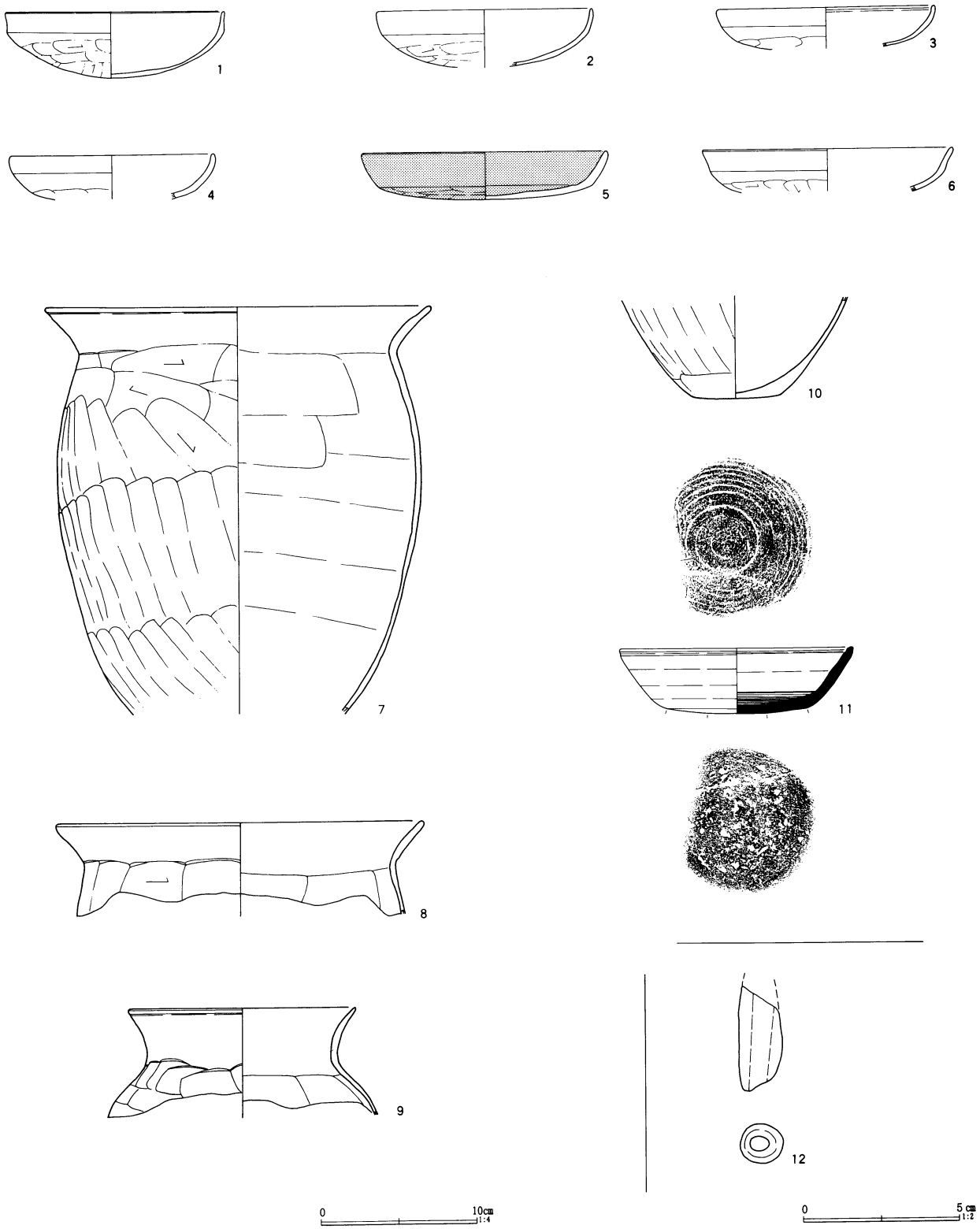
第21号住居跡P－1
1　暗褐色　(10YR3/3)
2　黒褐色　(10YR2/2)　砂層。

0　2m　1:60

7～10は、甕である。7は、カマド右袖に相当する部分に、伏せた状態で出土した。底部は欠損していた。9は、P1に、正位で出土したが、胴部以下を欠損していた。8・10は、覆土から出土した。

11は、須恵器坏である。末野産と考えられる。平底の底部で、口縁端部直下は、内外面とも工具または指（爪か）により沈線となっていた。底部は、外面は回転ヘラケズリ、内面には「ノタ目」が観察できた。

第89図　第21号住居跡出土遺物



第21号住居跡出土遺物観察表（第89図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	14.5	4.3		ABDEJ	4	橙	60%	カマド	
2	坏	(13.8)			ABDEFHJ	4	橙	20%	覆土	
3	坏	12.9			ABDEFJ	3	橙	口縁	覆土	
4	坏	13.8			ABDFJ	2	橙	20%	覆土	
5	坏	15.7	3.1		ABDFJ	2	橙	60%	SK1	内外面全面赤彩
6	坏	(16.0)			ABDEFJ	3	橙	破片	SK1	
7	甕	24.6			ABDEFJ	2	橙	下半部欠	右袖	
8	甕	(23.4)			ABEFJ	2	黄橙	口縁部	覆土	
9	甕	14.5			ABDEFJ	2	橙	口縁部	P1	
10	甕			(5.6)	ABDEFJ	2	橙		覆土	
11	坏	(14.8)	4.2	9.0	ABDHJL	3	灰黄褐	30%	覆土	内面底部「ノタ目」　末野

第21号住居跡出土土錘観察表（第89図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
12	(3.4)	1.4	0.6	5.72	Da他	にぶい赤褐色	80%	

第22号住居跡（第90・91図、図版21・29・43）

AP・AQ−21グリッドで検出した。

平面の形状は、長方形であった。

規模は、長軸5.28m、短軸4.20m、深さ0.48mであった。主軸方位は、N−65°−Eであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、硬く締まっていた。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、東壁の南寄りで検出した。燃焼部は、床面から10cm程掘り込まれていたが、煙道部との段差はなく、連続していた。煙突部は垂直に立ち上がっていた。天井部も残存していた。

また、カマドの両脇は、横幅3.0m、奥行0.65m、高さ0.35mにわたって掘り残され、住居内に張り出していた。この張り出し部のほぼ中央に、カマド燃焼部が掘り込まれていた。上面は平坦で、遺構確認面からの深さは12cm前後であった。この張り出し部は、カマド袖と、棚状施設を兼ねていたものと考えられる。

壁溝は、東壁を除き、全周していた。

また、住居南東隅で、径0.35mの円形のピットを検出した。検出位置から、貯蔵穴の可能性もあるが、明らかにできなかった。

遺構は、SJ23、SK40と重複していた。遺構の重複関係は、SJ23・SK40を壊していた。

出土遺物は、カマド及び覆土から、須恵器坏・高台坏・高台椀、土師器甕が出土した。また、鉄製品として、紡錘車・鉄鏃が出土した。

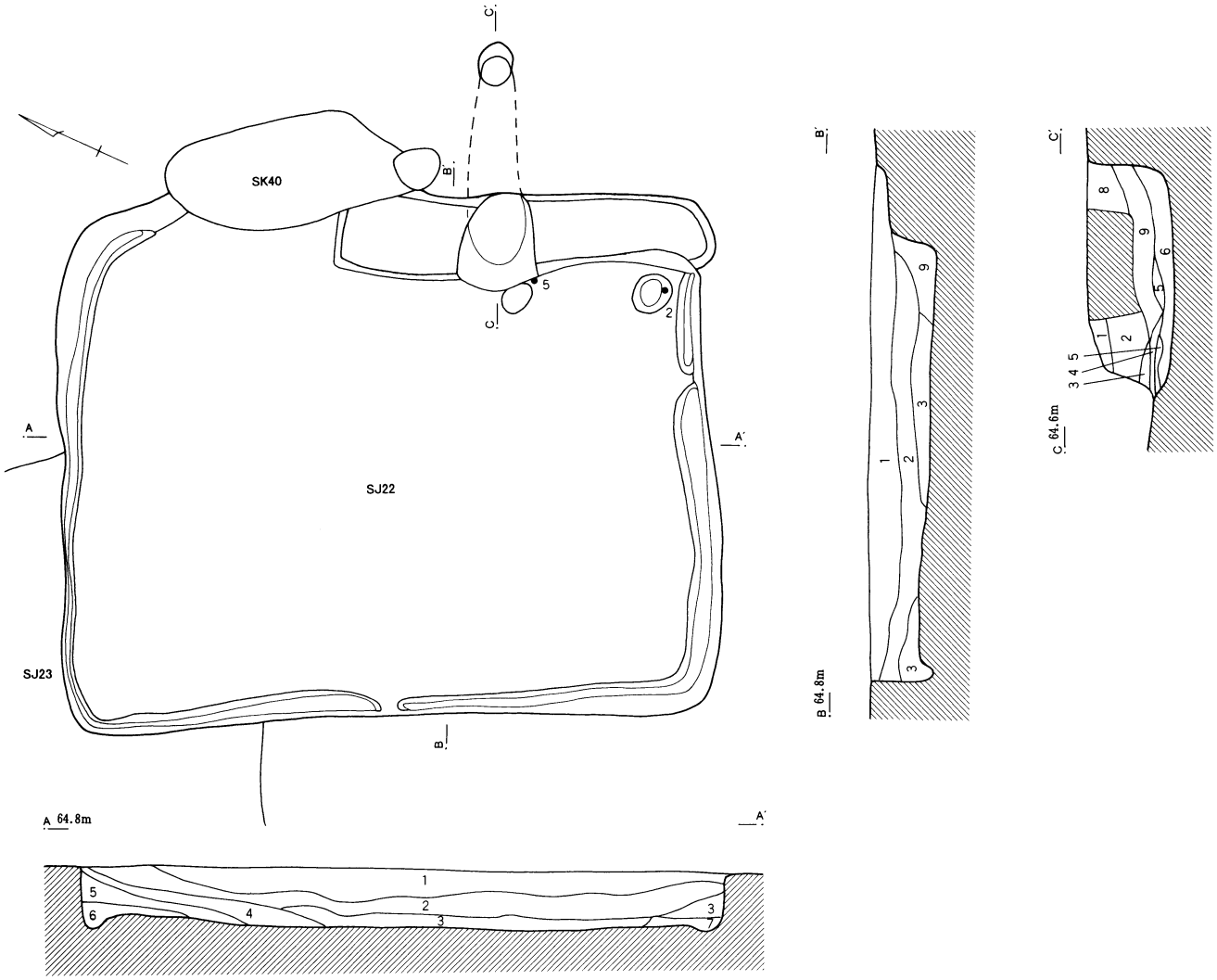
1～4は、須恵器坏である。4点とも覆土から出土した。1は、底部から口縁部にかけて器肉が厚く、均一であった。また、胎土に細かな砂粒を多く含んでおり、東金子産の可能性がある。底部の調整は、1～3までは、糸切後無調整、4は、底部周辺部へラケズリであった。4の底部には、墨書が認められた。判読が困難であったが、「束」または「東」と読める。

5～8は、高台付の椀または坏である。5以外は、底部の破片である。5は椀で、やや高い高台部から丸みをもって立ち上がる。口縁端部は強いつまみ上げによって大きく外側に開く。5・6はカマドから、7・8は覆土から出土した。

10は、鉄鏃である。本遺跡からは、漁労具としての土錘が多量に出土しており、本製品も鉄製の銛の可能性も否定できないが、ここでは鏃として報告する。鉄鏃は、茎部を欠損していた。全長は、現存長で5.6cm、鏃身幅2.4cm、厚さ0.4cmであった。重さは24.20gであった。

11は、鉄製紡錘車である。直径3.7cmの円形で、厚さは0.18cm、重さ8.25gであった。中央に径0.3cmの方形の孔があり、軸棒が孔の中に残存していた。

第90図　第22号住居跡



第 22 号住居跡

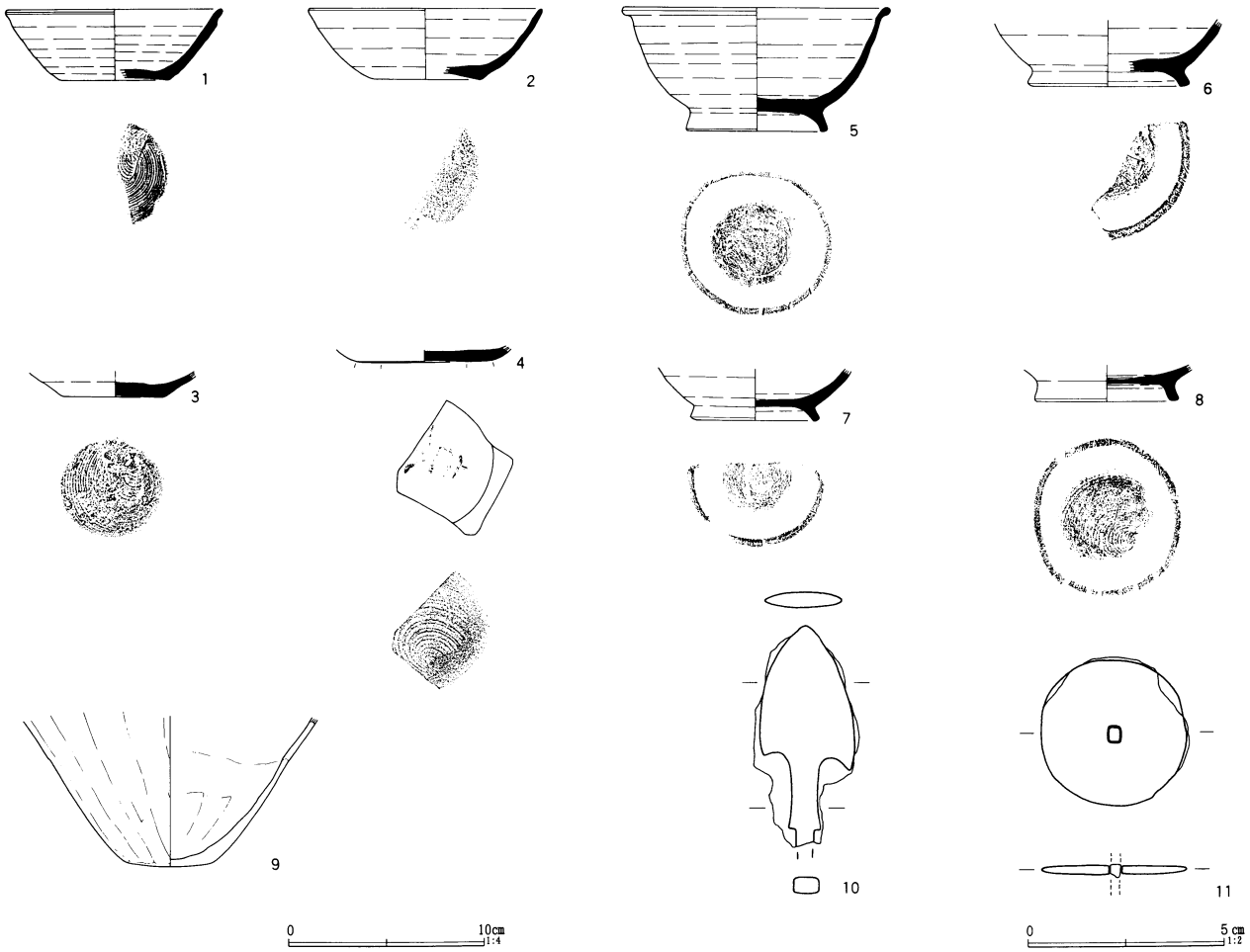
1　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ2～3 mm)まばら。
2　暗褐色　(10YR3/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～8 mm)多。
3　黒褐色　(10YR3/1)　黄灰色砂ブロック(φ5～8 mm)多量にまばらに含む。炭、焼土(φ1～3 mm)微。
4　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂粒(φ1～2 mm)多。
5　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～5 mm)と褐色土の混土層。
6　暗褐色　(10YR3/2)　黄灰色砂ブロック(φ1～3cm)をまばらに含む。
7　暗褐色　(10YR4/1)　黄灰色砂ブロック(φ2～5 mm)多。
8　暗褐色　(10YR4/1)　黄灰色粘土粒(φ1～2 mm)、炭化物(φ1～2 mm)微量。
9　暗褐色　(10YR4/1)　黄灰色土ブロック(φ5～8 mm)多。カマド焼土ブロック(φ3～5 mm)まばら。煙突からの流れ込み。

0　2 m　1:60

第22号住居跡出土遺物観察表（第91図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(11.0)	3.6	(5.6)	BJK	2	灰	25%	覆土	東金子？
2	坏	(11.8)	3.6	(5.8)	ABEFHJ	5	灰黄	20%	覆土	末野
3	坏			5.2	BDFJ	3	灰	底部	覆土	末野
4	坏			(7.0)	ABIJ	2	灰白		覆土	周辺ヘラ　墨書あり　南比企
5	高台椀	(13.5)	6.3	6.9	ABFJ	2	灰	50%	カマド	末野
6	高台坏			(7.5)	AEJ	3	にぶい黄橙	底部	カマド	末野
7	高台坏			6.0	AFJ	3	灰	底部	覆土	末野
8	高台坏			7.1	BHL	3	灰白	底部	覆土	末野
9	甕			4.5	BDEFJ	3	橙		カマド	

第91図　第22号住居跡出土遺物



第23号住居跡（第92・93図、図版22・29）

AP－21グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の北側と東側を、他の遺構に壊されていたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸4.86m、短軸4.52m、深さ0.24mであった。主軸方位は、N－62°－Eであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、P1を検出した。径0.25m、深さ0.30mであった。その他の柱穴については、遺構が他の住居に壊されていたため、検出できなかった。

カマドは、検出できなかった。

貯蔵穴は、検出できなかった。

壁溝は、北・西・南壁で検出した。東壁については、残存している部分で検出できなかったことから、壁溝は全周していなかったと思われる。

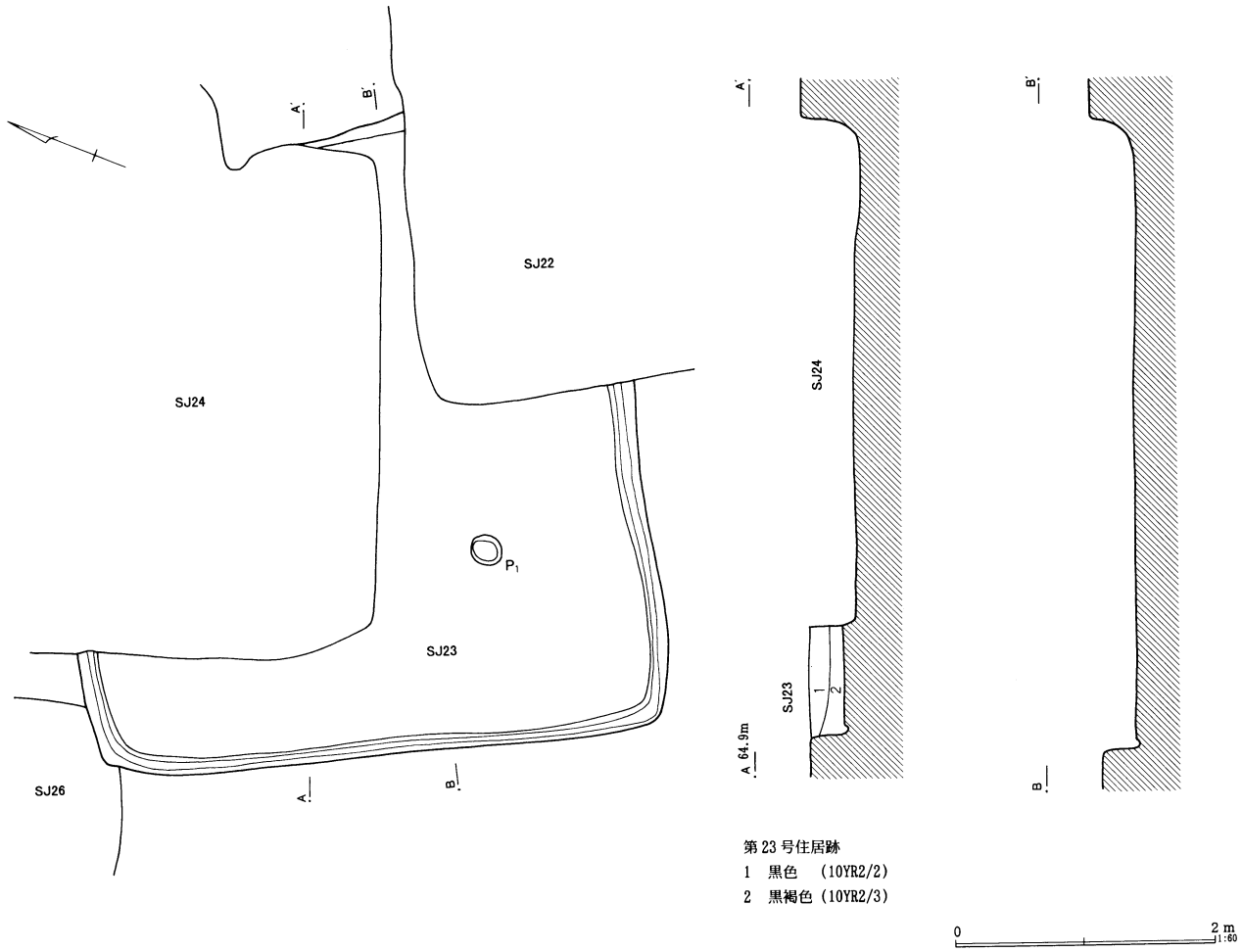
遺構は、SJ22・24・26と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察等から、SJ22・26に壊され、SJ26を壊していることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、古墳時代後期の土師器坏・壺が出土した。

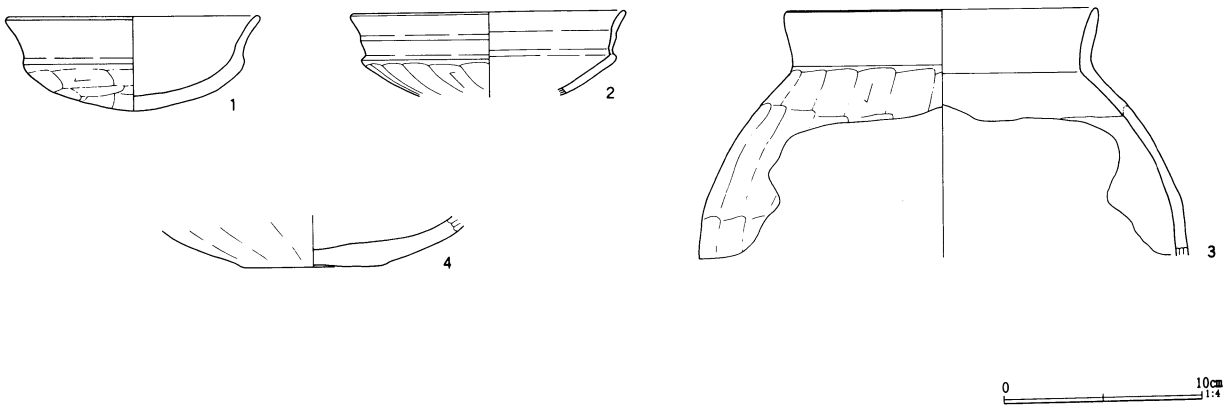
1・2は、坏である。1は、丸底の底部に大きく外反する口縁部を持つ。口縁部と底部の稜線は明瞭ではない。2は、口縁部に強いナデによる段を有する。

3・4は、壺である。3は、口縁部から胴部にかけての破片である。頸部の屈曲は弱く、口縁部はやや直立気味に立ち上がる。胴部は、外面が縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。4は、底部の破片である。

第92図　第23号住居跡



第93図　第23号住居跡出土遺物



第23号住居跡出土遺物観察表（第93図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.8)	4.8		BDEFJL	3	橙	40%	覆土	
2	坏	(13.8)			BDEFJL	3	橙	20%	覆土	
3	壺	(15.8)			BDEFHJKL	3	橙	口縁	覆土	
4	壺			7.4	BDEFHJKL	3	橙	底部	覆土	

第24号住居跡（第94・95・96図、図版22・29・39・40）

AP－21グリッドから検出された。

平面の形状は、東西に細長い長方形である。

規模は、長軸3.84m、短軸3.26m、深さ0.38mであった。方位は、N－67°－Eであった。

壁面は、概ね垂直に、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、硬く締まり、概ね平坦であった。

柱穴は、床面に柱穴状のピットを検出したが、柱穴かどうかは明らかにできなかった。

カマドは、住居の東壁で検出した。燃焼部は、皿状で、床面とのレベル差は殆ど認められなかった。煙道部は、燃焼部から段差なく水平に連続していた。煙突部は、概ね垂直に立ち上がっていた。また、天井部が残存していた。袖は、両側で検出した。

貯蔵穴は、検出できなかった。

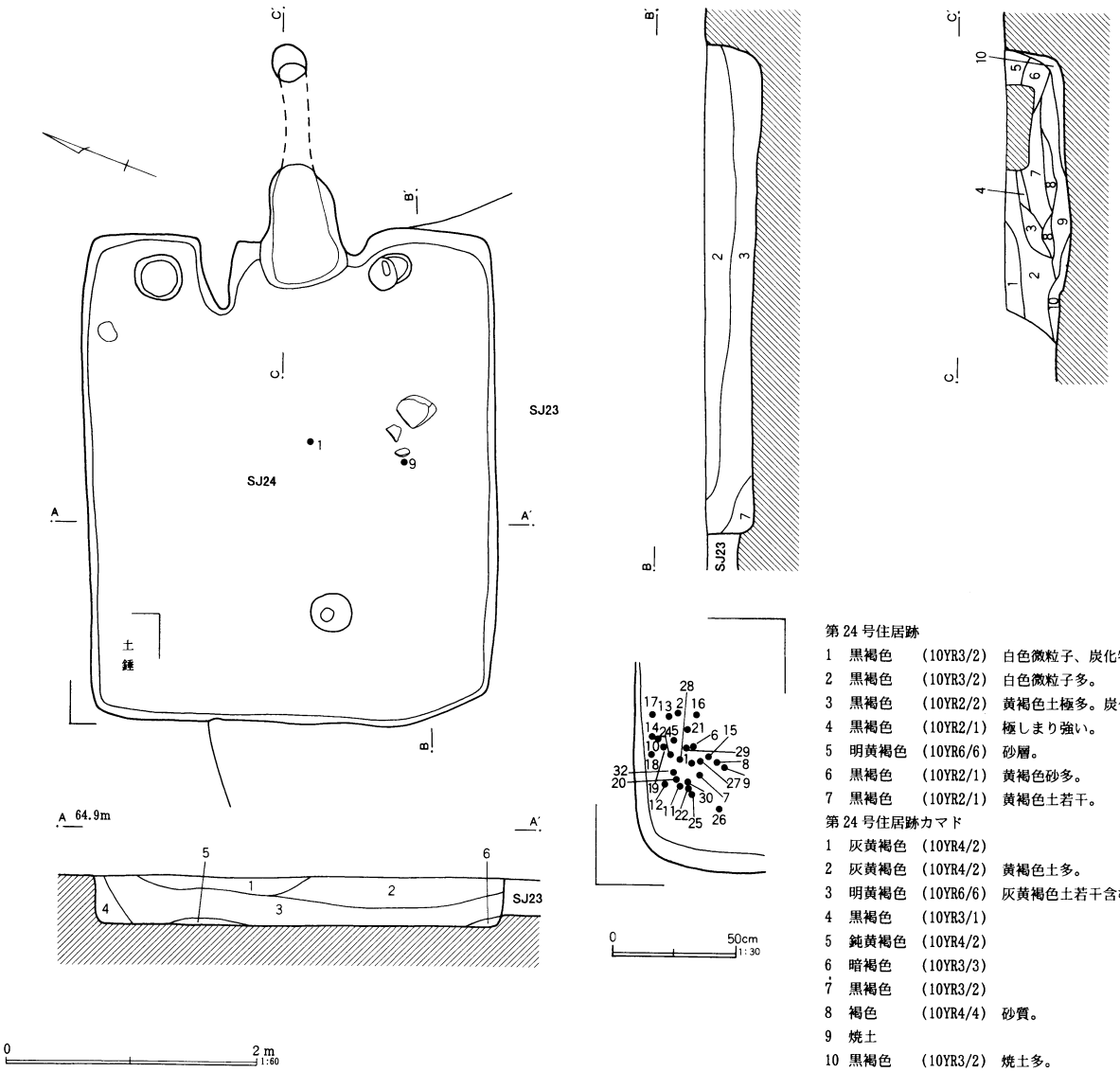
壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SJ23と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、SJ23を壊していることを確認した。

出土遺物は、住居覆土から、須恵器坏・高盤・長頸瓶、土師器台付甕が出土した。また、住居北西隅の床面及び覆土から、土錘が31点、覆土中から管玉が１点出土した。

１～６は、須恵器坏である。底部の調整は、１は糸

第94図　第24号住居跡



第24号住居跡

1　黒褐色　(10YR3/2)　白色微粒子、炭化物、焼土若干。
2　黒褐色　(10YR3/2)　白色微粒子多。
3　黒褐色　(10YR2/2)　黄褐色土極多。炭化物若干。
4　黒褐色　(10YR2/1)　極しまり強い。
5　明黄褐色　(10YR6/6)　砂層。
6　黒褐色　(10YR2/1)　黄褐色砂多。
7　黒褐色　(10YR2/1)　黄褐色土若干。

第24号住居跡カマド

1　灰黄褐色　(10YR4/2)
2　灰黄褐色　(10YR4/2)　黄褐色土多。
3　明黄褐色　(10YR6/6)　灰黄褐色土若干含む。
4　黒褐色　(10YR3/1)
5　鈍黄褐色　(10YR4/2)
6　暗褐色　(10YR3/3)
7　黒褐色　(10YR3/2)
8　褐色　(10YR4/4)　砂質。
9　焼土
10　黒褐色　(10YR3/2)　焼土多。

切後無調整、2は全面ヘラケズリ、3～6は周辺ヘラケズリであった。坏類は、全て覆土からの出土で、時期差のある遺物が混入していた。

4・5の底部外面には、墨書が認められた。4は「上」と判読できた。5は、上下二文字確認できた。上は、「力」または「九」と読めるが、下の文字よりも小さく、さらに判読できなかったが、その上に墨書の痕跡があることから、「力」または「九」は文字の旁であった可能性がある。下の文字は、今・令・衾・倉等の上部の「ひとがしら」と考えられるが、判読はできなかった。

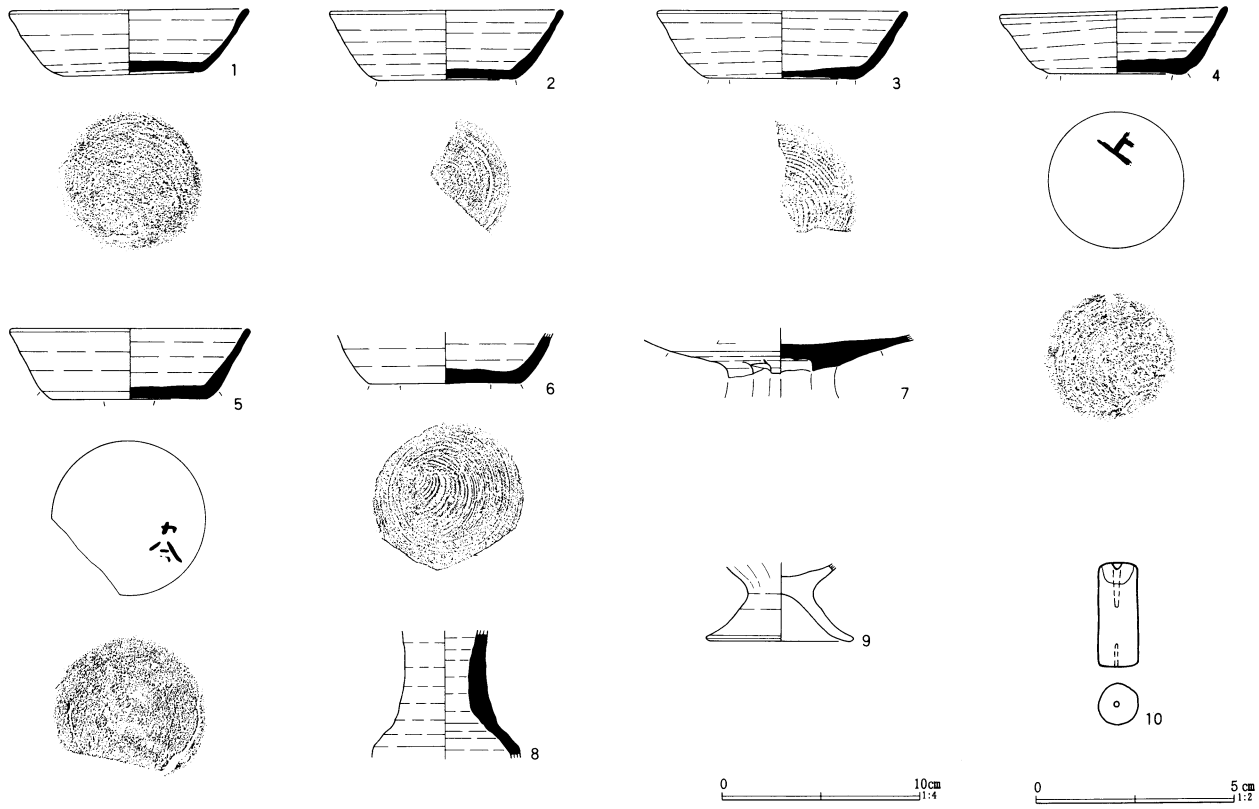
7は、高盤である。口縁及び脚部を欠損していたが、脚部の接合部付近に、方形の透孔が3箇所で観察できた。末野産と考えられる。

10は、管玉である。碧玉製で、端部の一部を欠損していた。長さ2.6cm、径1.0cm、重さは5.39gであった。両端から孔が穿たれるが、貫通しておらず、未製品と思われる。

土錘は、第96図11～41である。

13・14・33・41は覆土から、それ以外は住居北西隅床面から出土した。土錘は密集して出土したが、規則性は認められなかった。

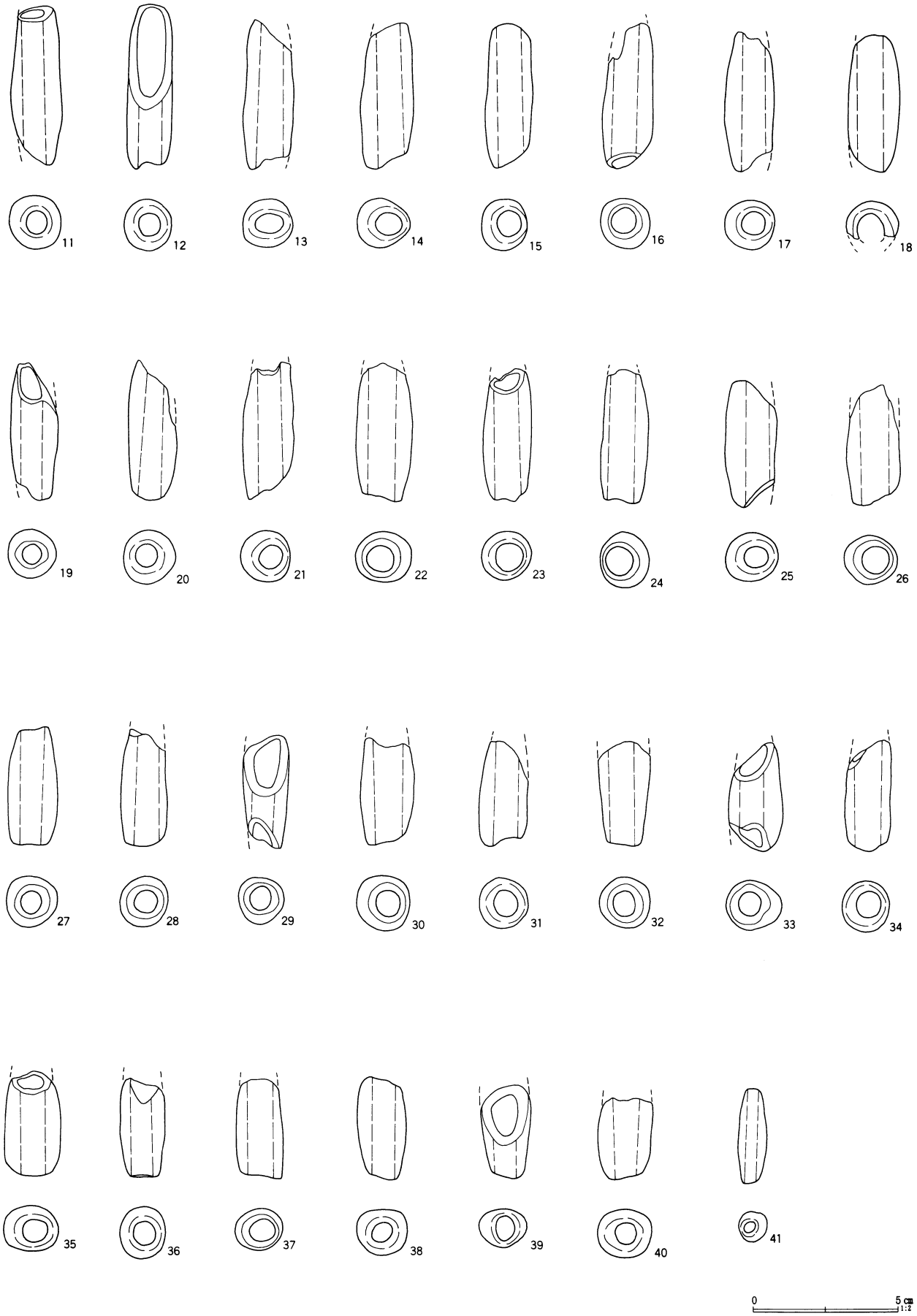
第95図　第24号住居跡出土遺物(1)



第24号住居跡出土遺物観察表（第95図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.0	3.3	7.0	ADEGJ	2	黒褐	100%	覆土	産地不明
2	坏	(12.8)	(3.5)	(7.0)	AFK	3	灰	25%	覆土	全面ヘラ　末野
3	坏	(12.4)	3.4	(7.4)	ADHJL	2	灰	20%	覆土	周辺ヘラ　末野
4	坏	11.4	3.2	6.7	ADJ	2	灰	80%	覆土	「上」墨書　周辺ヘラ　末野
5	坏	(12.0)	4.5	7.8	ABFJL	3	灰	60%	覆土	底部墨書　周辺ヘラ　末野
6	坏			7.6	ABIJ	2	灰	底部	覆土	周辺ヘラ　南比企
7	高盤				ABDEHJL	3	灰		覆土	透孔3ヶ所　末野
8	長頸瓶				BJ	1	暗灰		覆土	産地不明
9	台付甕			(7.2)	BDEFJ	3	橙	脚部	床面	

第96図　第24号住居跡出土遺物(2)



第24号住居跡出土土錘観察表（第96図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
11	5.5	1.8	0.8	14.75	BaⅣ	にぶい褐	90%	
12	5.6	1.6	0.8	11.81	Ba他	にぶい褐	70%	
13	5.1	1.7	1.0	12.04	Ba他	橙	80%	覆土
14	4.7	1.9	0.9	12.76	BaⅤ	にぶい褐	90%	覆土
15	5.0	1.6	0.9	12.28	BaⅤ	灰褐	95%	
16	(4.6)	1.7	0.9	13.10	BbⅤ	にぶい褐	95%	
17	4.8	1.7	0.8	11.69	BaⅤ	灰褐	90%	
18	4.7	1.8	0.7	8.19	BaⅤ	にぶい褐	50%	
19	4.1	1.6	0.7	11.18	Bb他	暗赤灰	60%	
20	4.7	1.8	0.8	11.32	BaⅤ	にぶい橙	60%	
21	(4.4)	1.8	0.8	12.54	Ba他	にぶい褐	80%	
22	(4.6)	1.9	0.9	12.47	Bb他	にぶい橙	80%	
23	(4.5)	1.7	1.0	10.46	BaⅤ	灰黄褐	90%	
24	(4.5)	1.7	0.9	12.35	BbⅤ	にぶい黄褐	90%	
25	4.4	1.8	0.8	12.70	BaⅥ	灰黄褐	80%	
26	3.9	1.8	0.9	9.61	Ba他	にぶい褐	70%	
27	4.1	1.8	0.7	11.99	BbⅥ	にぶい黄褐	95%	
28	(4.1)	1.7	0.9	10.33	BbⅥ	にぶい褐	95%	
29	3.9	1.6	0.9	7.19	Ba他	にぶい褐	60%	
30	(3.7)	1.9	0.8	11.34	Bb他	にぶい橙	70%	
31	(3.6)	1.7	0.8	9.26	Ba他	にぶい褐	80%	
32	(3.6)	1.8	0.8	9.45	Ba他	にぶい黄褐	80%	
33	(3.6)	1.9	0.8	8.43	BaⅥ	にぶい褐	80%	覆土
34	(3.6)	1.6	0.8	8.55	Bb他	灰褐	70%	
35	(3.6)	2.0	0.8	9.86	BbⅥ	にぶい褐	80%	
36	(3.3)	1.6	0.8	8.50	BaⅥ	灰褐	70%	
37	(3.9)	1.6	0.9	7.71	BbⅥ	灰褐	90%	
38	3.4	1.7	0.7	9.28	BaⅥ	灰褐	90%	
39	(3.2)	1.7	0.7	5.61	Ba他	にぶい褐	40%	
40	(2.8)	1.9	0.7	6.53	Ba他	にぶい褐	30%	
41	3.2	1.0	0.4	3.10	BaⅥ	にぶい黄橙	100%	覆土

第25号住居跡（第97・98図、図版22・23）

AQ−21グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の西側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸2.90m、深さ0.30mであった。主軸方位は、N−66°−Eであった。

壁面は、垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の黄褐色砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦で、硬く締まっていた。

柱穴は、床面からピットを1基検出したが、柱穴かどうかは明らかにできなかった。

カマドは、住居の東壁の南東隅に寄った位置で検出した。燃焼部は、床面との差はなく、浅い皿状となっていた。煙道は短く、外傾しながら上部へ立ち上がっていた。天井部は残存していなかった。袖は、カマドの左側で検出した。

壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。

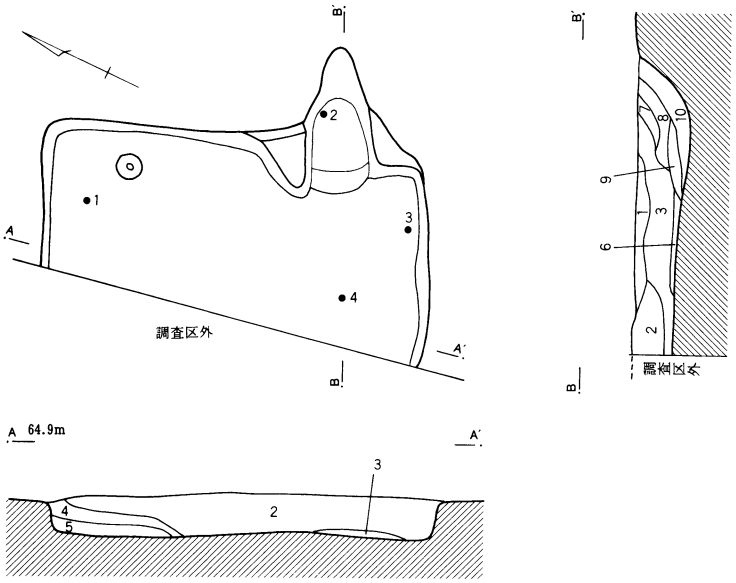
出土遺物は、覆土・カマドから、土師器坏・台付甕・須恵器坏が出土した。また、覆土中から、土錘が1点出土した。

1は、覆土から出土した。底部は平底気味で、直線的に外傾しながら立ち上がる。口縁部は、直立気味に上方へ立ち上がっていた。

2・3は、台付甕と考えられる。2は、口縁部の破片、3は脚部の破片である。2は、カマドから、3は覆土から出土した。

4は、須恵器坏である。南比企産と考えられる。底部の調整は、糸切後周辺へラケズリであった。

第97図　第25号住居跡

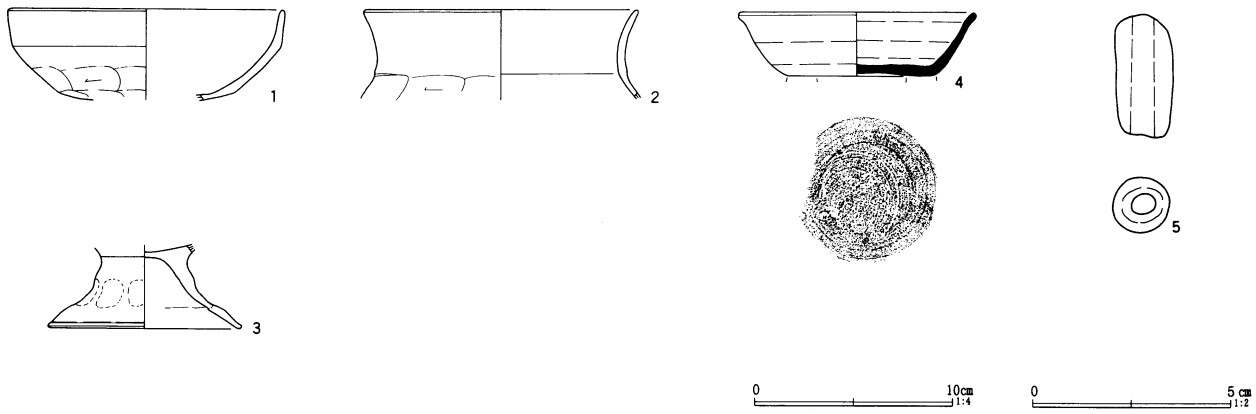


第 25 号住居跡

1　暗褐色　(10YR4/1)　黄褐色粘土ブロック(φ1～2 mm)まばら。
2　黒褐色　(10YR3/2)　黄灰色粘土ブロック(φ3～5 mm)やや多く、まばらに含む。
3　褐色土　(10YR4/2)　黄灰色粘土ブロック(φ3～5 mm)多。
4　黒褐色　(10YR2/3)
5　鈍黄褐色　(10YR4/3)
6　暗褐色　(10YR3/2)　焼土ブロック(φ1～2 mm)、炭(φ1～2 mm)少。
7　暗褐色　(10YR5/2)　黄灰色粘土ブロック(φ2～3 mm)少。
8　黄灰色　(10YR5/3)　焼土ブロック(φ2～3 mm)少。(落下した天井)
9　暗褐色　(10YR4/2)　焼土ブロック(φ8～10 mm)多。炭(φ2～3 mm)少。(落下した天井)
10　暗褐色　(10YR4/1)　灰多。焼土ブロック(φ5～8 mm)、炭(φ2～3 mm)多。(灰層)

0　2 m 1:60

第98図　第25号住居跡出土遺物



第25号住居跡出土遺物観察表（第98図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	13.8			ABDEFJ	3	橙	60%	覆土	
2	台付甕	13.9			BDEFJ	3	橙	口縁	カマド	
3	台付甕			9.7	ABDJ	2	橙	脚部	覆土	
4	坏	11.9	3.2	7.6	ABFIJL	2	灰	60%	覆土	周辺ヘラ　南比企

第25号住居跡出土土錘観察表（第98図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
5	3.0	1.9	0.6	6.86	Da他	黒褐	90%	

第26号住居跡（第99図、図版22）

AP－20・21グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の西側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸2.70m、深さ0.43mであった。主軸方位は、N－19°－Wであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦で、堅く締まっていた。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、検出できなかった。

貯蔵穴・壁溝等も検出できなかった。

遺構は、SJ23と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、SJ23に壊されていた。

出土遺物は、古墳時代の土師器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土なかった。

遺構の時期は、遺物が出土しなかったため、明らかにできなかったが、重複するSJ23出土遺物が、古墳時代後期に属するため、古墳時代後期でも、SJ23よりも古い時期のものと思われる。

第27号住居跡（第100・101図、図版22・30）

AP－21グリッドから検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、住居の東側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなった。

また、遺構は、一部攪乱をうけていた。

規模は、長軸3.58m、深さ0.40mであった。主軸方位は、N－19°－Wであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、平坦で、堅く締まっていた。

柱穴は、検出できなかった。

カマド、貯蔵穴、壁溝等の付属施設は検出できなかった。

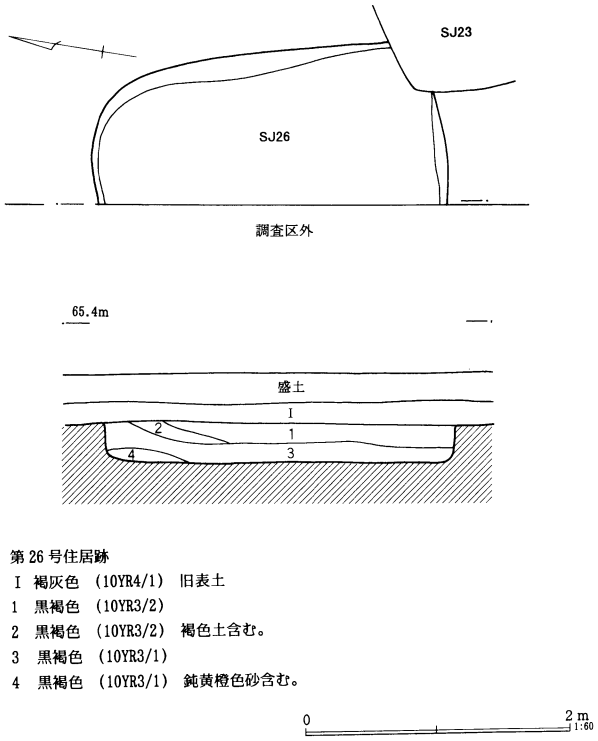
また、住居北壁で、張り出し部を検出した。重複する他の遺構とも考えられたが、床面が同レベルで連続し、土層断面にも重複が認められなかったことから、SJ27の施設の一部と考えた。

出土遺物は、覆土・床面から、須恵器坏３点が出土した。

１は、末野産と考えられる。底部の調整は、糸切後全面回転ヘラケズリであった。また、底部外面には、墨書が認められた。墨書は縦に並ぶ2文字を確認したが、上の文字は判読できなかった。下の文字は、「内」と読めた。

２は、産地は明らかにできなかった。底部の調整は、

第99図　第26号住居跡



糸切後、底部周辺部及び体部下端に回転ヘラケズリを施していた。

３は、底部の破片である。末野産と考えられるが、底部の調整は、糸切後、底部周辺部に手持ちヘラケズリが施されていた。

第28号住居跡（第102・103図、図版22・33）

AY・AZ－19グリッドで検出した。

平面の形状は、四隅がやや丸みを帯びた、歪んだ方形であった。

規模は、長軸4.94m、短軸4.24m、深さ0.36mである。主軸方位は、N－47°－Wであった。

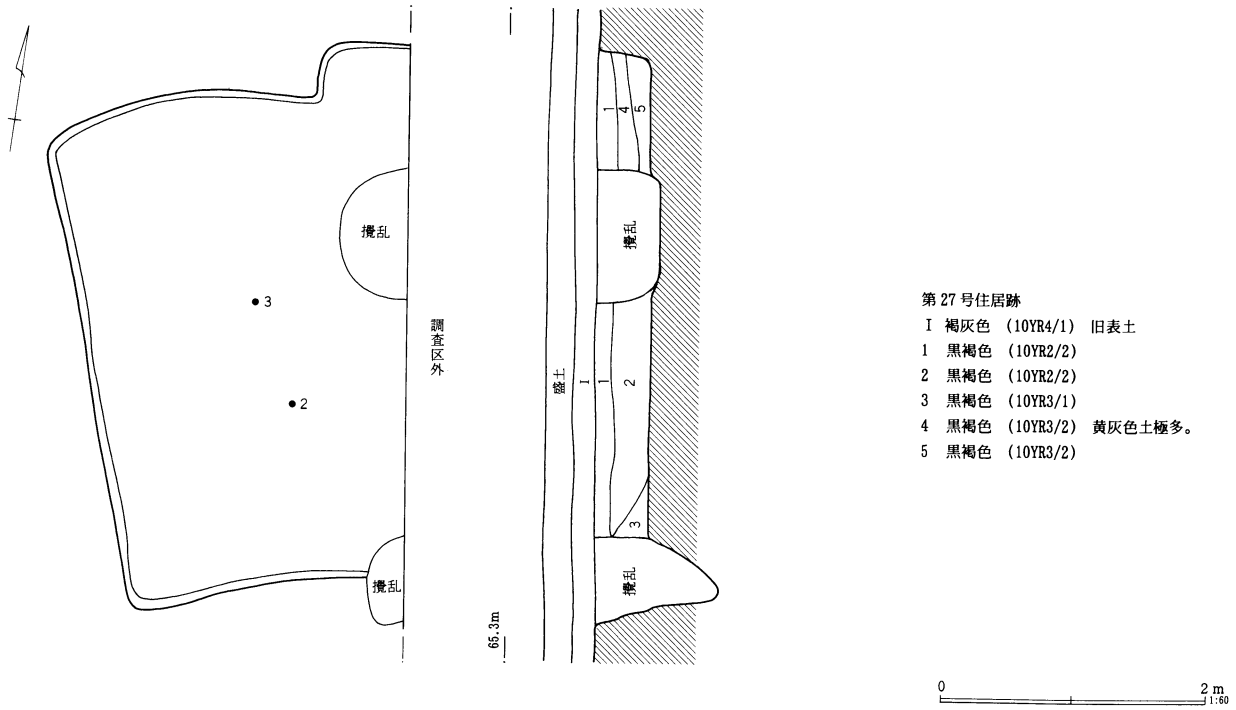
壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

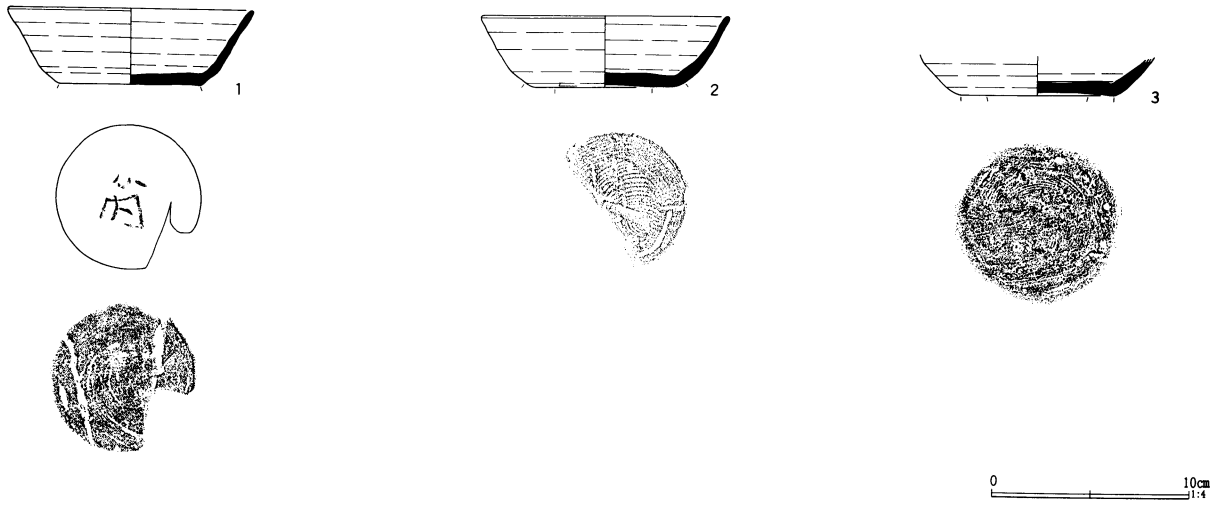
柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居北壁で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていた。煙道部は短く、階段状に傾斜していた。煙突部では、垂直に立ち上がっていた。天井部は、僅かではあったが残存していた。袖は、両側で検出した。

第100図　第27号住居跡



第101図　第27号住居跡出土遺物



第27号住居跡出土遺物観察表（第101図）

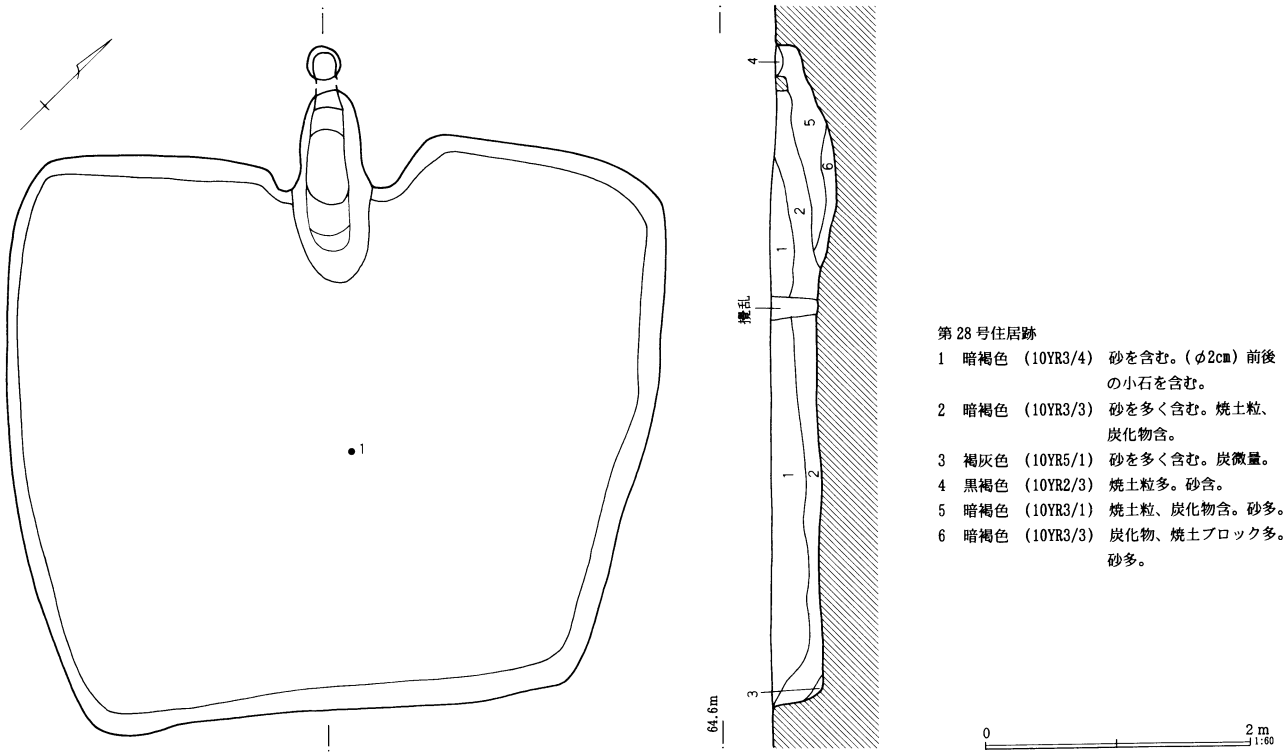
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.3	3.8	7.4	ABDFJ	3	黄灰	60%	覆土	全面ヘラ　墨書あり　末野
2	坏	(12.4)	3.6	7.2	ABDFJ	1	青灰	25%	床面	周辺・下端部ヘラ　産地不明
3	坏			7.8	ABJK	3	灰黄	底部	床面	周辺手持ちヘラ　末野

壁溝、貯蔵穴等の付属施設は検出できなかった。

出土遺物は、覆土中から、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は、須恵器壷１点のみであった。

１は、須恵器壷である。口縁部から胴部上位にかけて残存していた。頸部の屈曲は弱く、やや外反しながら立ち上がっていた。口縁端部では、垂直に立ち上がり、内面は強いナデにより、端部直下が沈線状となっていた。胴部外面は、平行叩きの後横ナデが施され、対応する内面には、当て具痕が明瞭に観察できた。当

第102図　第28号住居跡



第28号住居跡出土遺物観察表（第103図）

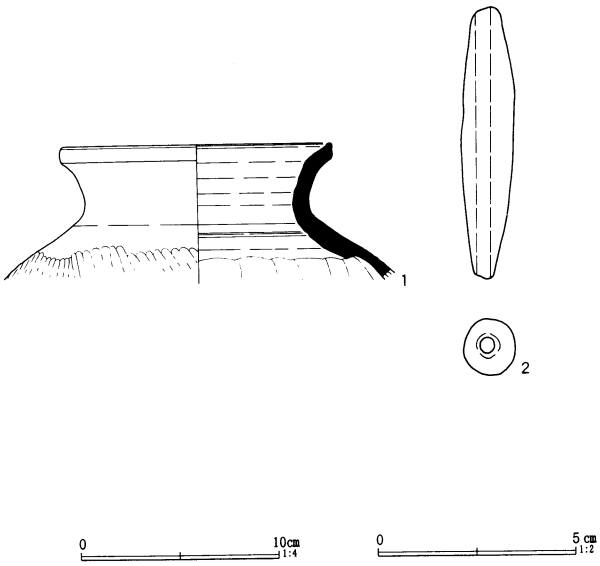
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壷	13.7			ABDFJL	3	赤褐	口縁部	覆土	末野？

第28号住居跡出土土錘観察表（第103図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
2	6.8	1.3	0.4	12.26	CaIII	にぶい橙	100%	

て具は、器面に深く抉るように当たり、厚さが口縁部の半分以下となっていた。須恵器の産地は、胎土の特徴から、末野産と考えられる。

第103図　第28号住居跡出土遺物



第29号住居跡（第104・105図、図版22・42）

Z－19グリッドで検出した。

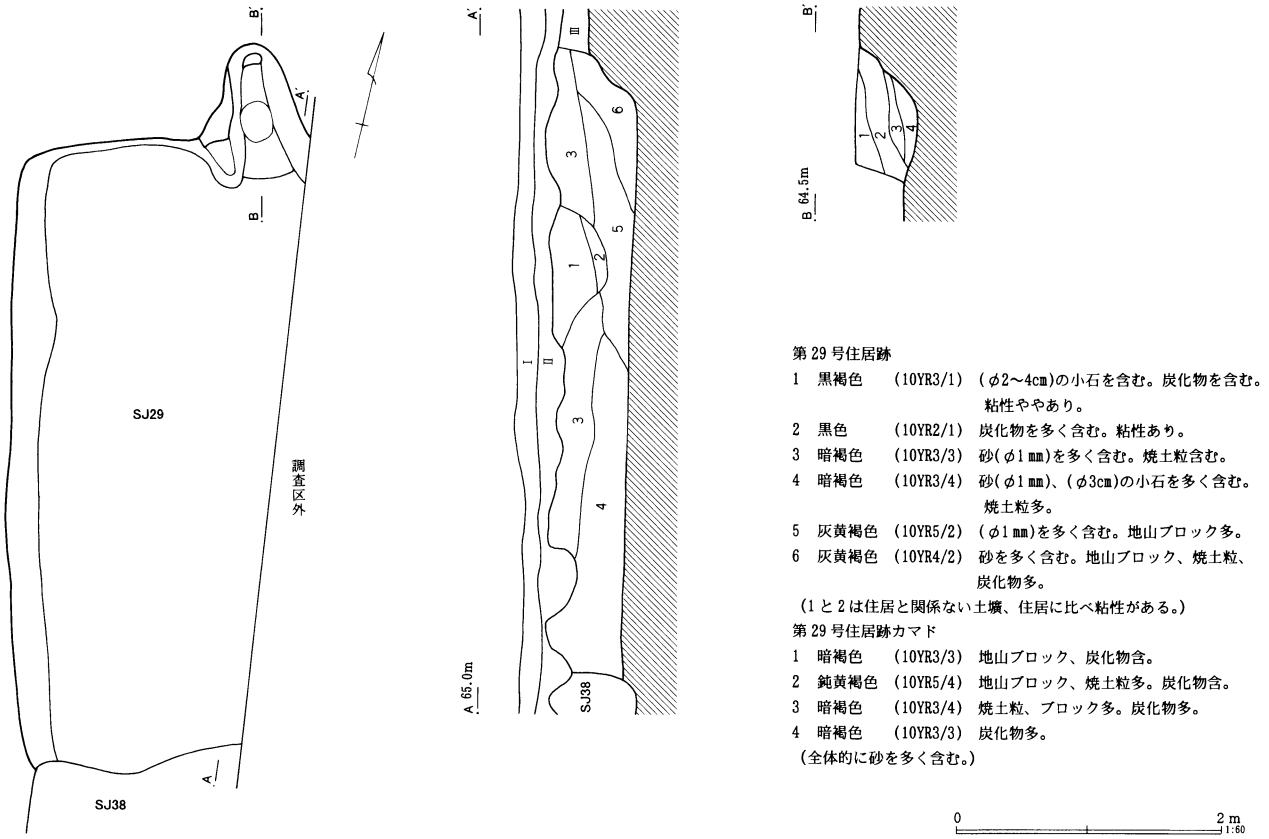
平面の形状は、方形であると思われるが、住居の南側をSJ38に壊され、東側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、深さ0.37mであった。主軸方位は、N－15°－Wであった。

壁面は、やや外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

第104図　第29号住居跡



第29号住居跡出土土錘観察表（第105図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	7.2	2.4	0.5	30.87	Cb他	橙	80%	

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居の北側で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれていた。煙道部は短く、燃焼部から外傾しながら立ち上がっていた。天井部は残存していなかった。袖は、カマド両側で検出したが、右側は、大部分が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

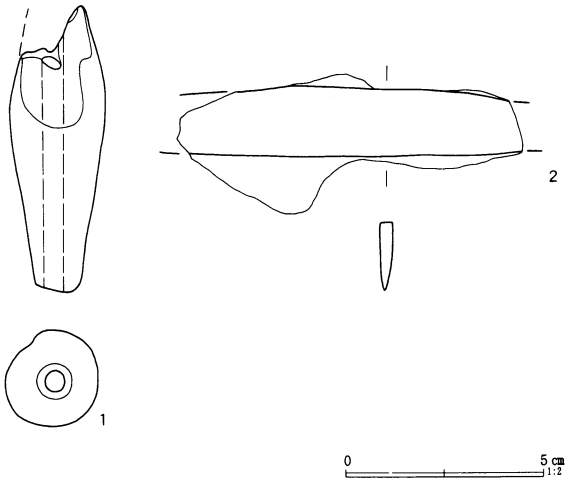
貯蔵穴、壁溝等は、検出できなかった。

遺構は、SJ38と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、本遺構がSJ38に壊されていることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は、土錘１点と、鉄製品として刀子１点のみであった。

２の刀子は、刃部の破片で、切先と茎を欠損していた。大きさは、現存長8.7cm、刃部幅1.7cm、背幅0.35cmであった。重さは44.6gであった。風化・錆が著しく、観察が困難であった。

第105図　第29号住居跡出土遺物



第30号住居跡（第106・107図、図版23・30・37）

Z・AA－19グリッドで検出した。

平面の形状は、四隅がやや丸みを帯び、歪んだ正方形であった。

規模は、長軸4.46m、短軸4.12m、深さ0.50mであった。主軸方位は、N－10°－Wであった。

壁面は、やや外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居の北壁で検出した。燃焼部は、浅い皿状であった。煙道部は短く、階段状に立ち上がっていた。天井部は残存していなかった。袖は、両側で検出した。

貯蔵穴は、検出できなかった。

壁溝は、住居の東壁で検出したが、他の壁際からは検出できなかったことから、全周はしていなかったものと思われる。

遺構は、SJ37と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、SJ37に壊されていることを確認した。

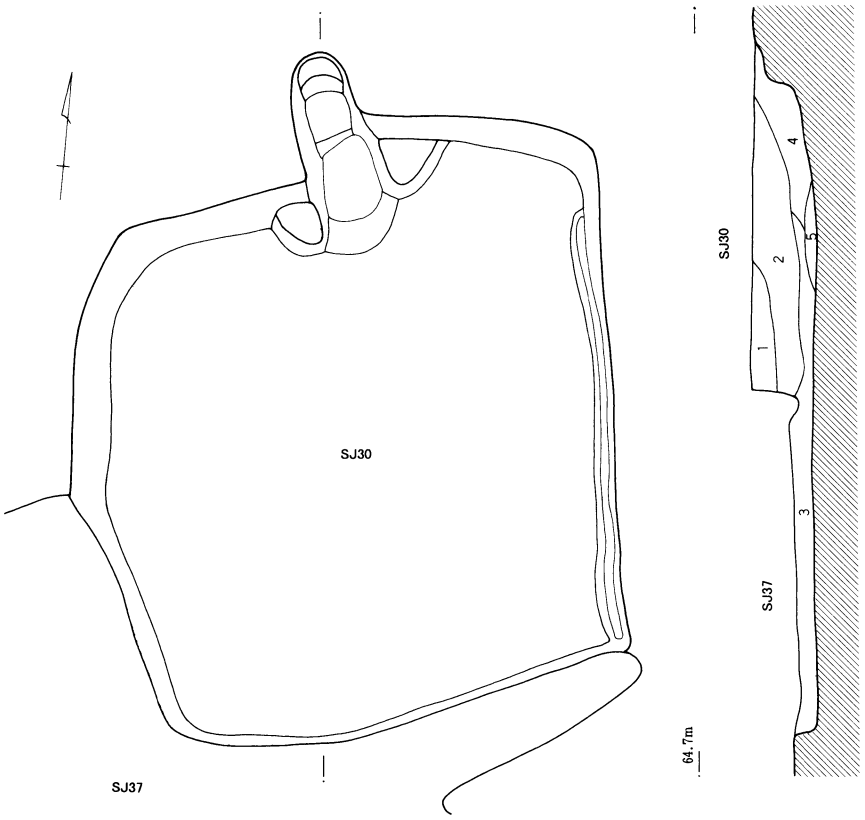
出土遺物は、覆土の上面から須恵器坏、土師器甕、土錘１点が出土した。遺物は、本遺構より新しいSJ37出土遺物より様相が新しく、さらに覆土上面からの出土であることから、本遺構に伴う遺物とは考えにくく、他からの混入の可能性もある。

１は、須恵器坏である。平底の底部から、やや丸みを持って立ち上がる。底部の切り離しは、ヘラ切りで、その後ケズリは施されず、ナデ仕上げである。

２・３は、土師器甕である。２は、口縁部が大きく外側に開く。胴部外面は、斜めまたは縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。

３は、口縁端部内面に、強いナデによる沈線が認められた。胴部外面は、縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデが施されていた。

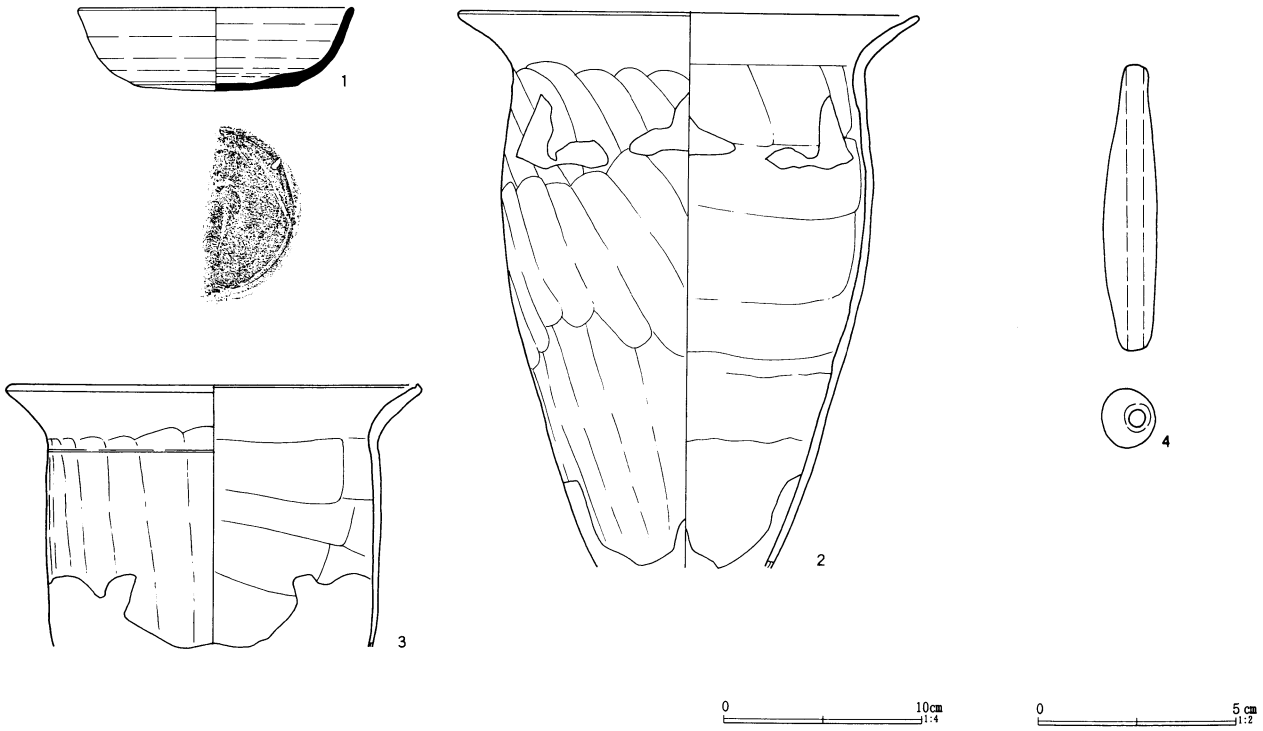
第106図　第30号住居跡



第30号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR5/4)　地山ブロック、焼土粒含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック、砂を含む。炭化物少量含む。
3　鈍黄褐色　(10YR5/4)　地山ブロック多。炭化物、砂を含む。
第30号住居跡カマド
4　黒褐色　(10YR2/3)　焼土粒、ブロック、炭化物多。地山ブロック含。
5　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物、焼土粒多。

0　2 m　1:60

第107図　第30号住居跡出土遺物



第30号住居跡出土遺物観察表（第107図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(13.9)	4.2	8.4	ABFJL	2	灰白	50%	覆土	ヘラ切り後ナデ　末野？
2	甕	(23.1)			ABDEFJL	3	浅黄橙	50%	覆土	
3	甕	(20.6)			ABDEFJ	2	橙	口縁	覆土	

第30号住居跡出土土錘観察表（第107図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
4	7.2	1.4	0.4	15.62	CaIII	褐灰	100%	

第31号住居跡（第108・109図、図版23・33・38）

W－18・19グリッドで検出した。

本遺構は、新旧２軒の住居跡が重複していた。

住居南壁に、張り出し状になる部分があるが、土層断面の観察により、他の住居であることが明らかとなった（住居13・14層）。しかし、住居の主軸方位が同一であることと、床面のレベルが同じであることから、同一住居の建て替えの可能性があり、新たに住居番号は付さなかった。

平面の形状は、四隅がやや丸みを帯びた正方形に近い住居である。

規模は、長軸4.40m、短軸4.22m、深さ0.40mであった。主軸方位は、N－89°－Eであった。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、地山の砂質土で、貼床は検出できなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、床面からピットを８基検出したが、主柱穴とは考えにくい。

カマドは、住居の東壁で検出した。燃焼部は土壙状に掘り込まれ、煙道部は長く住居外に伸びていたが、テラス状とはならずに斜めに立ち上がっていた。天井部は残存していなかった。

壁溝は、カマドの周囲を除き、住居をほぼ全周していた。

貯蔵穴は、カマドの南西側の離れた位置で検出した。この貯蔵穴は、土層断面の観察では、住居の壁溝（貯蔵穴１層）に壊されており、古い住居跡に伴うもので

あると思われる。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器盤・蓋が出土した。また、土錘が11点出土した。

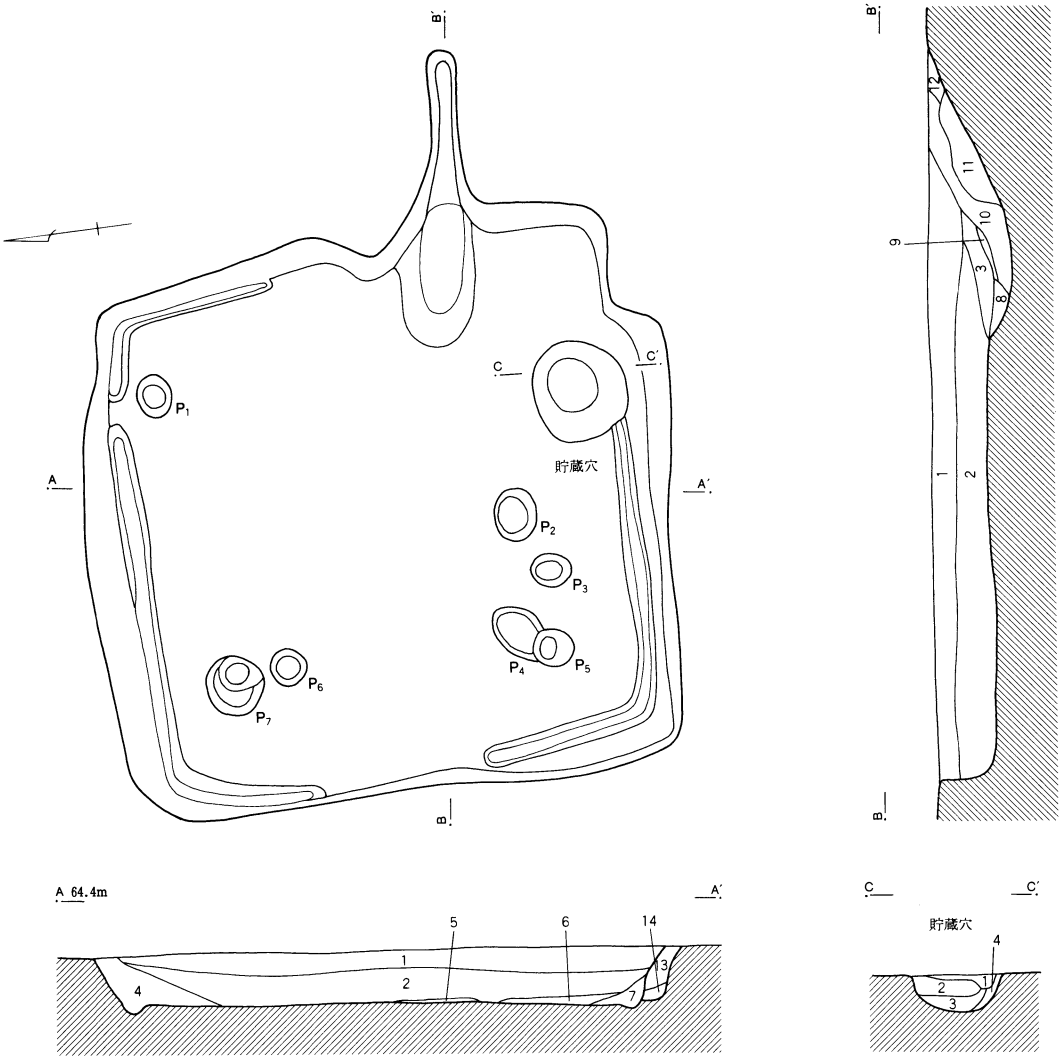
1は、土師器坏である。底部は丸底で、口縁部は外反しながら短く立ち上がる。口縁部のナデは弱く、底部との境界の稜は明瞭でない。底部のケズリは、口縁直下まで及んでいないが、部分的に小刻みなヘラケズリが施されていた。カマドから出土した。

2は、土師器甕である。小型で、台付甕の可能性がある。外面口縁端部直下は、強いヘラナデにより、ヘラの上端の痕跡が明瞭である。

3は、小型の坏である。手捏ね風で、口縁部は外面上端を指ナデ、下半部と底部にヘラケズリが施されていた。内面はヘラナデが施されていた。覆土中から出土した。

4・5は、破片で、覆土中から出土した。

第108図　第31号住居跡

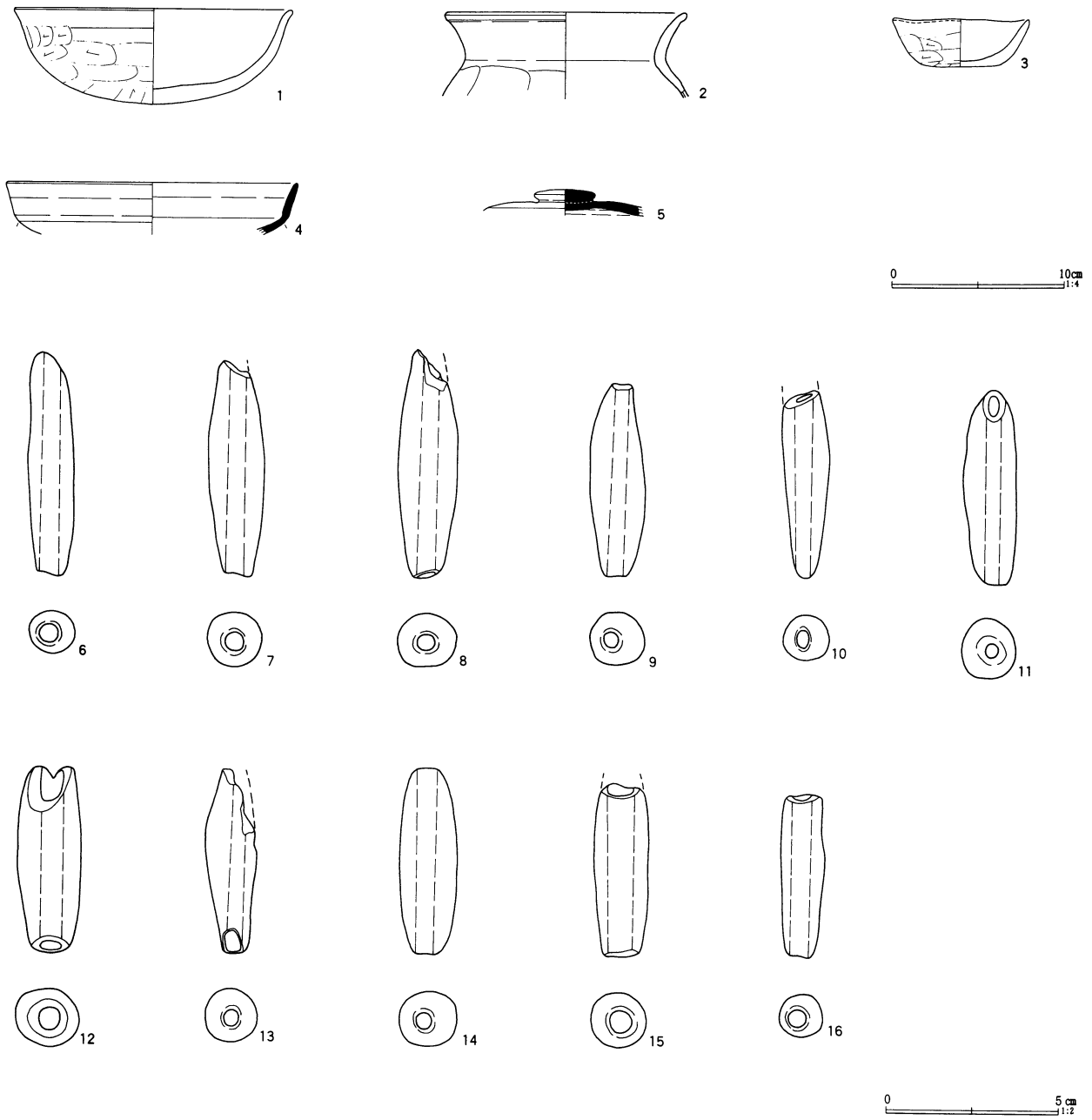


第31号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　やや砂質。
2　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物粒、鈍黄橙色土多く含む。締まり強く粘性。
3　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物粒僅か。
4　黒褐色　(10YR3/1)　やや砂質。
5　灰層
6　暗褐色　(10YR3/3)　灰多。
7　灰黄褐色　(10YR4/2)　灰白色粘土含む。
8　暗褐色　(10YR3/3)　焼土、灰多。締まり強く粘性。
9　焼土層
10　暗褐色　(10YR3/3)　焼土多く含む。締まりあり。
11　暗褐色　(10YR3/3)　焼土若干。やや砂質。
12　黒褐色　(10YR3/2)　灰、焼土含む。
13　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物粒、黄褐色土含む。やや砂質。
14　鈍黄褐色　(10YR4/3)　締まりあり。

第31号住居跡貯蔵穴
1　黒褐色　(10YR3/1)　やや砂質。(住居4層に同じ)
2　鈍黄褐色　(10YR5/4)
3　灰黄褐色　(10YR4/2)　焼土極多。
4　明黄褐色　(10YR6/6)

0　2m　1:60

第109図　第31号住居跡出土遺物



第31号住居跡出土土錘観察表（第109図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
6	6.5	1.3	0.5	10.57	AaIII	褐灰	100%	
7	6.3	1.6	0.5	14.26	BaIV	にぶい黄橙	90%	
8	6.6	1.7	0.5	14.91	CaIII	橙	90%	
9	5.6	1.6	0.5	12.54	CaIV	にぶい黄橙	100%	
10	(5.5)	1.3	0.4	8.16	Ca他	にぶい橙	80%	
11	5.7	1.6	0.4	14.69	BaIV	明赤褐	90%	
12	5.4	1.8	0.6	14.67	BbV	橙	90%	
13	5.4	1.5	0.4	9.86	Ca他	にぶい黄橙	80%	
14	5.4	1.7	0.5	14.88	BaV	橙	100%	
15	(5.0)	1.6	0.7	13.20	Ba他	明赤褐	70%	
16	4.7	1.8	0.5	6.96	Aa他	にぶい橙	70%	

第31号住居跡出土遺物観察表（第109図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(16.0)	5.5		ABDEFJKL	2	橙	40%	カマド	
2	甕	(14.0)			ABDEFJ	3	橙	口縁	カマド	
3	坏	(7.9)	2.8	(4.8)	ABEJKL	3	黒	25%	覆土	
4	盤	15.8			ABDEFJ	3	灰		覆土	南比企
5	蓋				ABDEFHJ	4	浅黄	破片	覆土	末野

第32号住居跡（第110・111図、図版23）

W－19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の東側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸3.80m、深さ0.56mであった。主軸方位は、N－11°－Eであった。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、地山の黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦で、堅く締まっていた。

カマドは、検出できなかったが、調査区外へ展開する北壁もしくは東壁に構築されていたと考えられる。

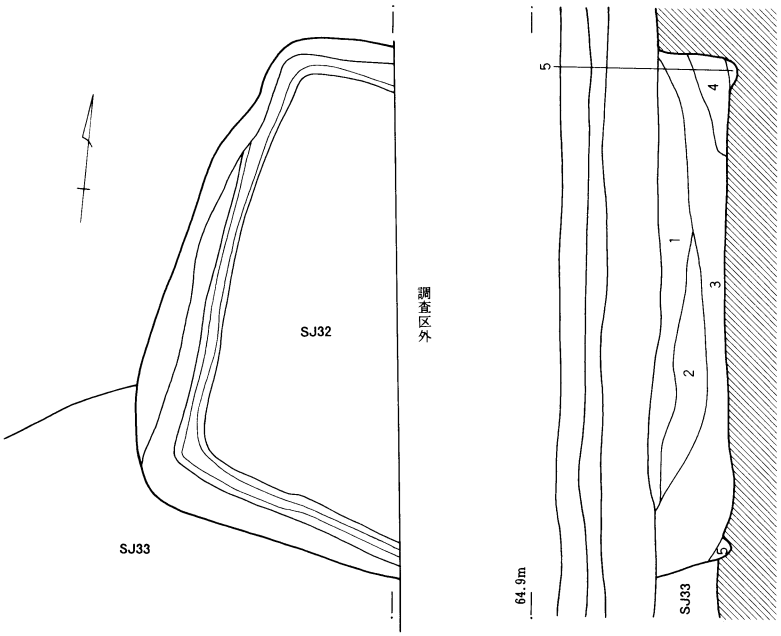
貯蔵穴は、検出できなかった。

壁溝は、確認できた範囲で全周していた。

遺構は、SJ33と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察から、本遺構が、SJ33を壊していることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、平安時代の土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は、須恵器高

第110図　第32号住居跡



第32号住居跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　焼土ブロック、炭化物を含。地山ブロック多。
2　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック、炭化物多。
3　黒褐色　(10YR3/2)　焼土ブロック、地山ブロック、炭化物多。
4　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック多。
5　黒褐色　(10YR3/1)　地山ブロック含。

0　2 m　1:60

第32号住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	高台坏			6.5	ABFJ	2	灰	底部	覆土	産地不明

第32号住居跡出土土錘観察表（第111図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
2	4.6	1.5	0.6	6.81	BaV	明赤褐	70%	

台付坏１点と、土錘１点のみであった。

１は、須恵器高台付坏である。底部の破片である。高台部はやや高く、高台端部は強いナデによる沈線が認められた。焼成は良好だが、産地は明らかにできなかった。

第33号住居跡（第112・113図、図版23・30・42）

W・X－19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の北側をSJ32に壊され、東側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸4.84m、深さ0.54mであった。主軸方位は、N－19°－Wであった。

壁面は、大きく外傾しながら立ち上がっていたため、崩落した可能性がある。

床面は、地山の砂質土で、貼床は施されていなかったが、平坦で、堅く締まっていた。

また、床面直上には、部分的に灰と炭の層が薄く堆積していた。

柱穴は、床面からP1・P2の２基検出した。この2基に対応する他の柱穴は、調査区外に展開し、明らかにできなかったが、本来は、４本柱穴の住居跡であったと思われる。

柱掘り方の規模は、径0.70m～0.80mの円形で、深さ0.35m～0.40mであった。掘り方底面には、さらに径0.30m前後の小穴が掘り込まれ、柱穴土層断面の観察では、柱痕の位置に対応することから、この小穴に柱本体が設置されたものと考えられる。

掘り方覆土は、黒褐色、灰黄褐色の砂を主体とし、堅く締まっていた。

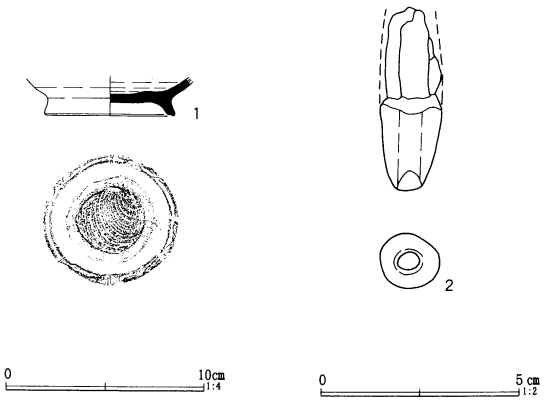
カマドは、検出できなかったが、調査区外に展開する東壁、またはSJ32に壊された北壁に設けられていたものと思われる。

貯蔵穴は、検出できなかった。

壁溝は、検出した範囲では全周していた。

出土遺物は、P1及び覆土から、土師器坏・甕、須恵器坏・盤が出土した。また、土錘１点と、鉄製品として刀子１点が出土した。

第111図　第32号住居跡出土遺物



１・２は、土師器坏である。

１は、P1掘り方から出土した。口縁部は、ナデにより弱い段を有する。

２は、覆土から出土した。底部は丸底で、口縁部は短く立ち上がる。内外面とも、器面が荒れ、調整の観察が困難であったが、内面に暗文が認められた。

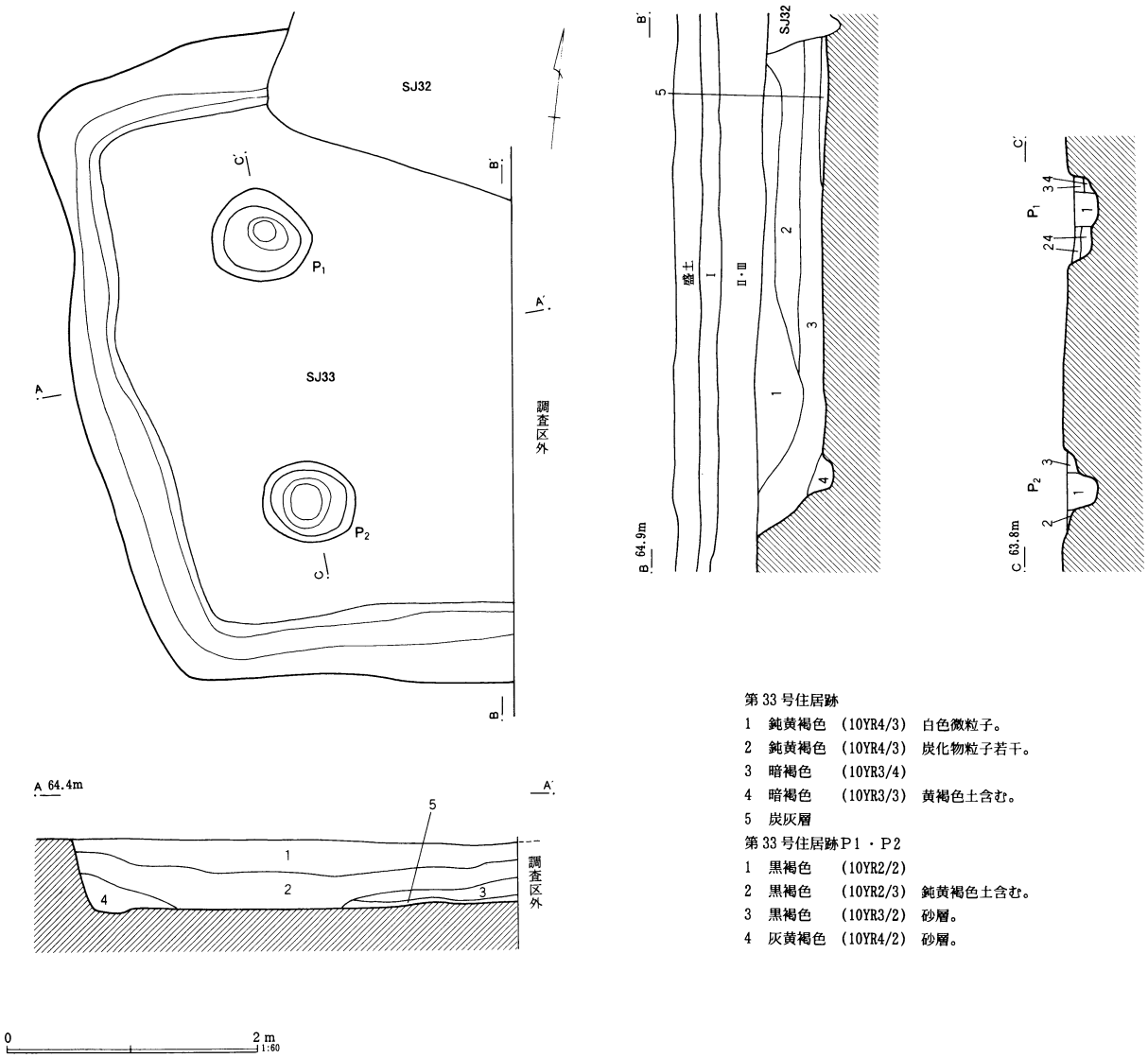
３は、土師器甕である。覆土から出土した。口縁部の破片である。直立気味の胴部から、大きく外側に開く口縁部を有する。内面口縁端部直下は、強いナデにより、沈線状となっていた。胴部外面は、縦方向のヘラケズリが施されていた。

４は、須恵器坏である。覆土中から出土した。口縁部の破片である。底部は丸底で、やや丸味をもって立ち上がる。口縁部下端部からヘラケズリされ、底部との境界が明瞭でない。ケズリは、小刻みな手持ちヘラケズリである。胎土に、細かな砂粒・石英等を含んでいたが、産地は明らかにできなかった。

５は、須恵器盤の破片である。覆土中から出土した。口縁部は丸味をもって立ち上がり、端部は外反する。口縁下端部と底部はヘラケズリされるが、強く削られたため、ケズリの境界が明瞭な稜となっていた。胎土の特徴から、末野産と考えられる。

７の刀子は、覆土から出土した。刃部の破片で、切先と茎を欠損していた。大きさは、現存長で7.2cm、刃幅1.1cm、背幅0.35cmであった。重さは15.47gであった。

第112図　第33号住居跡



第33号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　白色微粒子。
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　炭化物粒子若干。
3　暗褐色　(10YR3/4)
4　暗褐色　(10YR3/3)　黄褐色土含む。
5　炭灰層
第33号住居跡P1・P2
1　黒褐色　(10YR2/2)
2　黒褐色　(10YR2/3)　鈍黄褐色土含む。
3　黒褐色　(10YR3/2)　砂層。
4　灰黄褐色　(10YR4/2)　砂層。

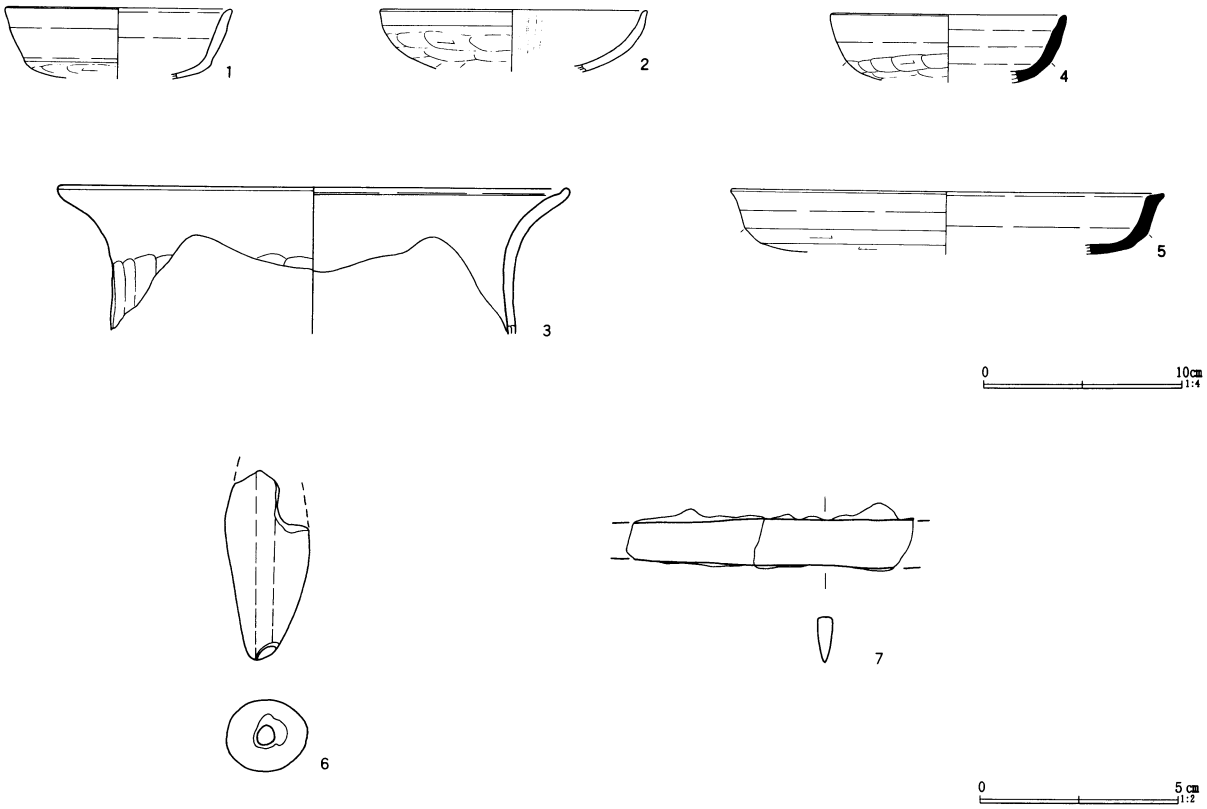
第33号住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(11.5)			ABEFJL	3	暗褐	20%	P1	
2	坏	13.5			ABEFJ	4	橙	60%	覆土	暗文
3	甕	(25.6)			ABEFJ	3	にぶい黄橙		覆土	
4	坏	11.8			ABDFJ	2	灰	破片	覆土	手持ちヘラ　産地不明
5	盤	(21.0)			ABDFJKL	2	灰	破片	覆土	末野

第33号住居跡出土土錘観察表（第113図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
6	(4.8)	2.1	0.4	12.39	Ca他	にぶい橙	40%	

第113図　第33号住居跡出土遺物



第34号住居跡（第114図、図版23）

X－18グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、短軸3.20m、深さ0.45mであった。主軸方位は、N－119°－Wであった。

壁面は、やや外傾していたが、直線的に立ち上がっていた。

床面は、地山の黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、平坦であった。また、床面直上には、部分的に、砂層が堆積していた。

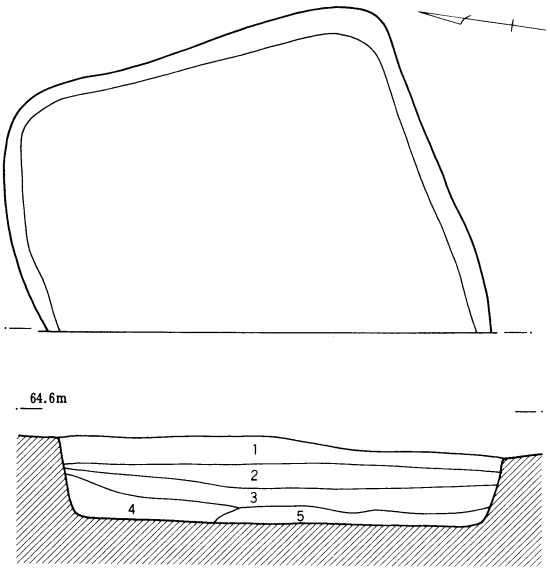
柱穴は、検出できなかった。

カマドは検出できなかったが、調査区外へ展開する西壁に構築されていたものと思われる。

貯蔵穴・壁溝は検出できなかった。

出土遺物は、土師器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第114図　第34号住居跡



第34号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR5/3)　白色微粒子多。焼土粒子、炭化物粒若干。
2　褐色　(10YR4/4)　白色微粒子、炭化物含む。
3　鈍黄褐色　(10YR4/3)
4　黒褐色　(10YR2/3)　黄褐色土粒若干。締まり強い。
5　暗褐色　(10YR3/3)　砂層。

0　2m　1:60

第35号住居跡（第115・116図、図版23・33）

X・Y－19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であった。

規模は、長軸4.92m、短軸4.90m、深さ0.47mであった。主軸方位は、N－32°－Wであった。

壁面は、概ね垂直に、直線的に立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

カマドは、住居北壁で検出した。燃焼部は、皿状で、床面とのレベル差は殆ど認められなかった。煙道部は、短く、階段状に立ち上がっていた。天井は残存していなかった。袖は、両側で検出したが、壁面から僅かに突出する程度であった。

貯蔵穴・壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SK54と重複していたが、遺構の重複関係は、明らかにできなかった。

出土遺物は、床面及び覆土から、土師器鉢・甕、須恵器甕が出土した。また、砥石が1点出土した。

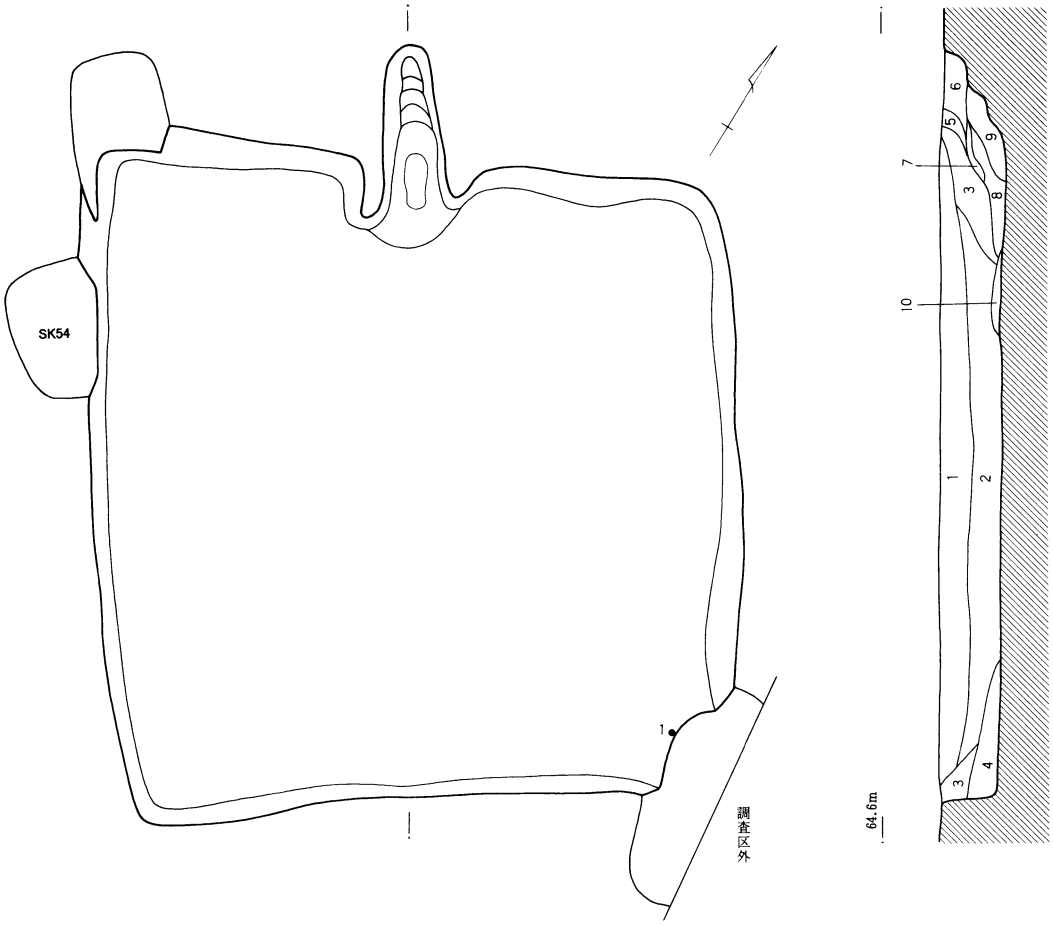
1は、鉢である。底部は丸底で、口縁部は強いナデによる段を有する。南東隅の床面から出土した。

2は、甕である。直立気味の胴部から、口縁部は大きく開く。口縁は肉厚である。覆土から出土した。

3は、須恵器甕である。底部の破片である。

4は、凝灰岩製の砥石で、重さは159.2gである。

第115図　第35号住居跡

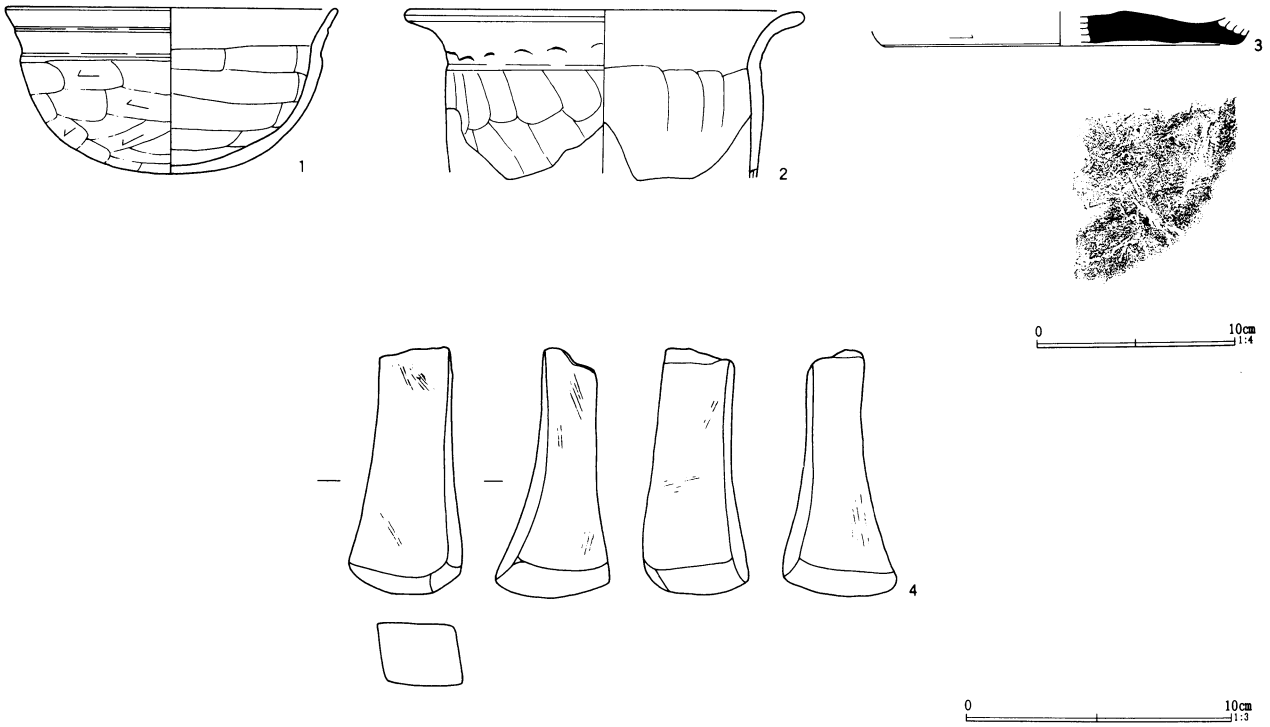


第35号住居跡

1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　白色粒極多。
2　暗褐色　(10YR3/3)
3　黒褐色　(10YR2/2)
4　黒褐色　(10YR3/2)　焼土、炭多。
5　黒褐色　(10YR3/2)
6　黒褐色　(10YR2/2)　炭化物粒子含む。粗粒。
7　灰黄褐色　(10YR4/2)　焼土含む。
8　黒褐色　(10YR2/2)　焼土若干含む。
9　黒色　(10YR2/1)　砂層。
10　黒褐色　(10YR2/2)　粘性ややあり。

0　2m　1:60

第116図　第35号住居跡出土遺物



第35号住居跡出土遺物観察表（第116図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	鉢	(16.6)	8.4		ABDEFJ	2	橙	30%	床面	
2	甕	(19.8)			ABDFIJL	3	橙	口縁	覆土	
3	甕			(18.0)	BFJL	3	灰	底部	覆土	末野？

第36号住居跡（第117図、図版23）

Y－18・19グリッドで検出した。

平面の形状は、やや歪んだ方形であったが、西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸5.30m、短軸5.10m、深さ0.28mであった。主軸方位は、N－23°－Wであった。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は床面からP1～P3の３基を検出した。柱掘り方は、径0.50m～1.00mの円形で深さは0.16m～0.27mであった。掘り方底面にはさらに小穴があり、この部分に柱が建っていたものと考えられる。また本来は、４本柱穴の竪穴住居跡であったと考えられるが、対応する住居床面北西隅からは検出できなかった。

カマドは、北壁中央部で検出した。燃焼部は、土壙状に掘り込まれ、煙道部はテラス状となっていた。煙突部は、外傾しながら立ち上がっていた。

貯蔵穴は、検出できなかった。

壁溝は、カマド右側を除き、ほぼ全周しているものと思われる。

出土遺物は、土師器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土なかった。

第37号住居跡（第118・119図、図版24・30・31・34・38）

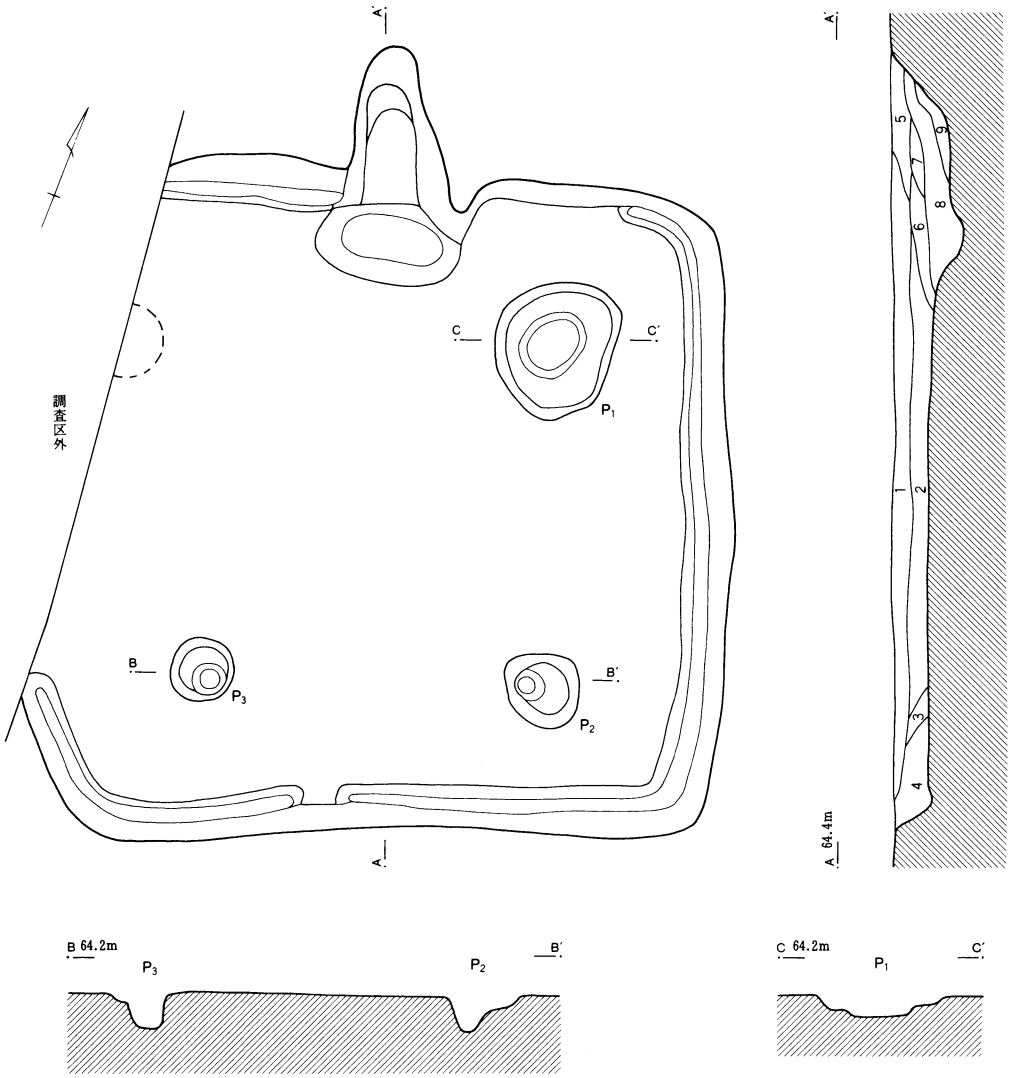
Z・AA－19グリッドで検出した。

遺構は、SJ30を壊していたが、SJ30の調査が先行したため、カマドの一部及び住居東壁で明らかにできなかった部分がある。

平面の形状は、方形であった。

規模は、長軸5.28m、短軸4.86m、深さ0.32mであ

第117図　第36号住居跡



第36号住居跡
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)　砂礫含む。(粗粒砂質土)
2　暗褐色　(10YR3/3)　粗粒砂質。
3　暗褐色　(10YR3/3)　焼土含む。
4　暗褐色　(10YR3/3)　微小礫、黄褐色土含む。
5　鈍黄褐色　(10YR4/3)　砂礫、焼土、炭化物若干。(粗粒砂質土)
6　黒褐色　(10YR2/3)　(粗粒砂質土)
7　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物含む。
8　黒褐色　(10YR2/3)　焼土多。
9　暗褐色　(10YR3/2)

0　2 m　1:60

った。主軸方位は、N－65°－Eであった。

壁面は、概ね垂直で、直線的に立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、床面から、P1～P4の4基を検出した。柱掘り方の規模は、径0.50m～0.65mの円形で、深さ0.35m～0.45mであった。柱痕は検出できなかった。

カマドは、東壁で検出した。燃焼部及び煙道部は殆ど段差なく連続し、煙突部では、外傾しながら立ち上がっていた。天井部は残存していなかった。

貯蔵穴は、カマドの右側で検出した。長径1.28m、短径0.65mの長方形で、深さ0.26mであった。底面には小穴が掘りこまれていた。また、貯蔵穴左側は浅いテラス状となっており、このテラス部分から土師器坏3点と鉢1点が入れ子状になって置かれていた。

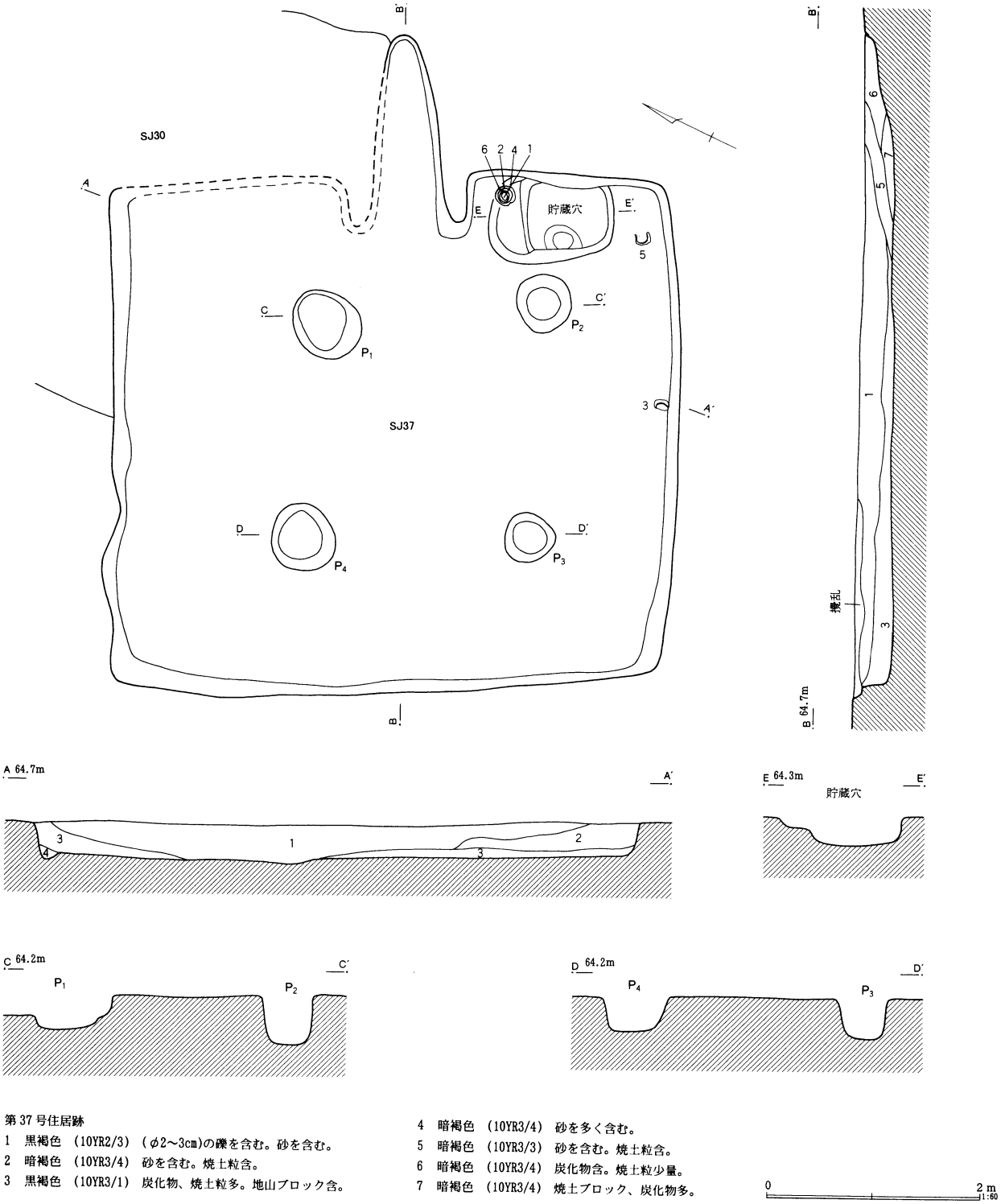
貯蔵穴の遺物は、住居に伴うものと考えられる。

遺構は、SJ30と重複していた。遺構の重複関係は、本遺構が、SJ30を壊していた。

出土遺物は、貯蔵穴・床面・覆土から、土師器坏・壷・鉢・甕が出土した。また、覆土中から、土錘9点が出土した。

貯蔵穴から出土した遺物は、1・2・4・6である。

第118図　第37号住居跡



第37号住居跡
1　黒褐色　(10YR2/3)　(φ2～3cm)の礫を含む。砂を含む。
2　暗褐色　(10YR3/4)　砂を含む。焼土粒含。
3　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物、焼土粒多。地山ブロック含。
4　暗褐色　(10YR3/4)　砂を多く含む。
5　暗褐色　(10YR3/3)　砂を含む。焼土粒含。
6　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物含。焼土粒少量。
7　暗褐色　(10YR3/4)　焼土ブロック、炭化物多。

6の鉢の中に、下から2・4・1の順に入れ子状に重なっていた。

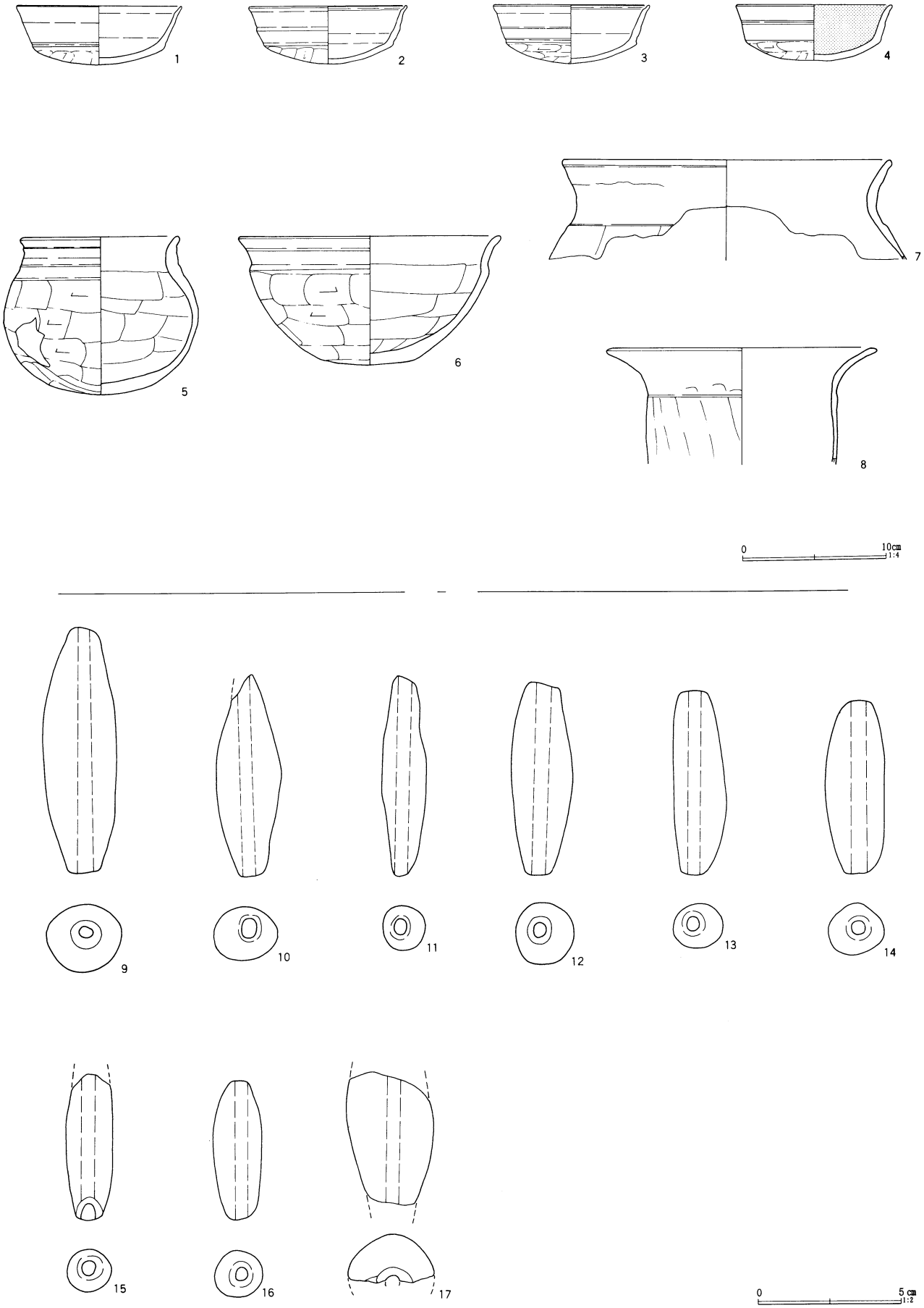
3の坏は貯蔵穴からは離れた南壁際で出土した。

1～4の坏は、口径11cm前後と小型で、丸底だが扁平気味な底部から外傾しながら立ち上がる。1以外は、口縁部の段が明瞭である。口縁部は、端部でやや外反し、端部内面は、強くナデられ、特に2・3では沈線となっていた。

また、5は、貯蔵穴の右側床面から出土したが、6の鉢と共に、口縁部が有段口縁となる等、坏類と特徴が共通していた。

これらのことから、住居貯蔵穴から出土した遺物と

第119図　第37号住居跡出土遺物



第37号住居跡出土遺物観察表（第119図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	11.6	4.1		ABDEJ	3	明黄褐	80%	貯蔵穴	
2	坏	11.0	4.0		ABDEFJ	2	暗褐	90%	貯蔵穴	
3	坏	10.8	4.1		ABDEF	2	橙	70%	壁際	
4	坏	10.8	3.9		ABDEFJ	3	暗褐	80%	貯蔵穴	
5	壺	10.8	11.1		ABDEJ	4	浅黄橙	70%	床面	
6	鉢	18.1	9.0	6.6	ABDEFJ	2	黄橙	100%	貯蔵穴	
7	甕	(22.7)			ABEFJ	3	橙	破片	覆土	
8	甕	(18.1)			ABEFJ	3	黄橙	25%	覆土	

第37号住居跡出土土錘観察表（第119図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
9	8.6	2.6	0.5	45.04	CbII	明赤褐	100%	
10	7.1	2.3	0.5	24.34	CaIII	にぶい橙	95%	
11	7.0	1.5	0.5	11.36	CaIII	にぶい黄橙	100%	
12	6.8	2.1	0.5	28.52	CbIII	明赤褐	100%	
13	6.4	1.8	0.4	17.11	BaIV	にぶい橙	100%	
14	6.1	2.0	0.6	22.35	BaIV	にぶい橙	100%	
15	(5.1)	1.6	0.5	11.05	Ba他	橙	80%	
16	4.9	1.7	0.4	13.01	BaV	にぶい橙	100%	
17	(4.6)	3.1	0.5	21.77	Cb他	明赤褐	25%	

床面から出土した遺物は、概ね共通した特徴をもっており、住居に伴う遺物と考えられる。

第38号住居跡（第120・121図、図版22・34）

Z・AA－19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であると思われるが、住居の東側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

規模は、長軸4.54m、深さ0.53mであった。主軸方位は、N－16°－Wであった。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

柱穴は、検出できなかった。

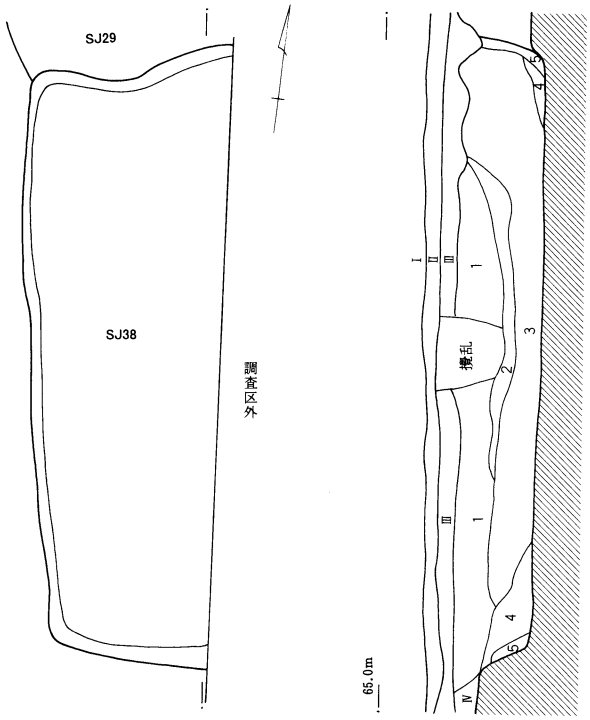
カマド・貯蔵穴は検出できなかった。

壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SJ28と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察により、本遺構が、SJ29を壊していることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、土師器甕1点と土錘2点が出土した。

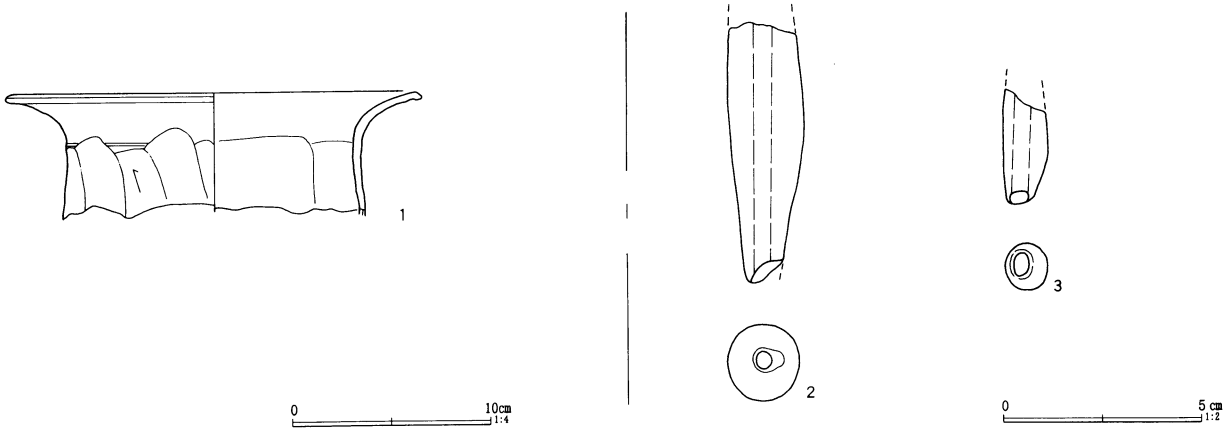
第120図　第38号住居跡



第38号住居跡
1　黒褐色　(10YR2/2)　炭化物、焼土粒含。(φ2～5mm)の小石を含む。
2　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物、焼土粒含。(φ3cm)前後の礫を含む。
3　黒褐色　(10YR2/3)　炭化物、焼土粒含。(φ2mm)以下の砂、(φ2cm)の小石を多く含む。
4　暗褐色　(10YR3/3)　砂質。焼土粒含。
5　褐色　(10YR4/4)　地山ブロックと黒褐色ブロックを多く含む。締まりあり。

0　2m　1:60

第121図　第38号住居跡出土遺物



第38号住居跡出土遺物観察表（第121図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(20.2)			ABEFJ	3	橙	破片	覆土	

第38号住居跡出土土錘観察表（第121図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
2	(6.5)	1.8	0.4	18.11	Ca他	にぶい橙	60%	
3	(2.9)	1.1	0.4	2.55	Aa他	橙	50%	

第39号住居跡（第122・123図、図版24・31・34）

AA・AB－18・19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形と思われるが、住居の東が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。また、調査区東壁で、他の住居のカマドが張り出していた。断面の観察では、SJ39を壊していたため、SJ40と番号を付した。

規模は、長軸3.40m、短軸3.28m、深さ0.41mであった。主軸方位は、N－44°－Eであった。

壁面は、外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの黄褐色砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

カマドは、検出できなかったが、調査区外へ展開する東壁に構築されていたと思われる。

柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出できなかった。

遺構は、SJ40カマドと重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察により、本遺構がSJ40カマドに壊されていることを確認した。

出土遺物は、床面・覆土中から、土師器坏・鉢・壷、須恵器甕が出土した。また、覆土中から、土錘が3点出土した。

1～3は、土師器坏である。1は丸底で、口径10cmの小型の坏である。口縁部は短く内屈するが、屈曲は弱い。口縁部のナデは弱く、底部のケズリが口縁部との境界まで及んでいた。

2は、1よりも口径が大きい坏である。口縁の屈曲は弱く、口縁部のナデも弱い。底部のケズリは、口縁直下まで及んでいた。

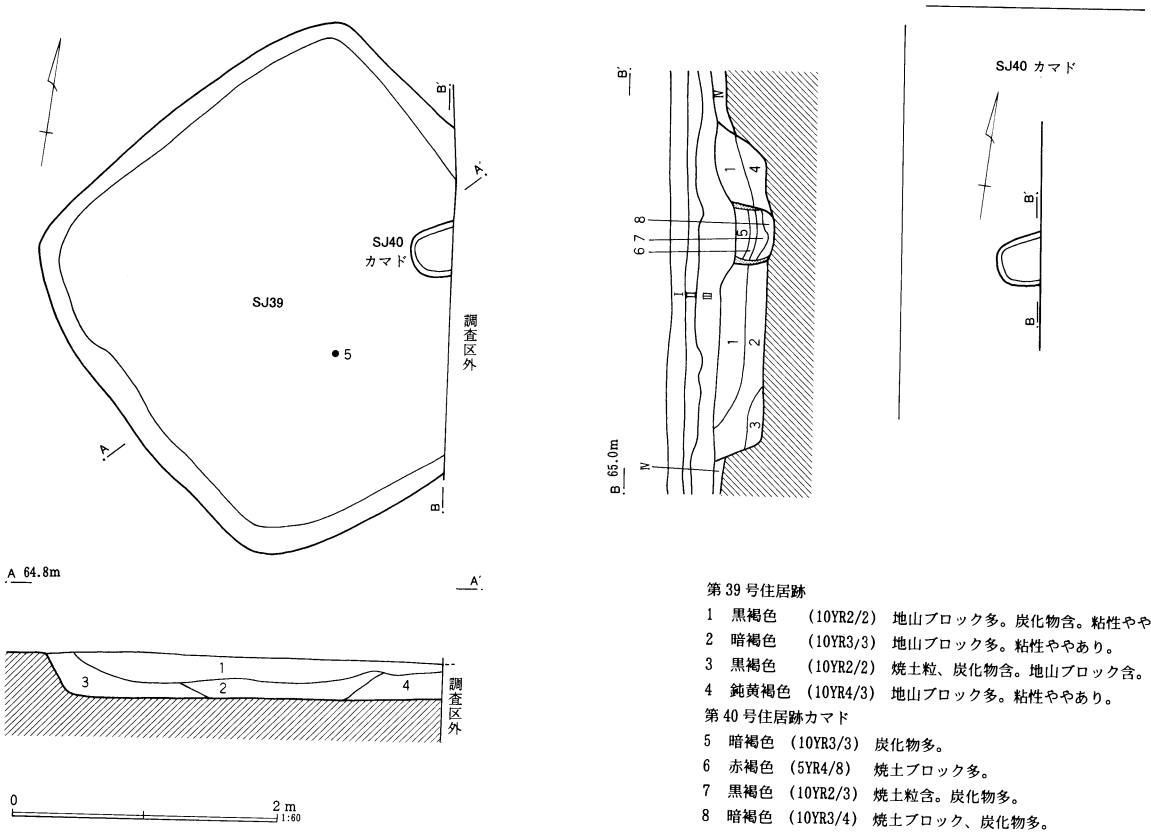
3は、丸底で、口縁部が外反する。内面口縁端部は、強いナデにより僅かに窪んでいた。内面には暗文があったと思われるが、器面が荒れ、観察できなかった。

4は、鉢である。底部を欠損していた。口縁部は緩やかに外反し、端部は強いナデによる面を有していた。器面が荒れ、調整が不明瞭であった。

5は、壷である。床面から出土したが、胴部以下を欠損していた。口縁端部内面直下は、強いナデにより沈線状になっていた。

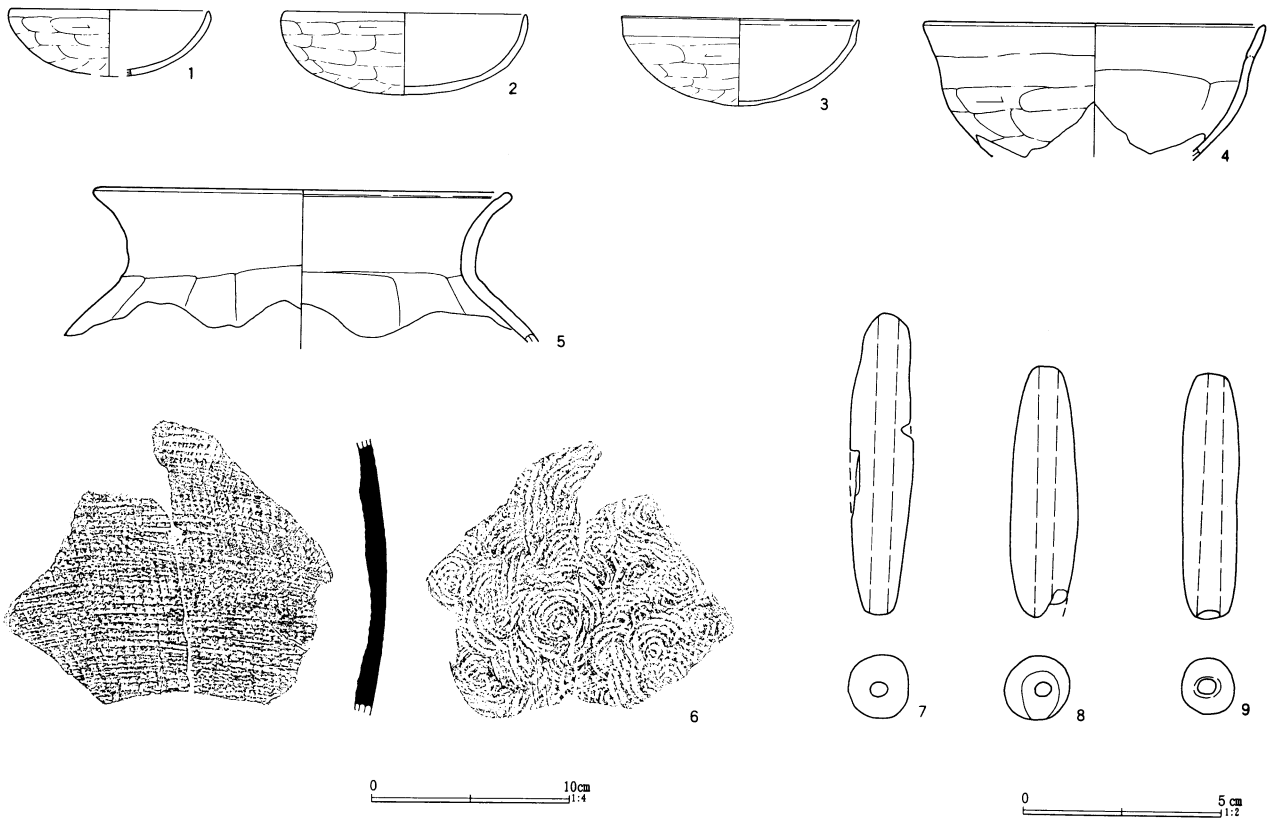
6は、須恵器甕の胴部片である。外面は、平行叩きであるが、器面には、叩き目と直行するように叩き板の木目が同時に写し込まれ、格子目文様に見える。内面の当て具痕は、青海波文であった。

第122図　第39・40号住居跡



第 39 号住居跡
1　黒褐色　(10YR2/2)　地山ブロック多。炭化物含。粘性ややあり。
2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。粘性ややあり。
3　黒褐色　(10YR2/2)　焼土粒、炭化物含。地山ブロック含。粘性ややあり。
4　鈍黄褐色　(10YR4/3)　地山ブロック多。粘性ややあり。
第 40 号住居跡カマド
5　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物多。
6　赤褐色　(5YR4/8)　焼土ブロック多。
7　黒褐色　(10YR2/3)　焼土粒含。炭化物多。
8　暗褐色　(10YR3/4)　焼土ブロック、炭化物多。

第123図　第39号住居跡出土遺物



第39号住居跡出土遺物観察表（第123図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(10.0)	(3.4)		ABEFHJ	3	橙	25%	覆土	
2	坏	(12.2)	4.0		BDEFJ	3	橙	25%	覆土	
3	坏	(12.0)	4.4		ABEFJL	4	橙	30%	覆土	
4	鉢	(17.1)			ABDEFJL	3	橙	25%	覆土	
5	壺	20.8			ABDEFJ	3	浅黄橙	口縁	床面	
6	甕				ABFHJKL	2	灰	破片	覆土	末野

第39号住居跡出土土錘観察表（第123図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	7.5	1.5	0.5	11.98	CaII	赤褐	60%	
8	6.3	1.6	0.4	15.49	Ba他	にぶい褐	80%	
9	6.1	1.4	0.6	10.77	AaIV	橙	95%	

第40号住居跡（第122図、図版24）

AB－20グリッドで検出した。

遺構は、カマドの先端部分のみ検出した。

平面の形状は、住居の大部分が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

遺構は、SJ39遺構確認時にカマド部分のみが検出していた。当初は、SJ39に伴うカマドと考えたが、調査区東壁の土層断面の観察によって、SJ39を壊す別の住居のカマドであることを確認した。このため、SJ40として新たに番号を付した。

カマドは、煙道部分と考えられる。壁面は赤く焼け、硬化面となっていた。また、天井部は残存していなかった。

SJ40の住居跡本体は、調査区東壁外に展開していることから、本遺構は、西カマドの住居跡であったと考えられる。

遺物は出土しなかった。

第41号住居跡（第124図、図版24）

AB－20グリッドで検出した。

遺構は、カマドのみ検出した。住居跡本体は、調査区東壁外へ展開し、全体の規模・形状を明らかにすることはできなかった。

検出したのは、カマド煙道部のみである。煙道底面は、平坦であり、煙突部で外傾しながら立ち上がっていた。カマド本体の形態は明らかにできなかったが、煙道底面が、平坦なテラス状となるカマドであったと考えられる。覆土は、焼土・炭化物を多く含んでいたが、煙道壁面は、焼けた痕跡は観察できなかった。また、天井部は残存していなかった。

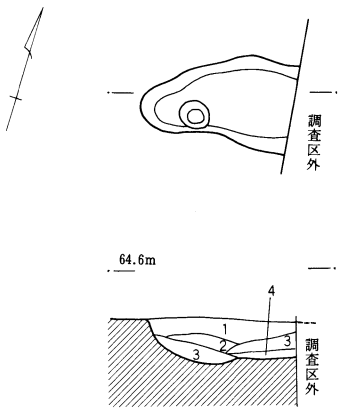
本遺構は、住居跡本体が調査区東壁外へ展開していることから、西壁にカマドのある住居跡であったと考えられる。

第42号住居跡（第125・126図、24・25・31）

AA・AB－18・19グリッドで検出した。

平面の形状は、方形であるが、西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

第124図　第41号住居跡



第41号住居跡カマド
1　黒褐色　(10YR2/3)　地山ブロック含。
2　赤褐色　(2.5YR4/8) 焼土ブロック多。炭化物含。
3　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物多。焼土粒含。
4　黒褐色　(10YR2/3)　焼土粒含。
5　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物多。

0　2 m　1:60

規模は、長軸3.76m、深さ0.46mであった。主軸方位は、N－17°－Wであった。

壁面は、やや外傾しながら立ち上がっていた。

床面は、礫混じりの砂質土で、貼床は施されていなかったが、概ね平坦であった。

カマドは、北壁（カマドA）と東壁（カマドB）で検出した。カマドBの断面に、住居の立ち上がりを検出したことから、カマドAのほうが新しいものと考えられる。燃焼部は2基とも土壙状で、煙道部は一段高いテラス状となっていた。煙突部は、ほぼ垂直に立ち上がっていた。カマドA・Bとも天井部が残存していたが、カマドBの残存状況がよく、天井部もよく焼け、赤色の硬化面となっていた。袖は、カマドA右側で検出した。

また、カマドBの両側で、深さ15cm前後のテラス状の張出部を検出した。カマド両脇の棚状施設と考えられるが、カマドB断面の観察では、住居覆土1層が、張り出し部分に連続して堆積していることから、カマドB廃絶後も利用されていたと考えられる。

貯蔵穴・柱穴は検出できなかった。

壁溝は、検出されなかった。

出土遺物は、カマドB及び覆土中から、須恵器坏・甕、土師器甕が出土した。また、覆土中・張り出し部から土錘5点と砥石1点が出土した。

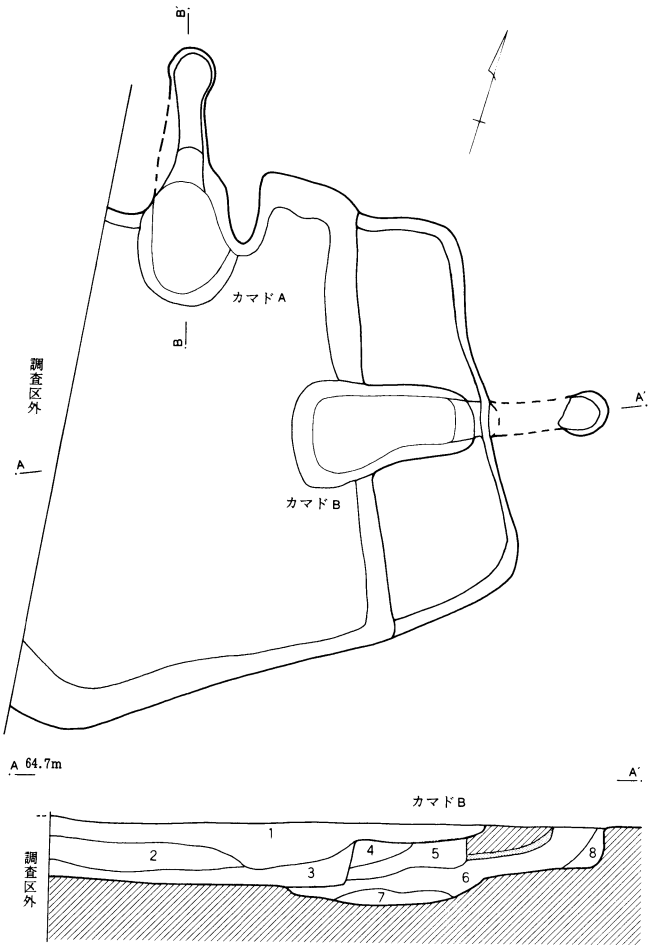
1・2は、須恵器坏である。1は、カマドBから出土した。2点とも末野産と考えられ、底部の調整は、糸切後無調整であった。

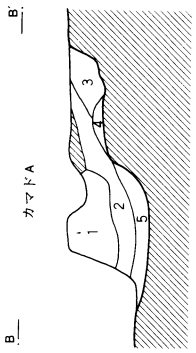
3は、須恵器甕である。底部の破片である。胎土の特徴から末野産と考えられ、胴部下端部にヘラケズリが施されていた。カマドBから出土した。

4は、土師器甕で、覆土から出土した。

10の砥石は、凝灰岩製で、重さ142.5gであった。

第125図　第42号住居跡





第42号住居跡

1　暗褐色　(10YR3/3)　(φ5mm)前後の小石を含む。焼土粒含む。
2　黒褐色　(10YR2/2)　(φ3～5cm)の礫を多く含む。焼土粒、炭化物含。
3　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物含。(φ3cm)前後の礫を僅かに含む。

第42号住居跡カマド(A)

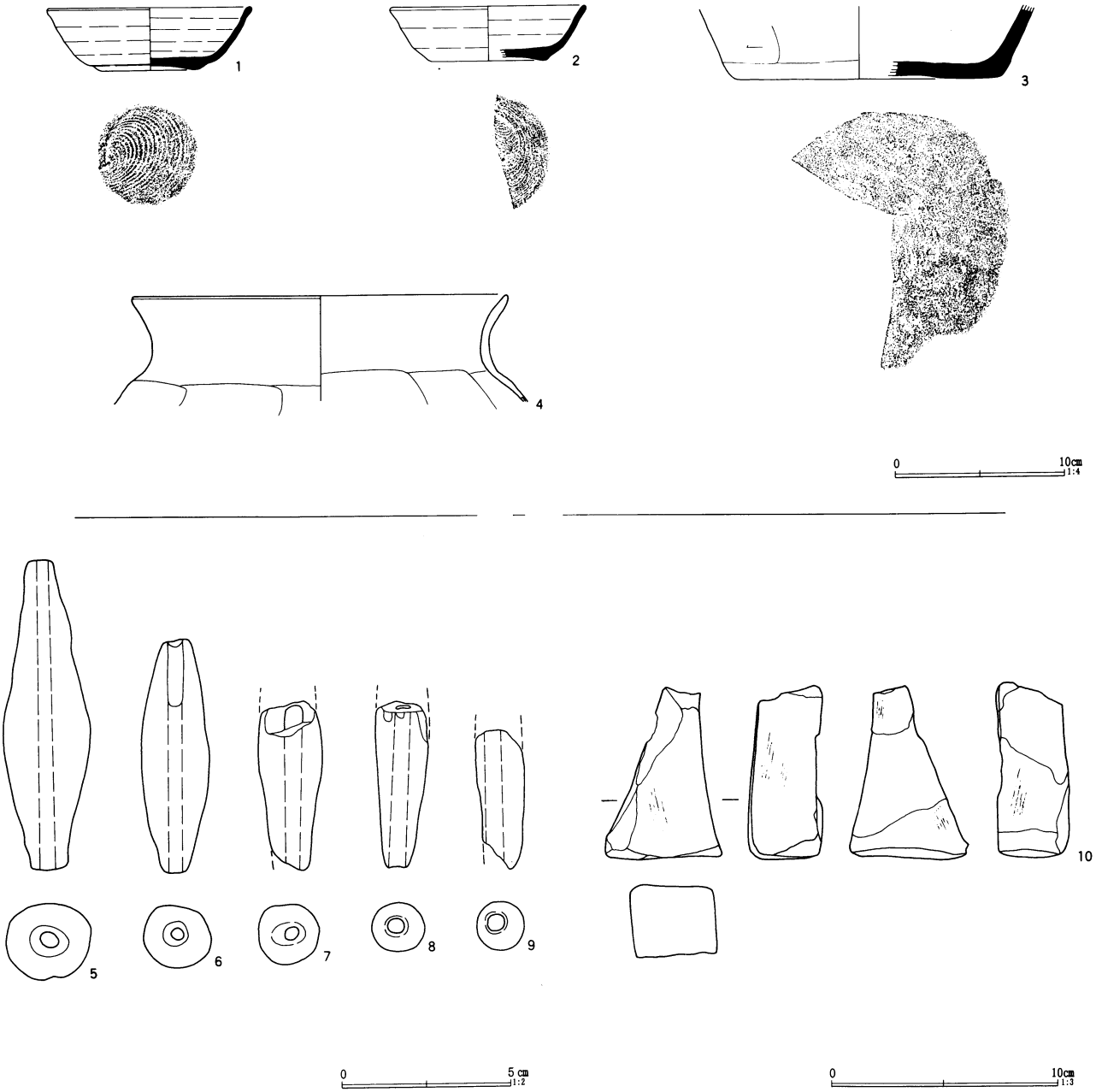
1　暗褐色　(10YR3/3)　(φ5mm)前後の小石を含む。焼土粒含む。
2　黒褐色　(10YR2/3)　焼土ブロック、炭化物多。
3　暗褐色　(10YR3/3)　(φ5mm)前後の小石を含む。焼土粒、炭化物含む。
4　黒褐色　(10YR2/3)　砂を多く含む。(φ2mm)焼土粒含。
5　黒褐色　(10YR3/1)　焼土、炭化物多。(φ3mm～5mm)の小石を多く含む。

第42号住居跡カマド(B)

4　灰黄褐色　(10YR4/2)　焼土粒、炭化物含。
5　暗褐色　(10YR3/3)　(φ3cm)前後の礫を含む。炭化物含。
6　黒褐色　(10YR2/3)　(φ3cm)前後の礫、(φ2mm)以下の砂を多く含む。焼土粒、ブロックを含む。
7　暗褐色　(10YR3/3)　焼土粒、ブロック、炭化物を含む。
8　鈍黄褐色　(10YR4/3)　焼土粒含。砂質。

0　2m　1:60

第126図　第42号住居跡出土遺物



第42号住居跡出土遺物観察表（第126図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(12.0)	3.7	6.0	ABEFJ	4	灰	40%	カマドB	末野
2	坏	(11.4)	3.2	(7.0)	ABFJ	2	灰	20%	覆土	末野
3	甕			(17.0)	ABFHJL	2	灰	底部	カマドB	末野
4	甕	(21.9)			ABDEFJ	3	橙	口縁	覆土	

第42号住居跡出土土錘観察表（第126図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
5	9.1	2.5	0.5	38.52	Cb I	橙	100%	張出
6	6.8	2.0	0.4	22.11	CbIII	にぶい橙	100%	
7	(5.0)	1.8	0.4	13.43	Ca他	にぶい橙	50%	張出
8	(4.9)	1.6	0.5	10.34	Ca他	橙	60%	カマドA
9	(4.1)	1.4	0.5	6.10	Ba他	橙	40%	

(2) 掘立柱建物跡

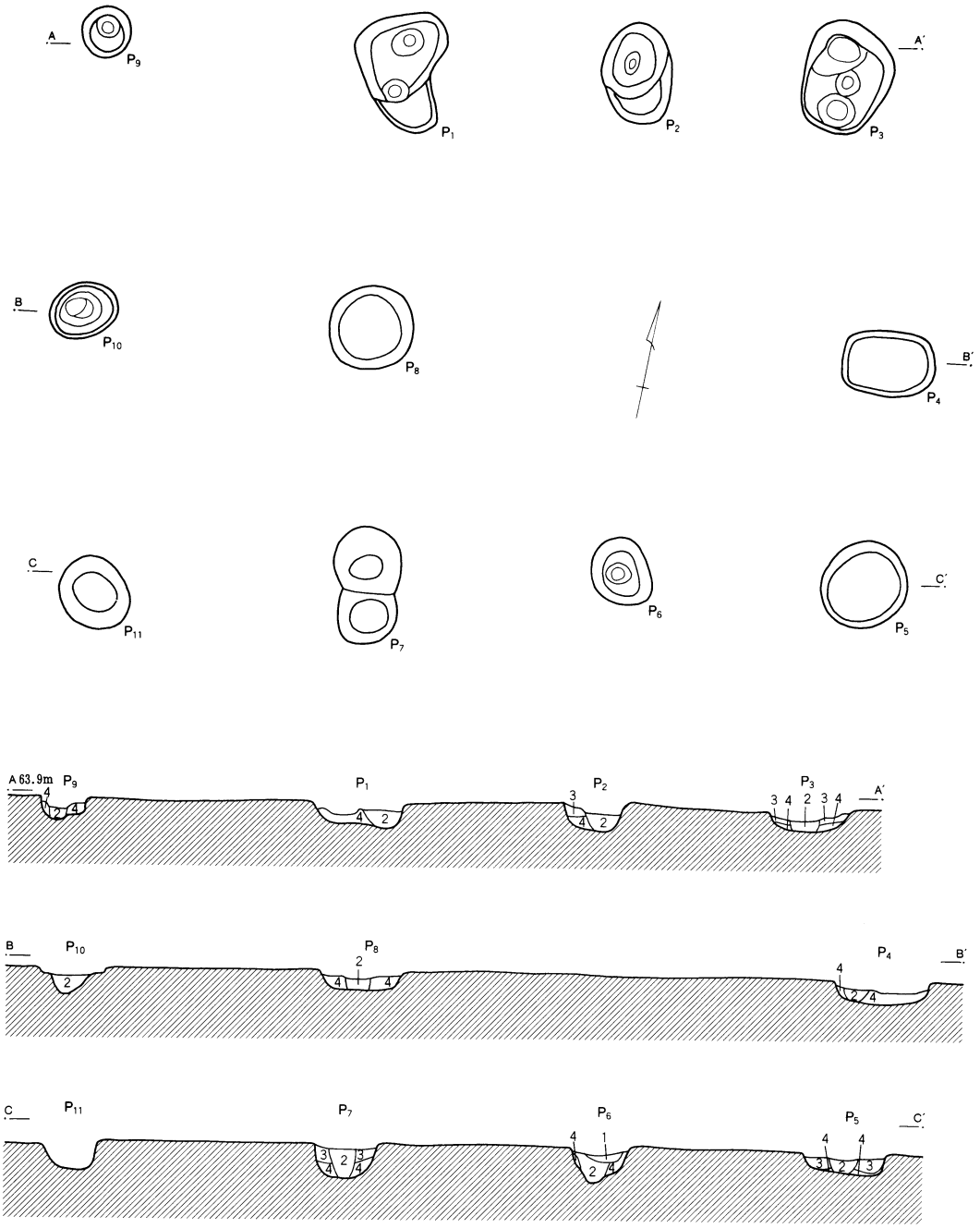
第1号掘立柱建物跡（第127・128図、図版25）

AJ－20・21グリッドで検出した。

規模は、2間×2間で、西側に庇の付いた建物であった。身舎の規模は、桁行4.3m、梁行3.8mで、身舎と庇との間隔は、2.4mであった。身舎の面積は、16.34m²であった。主軸方位は、N－10°－Wであった。

柱間寸法は、桁行2.15m、梁行1.9mであった。

第127図　第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡
1　暗褐色　(10YR3/3)　地山粒子多。砂質。
2　暗褐色　(10YR3/4)　地山粒子、炭化物含。粘性ややあり。
3　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。
4　褐色　(10YR4/4)　焼土粒含。地山ブロック多。

0　2 m　1:60

第１号掘立柱建物跡出土土錘観察表（第128図）

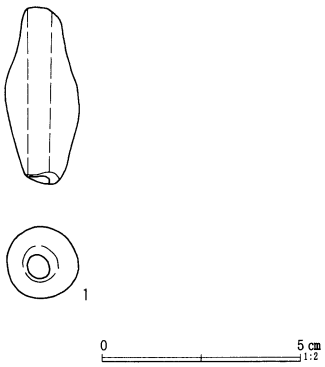
番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	4.5	1.8	0.6	11.00	CaV	にぶい黄橙	95%	P1

柱掘り方の形状は、円形または楕円形で、径60cm～100cm、深さ20cm～30cmであった。庇の柱穴は、40cm～60cm、深さは25cm前後であった。

柱痕は、身舎の柱穴では、全ての柱穴で検出した(覆土２層)。

出土遺物は、P1掘り方から、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は、土錘1点が出土したのみである。

第128図　第１号掘立柱建物跡出土遺物



(3) 土壙

第１号土壙（第129図、図版25）

AK－21グリッドで検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.88m、短軸0.53m、深さ0.11mであった。主軸方位はN－46°－Eであった。

土壙底面には、自然石が２個１組で等間隔に６個並んでいた。石の上面は平坦で、６個の石の上面でのレベルは水平であった。

第２号土壙（第129図）

AK－21グリッドで検出した。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.08m、短軸0.84m、深さ0.23mであった。主軸方位はN－90°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第３号土壙（第129図）

AD－20グリッドで検出した。遺構は、SK4・5に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.82m、短軸1.23m、深さ0.34mであった。主軸方位はN－86°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第４号土壙（第129・130図）

AD－20グリッドで検出した。遺構は、SK3を壊していた。遺構の東側は調査区外に展開していた。

平面の形状は楕円形で、規模は短軸1.34m、深さ0.18mであった。主軸方位はN－50°－Wであった。

出土遺物は、須恵器蓋１点、土錘４点が出土した。

第５号土壙（第129図）

AD－20グリッドで検出した。遺構は、SK3を壊していた。遺構の東側は調査区外に展開していた。

平面の形状は楕円形で、規模は短軸0.58m、深さ0.34mであった。主軸方位はN－73°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第６号土壙（第129・131図）

AE－20グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.44m、短軸1.41m、深さ0.13mであった。主軸方位はN－89°－Wであった。

出土遺物は、土錘が１点出土した。

第７号土壙（第129図）

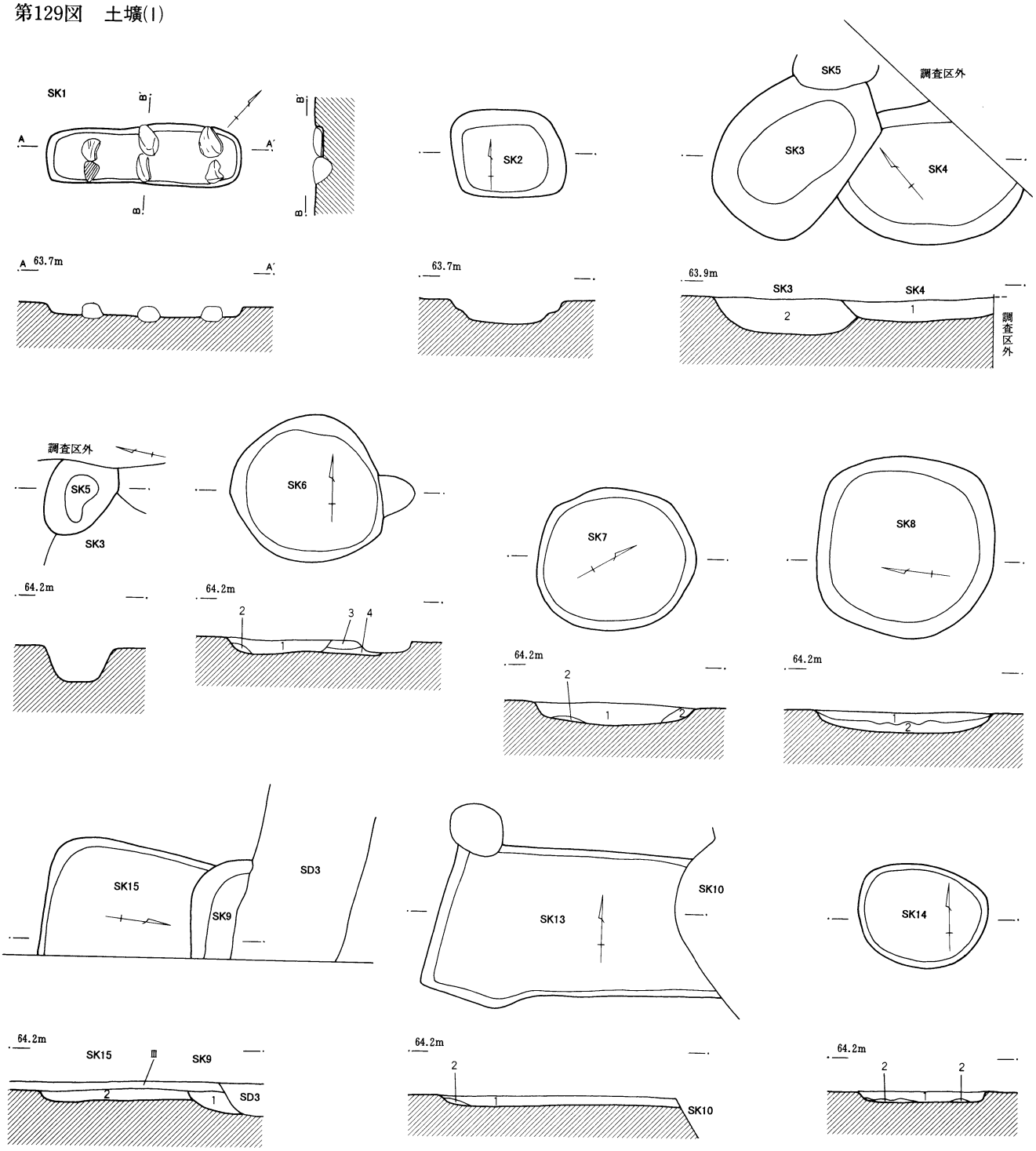
AE－20グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.53m、短軸1.37m、深さ0.20mであった。主軸方位はN－30°－Eであった。

第８号土壙（第129・131図）

AD－19グリッドで検出した。

第129図　土壙(1)

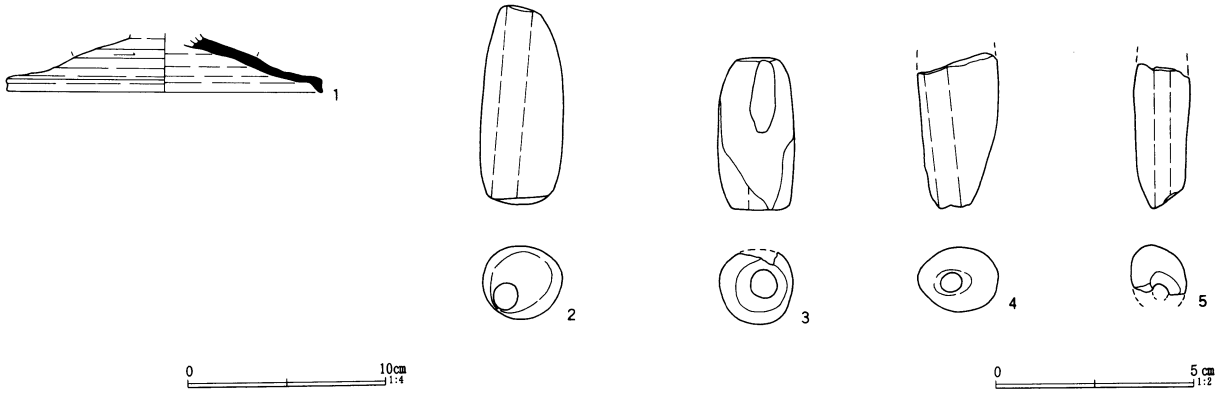


第3・4号土壙
1　暗褐色　(10YR3/3)　褐色土、炭化物若干含む。
2　黒褐色　(10YR3/2)　粗粒、砂質。
第6号土壙
1　黒褐色　(10YR2/3)　砂質。
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　砂質。
3　黒褐色　(10YR3/2)　砂質。
4　黒褐色　(10YR2/2)　砂質。
第7号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物、土器細片含む。
2　鈍黄褐色　(10YR5/4)　砂質。
第8号土壙
1　黒褐色　(10YR3/2)　粘性ややあり。炭化物、焼土粒含む。
2　褐灰色　(10YR5/1)　砂質。焼土粒子含む。地山ブロック多。

第9・15号土壙
Ⅲ　灰黄褐色　(10YR4/2)　締まりなし。
1　暗褐色　(10YR3/4)　砂を多く含む。炭化物を含む。締まりなし。(SK9)
2　黒褐色　(10YR3/2)　焼土粒含。炭化物をわずかに含む。締まりあり。(SK15)
第13号土壙
1　黒褐色　(10YR3/1)　焼土粒含む。(φ2mm)以下の砂を含む。
2　褐色　(10YR4/4)　焼土粒含む。砂質。
第14号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒、炭化物、地山ブロック含む。
2　褐色　(10YR4/4)　地山ブロック、焼土粒を含む。砂質。

0　2m　1:60

第130図　第４号土壙出土遺物



第４号土壙出土遺物観察表（130図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	蓋	(15.9)			ABDHJ	4	灰白	破片	覆土	

第４号土壙出土土錘観察表（第130図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
2	5.0	2.1	0.6	19.02	BbV	黄橙	100%	
3	3.8	2.0	0.7	12.45	BbVI	灰黄褐	60%	
4	(3.9)	2.1	0.6	11.86	Bb他	黒褐	50%	
5	(3.6)	1.4	0.5	6.83	Bb他	黒褐	25%	

第６・８号土壙出土土錘観察表（第131図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
6-1	4.0	1.9	0.5	13.66	Ba他	赤褐	60%	
8-1	(4.2)	1.7	0.6	11.81	Ba他	橙	70%	

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.76m、短軸1.68m、深さ0.19mであった。主軸方位はN－7°－Wであった。

遺物は、土錘が１点出土した。

第９号土壙（第129図）

AE－20グリッドで検出した。

平面の形状は方形で、遺構の北側をSD3に壊され、東側は調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。規模は、深さ0.19mであった。

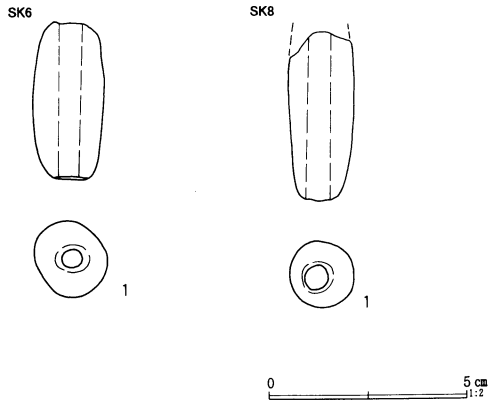
遺物は出土しなかった。

第10号土壙（第132・133図、図版25・31・34・37）

AD・AE－20グリッドで検出した。遺構は、SJ12・SK11・12を壊していた。

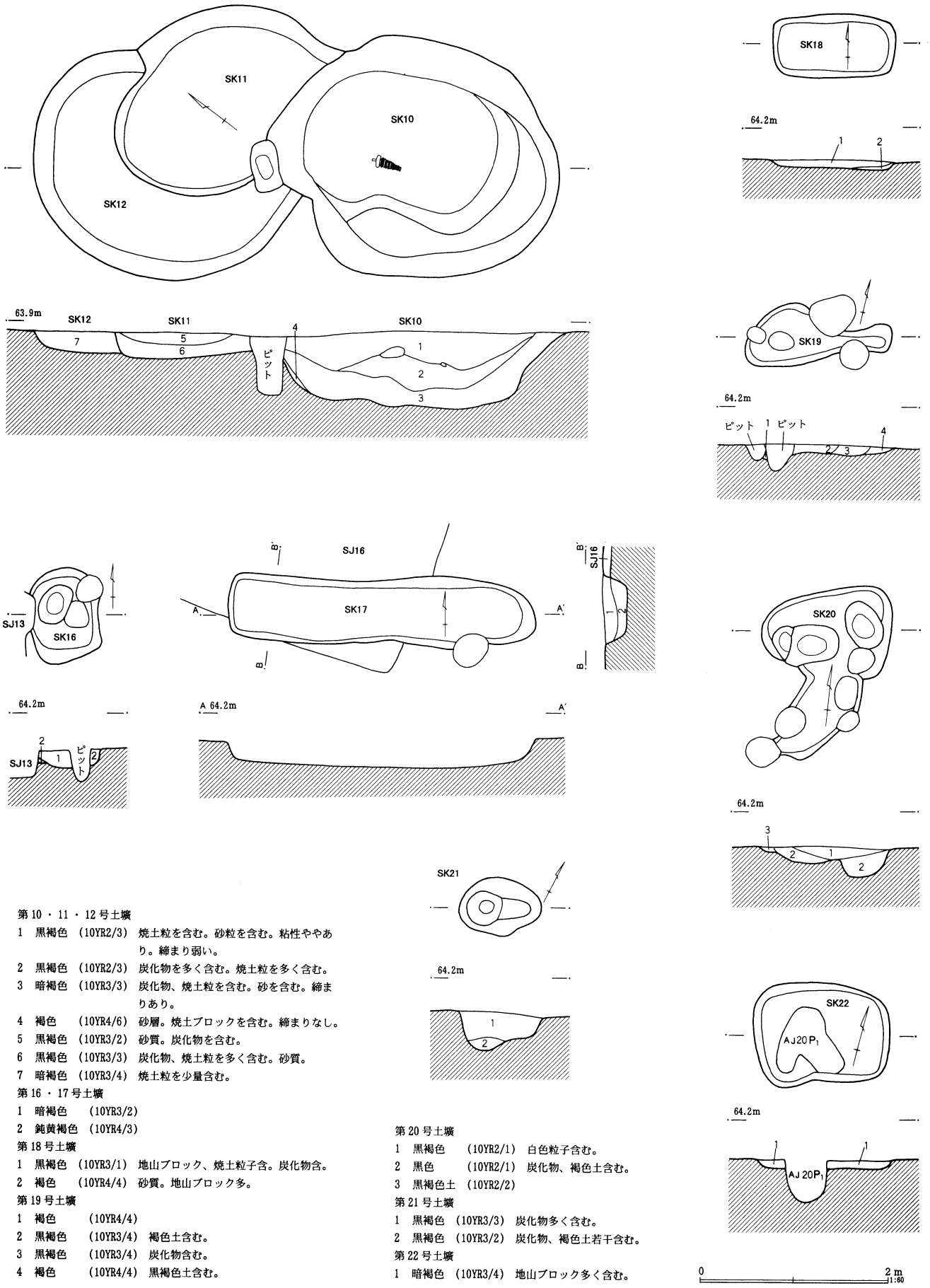
平面の形状は楕円形で、規模は、長軸3.16m、短軸2.52m、深さ0.80mであった。主軸方位はN－26°－Wであった。土壙底面は、礫層に達していた。

第131図　第６・８号土壙出土遺物



出土遺物は、古墳時代後期の土師器坏、平安時代の須恵器坏・高台付坏、灰釉陶器、中世の瀬戸産の卸目付大皿が出土した。また、土壙底面から、宝篋院塔の相輪が、覆土中から土錘３点が出土した。

第132図　土壙(2)



第 10・11・12 号土壙

1　黒褐色　(10YR2/3)　焼土粒を含む。砂粒を含む。粘性ややあり。締まり弱い。

2　黒褐色　(10YR2/3)　炭化物を多く含む。焼土粒を多く含む。

3　暗褐色　(10YR3/3)　炭化物、焼土粒を含む。砂を含む。締まりあり。

4　褐色　(10YR4/6)　砂層。焼土ブロックを含む。締まりなし。

5　黒褐色　(10YR3/2)　砂質。炭化物を含む。

6　黒褐色　(10YR3/3)　炭化物、焼土粒を多く含む。砂質。

7　暗褐色　(10YR3/4)　焼土粒を少量含む。

第 16・17 号土壙

1　暗褐色　(10YR3/2)

2　鈍黄褐色　(10YR4/3)

第 18 号土壙

1　黒褐色　(10YR3/1)　地山ブロック、焼土粒子含。炭化物含。

2　褐色　(10YR4/4)　砂質。地山ブロック多。

第 19 号土壙

1　褐色　(10YR4/4)

2　黒褐色　(10YR3/4)　褐色土含む。

3　黒褐色　(10YR3/4)　炭化物含む。

4　褐色　(10YR4/4)　黒褐色土含む。

第 20 号土壙

1　黒褐色　(10YR2/1)　白色粒子含む。

2　黒色　(10YR2/1)　炭化物、褐色土含む。

3　黒褐色土　(10YR2/2)

第 21 号土壙

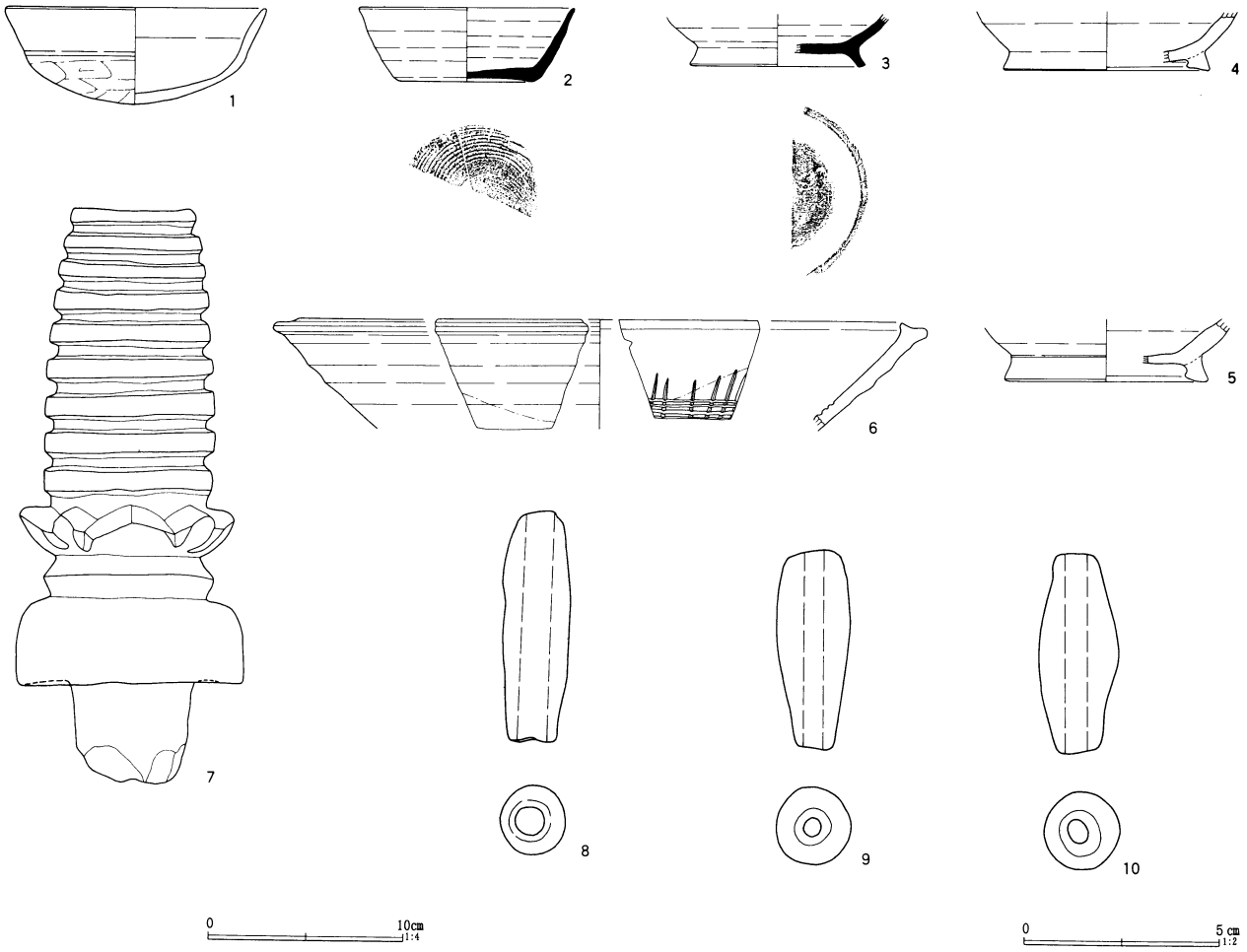
1　黒褐色　(10YR3/3)　炭化物多く含む。

2　黒褐色　(10YR3/2)　炭化物、褐色土若干含む。

第 22 号土壙

1　暗褐色　(10YR3/4)　地山ブロック多く含む。

第133図　第10号土壙出土遺物



第10号土壙出土遺物観察表（第133図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	13.3	5.0		ABDFGJL	3	灰褐	70%	覆土	
2	坏	(11.0)	3.8	7.0	BFHJ	2	褐灰	破片	覆土	
3	高台坏			(9.0)	ABFHJ	3	灰	破片	覆土	
4	長頸瓶			(10.6)	BFHJ	1	灰	破片	覆土	灰釉
5	長頸瓶			(10.5)	BFHJ	1	灰	破片	覆土	灰釉
6	大皿	(33.6)			BFHJ	1	灰白	破片	覆土	中世　瀬戸・卸目付

第10号土壙出土土錘観察表（第133図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
8	5.9	1.7	0.8	18.11	BaIV	にぶい橙	100%	
9	5.1	2.0	0.5	18.25	Cb他	にぶい橙	80%	
10	5.1	2.0	0.6	18.98	CbV	明褐	100%	

遺物には、時期差があり、古墳時代・平安時代の遺物は、他からの混入遺物と考えられる。遺構の時期は、底面から出土した宝篋院塔相輪から、中世に属していたと考えられる。

宝篋院塔相輪(7)は、安山岩製で、上部の宝珠と請花を欠損していた。九輪は彫りが深く、下部の請花はしっかり彫刻され、立体感がある。伏鉢の文様は観察できなかった。伏鉢の下部には軸部があり、笠に装着されていたと思われる。相輪の重さは、2,699gであった。

第11号土壙（第132・134図、図版25・31・38）

AD－20グリッドで検出した。遺構は、北西でSK12を壊し、南側はSK10に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸2.60m、短軸1.87m、深さ0.26mであった。主軸方位はN－66°－Wであった。

出土遺物は、須恵器坏・蓋・甕の胴部片が出土した。また、土錘が6点出土した。

第12号土壙（第132図、図版25）

AD－19・20グリッドで検出した。遺構の東側をSK10・11に壊されていた。

平面の形状は楕円形で、規模は、短軸2.42m、深さ0.21mであった。

遺物は出土しなかった。

第13号土壙（第129・135図、図版25）

AD・AE－19・20グリッドで検出した。遺構の東側をSK10に壊され、またSJ12を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は短軸1.38m、深さ0.10mであった。主軸方位はN－88°－Eであった。

出土遺物は、土錘が2点出土した。

第14号土壙（第129・135図）

AE－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.23m、短軸0.95m、深さ0.10mであった。主軸方位はN－90°－Eであった。

土遺物は、土錘が2点出土した。

第15号土壙（第129図）

AE－20グリッドで検出した。遺構の北側をSK9に壊されていた。また、東側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は方形で、規模は、深さ0.11mであった。主軸方位はN－1°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第16号土壙（第132・136図）

AG－20グリッドで検出した。遺構は、SJ13を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、長軸0.95m、短軸0.73m、深さ0.19mであった。主軸方位はN－0°であった。

出土遺物は、覆土から、中世在地産の鉢の口縁部片が出土した。

第17号土壙（第132図、図版20）

AI－20グリッドで検出した。遺構は、SJ16を壊していた。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸3.28m、短軸0.64m、深さ0.32mであった。主軸方位はN－72°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第18号土壙（第132図）

AF－19グリッドで検出した。

平面の形状は長方形で、規模は長軸1.30m、短軸0.67m、深さ0.08mであった。主軸方位はN－6°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第19号土壙（第132図）

AF－20グリッドで検出した。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.56m、短軸0.20m、深さ0.11mであった。主軸方位はN－77°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第20号土壙（第132図）

AG－20グリッドで検出した。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.94m、短軸0.63m、深さ0.13mであった。主軸方位はN－13°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第21号土壙（第132図）

AG－20グリッドで検出した。

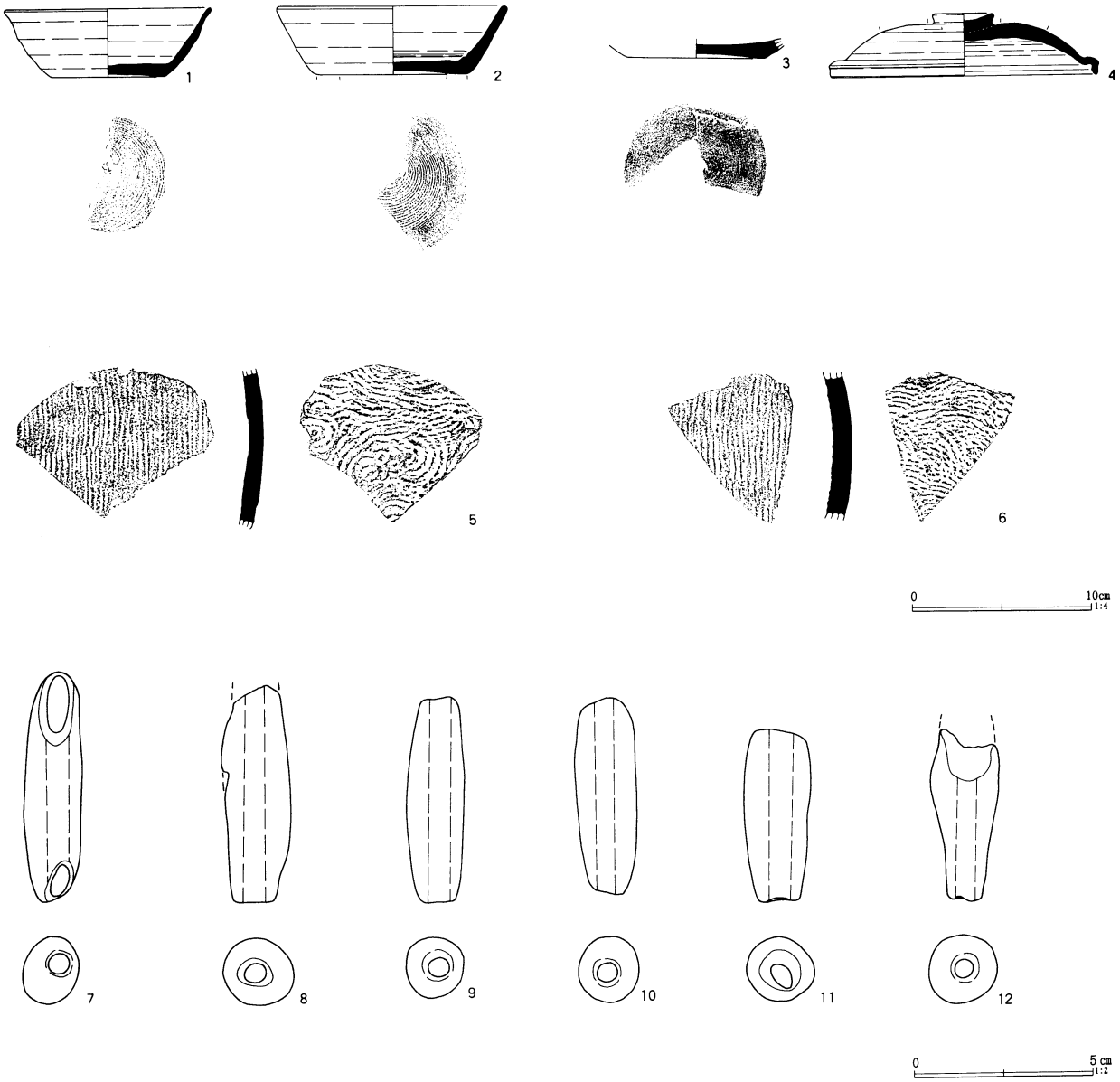
平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.88m、短軸0.62m、深さ0.42mであった。主軸方位はN－63°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第22号土壙（第132図）

AJ－20グリッドで検出した。遺構中央部はピットに壊されていた。

第134図　第11号土壙出土遺物



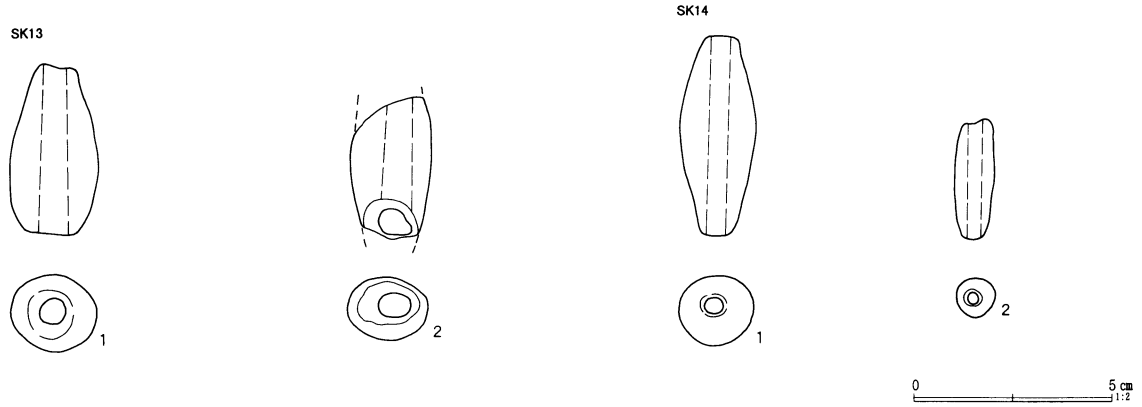
第11号土壙出土遺物観察表（第134図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	(11.5)	3.8	(6.5)	ABDFHJ	3	褐灰	25%	覆土	
2	坏	(12.7)	3.8	(8.4)	ABIJ	2	灰	20%	覆土	
3	坏			(7.8)	ABEIJ	3	灰	底部	覆土	
4	蓋	(15.0)	3.5		ABFL	2	灰	20%	覆土	
5	甕				ABFHJ	1	灰	破片	覆土	
6	甕				ABHJ	2	灰	破片	覆土	

第11号土壙出土土錘観察表（第134図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	6.4	1.6	0.6	16.80	BaIV	にぶい黄橙	90%	
8	(6.1)	2.0	0.6	19.60	CaIV	黒褐	100%	
9	5.8	1.7	0.6	15.09	BaIV	にぶい赤褐	100%	
10	5.5	1.8	0.6	16.03	BaIV	にぶい黄褐	100%	
11	4.8	1.9	0.7	15.83	DbV	黒褐	100%	
12	(4.7)	1.9	0.6	13.30	Ca他	橙	60%	

第135図　第13・14号土壙出土遺物



第13号土壙出土土錘観察表（第135図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	6.3	2.3	0.8	17.36	BaIV	にぶい黄橙	100%	
2	(3.6)	2.0	0.8	10.14	Ba他	にぶい褐	80%	

第14号土壙出土土錘観察表（第135図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	5.0	1.9	0.5	14.02	CaV	にぶい褐	100%	
2	3.0	1.0	0.3	2.89	DbVI	にぶい褐	100%	

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.46m、短軸1.02m、深さ0.08mであった。主軸方位はN－76°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第23号土壙（第137図）

AG・AH－20グリッドで検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.54m、短軸0.65m、深さ0.18mであった。主軸方位はN－86°－Eであった。底面で、円形の小穴を検出した。

遺物は出土しなかった。

第24号土壙（第137図）

AG－20グリッドで検出した。遺構の東側は、SJ13と重複していたが、遺構の重複関係は明らかにできなかった。

平面の形状は長方形で、規模は、短軸0.56m、深さ0.16mであった。主軸方位は、N－85°－Eであった。

底面で、円形の小穴を検出した。SK23・24は、規模・形状が酷似し、主軸方位も同一であったが、２基の土壙の関係は明らかにできなかった。

遺物は出土しなかった。

第26号土壙（第137図）

AS－21グリッドで検出した。遺構は、SJ17を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.85m、短軸0.98m、深さ0.62mであった。主軸方位はN－45°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第27号土壙（第137図）

AS－21グリッドで検出した。遺構は、SJ17を壊していた。

平面の形状は方形で、規模は、短軸1.04m、深さ0.31mであった。主軸方位はN－50°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第28号土壙（第137図）

AS－21グリッドで検出した。

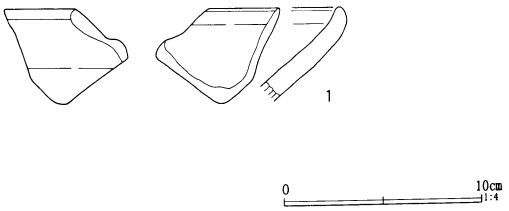
平面の形状は長楕円形で、規模は、長軸2.32m、短軸0.98m、深さ0.82mであった。主軸方位はN－14°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第16号土壙出土遺物観察表（第136図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	鉢				ABFHL	3	褐	破片	覆土	

第136図　第16号土壙出土遺物



第29号土壙（第137図）

AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.15m、短軸0.76m、深さ0.24mであった。主軸方位はN－10°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第30号土壙（第137図）

AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.87m、短軸0.82m、深さ0.13mであった。主軸方位はN－4°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第31号土壙（第137図）

AR－22グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.83m、短軸0.71m、深さ0.29mであった。主軸方位はN－90°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第32号土壙（第137図）

AR－22グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.95m、短軸0.72m、深さ0.10mであった。主軸方位はN－9°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第33号土壙（第137図）

AS－21グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.93m、短軸0.72m、深さ0.16mであった。主軸方位はN－40°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第34号土壙（第137図）

AQ－21グリッドで検出した。遺構は、SJ20に壊されていた。

平面の形状は、長方形と考えられ、規模は、深さ0.28mであった。

遺物は出土しなかった。

第35号土壙（第137図）

AQ－21グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸0.96m、短軸0.70m、深さ0.10mであった。主軸方位はN－24°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第36号土壙（第137図）

AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.28m、短軸1.04m、深さ0.10mであった。主軸方位はN－88°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第37号土壙（第137図）

AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.14m、短軸0.78m、深さ0.22mであった。主軸方位はN－72°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

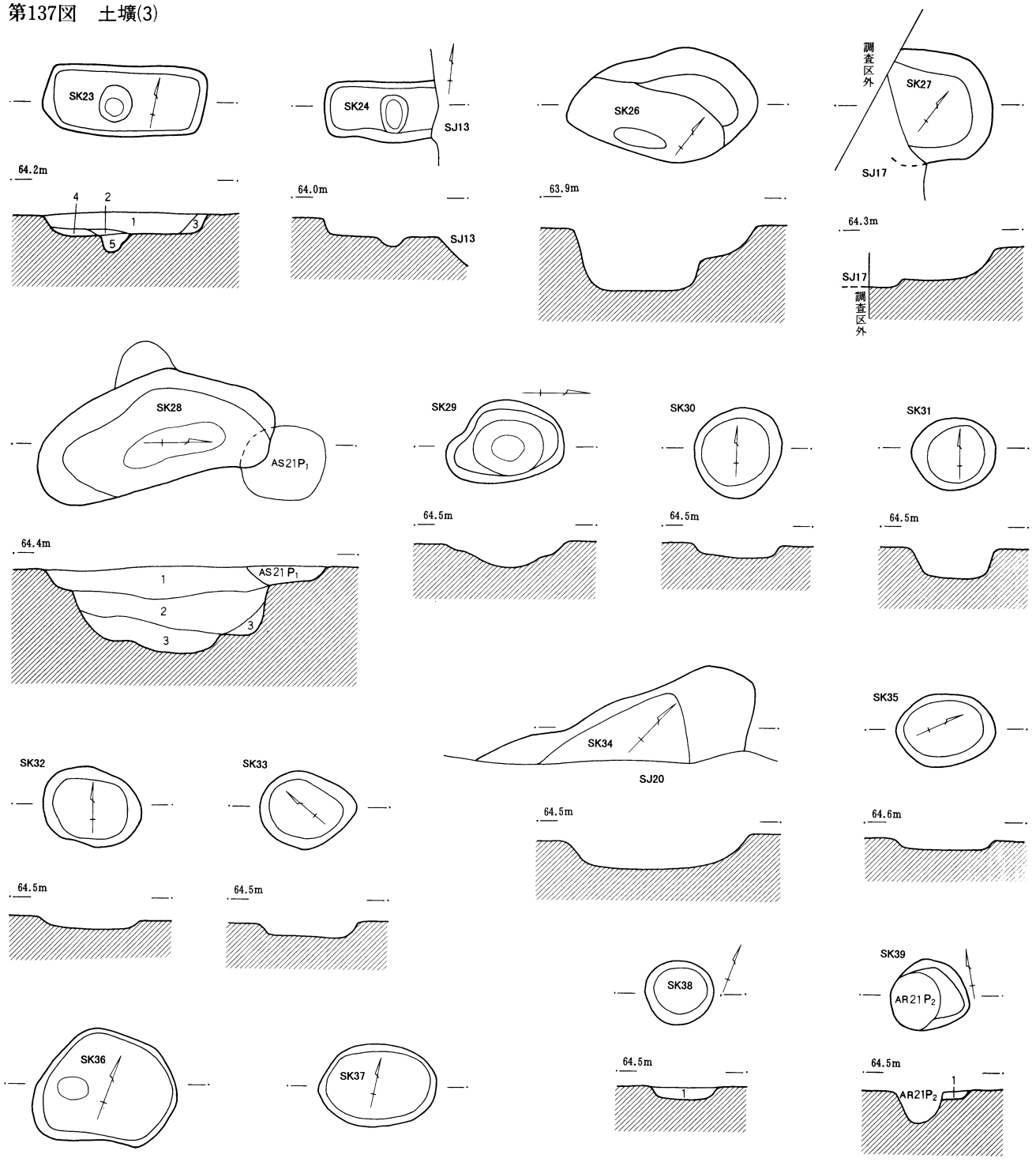
第38号土壙（第137図）

AR－21グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.64m、短軸0.62m、深さ0.13mであった。主軸方位はN－90°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第137図　土壙(3)



第23号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　地山ブロック多。焼土粒含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　粘性ややあり。炭化物含。
3　暗褐色　(10YR3/3)　砂質。地山ブロック含む。
4　褐色　(10YR4/4)　炭化物、地山ブロック含。
5　黒褐色　(10YR3/1)　地山ブロック、炭化物、焼土粒含。

0　2 m　1:60

第28号土壙
1　暗褐色　(2.5YR4/1)　黄灰色粘質砂ブロック(φ2～3㎜)少。
2　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色粘質砂ブロック(φ2～3㎜)やや多。
3　暗褐色　(10YR5/2)　黄灰色粘質砂粒(φ1～2㎜)、炭化物(φ2～3㎜)少。

第36号土壙
1　黒褐色　(10YR2/1)　黄灰色粘土ブロック(φ8～10㎜)まばら。炭、焼土ブロック(φ3～5㎜)まばら。

第37号土壙
1　暗褐色　(10YR3/2)　黄灰色粘土ブロック(φ2～3㎜)多。埋戻し土。

第38号土壙
1　暗褐色　(10YR4/2)　黄灰色砂ブロック(φ3～10㎜)多。焼土(φ1～2㎜)少。埋戻し土。

第39号土壙
1　褐色土　(10YR3/2)　黄灰色砂ブロック(φ5～10㎜)多。

第39号土壙（第137図）

AR－21グリッドで検出した。遺構の西側をピットに壊されていた。

平面の形状は楕円形と考えられ、規模は、深さ0.09mであった。

遺物は出土しなかった。

第40号土壙（第138図）

AP－21グリッドで検出した。遺構は、SJ22に壊されていた。

平面の形状は長楕円形で、規模は、長軸2.21m、短軸0.89m、深さ0.56mであった。主軸方位はN－27°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第41号土壙（第138図）

AO・AP－21グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸1.10m、短軸1.01m、深さ0.18mであった。主軸方位はN－75°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第42号土壙（第138図）

AC－19グリッドで検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸0.84m、短軸0.48m、深さ0.45mであった。主軸方位はN－88°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第43号土壙（第138図）

AC－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.34m、短軸0.78m、深さ0.33mであった。主軸方位はN－12°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第44号土壙（第138・139図）

AB－19グリッドで検出した。遺構は、北側がピットに壊され、西側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は長方形で、規模は深さ0.23mあった。

出土遺物は、須恵器甕の破片２点、土錘１点が出土した。１は頸部、２は胴部の破片である。

第45号土壙（第138図）

W－19グリッドで検出した。遺構は、西側をSK46に壊されていた。

平面の形状は不整形で、規模は、長軸1.70m、短軸0.49m、深さ0.16mであった。主軸方位はN－８°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第46号土壙（第138図）

W－19グリッドで検出した。遺構は、SK45を壊していた。

平面の形状は楕円形で、規模は長軸1.53m、短軸0.90m、深さ0.16mであった。主軸方位はN－22°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第47号土壙（第138図）

W－19グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.84m、短軸0.74m、深さ0.49mであった。主軸方位はN－０°であった。

遺物は出土しなかった。

第48号土壙（第138・140図、図版34）

W・X－19グリッドで検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸2.86m、短軸0.76m、深さ0.20mであった。主軸方位はN－1°－Eであった。

出土遺物は、土師器甕が出土した。

第49号土壙（第138図）

W・X－18・19グリッドで検出した。

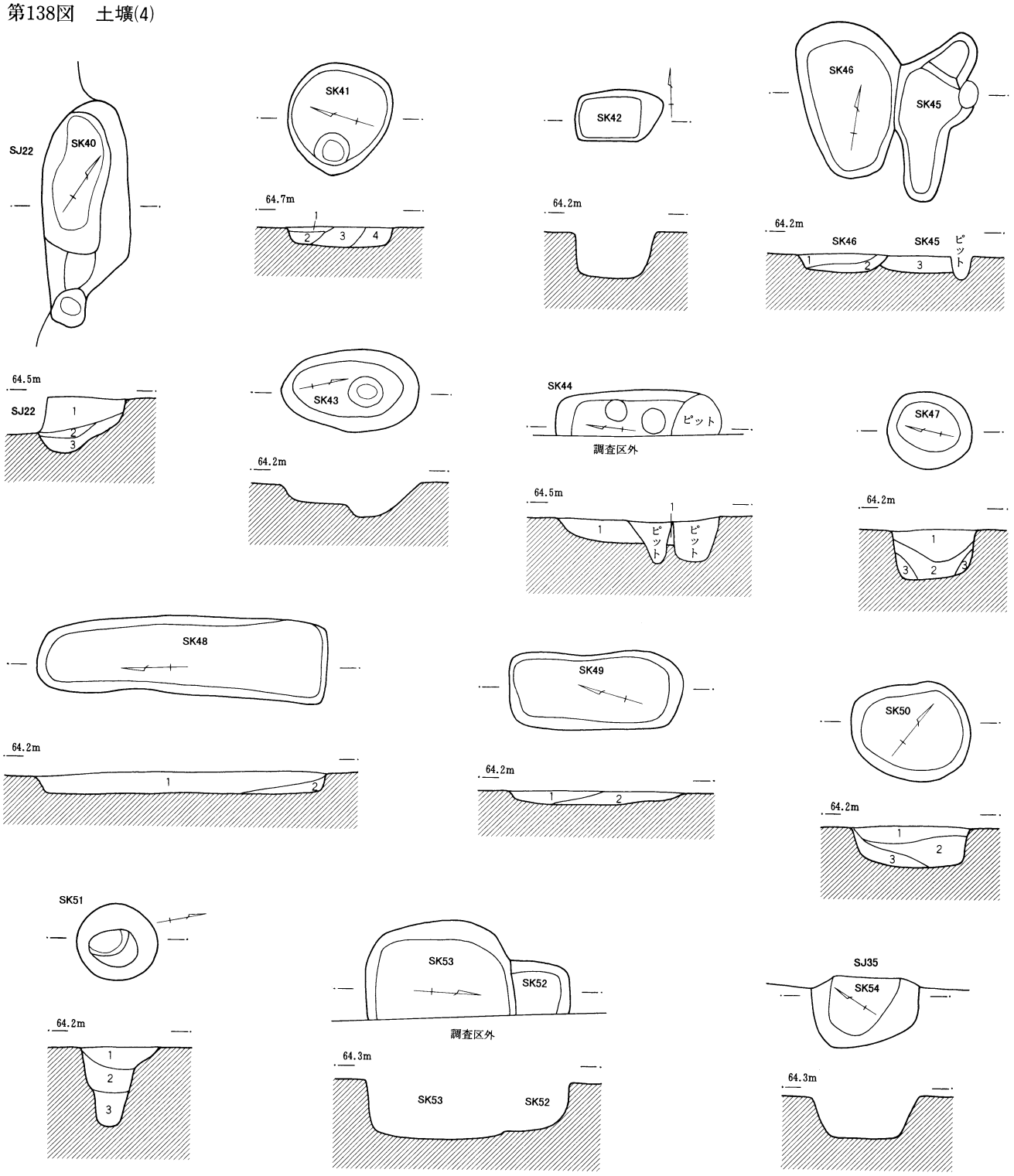
平面の形状は長方形で、規模は、長軸1.69m、短軸0.72m、深さ0.12mであった。主軸方位はN－19°－Wであった。

第50号土壙（第138図）

X－18グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.18m、短軸0.92m、深さ0.41mであった。主軸方位はN－58°－Eであった。

第138図　土壙(4)



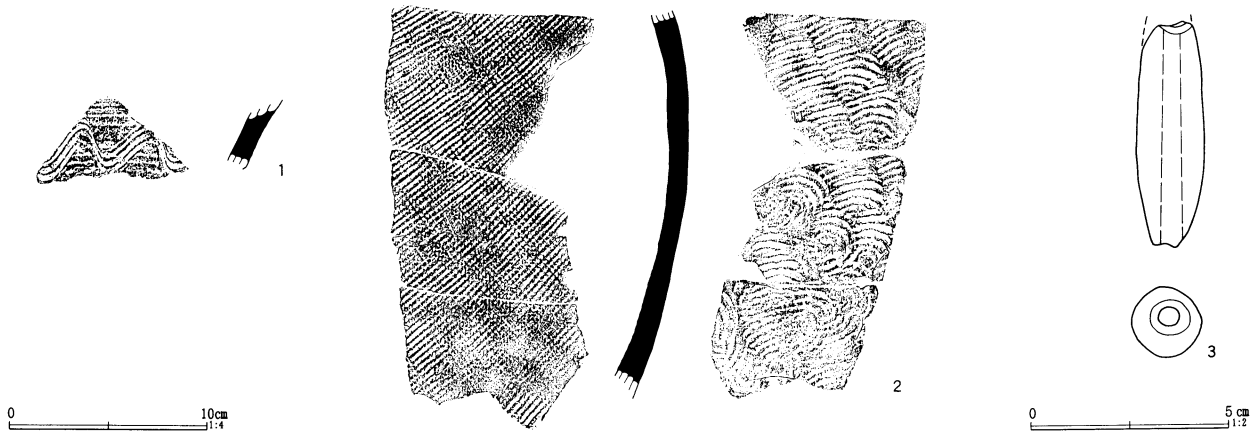
第40号土壙
1　鈍黄褐色　(10YR4/3)
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　黄褐色土粒子含む。
3　黒褐色　　(10YR3/2)
第41号土壙
1　黒褐色　(10YR2/2)
2　黒褐色　(10YR2/2)　鈍黄褐色土粒。
3　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄褐色土粒多。
4　黒褐色　(10YR3/2)　鈍黄褐色土粒と混合土。
第44号土壙
1　黒褐色（10YR3/1）暗褐色砂質土含む。

第45・46号土壙
1　黒褐色　(10YR2/3)　焼土粒含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。
3　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物含。
第47号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物含。地山ブロック多。
2　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物含。地山ブロックを少量含。
3　黒褐色　(10YR3/1)　炭化物含。焼土粒含。
第48号土壙
1　黒褐色　(10YR2/3)　炭化物、焼土粒、地山ブロック含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。

第49号土壙
1　黒褐色　(10YR2/3)　炭化物、焼土粒、地山ブロック含。
2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロック多。
第50号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　地山ブロック多。
2　黒褐色　(10YR3/1)　地山ブロック、焼土粒含。
3　暗褐色　(10YR3/3)　砂を多く含む。焼土ブロック含む。
第51号土壙
1　暗褐色　(10YR3/4)　炭化物、地山ブロック多。
2　黒褐色　(10YR2/3)　炭化物含。
3　黒褐色　(10YR3/2)　(φ2～5㎜)の小石を含む。

0　2 m
1:60

第139図　第44号土壙出土遺物



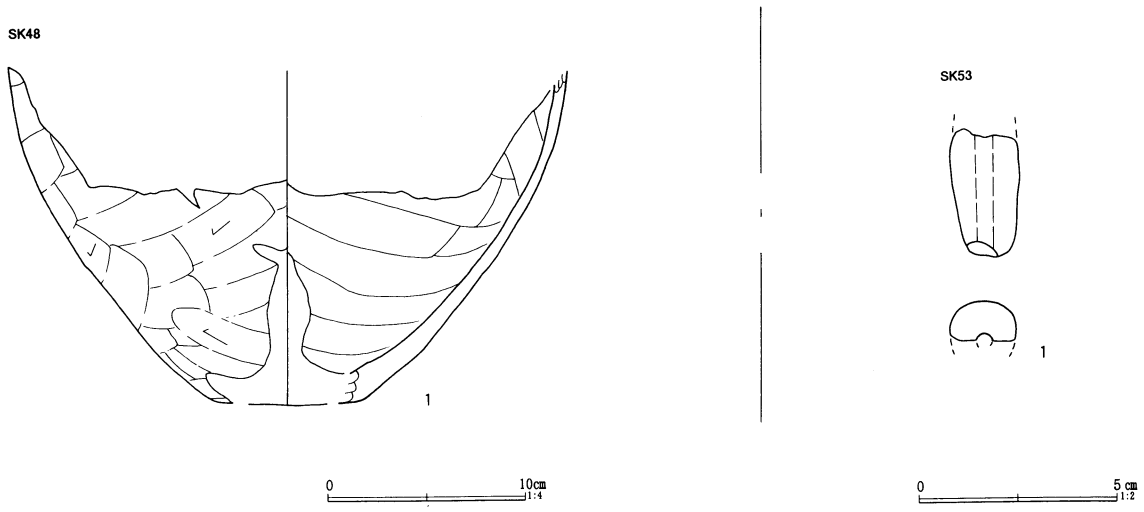
第44号土壙出土遺物観察表（第139図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕				ABEFHJ	3	灰白	破片	覆土	
2	甕				ABDEFHJ	3	灰褐	破片	覆土	

第44号土壙出土土錘観察表（第139図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
3	(5.8)	1.7	0.6	14.78	BaⅣ	橙	90%	

第140図　第48・53号土壙出土遺物



第48号土壙出土遺物観察表（第140図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕			(7.8)	ABDFJL	2	暗褐	破片	底面	

第53号土壙出土土錘観察表（第140図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	(3.4)	1.7	0.5	6.15	Ba他	橙	30%	

第51号土壙（第138図）

W－19グリッドで検出した。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.78m、短軸0.76m、深さ0.78mであった。主軸方位はN－7°－Wであった。

第52号土壙（第138図）

X－19グリッドで検出した。遺構の南側はSK53に壊され、東側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は方形で、規模は深さ0.50mであった。

第53号土壙（第138図、図版140）

X－19グリッドで検出した。SK52を壊していた。また、遺構の東側は調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は方形で、規模は、長軸1.40m、深さ0.56mであった。主軸方位はN－7°－Wであった。

出土遺物は、土錘が1点出土した。

第54号土壙（第138図）

Y－19グリッドで検出した。遺構は、SJ35と重複していたが、遺構の重複関係については明らかにできなかった。

平面の形状は楕円形で、規模は長軸1.06m、深さ0.40mであった。主軸方位はN－36°－Wであった。

遺物は出土しなかった。

第55号土壙（第141図）

Y－18・19グリッドで検出した。

平面の形状は長楕円形で、規模は、長軸1.46m、短軸0.35m、深さ0.13mであった。主軸方位はN－88°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第56号土壙（第141図）

Y－18グリッドで検出した。遺構の南側がピットに壊されていた。

平面の形状は円形で、規模は、長軸0.92m、短軸0.86m、深さ0.11mであった。主軸方位はN－90°－Eであった。

遺物は出土しなかった。

第57号土壙（第141図）

X－18グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.44m、短軸1.01m、深さ0.35mであった。主軸方位はN－6°－Wであった。

第58号土壙（第141・142図、図版31・35）

AB－19グリッドで検出した。

平面の形状は不正形で、規模は長軸4.13m、短軸2.44m、深さ0.23mであった。主軸方位はN－22°－Wであった。

遺構北西隅部底面で、ピットを検出したが、遺構に伴うかどうかは明らかにできなかった。

出土遺物は、土師器坏・皿・壺・甕、須恵器坏・甕の胴部が出土した。また、土錘が4点出土した。

5の須恵器坏は、末野産と考えられる。底部の調整は、手持ちヘラケズリであった。

第59号土壙（第141・143図）

AC－19グリッドで検出した。遺構の南側と西側が調査区外に展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

平面の形状は長方形と考えられる。規模は、短軸2.18m、深さ0.28mであった。主軸方位はN－32°－Eであった。

底面に、柱穴状のピットを検出したが、遺構に伴うかどうかは明らかにできなかった。

出土遺物は、土錘が3点出土した。

第60号土壙（第141図）

AC－19グリッドで検出した。

平面の形状は長方形で、規模は、長軸0.77m、短軸0.60m、深さ0.65mであった。主軸方位はN－86°－Wであった。

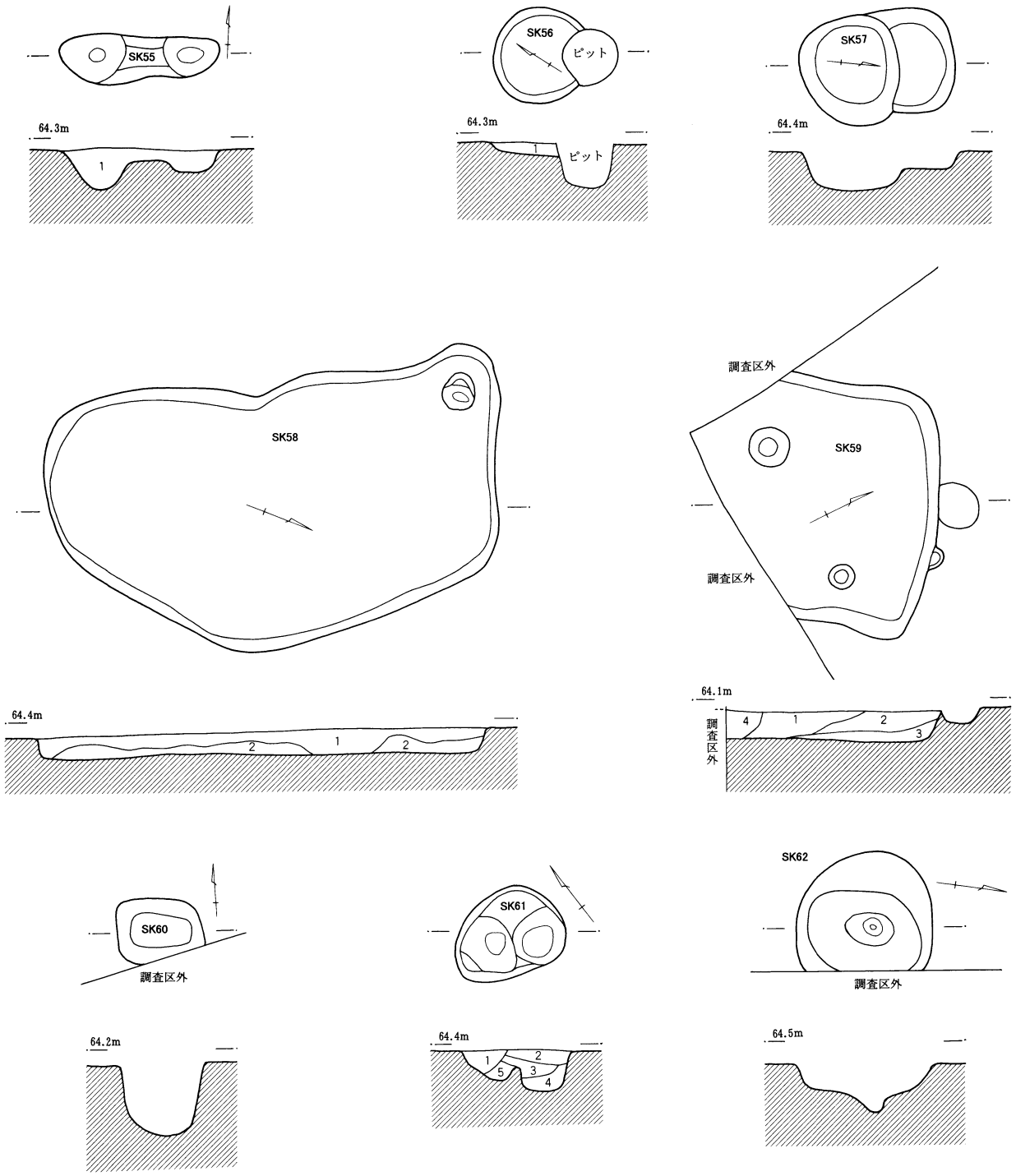
遺物は、平安時代の土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第61号土壙（第141図）

U・V－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.06m、短軸0.76m、深さ0.36mであった。主軸方位はN－88°－W

第141図　土壙(5)



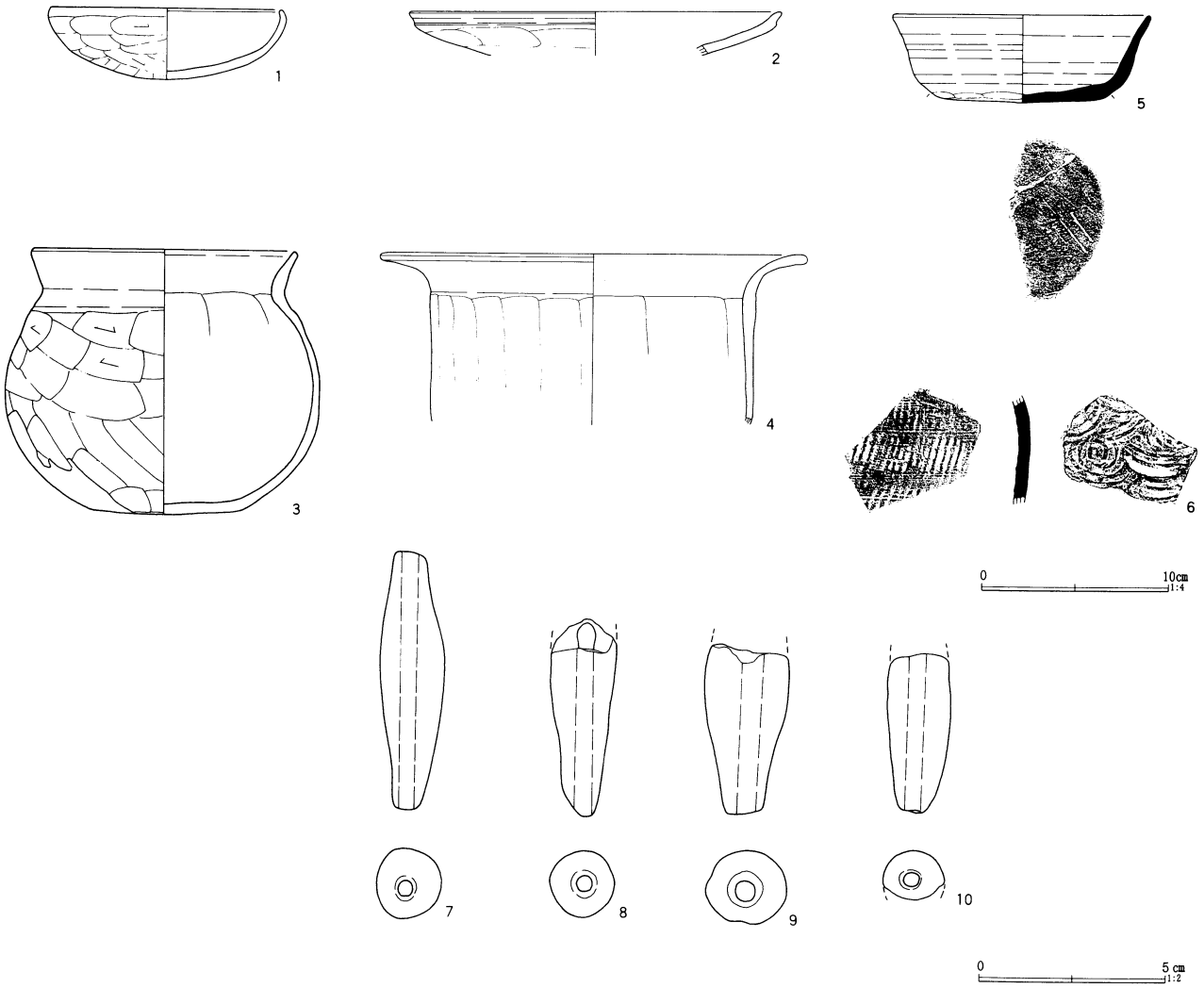
第 55 号土壙
1　暗褐色　(10YR3/3)　砂質。締まりあり。
第 56 号土壙
1　暗褐色　(10YR3/3)　焼土、炭化物粒子若干。
第 58 号土壙
1　暗褐色　(10YR3/3)　(φ1 mm)以下の砂を多く含む。地山ブロック含。焼土粒含む。粘性ややあり。
2　鈍黄褐色　(10YR4/3)　(φ1 mm)以下の砂を多く含む。地山ブロック多。砂質。

第 59 号土壙
1　黒褐色　(10YR3/2)
2　暗褐色　(10YR3/3)
3　褐色　(10YR4/4)　砂質。
4　黒褐色　(10YR3/1)

第 61 号土壙
1　灰黄褐色　(10YR4/2)
2　黒褐色　(10YR3/1)
3　鈍赤褐色　(10YR4/3)　砂質。
4　黒褐色　(10YR2/3)　砂質。
5　鈍黄褐色　(10YR5/4)

0　2 m　1:60

第142図　第58号土壙出土遺物



第58号土壙出土遺物観察表（第142図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	坏	12.5	3.8		ABEFHJ	3	橙	75%	覆土	
2	皿	(19.8)			ABDEFJ	3	橙	破片	覆土	
3	壺	(14.0)	(14.3)	(8.0)	ABEFJL	3	橙	50%	覆土	
4	甕	(23.0)			ABDEFJL	3	橙	20%	覆土	
5	坏	(13.7)	4.2	8.0	ABEFHJ	3	灰	30%	覆土	
6	甕				BFJL	1	灰	破片	覆土	

第58号土壙出土土錘観察表（第142図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
7	6.9	1.8	0.4	18.96	CaIII	にぶい黄橙	100%	
8	(5.3)	1.8	0.5	12.76	Ca他	にぶい黄橙	60%	
9	(4.6)	2.3	0.6	15.54	Cb他	にぶい黄褐	60%	
10	(4.3)	1.7	0.5	6.49	Ba他	にぶい黄褐	30%	

であった。

遺物は、平安時代の土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

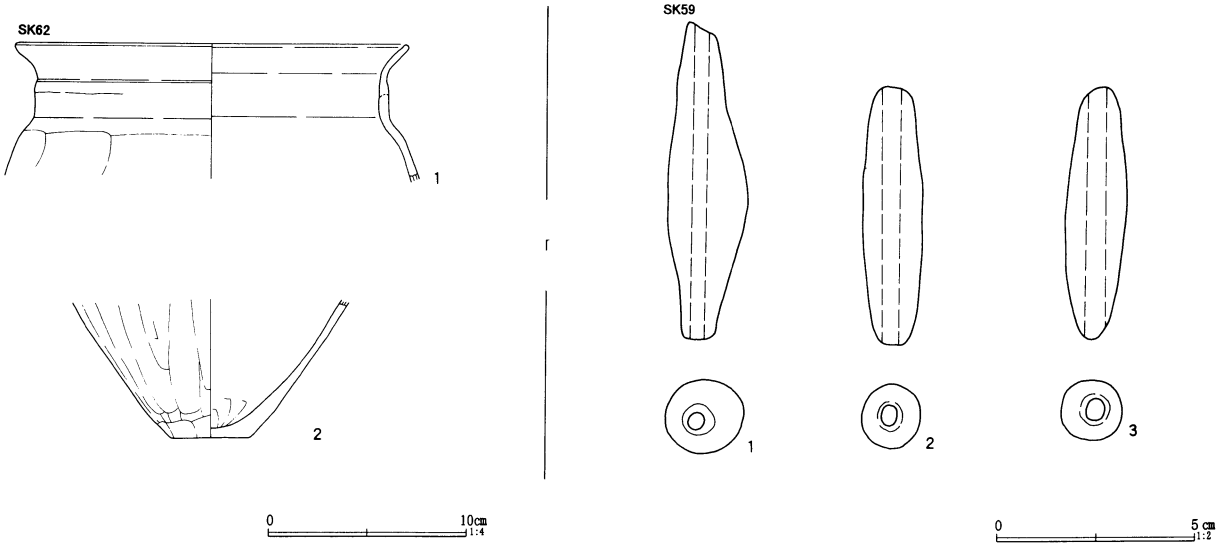
第62号土壙（第141・143図）

AB－19グリッドで検出した。

平面の形状は楕円形で、規模は、長軸1.25m、深さ0.44mであった。主軸方位はN－6°－Wであった。

遺物は、土師器甕が出土した。

第143図　第59・62号土壙出土遺物



第62号土壙出土遺物観察表（第143図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(19.6)			BEFJ	3	橙	破片	覆土	
2	甕			(4.0)	ABEFHKL	2	橙	破片	覆土	

第59号土壙出土土錘観察表（第143図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	8.0	2.0	0.4	20.71	CbII	にぶい黄橙	90%	
2	6.5	1.5	0.5	12.79	BaIII	黒褐	100%	
3	6.3	1.5	0.5	12.68	BaIV	にぶい褐	90%	

(4) 溝跡

如意南遺跡からは、溝跡は4条検出した。SD1～3は、II区北端から、SD4はIII区中央部で検出した。

溝跡は、調査地点が細長く、検出した溝跡は殆どが調査区外へ展開していた。このため、全体の形状が明らかにできなかったものが多かった。

以下、各溝跡について報告する。

第1号溝跡（第144図）

AD－19･20グリッドで検出した。遺構は、北側と東側が調査区外へ展開していたため、全体の形状は明らかにできなかった。また、西側でSD2と重複していた。

溝跡は、東西方向に伸びていた。規模は、確認できた長さが2.2m、幅0.44m、深さ0.15mであった。

遺構は、SD2と重複していた。重複関係は明らかにできなかったが、SD1とSD2は連続するように重検出したため、同一の溝跡であった可能性もある。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第2号溝跡（第144・145図）

AD－19･20グリッドで検出した。遺構の北側は調査区外へ展開し、東側はSD1と重複していたため、全体の形状は明らかにできなかった。

溝跡は、SD1と連続するように、東西方向に伸びていた。また、溝跡の西側は立ち上がっており、溝の西端を検出した。規模は、確認できた長さが4.7m、幅0.7m、深さ0.4mと、規模はSD1よりも大きい。

遺構は、SD1と重複していたが、重複関係については明らかにできなかった。SD1とSD2は、連続して検出したため、同一の溝跡であった可能性もある。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第3号溝跡（第144・146図、図版25・35・40）

AE－19・20グリッドから検出した。遺構の東側は、調査区外に展開し、全体の形状は明らかにできなかった。また、遺構の西側は、SJ6・7を壊し、SJ6・7の東壁付近で立ち上がっていた。

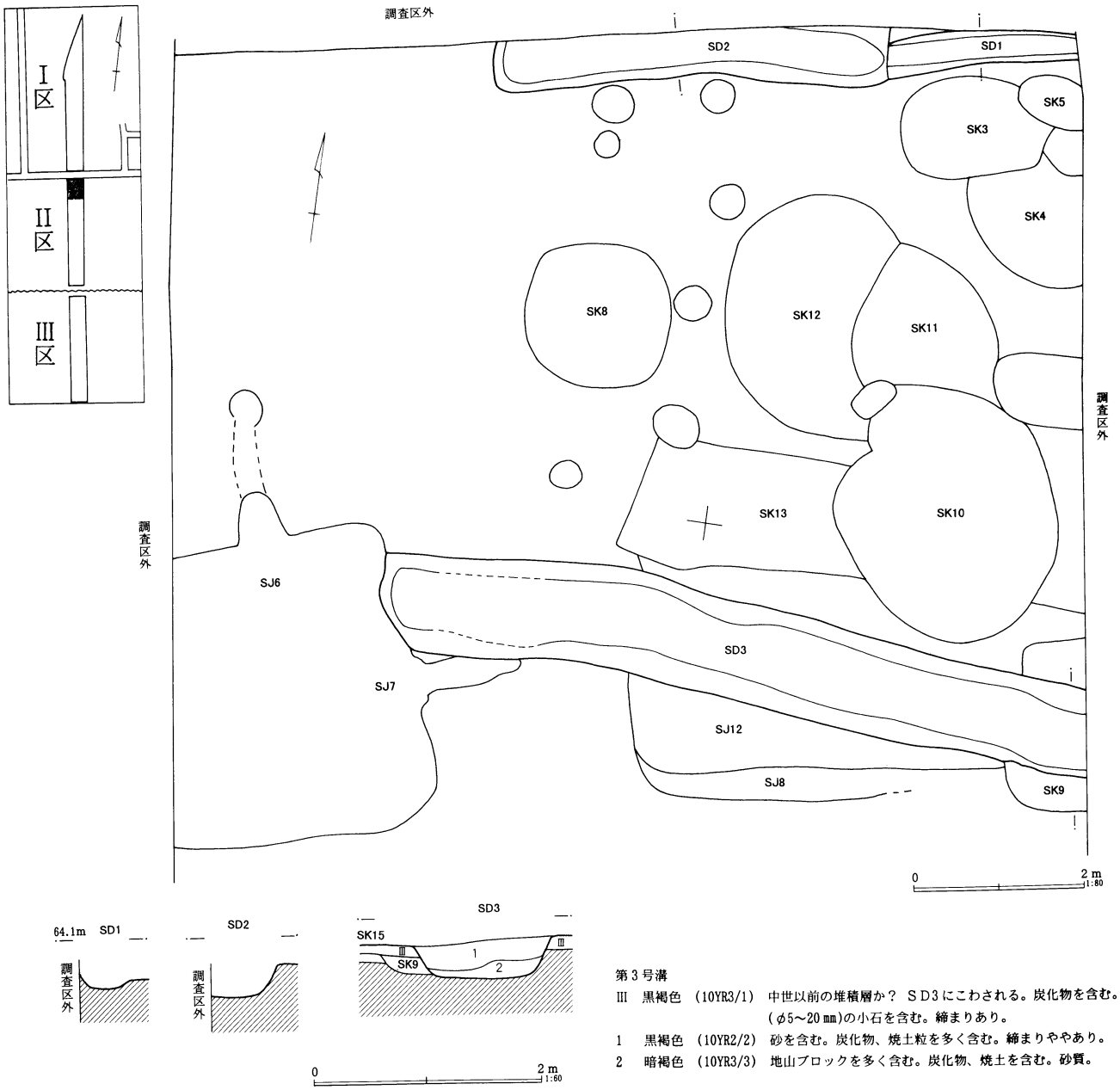
溝跡は、東西方向に伸びていた。規模は、確認できた長さが6.45m、幅0.85m、深さ0.35～0.45mであった。

断面の形状は、逆台形で、底面は凹凸なく、概ね平坦であった。西端と調査区東端とのレベル差もなく、水平であった。

遺構は、SJ6・7・12、SK9・15と重複していた。遺構の重複関係は、土層断面の観察により、すべての遺構を壊していることを確認した。

出土遺物は、覆土中から、平安時代の土師器・須恵器の破片と共に、中世瀬戸産の陶器、在地産の陶器が出土した。また、紡錘車、土錘が出土した。

第144図　第1・2・3号溝跡



第3号溝

Ⅲ　黒褐色　(10YR3/1)　中世以前の堆積層か？　SD3にこわされる。炭化物を含む。(φ5～20mm)の小石を含む。締まりあり。

1　黒褐色　(10YR2/2)　砂を含む。炭化物、焼土粒を多く含む。締まりややあり。

2　暗褐色　(10YR3/3)　地山ブロックを多く含む。炭化物、焼土を含む。砂質。

第２号溝跡出土土錘観察表（第145図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	6.2	2.0	0.6	21.38	BbIV	黒褐	100%	

遺構の時期は、出土遺物から、中世に属していたと考えられ、後述する陶器の特徴から15世紀前半代と考えられる。溝の北側にはSK10が隣接し、SK10からは、宝篋院塔相輪部と、15世紀代前半と考えられる、瀬戸産の卸目付大皿が出土していることから、SD3とSK10は同時期のものと考えられ、関連が想定される。

１は、瀬戸産の平碗または浅碗と考えられる。底部の破片であるため、全体の形状は不明である。高台部は低い削り出し高台である。高台部外面と底部の境界には、ケズリの際にに生じた、ヘラの上端の痕跡が明瞭に残され、鋭利な沈線状となっていた。天目茶碗の可能性もあったが、内面底部に灰釉が施釉されていたため、平碗または浅碗とした。

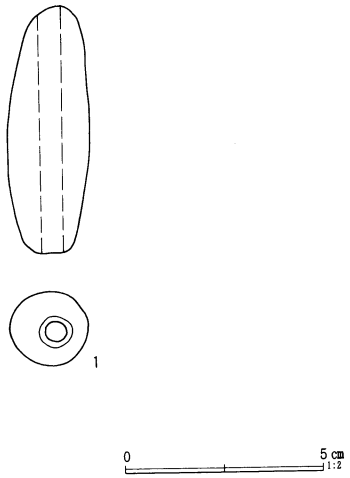
２は、瀬戸産の卸皿である。底部のみの破片である。底径は5.1cmと小さく、底部から大きく外傾する皿状の形態となる。底部の切り離しは糸切りである。内面の卸目は、ヘラ状工具で格子状施されていた。また、底部内面には灰釉が施されていた。

３は、瀬戸産の花瓶と考えられる。頚部～胴部の破片である。胴部の最大径は、12.0cmであった。胎土は灰白色で、黒褐色の釉が施釉されていた。胴部には印花手法による唐草文が描かれ、その上部と下部には、一列に並んだ丸文が施されていた。内面は、上部でナデが強い。

４は、土釜である。在地産の瓦質陶器である。口縁部は、やや内傾するが、概ね直立気味に立ち上がる。口縁端部は、面取り風にナデられていた。口縁部と胴部の境界は、強いナデによる稜が明瞭である。胴部外面には把手の痕跡が認められた。

５・６は、在地産の鉢または片口鉢である。５は口縁部の破片、６は底部の破片である。２点とも胎土・色調ともに共通し、同一個体の可能性がある。５の口縁部は、端部内面のナデ調整が顕著で、端部直下が沈線状となっていた。６は、胴部外面と底部の境界に、指頭による押さえ痕が認められた。

第145図　第２号溝跡出土遺物



７は、土製紡錘車である。約1/2を欠損していた。大きさは、上端の幅5.4cm、下端の幅3.5cm、重さ30.1gであった。

第４号溝跡（第147図）

AQ－21グリッドで検出した。遺構は東西方向に伸びていた。遺構の西側では、立ち上がりを検出したが、東側は、SJ21と重複していた。

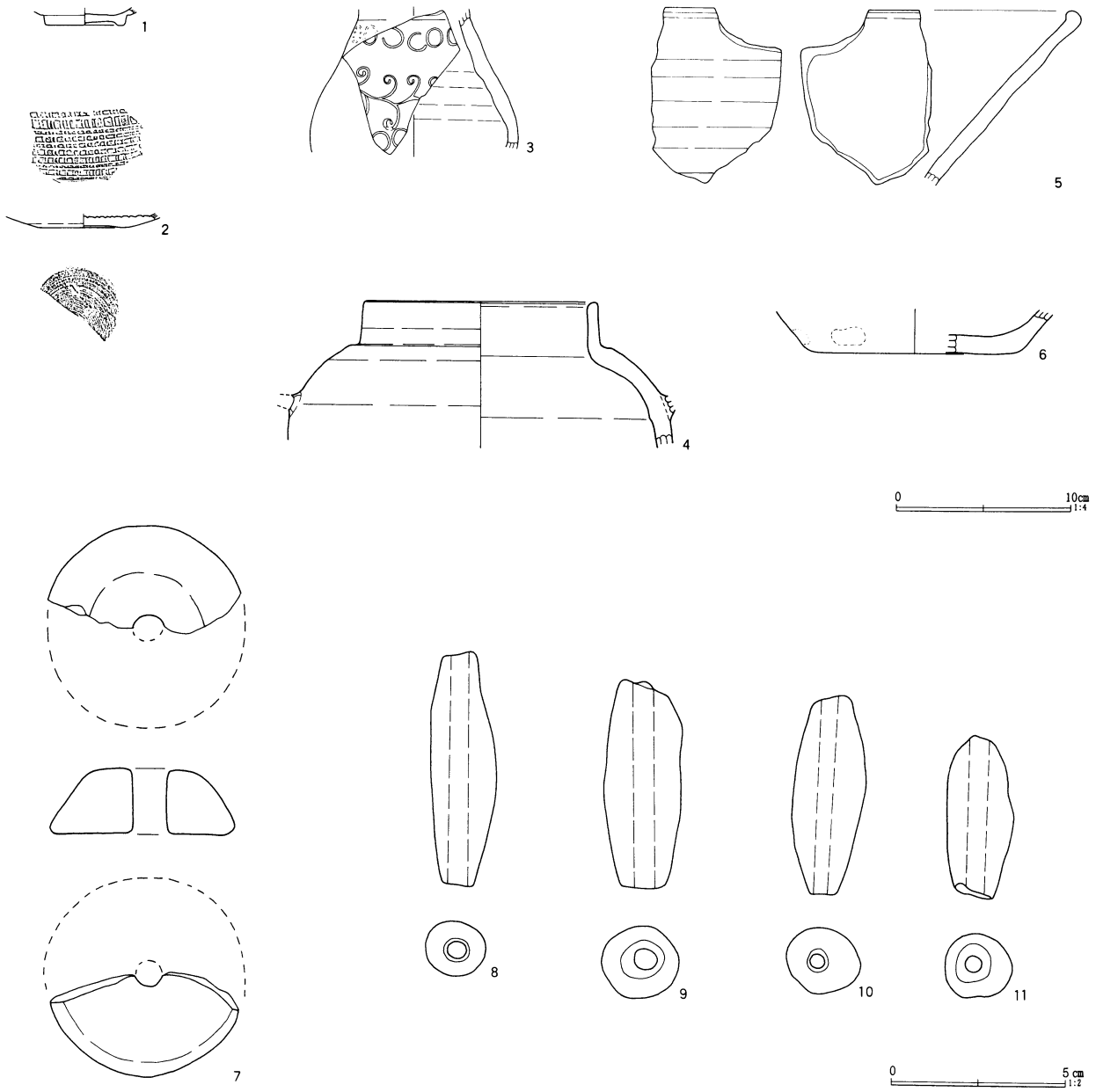
規模は、確認できた長さが4.4m、幅0.82m、深さ0.2mであった。

断面の形状は、浅いU字状で、底面中央部が深く、両端へ行くほど浅くなっていた。溝跡両端のレベル差はなく、概ね水平であった。

遺構は、SJ21と重複していた。遺構の重複関係は明らかにできなかったが、重複するSJ21土層断面の観察では、SD4は検出できなかったことから、SJ24が新しいか、SD４が、SJ21内で立ち上がっていた可能性がある。

出土遺物は、土師器・須恵器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

第146図　第3号溝跡出土遺物



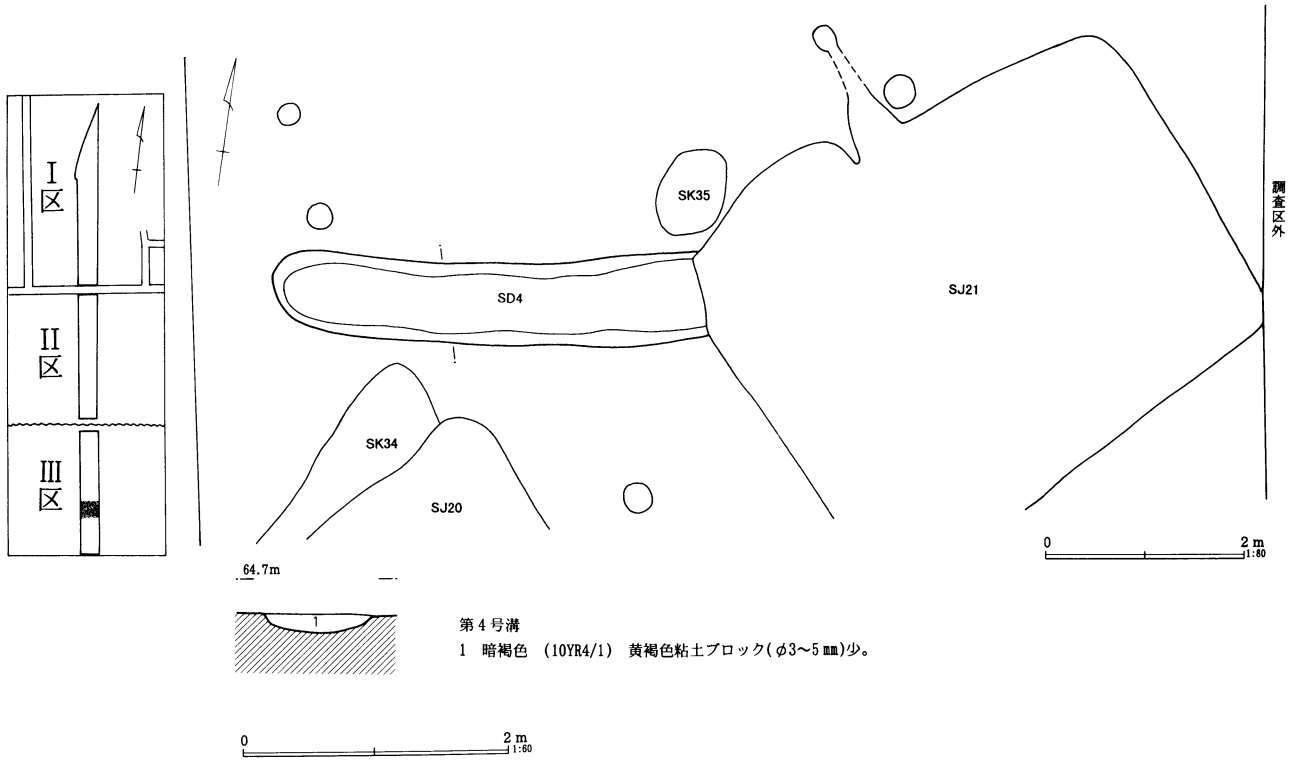
第３号溝出土遺物観察表（第146図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	碗			4.6	BF	1	灰白	底部	覆土	中世　瀬戸・灰釉
2	卸皿			5.1	BF	1	灰白	底部	覆土	中世　瀬戸・灰釉
3	花瓶				BF	1	灰白	胴部	覆土	中世　瀬戸・鉄釉
4	土釜	(13.0)			AFJ	3	暗灰	胴部上半	覆土	中世　在地・瓦質
5	鉢				ACHJKL	3	褐灰	口縁	覆土	中世　在地
6	鉢			(12.0)	ACHJKL	3	褐灰	底部	覆土	中世　在地

第３号溝跡出土土錘観察表（第146図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
8	6.7	1.7	0.6	17.76	CbIII	褐	95%	
9	5.9	2.3	0.6	28.52	BbIV	にぶい褐	90%	
10	5.8	2.1	0.4	21.97	BbIV	黒褐	90%	
11	4.4	2.0	0.5	15.73	Ba他	褐	90%	

第147図　第４号溝跡



(5)　ピット

ピットは、如意南遺跡からは、277基検出した。ピットの分布は、調査区内に散在せず、概ね４箇所に集中する傾向が認められた。これらの集中個所は、掘立柱建物跡あるいは柵列等の柱穴であった可能性もあったため、各集中個所について、それぞれピット群１～４と番号を付した。

各ピット群の分布範囲は、以下のとおりである。

ピット群１は、Ⅰ区X・Y－18・19グリッドのSJ35周辺部。

ピット群２は、II区AF～AH－19・20グリッドのSJ10以南から礫層露出部分まで。

ピット群３は、II区AI・AJ－19グリッドの、礫層露出部分以南からSB1周辺まで。

ピット群４は、III区AO～AQ－21グリッドの、埋没谷南岸礫層露出範囲以南からSJ22周辺部までであった。

以下、各ピット群について報告する。なお、ピット群中の個々のピット番号は、新たに付さなかった。ピットの深さについては、平面図中の各遺構脇に、遺構確認面からの深さを（cm）であらわした。

ピット群１（第148図）

Ⅰ区X・Y－18・19グリッドで検出した。

ピットは25基検出した。

遺構の規模は、径20cm～60cm、深さ９cm～60cm前後であった。

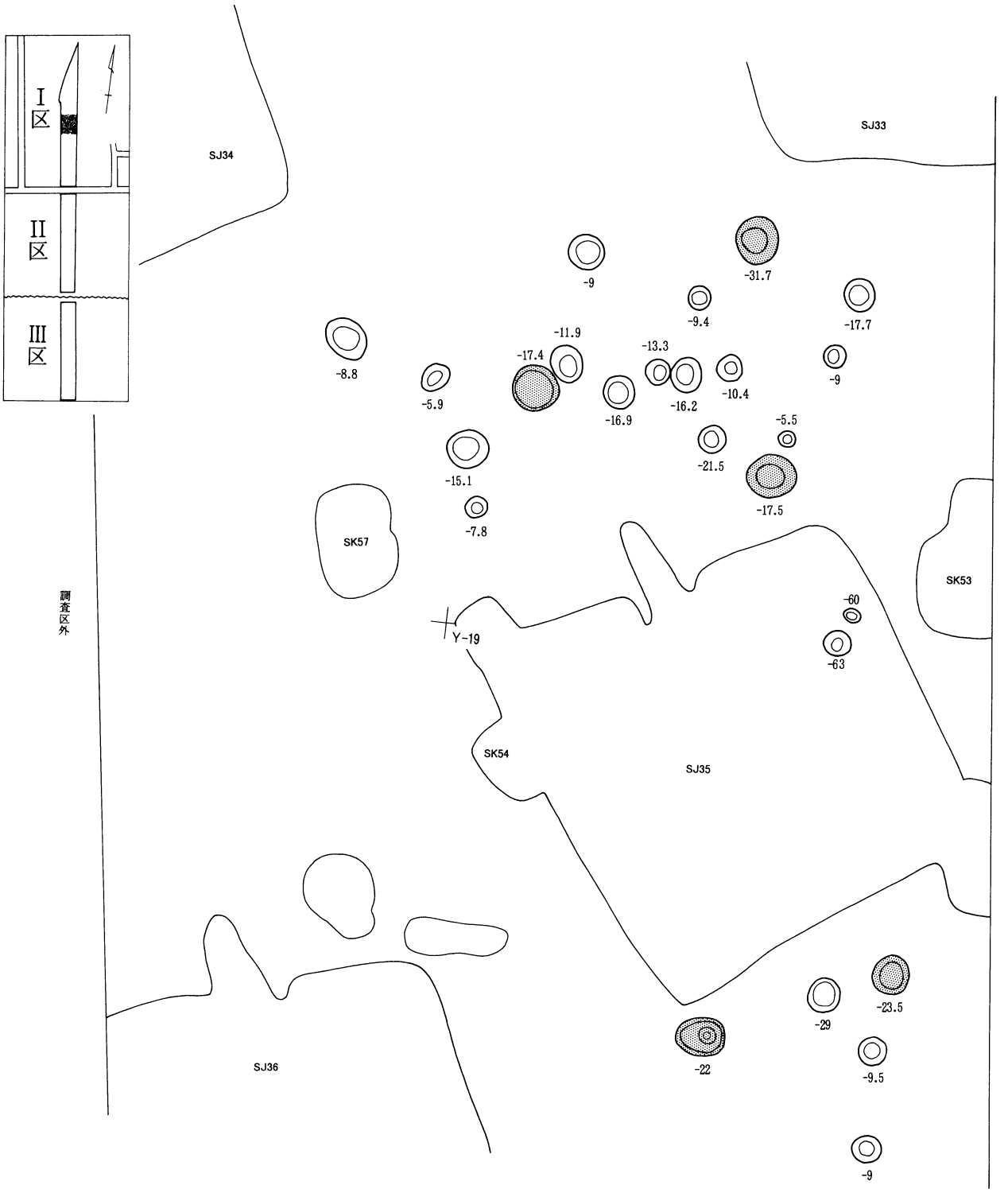
遺構覆土は、暗褐色土を主体とし、地山の黄褐色ブロック・砂粒を含む一群と、黒褐色土を主体とし、砂粒・炭化物・焼土粒・地山の黄褐色砂質土ブロックを含む一群がある。前者は、平面図中にスクリーントーンで示した。

前者の一群は、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡の柱穴覆土と共通することから、古代に属していた可能性がある。また後者は、中世の遺物が出土した、SD3・SK10の覆土と共通していることから、ピットは、中世に属していた可能性がある。また、一部のピットは、SJ35を壊していた。

25基のピットは、建物を構成する柱穴の可能性もあるが、配列に規則性がなく、建物遺構は検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

第148図　ピット群(I)



0　2 m
1:80

ピット群２（第149図、図版41）

ピット群２は、II区AF～AH－19･20グリッドで検出した。

ピットの分布範囲は、SJ13北側から、礫層露出範囲北側までであった。ピットは、104基検出した。

ピットの規模は、20～40cmの方形または円形で、深さは、浅いもので９cm、深いものは55cm前後であった。

覆土は、全て黒褐色土を主体とし、砂粒・炭化物・焼土粒・地山の黄褐色砂質土ブロックを含んでいた。これらは、中世に属するSK10･SD3覆土と共通することから、全て中世に属していた可能性がある。

柱穴は、SJ23北側の一群は東西方向に並び、西側のAG－20グリッド杭からAH－20グリッド杭にかけては南北方向に並び、またAH－20グリッド杭付近では、東西方向に並ぶ一群があり、配置にやや規則性が見られた。

これらは、掘立柱建物跡あるいは柵列等の建物の柱穴であった可能性があるが、建物遺構の抽出はできなかった。

出土遺物は、ピットから出土したものはなかったが、グリッドから宋銭11枚が出土した。本来は、グリッド出土遺物として報告すべき遺物であるが、ピット群と関連が想定されるため、ピット群出土遺物として報告する。出土位置については第149図に示した。

１･２は、AG－19グリッド南東部のピット覆土上層から出土した。２枚が重なって出土した。１は「咸平元寶(初鋳年998年、以下初鋳年)、２は「元祐通寶(1086年）であった。

３～11は、AG－20グリッド杭付近から出土した。９枚が重なって出土した。

１の「開元通寶（621)」が最も古い年代の唐銭で、11の「政和通寶（1111年)」の年代が最も新しい。

９枚の銭の残存状況は、４・７・８以外は良好で、表面の文字は鮮明に判読することができた。しかし、裏面を詳細に観察すると、全体的に粗悪で、外縁や内郭の段を殆ど持たないものも見られた。

ピット群３（第150図）

ピット群３は、II区AI･AJ－19グリッドで検出した。ピットは49基検出した。

遺構の規模は、径20～60cm前後の円形で、深さは9cm～50cm前後であった。

覆土は、暗褐色土を主体とし、地山ブロック・砂粒を含む一群と、黒褐色土を主体とし、砂粒・炭化物・焼土粒・地山ブロックを含む一群がある。前者は、平面図中にスクリーントーンで示した。

前者の一群は、隣接するSB1の柱穴覆土と共通することから、古代に属していた可能性がある。また後者は、中世の遺物が出土した遺構の覆土と共通しており、中世に属していた可能性がある。

ピットの配列は、古代のものと考えられるピットは、SB1北側で、東西方向に並ぶ一群が、中世と考えられるピットは、SJ16北側にT字型に並ぶ一群があるが、建物遺構の検出には至らなかった。

遺物は出土しなっかた。

ピット群４（第151図）

ピット群４は、III区AO～AQ－21グリッドで検出した。ピットは33基検出した。

遺構の規模は、径20cm～80cmの円形または楕円形で、深さは6.5cm～65cm前後であった。

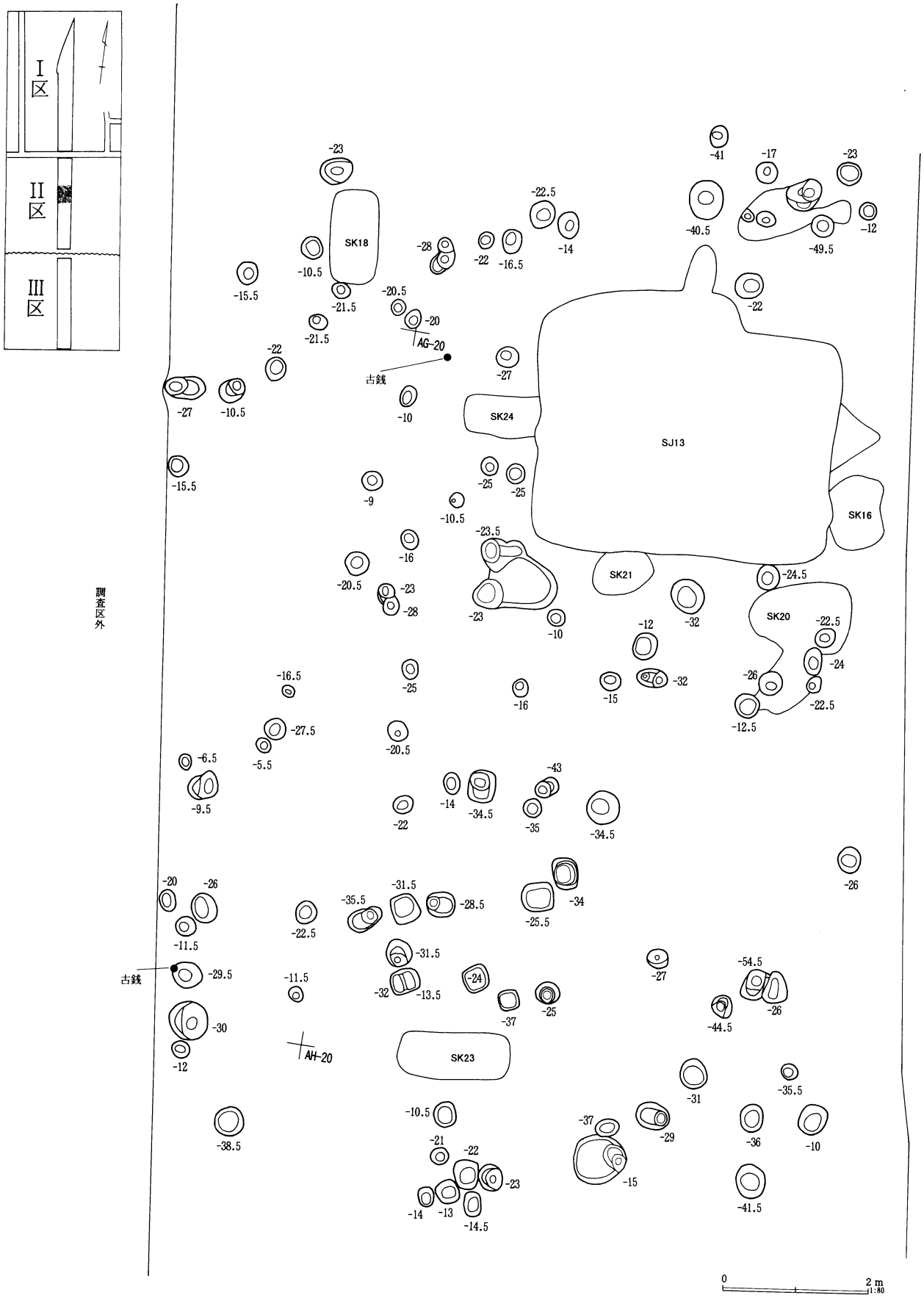
覆土は、暗褐色土を主体とし、地山ブロック・砂粒を含む一群と、黒褐色土を主体とし、砂粒・炭化物・焼土粒・地山ブロックを含む一群がある。前者は、平面図中にスクリーントーンで示した。

前者は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡等、古代の遺構覆土と共通するため、古代に属していた可能性がある。また後者は、SK10･SD3等、中世の遺構覆土と共通しており、中世に属していた可能性がある。

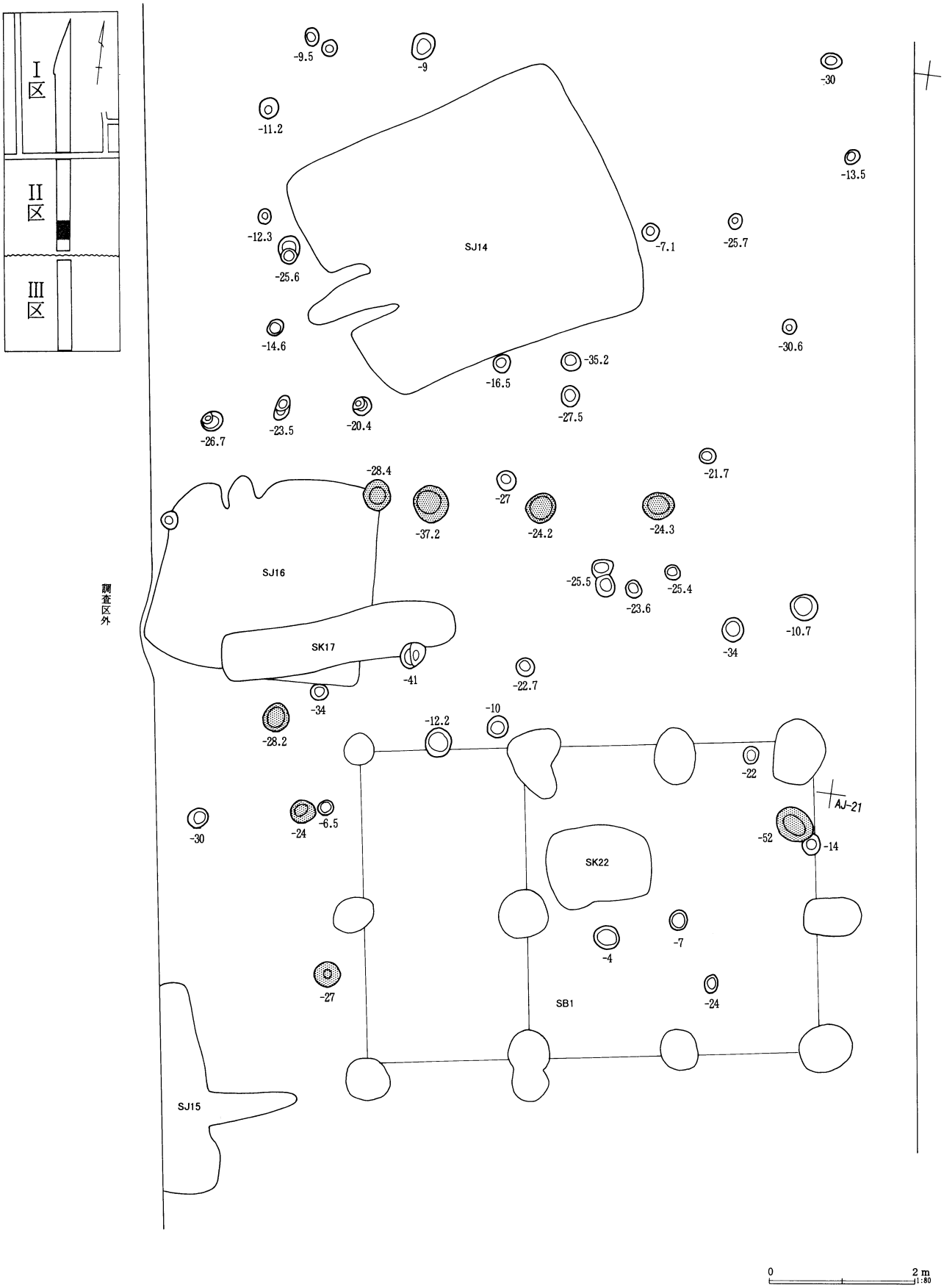
ピットの配列は、古代のものと考えられるピットは、SJ22東側で、L字型に並ぶ一群があったが、建物跡の検出はできなかった。中世と考えられるピットは、配列に規則性は認められず、建物遺構の検出はできなかった。

遺物は出土しなっかた。

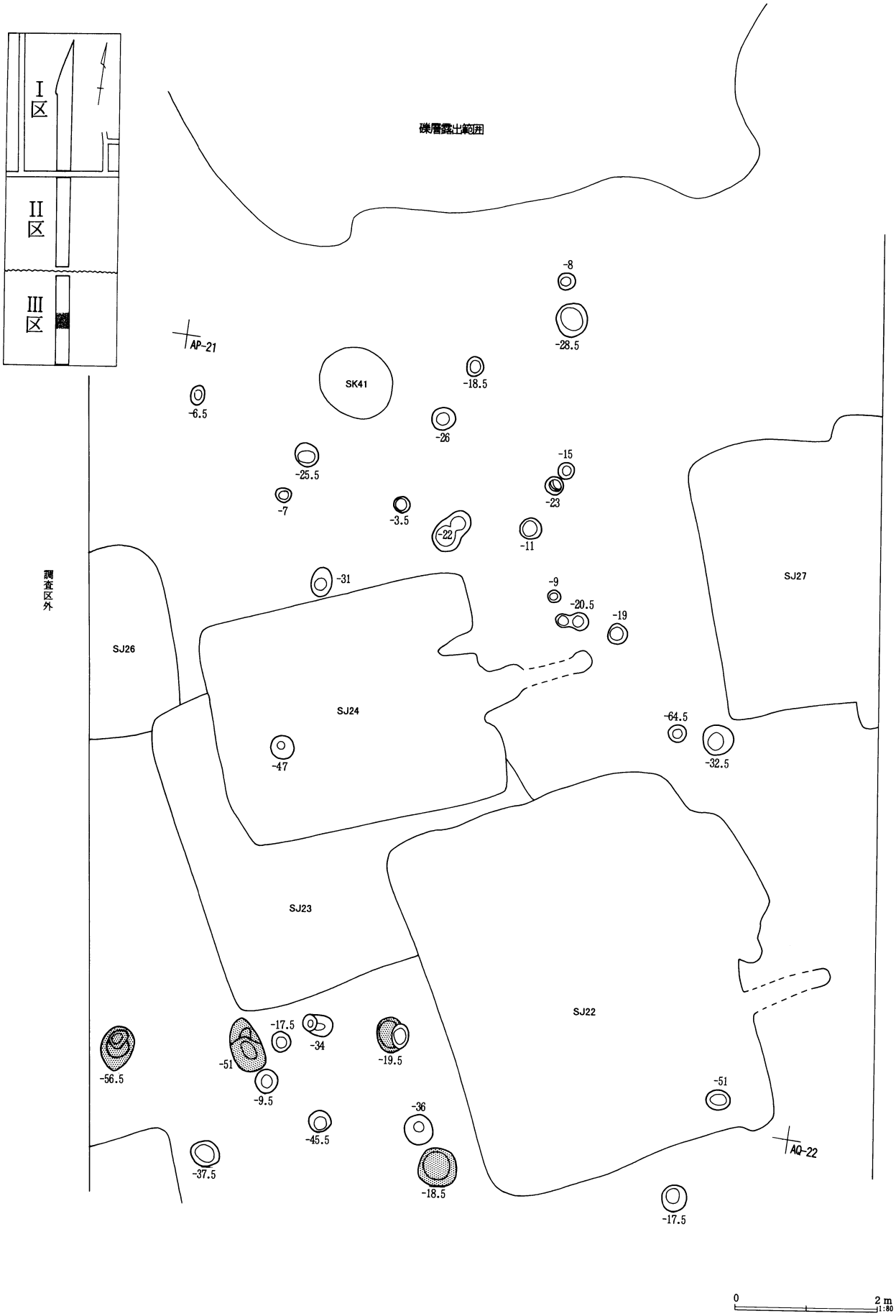
第149図　ピット群(2)


I区
II区
III区
SK18
SK24
SJ13
SK16
SK21
SK20
SK23
AG-20
AH-20
古銭
調査区外
0
2 m
1:80

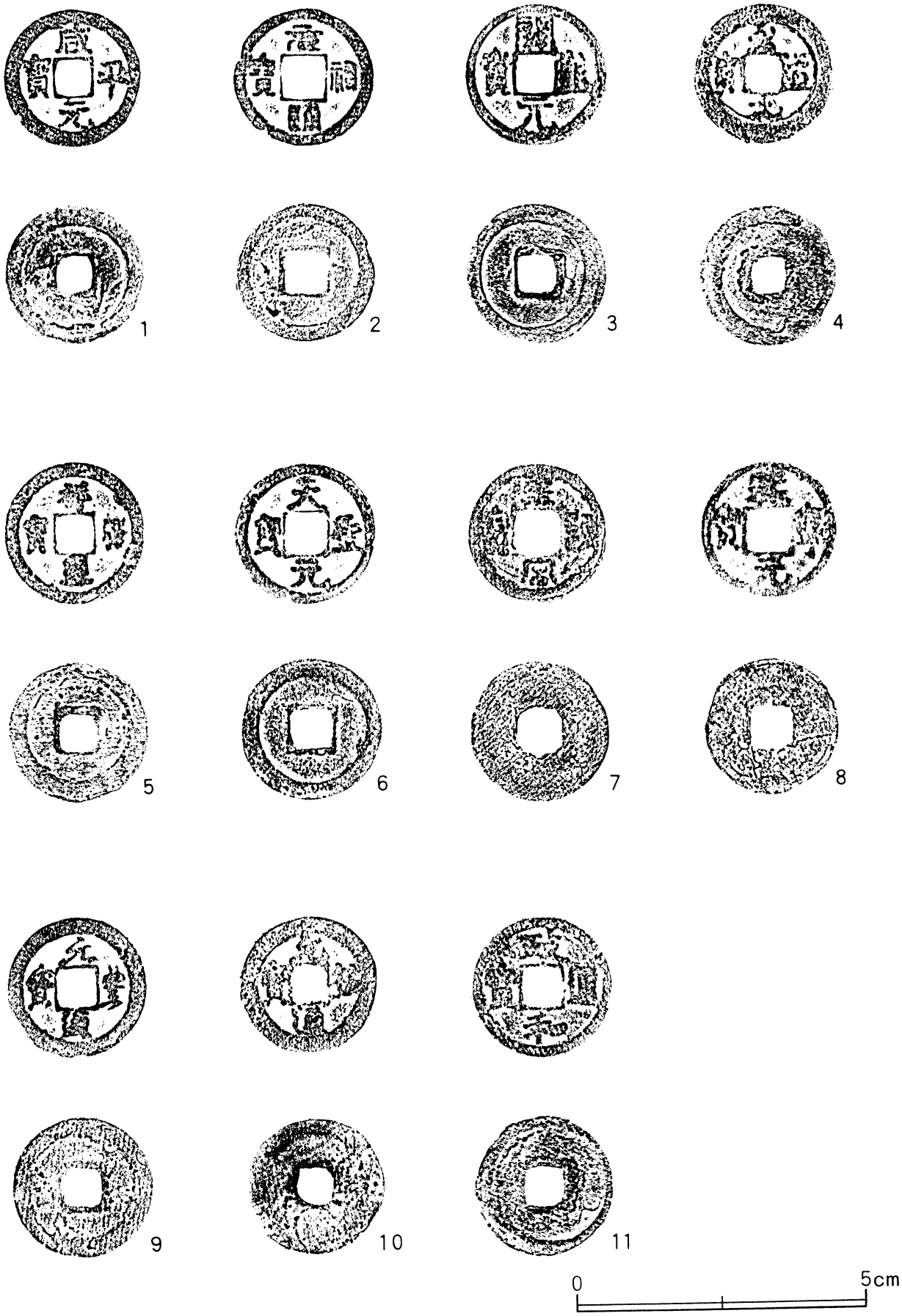
第150図　ピット群(3)


I区
II区
III区
調査区外
SJ14
SJ15
SJ16
SK17
SK22
SB1
AJ-21
-9.5
-9
-30
-11.2
-13.5
-12.3
-25.6
-7.1
-25.7
-14.6
-30.6
-16.5
-35.2
-27.5
-26.7
-23.5
-20.4
-28.4
-21.7
-27
-37.2
-24.2
-24.3
-25.5
-25.4
-23.6
-10.7
-34
-41
-22.7
-34
-28.2
-12.2
-10
-22
-30
-24
-6.5
-52
-14
-4
-7
-27
-24
0
2 m
1:80

第151図　ピット群(4)


I区
II区
III区
礫層露出範囲
AP-21
SK41
-8
-28.5
-18.5
-6.5
-26
-25.5
-15
-23
-7
-3.5
-22
-11
-31
-9
-20.5
-19
調査区外
SJ26
SJ24
SJ27
-64.5
-32.5
-47
SJ23
SJ22
-17.5
-34
-19.5
-56.5
-51
-9.5
-51
-36
-45.5
AQ-22
-37.5
-18.5
-17.5
0
2 m
1:80

第152図　出土古銭



古銭計測表(第152図)

番号	名　　称	初鋳年	時期	直径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	出土位置	備　　考
1	咸平元寳	998	北　宋	24.12	1.31	2.65	AG-19	
2	元祐通寳	1086	北　宋	24.33	1.19	2.00	AG-19	
3	開元通寳	621	唐	25.19	1.49	3.83	AG-20	
4	至道元寳	995	北　宋	24.33	1.39	3.34	AG-20	
5	祥符通寳	1008	北　宋	24.69	1.22	2.60	AG-20	
6	天聖元寳	1023	北　宋	24.79	1.32	3.33	AG-20	
7	皇宋通寳	1039	北　宋	24.51	1.21	3.41	AG-20	風化著しい
8	熙寧元寳	1068	北　宋	23.69	1.30	3.37	AG-20	風化著しい
9	元豊通寳	1078	北　宋	24.69	1.29	3.30	AG-20	
10	元祐通寳	1086	北　宋	24.32	1.48	3.10	AG-20	
11	政和通寳	1111	北　宋	24.50	1.51	3.54	AG-20	

(6) グリッド出土・表採遺物 (第153・154図)

如意南遺跡からは、グリッド・表採等、遺構外から、土師器・須恵器の破片、中世陶器、土錘、紡錘車、鉄製品、砥石、縄文時代の打製石斧が出土した。

土師器・須恵器については、殆どが破片資料であって、図示可能なものはなかった。以下、各遺物について報告する。

1～15は、土錘である。土錘の計測値については、観察表を参照されたい。

16は、土製紡錘車である。表採資料である。約1/2を欠損していた。大きさは、上端の幅4.5cm、下端の幅3.9cm、重さ36.4gであった。

17～19は、鉄製品である。17は、鎌である。W－19グリッドから出土した。基部と先端部を欠損していた。大きさは、刃部の現存長7.5cm、幅1.8cm、基部の幅1.2cm、厚さ0.45cm、重さ37.48gであった。

18は、釘である。X－19グリッドで出土した。完形品である。大きさは、長さ8.7cm、径0.75cm、重さ15.89gであった。

19は鋏である。III区埋没谷付近の表採資料である。刃部の先端を欠損していた。大きさは、長さ15.0cm刃部長5.9cm、幅0.6cm、背幅0.3cm、重さ29.58gであった。

20・21は、中世在地産の鉢または片口鉢の破片である。2点ともAA－18グリッドから出土した。口縁部のみ残存していた。20は、口縁部が厚く、内面端部直下は、強いナデにより沈線状となっていた。

21は、20よりやや薄手で、20と同様に内面端部直下に強いナデの痕跡が明瞭であった。2点とも、胎土に石英・砂粒・片岩を多く含んでおり、在地産と考えられる。

22は、砥石である。表採資料である。上端と下端を欠損していた。大きさは、長さ9.6cm、幅2.4cm、厚さ2.1cm、重さ81.0gであった。凝灰岩製であるが、欠損面も含め、全面が黒く煤けていた。

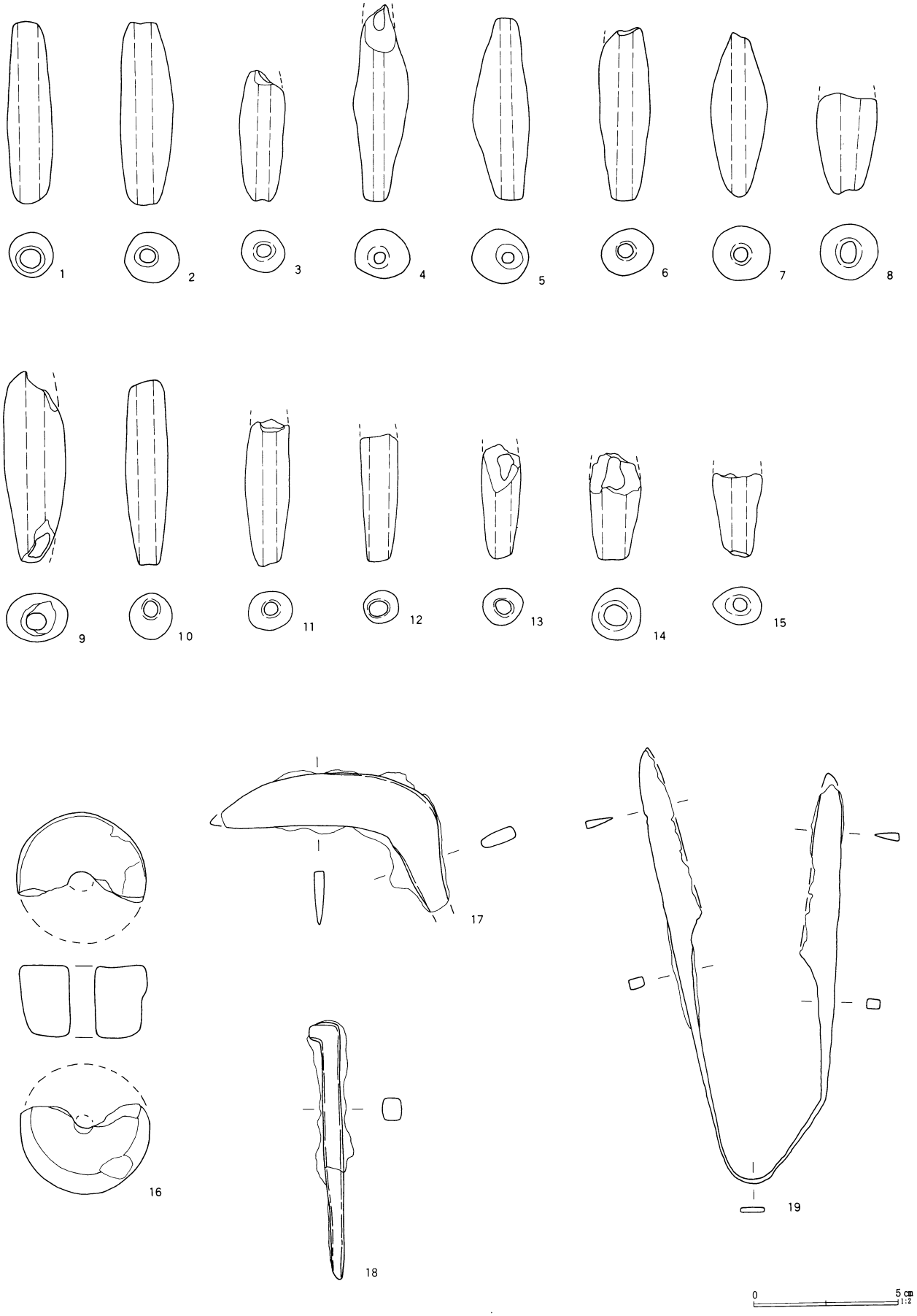
23・24は、縄文時代の打製石斧である。2点とも、分銅型の石斧である。

23は、AA－18グリッドから出土した。安山岩製で、完形品である。大きさは、長さ10.8cm、刃部幅6.9cm、厚さ2.9cm、重さ236gであった。

24は、Y－19グリッドから出土した。ホルンフェルス製で、完形品である。大きさは、長さ9.6cm、刃部幅6.0cm、厚さ2.4cm、重さ136gであった。

如意南遺跡の縄文時代の遺物は、この打製石斧2点のみで、他に縄文時代の遺構・遺物は検出できなかった。これらは、縄文時代の遺物として報告したが、本遺跡が、古墳時代以降の遺跡であることから、何らかの形で本遺跡に持ち込まれたか、混入したものと思われる。分銅型という形態を踏まえれば、後世に編物石あるいは漁労用の網の錘として転用された可能性もあるが、石斧には転用の痕跡は認められなかった。

第153図　グリッド出土・表採遺物(1)



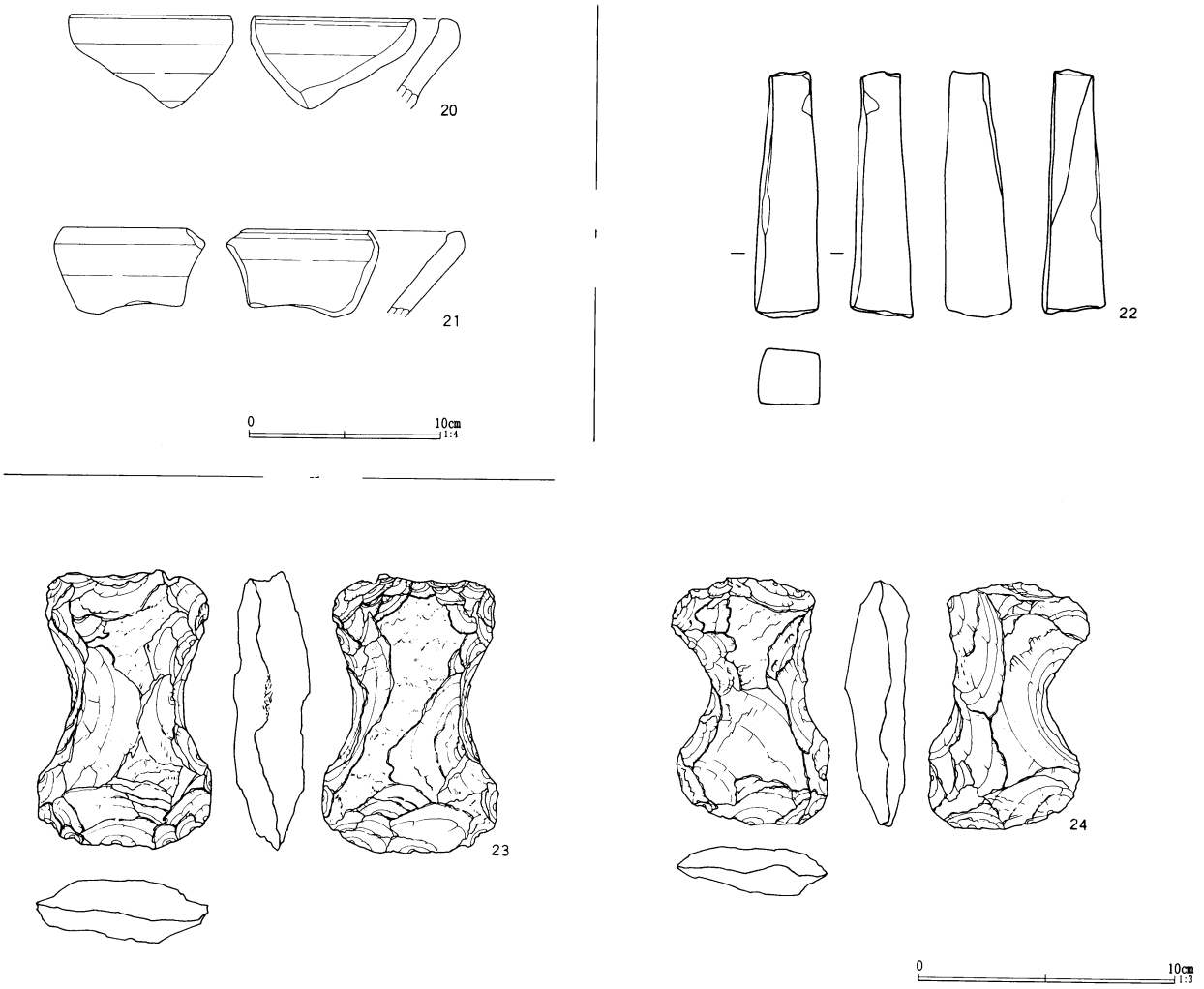
グリッド出土・表採土錘観察表（第153図）

番号	長さ	径	穴径	重さ	分類	色調	残存	備考
1	6.3	1.6	0.7	12.36	AaIV	橙	90%	W-18
2	6.3	1.9	0.6	19.22	BbIV	明褐	100%	AC-19
3	4.5	1.5	0.5	8.31	Ba他	灰黄褐	90%	AC-19
4	(6.8)	2.0	0.4	17.97	CaIII	黒褐	90%	AC-19
5	6.3	2.0	0.4	19.51	CbIV	にぶい黄橙	100%	AC-19
6	5.9	1.8	0.5	14.67	CaIV	にぶい黄橙	90%	AC-19
7	5.7	2.0	0.5	16.47	CaIV	にぶい黄橙	100%	AC-19
8	(3.5)	2.1	0.5	12.34	Ba他	黄褐	50%	AE-19
9	6.7	2.1	0.6	22.65	Ba他	赤褐	80%	AG-20
10	6.4	1.5	0.6	14.02	Ba他	橙	85%	表採
11	(5.1)	1.6	0.5	9.62	Ba他	灰黄褐	85%	表採
12	(4.4)	1.3	0.7	5.90	Aa他	灰白	70%	表採
13	(3.9)	1.4	0.6	5.48	Ba他	にぶい黄橙	60%	表採
14	(4.7)	1.7	0.8	9.19	Ba他	灰黄褐	40%	表採
15	(2.9)	1.7	0.5	4.97	Ca他	浅黄橙	30%	表採

グリッド出土・表採遺物観察表（第154図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
20	鉢				ABFJH	3	灰白		AA-18	中世　在地産
21	鉢				ABFJH	3	褐灰		AA-18	中世　在地産

第154図　グリッド出土・表採遺物(2)



VI　結語

1. 調査成果の概要

如意・如意南遺跡からは、古墳時代後期～奈良平安時代の竪穴住居跡59軒、掘立柱建物跡1棟、古墳時代後期～中世の土壙85基、溝跡5条、ピット277基が検出された。

各遺跡毎の遺構数は、如意遺跡では、竪穴住居跡17軒、土壙25基、溝跡1条、如意南遺跡では、竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡１棟、土壙60基、溝跡４条、ピット277基であった。

竪穴住居跡は、殆どが重複しており、単独で検出した遺構は少なかった。また、幅12m前後の細長い調査区であったため、遺構の多くは調査区外へ展開していた。このため、遺構の全体が明らかとなった住居跡は少なかった。しかし、遺構そのものの残存状況は良好であり、カマドが天井部まで残存していたものが多かった。

掘立柱建物跡は、如意南遺跡から１棟検出したのみである。２間×２間の側柱建物で、西側に庇を有していた。

土壙は、竪穴住居跡と概ね同時期のものと考えられるが、如意南遺跡では、中世の陶器・石造物が出土したものもあった。中世の遺物は、概ね14～15世紀代が中心で、室町時代のものと考えられる。

溝跡は、細長い調査区を横断するように検出されたため、全体の形状が明らかになったものは検出できなかった。また、出土遺物が少なく、時期を明確にできたものは如意南遺跡SD３のみであった。

如意南SD３からは、瀬戸産の平碗・卸（おろし）皿・花瓶・在地産の土釜・鉢が出土し、遺物の特徴から14～15世紀代に属していたものと思われる。土釜は、瓦質陶器で、毛呂山町堂山下遺跡に類例が認められる。(宮瀧1991)

ピットは、如意南遺跡を中心に277基が検出された。ピットは、調査区内の４箇所に集中する傾向があったため、それぞれピット群１～４とした。ピットからは、出土遺物がなく、時期を明確にできたものはなかったが、各ピットの規模は、径30cm以下で、方形のものが多い。ピットの多くは平安時代の竪穴住居跡を壊しており、また、ピット群のあるグリッドからは、中世の遺物が出土していることから、大半は中世に属していた可能性がある。

出土遺物は、主に竪穴住居跡から、古墳時代後期～奈良・平安時代の土師器・須恵器、土錘が出土した。

奈良・平安時代の住居跡からは、他に鉄製品、紡錘車、砥石、帯金具、転用硯が出土した。また、判別できたものは少ないが、墨書土器が数点出土した。

特に注目されるのは、土錘の出土点数の多さであろう。図示可能な遺物は、如意・如意南遺跡で合わせて268点出土した。図示できなかった小破片も含めると、300点を超える。多くは竪穴住居跡からの出土で、数十点がまとまって出土した遺構もあった。土錘は漁労具と考えられ、本遺跡が荒川に面している点からも、漁労に携わっていた集団であった可能性を示唆するものとして興味深い。

また、僅かではあったが、中世の遺物が出土した。主に土壙・溝跡、グリッドからの出土であった。

中世の遺物は、概ね14～15世紀に属すると考えられる破片資料であったが、瀬戸産の卸（おろし）皿・平碗・花瓶、在地産の鉢・土釜、他に古銭（北宋銭）、宝篋院塔の相輪等が出土した。

如意南遺跡の南には、12世紀末から13世紀初頭にかけて活躍した武将、畠山重忠の館跡と伝わる畠山館跡が隣接する。

館跡の出土遺物は、一部の遺構から13世紀中葉以前まで遡る遺物が出土しているものの(註１)、概ね13世紀後半から15世紀代の遺物が中心であり、如意南遺跡も概ねこの時期の遺構・遺物と考えられることから、重忠との直接的な関連性は薄いものの、畠山館跡と密接に関連していたと思われる。

発掘調査時は、如意遺跡と如意南遺跡の２遺跡に区分して調査し、報告も便宜的に２つの遺跡として報告したが、調査の結果では、両遺跡の境界付近では、竪穴住居跡・土壙を中心に遺構が密集し、連続して検出されたことから、実際には同一遺跡の可能性が高い。したがって、ここでは如意・如意南遺跡を合わせて調査のまとめとしたい。

なお、如意・如意南遺跡の調査では、便宜上遺構番号をそれぞれ遺跡毎に個別に付したため、一部の遺構で、重複した番号が存在する。このため、混乱を避けるため、本稿では、如意遺跡の遺構は、如意SJ140、如意南遺跡の遺構は、如意南SK50といったように、遺構番号の前に遺跡名を冠して報告する。

2. 古墳時代後期の土器について

如意・如意南遺跡からは、竪穴住居跡、一部の土壙を中心に、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した。しかし、遺構の残存状況に比べ、出土遺物の量は少なく、特に古墳時代後期においては遺構の時期も断続的で、同一時期内でも欠落した器種が認められた。特に土師器坏類においては、遺跡全体でも数十点程度が出土したのみで、本遺跡独自に器種分類・編年を行える程の遺物は出土しなかった。

さらに今回調査地点の北側の六堰頭首工調査地点では、200軒を超す竪穴住居跡が検出されており、詳細な器種分類と編年は、六堰頭首工調査地点報告時に改めて行うこととする。

したがって、ここでは、各土器の細かな器種分類、編年は行わず、遺構に確実に伴い、良好な一括資料として把握可能で、本遺跡群の編年の基準となる資料を取り上げることとする。

(1) 如意SJ137出土遺物

今回の調査地点で、最も古い段階の遺物として、如意SJ137出土遺物が挙げられる。

第155図は、如意SJ137出土遺物である。１～７は、カマド右脇の床面からまとまって出土した。この内、土師器坏は、1～４である。

１は、和泉式からの系譜を引く伝統的な椀状の坏である。全体的に器肉が厚く、重量感のある土器である。口縁部は内湾しながら立ち上がる。外面底部はヘラケズリが施されるが、中央部はケズリ残され、窪んだ上げ底状となっていた。

底部の特徴から、台上ではなく、掌上で成形されたものと考えられる。口縁部の厚さは一定ではなく、内外面とも横ナデは弱く、断続的であった。また、赤彩が施されていた。

２～４は、１とは形態・製作技法が異なっており、須恵器坏蓋模倣坏（以下模倣坏）に形態的には類似する土器群である。

２は、円柱状の粘土塊から成形されたものと考えられる。底部は厚底であり、外面は水平に切ったような平底であった。成形は、粘土塊から底部を作り出し、底部中位からは異なる粘土を接合し、口縁部を成形している。口縁部は、底部との境界を、内面から圧迫することにより、概ね垂直に立ち上げている。調整の工具痕跡は断続的で、また口縁部の厚さも一定ではなく、掌上で整形された可能性もある。

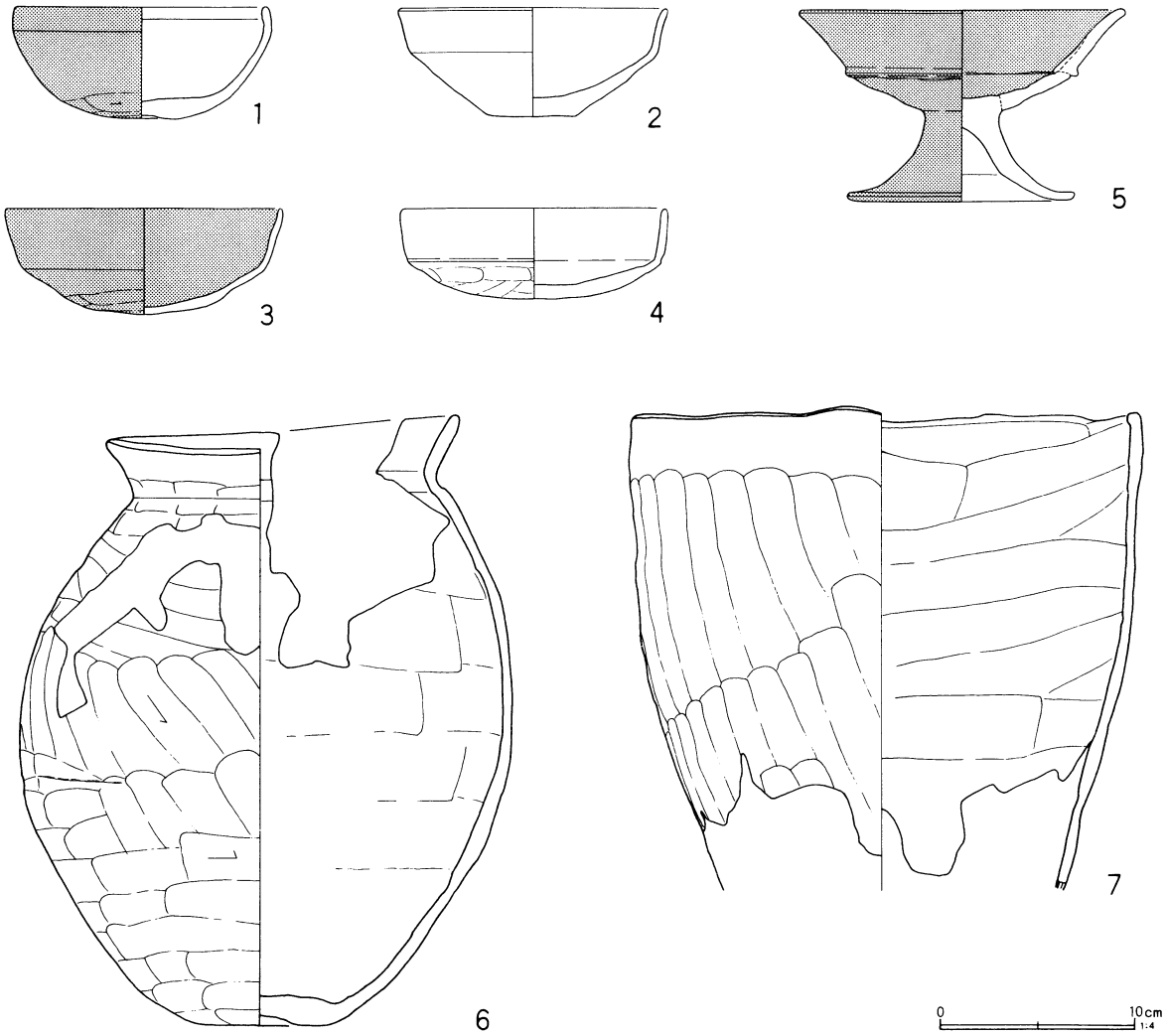
口縁部の形態は、模倣坏に似ているが、口縁部と底部の境界の稜は明瞭でなく、沈線も認められなかった。また、口縁端部の面は作り出さず、面上の沈線も認められなかった。

３は、２と基本的に同一の製作技法によるものと考えられるが、外面底部は外周部をヘラケズリすることによって丸底となり、２よりは模倣坏に近い形態となる。しかし、口縁部と底部との境界の稜は明瞭ではなく、沈線も認められなかった。また、口縁部は２よりも薄いが、厚さは一定ではなく、ナデも断続的であった。口縁端部は面を作り出さずに丸くなり、面上の沈線も認められなかった。

４は、２・３を更に技術的に発展させた形態となる。丸底の底部に、垂直に立ち上がる口縁部を有し、底部との境界に稜線と沈線が認められる。

口縁部の厚さは一定で、横ナデも連続的であり、回

第155図　如意SJ137出土遺物



転台の使用が想定される。さらに、口縁部横ナデの終端は内外面とも同じ位置で上方に立ち上がっているのが観察できた。

4は、2・3の坏よりも形態的には模倣坏により近くなっているが、口縁部と底部の境界の稜と沈線は弱く、口縁端部は面を作り出さずに丸くなり、面上の沈線が認められない。

2～4の坏は、2→3→4の順に形態・製作技法ともに次第に模倣坏に近くなっている。

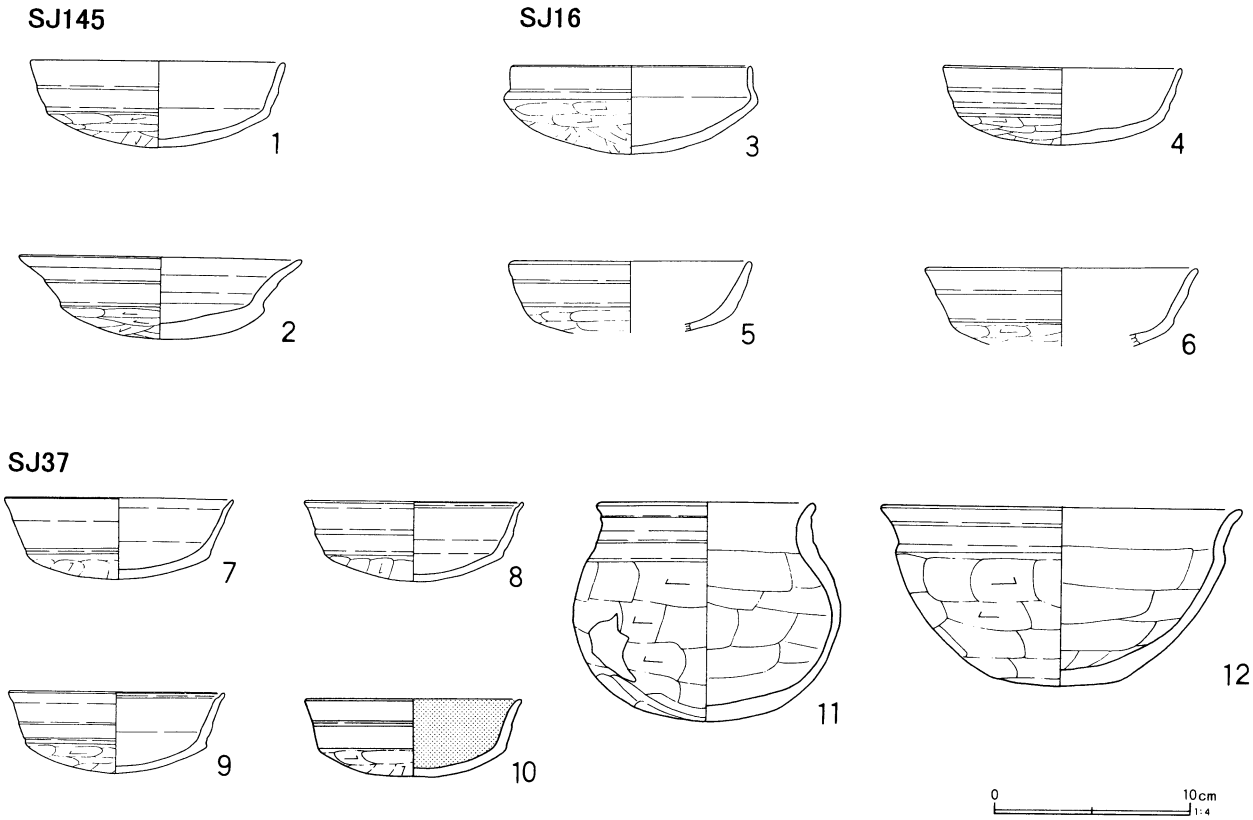
しかし、いわゆる定型化した須恵器坏蓋模倣坏を、垂直に立ち上がる口縁部を有し、稜と沈線によって底部と口縁部を区画し、口縁端部に面を有し、面上に沈線を有する坏とするならば、2～4の土器は、模倣と呼ぶには稚拙で、形態のイメージは似ているものの、機能・製作技法に至るまで十分に理解された模倣とは呼べない。

SJ137出土土器群の時期的な位置付けについては、椀状の坏である1および底部が上げ底状となる6の甕にみられる伝統的な要素と、先に触れた2～4にみられる須恵器坏蓋の形態を意識した、新出的な要素の伴出により、和泉期と鬼高期の間に位置付けることができ、いわゆる定型化した模倣坏出現直前の段階の様相を示す良好な資料と考えられる。

また、2～4の坏は、中村倉司氏の提唱した「源初坏」(中村 1984)(註2)、大屋道則氏のいう「出現期模倣坏」・「定型化以前の模倣坏」(大屋・中村1991、栗岡・大屋1998)に相当する。

この3点の坏は、時期的には同時期と考えられるも

第156図　如意SJ145・如意南16・37出土遺物



のの、技術的には2→3→4の順で次第に定型化に近づく。今回の調査では、後続すると考えられるいわゆる定型化した模倣坏が出土しなかったため、十分な検討ができなかったが、定型化に至るまでの模倣の経過を知ことができる良好な資料となろう。

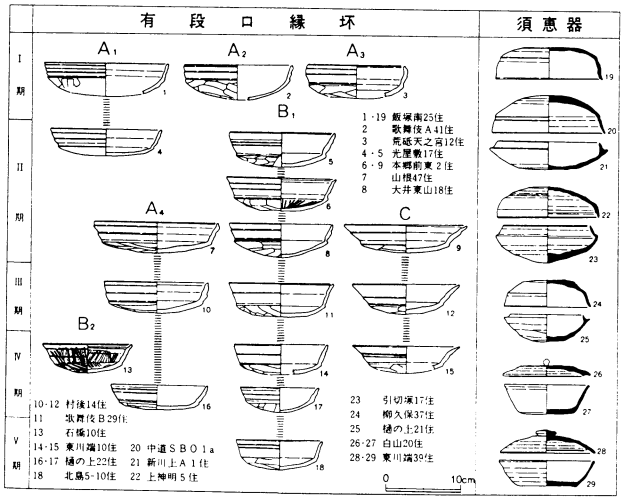
今回調査した地点では、これらの土器群に先行する時期の遺物は出土しておらず、現状では、如意・如意南遺跡では最も古い段階の遺物となるものと考えられる。

(2)　如意SJ145・如意南SJ16・37出土遺物

SJ137に続く時期ものとして、本来は、定型化した須恵器模倣坏の出現が想定されるが、今回調査した地点からは、定型化した模倣坏は出土しておらず、時期の断絶が認められた。

SJ137に後続すると考えられる土器群で、遺構に伴う遺物としては、如意SJ145・如意南SJ16・SJ37出土土器がある。

第157図　田中氏による分類図



これら住居出土の土師器坏は、有段口縁坏が主体となる。有段口縁坏については、田中広明氏による詳細な分析が行われている（田中1991）。

本遺跡出土の有段口縁坏は、田中分類によれば概ねB類に属し、II期以降に属していると考えられる。ここでは、土師器坏を中心に如意SJ145・如意南SJ16・37出土遺物について考察する。

如意SJ145(第156図１・２)

如意SJ145出土遺物は、有段口縁坏、大型鉢、長胴甕、球形胴の壷で構成される。本文第25・26図に掲載した遺物のうち、６・８の土師器甕・壷以外は、カマド及び周辺部から出土した。

SJ145出土土師器坏は、新たに第156図１・２として示した。

１は、丸底の底部で、口縁部は、底部との境界付近を内面から圧迫し、概ね垂直に立ち上げている。口縁部の段は明瞭ではないが、後述する2軒の住居出土遺物よりは明瞭である。また口縁部と底部の境界の稜も弱い。口径は12.9cmであった。

２は、１の坏とは形態が異なり、厚底で口縁部が大きく外反する形態である。口径は１よりも大きくなるが、口縁部の段は、明瞭ではない。

１・２は、田中分類の有段口縁坏B類・C類にそれぞれ相当し、口径や坏の特徴から、概ねIII期前後に並行するものと考えられる。

如意南SJ16(第156図３～６)

如意南SJ16出土遺物は、甕類の大型品は出土しなかったが、土師器坏が４点と多孔型甑の底部の破片が出土した。甑以外の４点の坏は、完形品ではなかったが、カマド左脇の住居コーナー部分の床面からまとまって出土した。

３は須恵器坏身模倣坏で、４・５・６が有段口縁坏である。

４は、口縁部の段が３段となる。段は明瞭ではなく、外面の口縁部と底部の境界の稜が弱く、沈線状となっていた。内面の口縁部と底部の境界は、外面に比べ屈曲が緩やかになっている。

５の口縁部は段が２段であるが、４同様段は明瞭ではなく、外面口縁部と底部の境界の稜も弱い。

如意SJ145出土坏類と比較すると、坏の器高はほぼ同じであるが、口径は、６を除けば、12cm前後となり、やや小型である。

また、口縁部の段及び底部との境界の稜は如意SJ145と比較すると、明瞭ではない。

如意南SJ37（第156図７～12)

如意南SJ37出土遺物は、有段口縁坏と、小型壷、鉢・甕である。この住居で注目されるのは、坏と小型壷・鉢の口縁部が全て有段口縁となることである。

遺物の出土状態は、貯蔵穴脇のテラス状の平坦部から、第156図12の鉢の中に７・８・10が入れ子状に重なって出土した。

また、９の坏は、貯蔵穴からは離れた位置で出土したものの、他の坏と共通した特徴をもっており、SJ37出土遺物は、覆土から出土した甕を除けば、同時期の一括資料として把握でき、編年作業の基準資料となるものと考えられる。

坏の特徴は、口径が11cm前後と、先に見た如意SJ145、如意南SJ16出土土師器坏よりもさらに小型化が著しくなっている。

口縁部の段は２段であるが明瞭ではなく、７のように段が殆ど認められないものや、10のように沈線状となっているものもあった。また、口縁部と底部の境界の稜も弱く、７・９のように沈線状となるものも認められた。

口縁端部は、強いつまみ上げによって外側に折れて外反し、特に外反の強い８・９の内面端部は沈線状となっていた。

有段口縁坏は、須恵器坏蓋模倣坏の一つと考えられているが、田中分類によれば、III期以降、他の須恵器坏蓋模倣坏と同様、口径が次第に縮小していく傾向があり、また口縁部の段は次第に弱くなっていく特徴を有している。

３軒の住居跡出土坏類を比較すると、如意SJ145・如意南SJ16・如意南SJ37の順に次第に口径が縮小し、口縁部の段及び口縁部と底部の境界の稜が退化していくことが観察できる。このことから、３軒の住居跡は、如意SJ145→如意南SJ16→如意南SJ37と変遷していることが理解でる。今後本遺跡出土土器の編年作業をしていく上での指標となるものと思われる。

3. 土錘について

如意・如意南遺跡からは、古墳時代～奈良平安時代の竪穴住居跡・土壙から多量の土錘が出土した。

土錘は、漁労用具の一種で、主に投網等の網漁に使用されたと考えられる。実測可能な点数は、268点であった。

これらの土錘は、全て管状土錘であった。この他、今回調査した地点では、如意SJ139から土玉が１点出土したが、重さが0.52gと軽く、錘としての機能が疑わしく、また祭祀用具の可能性も考慮に入れ、分析からは除外した。

(1) 形態

出土した268点の土錘は、製作技法、あるいは用途の違いに起因すると考えられる、いくつかの形態差が認められた。このため、極めて便宜的ではあったが、その形状と規模により、以下のように分類を試みた。(第158図)

A類

上端～下端までの径が概ね一定であるが、端部でやや細くなり、長さに対する径の割合が小さく、細長いもの。A類に属する土錘は23点であった。

B類

Aと比べ、側面中央部がやや膨らむもの。B類に属する土錘は178点と、最も多かった。

B′類

側面の形態が、片面は直線的で、もう一方が膨らむ半月状で、A類とB類の両方の形態を併せ持つもの。B′類に属する土錘は、１点のみであった。

C類

中央部が大きく膨らみ、上端と下端が絞ったように細くなるもの。C類に属する土錘は、58点であった。

D類

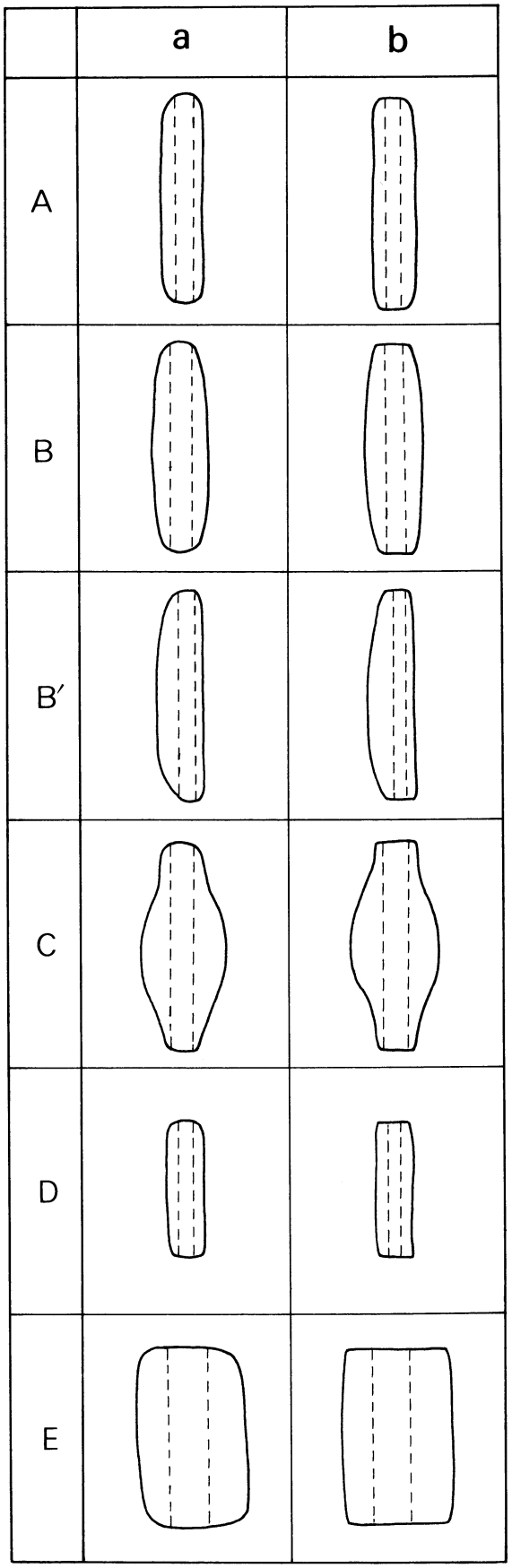
上端と下端の径が一定で、管玉状になるもの。

D類に属する土錘は、６点であった。

E類

上端と下端の径が一定だが、長さに対する径の割合が大きく、太く短いもの。E類に属する土錘は、２点で

第158図　土錘分類図



あった。

また、土錘の両端部を観察すると、端部を面取りしないものと、面取りするものがあった。

土錘の製作方法の多くは、棒状の軸に粘土を巻き付け、握る、あるいは薄く伸ばしながら成形していたと考えられる。このため、土錘両端部は特に薄くなり、端部の厚さが1mm以下になるものも多かった。この後、軸棒を引き抜くか、軸棒ごと焼成していたものと思われる。

しかし、今回調査地点出土土錘の両端部を詳細に観察すると、ヘラ状の工具によって両端部を面取りし、平らな面を作り出しているものも多く見られた。このため、端部を面取りしないものをa、面取りするものをbとして細分を試みた。

土錘総点数268点の内、形態分類毎の点数は、以下のようになる。

Aa類：23点、Ab類：0点、、Ba類：147点、Bb類：31点、B̄a類：0点、B̄b類：1点、Ca類：43点、Cb類15点、Da類：2点、Db類4点、Ea類：2点、Eb類0点

これらの形態のうち、最も多かったのはBa類で、土錘総点数の54.9%と、約半数を占める。次いでCa類の16.0%、Bb類11.6%、Aa類8.6&、Cb類5.6%となっている。

(2) 大きさ

また、大きさも数種類に分かれるため、長さによって以下に分類した。

Ⅰ：長さ9cm以上

Ⅱ：長さ8cm前後

Ⅲ：長さ7cm前後

Ⅳ：長さ6cm前後

Ⅴ：長さ5cm前後

Ⅵ：長さ4cm以下

大きさの分類は、完形品を基本にし、欠損品については、復元可能なものは復元値で分類した。両端が欠損しているものや、小破片で復元不可能なものは、その他とした。

これらの組み合わせによって、AaⅠ類・BbⅢ類といったように呼称する。なお、個々の土錘の分類については、第Ⅳ章・第Ⅴ章の各遺構毎の土錘計測表を参照されたい。

長さの分類の中で、復元不可能な、その他としたものが104点あった。大きさを含めた形態分類は、268点中、この104点を除外した164点が対象となる。

この164点の内各分類の大きさ毎に点数を示したものが、表1である。

最も長いものは、BbⅠ類の9.8cm、最も短いものはDbⅥ類の3.0cmであった。最大のものと最小のものの差が大きいが、土錘の多くはⅢ類（7cm）～Ⅴ類（5cm）の小型品に集中している。

各分類毎では、Aa類ではⅢ類、Ba類ではⅣ類、Bb類ではⅤ類、Ca類ではⅣ類、Cb類ではⅢ類とⅤ類、Db類ではⅥ類が中心となっている。

この傾向は、竪穴住居跡出土土錘のみを抽出したものでも同様の傾向が見られた。（表2）

表1

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	合計
Aa	0	1	5	3	1	0	10
Ab							0
Ba	0	7	29	31	23	5	95
Bb	1	0	0	5	10	5	21
B̄b							0
Ca	0	1	8	10	3	0	22
Cb	1	2	3	1	4	0	11
Da							0
Db					1	3	4
Ea						1	1
計	2	11	45	50	42	14	164

表2

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	合計
Aa	0	1	5	1	0	0	7
Ab							0
Ba	0	4	16	21	21	5	67
Bb	1	0	0	1	9	4	15
B̄b							0
Ca	0	1	6	6	1	0	14
Cb	1	1	2	0	3	0	7
Da							0
Db					0	1	1
Ea						1	1
計	2	7	29	29	34	11	112

(3) 重さ

今回調査地点出土土錘の重量は、最も重いものがCb II類の45.04g、最も軽いものはDbVI類の2.89gであった。最大と最小では、幅があるが、先に見たⅠ類～VI類の長さに概ね比例している。

各分類の重さについては、重さの最大値と最小値、及び各分類の総個数に対する平均値を表3に示した。出土点数が1点のみのAaII類・AaV類・BbⅠ類・CbⅠ類・CbIV類・DbV類・EaVI類は、各重量を平均値に示した。

各分類毎の重さの平均値を見ると、Ⅰ類からVI類へ次第に軽くなる。Ⅰ類ではBb類が、II・III類ではCb類が、IV～VI類ではBb類が最も重くなる。II・III類では、Bb類が出土していないため、Cb類が最も重くなったが、概ねBb類が最も重い。次いでCb類・Ba類・Ca類・Aa類の順に軽くなっていく。

土錘の重さでは、面取りを施したb類が重く、面取りを施さないa類が軽いことが解る。b類は、a類の薄い端部を切り取ることで端部に面が生じる。長さは本来より短くなるが、同じ長さとなった端部未加工のa類よりは、身が詰まった部分だけ残されたb類のほうが重くなる。このため、同じ長さのa類とb類とでは、結果的にb類の方が重くなるものと考えられる。

表3　土錘重量　　単位（g）

		I	II	III	IV	V	VI
Aa	最大			12.56	13.78		
	最小			10.57	9.06		
	平均		15.31	11.51	11.78	7.98	
Ba	最大		30.12	24.51	27.75	18.87	15.88
	最小		17.56	12.79	9.22	7.83	3.10
	平均		21.68	18.53	16.68	13.30	10.39
Bb	最大				31.69	23.62	20.75
	最小				19.22	12.94	8.57
	平均	43.29			24.80	16.48	13.03
Ca	最大			25.62	19.60	14.13	
	最小			11.36	11.93	11.58	
	平均		19.97	16.92	15.33	13.24	
Cb	最大		45.04	28.52		18.98	
	最小		23.01	18.69		11.83	
	平均	38.52	34.03	23.11	19.51	14.75	
Db	最大						10.02
	最小						2.89
	平均					15.53	5.42
Ea	最大						
	最小						
	平均						5.67

(4) 出土遺構

今回調査地点の土錘は、主に竪穴住居跡・土壙から出土した。表4は、特に土錘の出土した竪穴住居跡の、分類別の一覧である。

殆どの遺構では、1点から数点であるが、10点以上がまとまって出土した遺構もある。特に注目されるのは、如意南SJ24で、31点の土錘が出土し、住居コーナーの床面からは、27点の土錘が一括して出土した。これらは、一つの網に装着されていた可能がある。

SJ24出土土錘は、分類では、B類が殆どで、他に土錘がまとまって出土した如意SJ142・SJ148、一覧には掲載していないが、如意SK54でも、特にB類を中心に、特定の形態に集中する傾向がある。これらのことから、一つの網に装着されていた土錘は、同一形態の土錘で構成されていた可能性もある。

(5) 時期

出土土錘の帰属時期の問題については、遺構の帰属する時期をもとに判断できる。しかし、今回の調査では、遺跡独自の時期区分を行わなかったため、ここでは周辺遺跡の調査成果をもとに、本遺跡出土土器に大まかな年代を与えた(註3)。表5は、竪穴住居跡出土土錘の、時期別の分類表である（註4)。

年代ごとに出土する土錘の傾向を観察すると、概ね全時期を通じてBa類が出土する。Aa類は、点数が少ないため、不明な点も多いが、7世紀後半以降に、端部に面取りを施したBb類は、7世紀中葉に数点見られるが、概ね8・9世紀が中心となる。Ca・Cb類は7世紀後半以降に、D類・E類は点数が数点であるため、明らかにできなかったが、8世紀以降に集中している。

(6) まとめ

如意・如意南遺跡出土土錘を見てきたが、本遺跡からは、268点と、比較的多くの土錘が出土した。しかも、竪穴住居跡・土壙等遺構に伴ってまとまって出土した。現在調査中の六堰頭首工調査地点では、200軒を超える竪穴住居跡が検出されており、今後、土錘の数はさらに増加するものと考えられる。

埼玉県内において、土錘がまとまって出土した遺跡

表4　住居出土土錘一覧

	Aa				Ba						Bb					Ca					Cb					Da	Db	Ea		合計	備考
	II	III	IV	他	II	III	IV	V	VI	他	I	IV	V	VI	他	II	III	IV	V	他	I	II	III	V	他	他	VI	VI	他		
如意138		2						3		4			1		1												1	1		13	10世紀
139								1		1																				2	7世紀前
140							2								1															3	7世紀中
141										2																				2	平安
142		1		1	1	4	3			1	1								1	3										16	8世紀初
143						2	3											1		1									1	8	9世紀末
144				1						1										1										3	古墳後
145					1	1	1			2																				5	7世紀前
146						1				2																				3	6世紀末～7初
147								1																						1	6世紀後半
148	1	1		2	1	6	3	1		4								1												20	7世紀後半
149				2	1	2	1			1								1												8	7世紀末
150							1																							1	6世紀末～7初
151										1																				1	古墳後
如意南1							1	1																						2	8世紀末～9初
2								1																						1	〃
3								1					1																	2	〃
4															1															1	〃
6							1	1																						2	9世紀中～後
10								2				1	2					1						2			1			9	9世紀前～中
11																	1													1	8世紀初
12													1		1			1		1				1						5	9世紀前～中
13																				1										1	8世紀末～9初
19													1																	1	平安
21																										1				1	8世紀前
24							1	6	5	9			2	4	4															31	8世紀後
25																										1				1	〃
28																	1													1	奈良
29																									1					1	奈良
30																	1													1	古墳後
31		1		1			2	1		1			1				1	1		2										11	8世紀後
32								1																						1	9世紀中～後
33																				1										1	7世紀末
37							2	1		1							2					1	1			1				9	7世紀後半
38				1																1										2	奈良
39			1							1							1													3	7世紀末
42										1										2	1		1							5	9世紀前～中
合計	1	5	1	8	4	16	21	21	5	32	1	1	9	4	8	1	6	6	1	13	1	1	2	3	2	2	2	1	1	179	

表5　時期別土錘一覧

	Aa				Ba						Bb					Ca					Cb					Da	Db	Ea		合計	備考
	II	III	IV	他	II	III	IV	V	VI	他	I	IV	V	VI	他	II	III	IV	V	他	I	II	III	V	他	他	VI	VI	他		
6世紀後半								1																						1	
6世紀末～7初						1	1			2																				4	
7世紀前					1	1	1	1		3																				7	
7世紀中							2								1															3	
7世紀後半	1	1		2	1	6	5	2		5							2	1				1	1		1					29	
7世紀末			1	2	1	2	1			2					1			1		1										12	
8世紀初		1		1	1	4	3			1	1						1		1	3										17	
8世紀前																											1			1	
8世紀後		1		1			3	7	5	10			3	4	4		1	1		2							1			43	
8世紀末～9初							1	3					1		1					1										7	
9世紀前～中								2		1		1	3		1			2		3	1		1	3				1		19	
9世紀中～後							1	2																						3	
9世紀末						2	3											1		1									1	8	
10世紀		2						3		4			1		1													1	1	13	
合計	1	5	1	6	4	16	21	21	5	28	1	1	8	4	9	0	4	6	1	11	1	1	2	3	1	2	2	1	1	167	

として代表的な遺跡は、上里町中堀遺跡がある。(田中・末木1997)中堀遺跡では、763点もの土錘が出土している。

中堀遺跡出土土錘の分析によれば、本遺跡で出土量の多いA類～C類は、中堀遺跡出土土錘のC1～C3類に相当し、中堀遺跡で分析した埼玉県内の出土傾向とも概ね一致している。

本遺跡出土土錘の中心となるA類～C類は、大きさがIII類～V類（7cm～5cm）の小型品で構成される。

谷口榮氏によれば、古代においては、個人単位での漁労が行われ、小型の土錘を装着した投網を用いた漁労が一般的であったとされる。(谷口1991)

本遺跡出土土錘もこうした個人単位での投網に適した大きさで構成され、古墳時代から平安時代まで継続的に漁労が行われていたことが推測できる。また、1・2点のみが出土した遺構や、長さが3cm以下の極めて小さい土錘も少数ながら存在する。これらは、釣の錘として利用された可能性もある（谷口1991)。

今回調査した地点は、土器の出土量が少なく、集落の時期区分を行わなかったため、時期的な土錘の推移の検討が十分にできなかった。今後の課題としたい。

註

(1) 川本町遺跡調査会による第5次調査で、石組遺構から、13世紀前半まで遡ると考えられる土師質土器が出土した。

(2) 中村氏は、近年、口縁部と底部が区別され意識の上で須恵器を模倣したと考えられる坏を「擬模倣坏」としている。中村倉司 1999「3．深谷市域における4・5世紀の土器編年」『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集

(3) 本遺跡出土遺物の年代については、古墳時代は田中広明氏（田中1991)、奈良・平安時代は、坂野和信・富田和夫（坂野・富田1996)、赤熊浩一氏（赤熊1988）の論考を参考にした。

(4) 表4で分析した竪穴住居跡出土土錘は、179点であったが、時期が不明確な住居跡もあり、表5の時期別分類で示した土錘は167点である。

引用・参考文献

赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸―古墳・歴史時代II―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集

大屋道則・中村倉司 1992 「出現期模倣坏の検討（一)」『研究紀要』第9号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

栗岡潤・大屋道則 1998 『築道下遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集

田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給―有段口縁坏の展開と在地社会の動態―」『埼玉考古学論集』設立10周年記念論文集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中広明・末木啓介 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集

谷口 榮 1991 「II.北部東京湾岸における土錘の様相」『竹橋門』東京国立近代美術館遺跡調査委員会

中村倉司 1984 「器種組成の変遷と時期区分」『土曜考古』9 土曜考古学研究会

中村倉司 1999 「3．深谷市域における4・5世紀の土器編年」『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集

坂野和信・富田和夫 「飛鳥時代の関東と畿内―北関東における7世紀の土器様相―」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』

宮瀧交二 1991 『堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集

村松 篤 1999 『畠山館跡 第5次調査の報告』川本町遺跡調査会

如意遺跡竪穴住居跡計測表

番号	位　置	形　態	長軸	短軸	深さ	竈	貯穴	主軸方位	本遺構より新	本遺構より古	備　考
137	M・S-18	方形	3.09		0.37	西	なし	N-103°-W			
138	S-18	歪方形	3.72	3.50	0.45	東	なし	N-69°-E			
139	T-18	方形	6.74		0.12	北	あり	N-6°-E	SJ140・151		
140	T・U-18	方形	5.22		0.14	北・東	なし	N-5°-E		SJ139	玉
141	S・T-18	方形			0.48	東		N-72°-E			
142	U-18	隅丸方形	3.60	3.20	0.56	北	なし	N-11°-W	SK53・54	SJ145・146	
143	U・V-18	方形		4.08	0.40	東	あり	N-80°-E		SJ145・147・152	
144	V-19	方形		2.40	0.24	東		N-68°-E			模造品
145	U-18	長方形	4.64			北		N-2°-W	SJ142・143	SJ152	
146	U・V-18	隅丸長方形	6.12	2.60	0.40	東	あり	N-78°-E	SJ142・145	SJ152	
147	V-18	方形	5.04		0.28	東	あり	N-75°-E	SJ143・152		
148	V・W-18・19	方形	5.92	5.80	0.40	東	あり	N-78°-E	SJ149		
149	V・W-18	方形	3.49		0.60	北	あり	N-8°-E		SJ148	土玉
150	V・W-19	隅丸方形		2.72	0.52	西	なし	N-107°-W		SJ153	
151	T-18	方形			0.54			N-6°-W			
152	U・V-18	方形			0.16						
153	W-19	方形	3.04	2.96	0.48		あり	N-117°-W	SJ150		

如意南遺跡竪穴住居跡計測表

番号	位　置	形　態	長軸	短軸	深さ	竈	貯穴	主軸方位	本遺構より新	本遺構より古	備　考
1	AK・AL-20	方形		2.68	0.49	東	なし	N-72°-E		SJ2	紡錘車
2	AK-20	方形			0.36			N-8°-W	SJ1・		
3	AK-20									SJ2	
4	AK-4	方形		4.34	0.23	東	なし	N-72°-E			紡錘車
5	AJ-20	方形	3.03		0.40	北		N-12°- W			砥石
6	AD・AE-19	隅丸方形	3.54		0.42	北		N-16°-W		SJ7	墨書
7	AE-19	方形		3.56	0.12	東	左	N-73°-E	SJ6		
8	AD・AE-19・20								SJ12		
9	AE-20	方形	3.40	2.89	0.42	北	なし	N-4°-E		SJ10・SJ11	刻書・鋤先
10	AE・AF-19・20	方形	6.30	5.62	0.40	北	なし	N-3°-E	SJ9	SJ11	砥石
11	AE-20	方形	2.76		0.44	北西		N-25°-W	SJ9・10		
12	AE-AF-19・20	長方形	4.64	3.35	0.54	東	右	N-82°-E	SD3、SK10・13		刀子
13	AF・AG-20	長方形	4.10	3.20	0.41	北	右	N-7°-W		SK24	紡錘車
14	AI-20	長方形	4.10	3.48	0.08	南西	左	N-123°-W			帯金具
15	AJ-20	方形		2.86	0.22	東	右	N-83°-E			
16	AI-20	歪方形	2.76	2.92	0.10	北西	なし		SK17		
17	AS・AT-21	方形			0.32	北東		N-50°-E	SK26・27		転用硯
18	AR-21	方形		3.04	0.67	東	なし	N-70°-E		SJ19	
19	AR・AS-21	方形			0.30			N-48°-E	SJ18		
20	AQ・AR-21	長方形	5.50	4.68	0.36	東	なし	N-53°-E			
21	AQ-21・22	長方形	5.02	3.80	0.65	北	右	N-40°-W	SD4		
22	AP・AQ-21	長方形	5.28	4.20	0.48	東	なし	N-65°-E	SK40	SJ23	鏃・紡錘車
23	AP-21	方形	4.86	4.52	0.24			N-62°-E	SJ22・24		
24	AP-21	長方形	3.84	3.26	0.38	東	?	N-67°-E		SJ23	管玉
25	AP-21	方形		2.90	0.30	東		N-66°-E			
26	AP-20・21	方形	2.70		0.43				SJ23		
27	AP-21	方形	3.58		0.40			N-19°-W			墨書
28	AY・AZ-19	歪方形	4.94	4.24	0.36	北		N-47°-W			
29	Z-19	方形			0.37	北		N-15°-W	SJ38		刀子
30	Z・AA-19	歪方形	4.46	4.12	0.50	北		N-10°-W	SJ37		
31	W-18・19	正方形	4.40	4.22	0.40	東	右	N-89°-E			
32	W-19	方形	3.80		0.56			N-11°-E			
33	W・X-19	方形	4.48		0.54			N-19°-W			刀子
34	X-18	方形		3.20	0.45			N-119°-W			破片
35	X・Y-19	方形	4.92	4.90	0.47	北西	なし	N-32°-W			砥石
36	Y-18・19	歪方形	5.30	5.10	0.28	北		N-23°-W			
37	Z・AA-19	方形	5.28	4.68	0.32	東	右	N-65°-E		SJ30	
38	Z・AA-19	方形	4.54		0.53			N-16°-W		SJ29	
39	AA・AB-18・19	方形	3.40	3.28	0.41			N-44°-E			
40	AB-20					西					
41	AB-20					西					
42	AA・AB-18・19	方形	3.76		0.46	北・東		N-17°-W			砥石